
あなたは科学を信じますか？

伝助No.32

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたは科学を信じますか？

【Nコード】

N8739N

【作者名】

伝助No.32

【あらすじ】

魔法が溢れる世界で（自称）科学者の森羅悠夜「もりあみ・ゆうや」は、一度は諦めかけた高校生活を送るが、彼の周りには一癖も二癖もある魔法使いばかり。そんな悠夜は、非日常の自分と日常の仲間を通して失ってしまったもの、かけがえのないものを手に掴もうとする

笑い、シリアス、恋愛にバトルでラブコメ型スクール・ストーリー
ーここに開幕。

M a g i c I n d e x (前書き)

用語辞典です。サブタイが中二です。

キャラプロフィール同様、物語の進行に応じて加筆・修正をしたいと思います。

作品を読んでいる際に迷った方はどうぞこちらへ。

M a g i c I n d e x

エクソシスト
魔祓師

魔法を使う職の一つで、主な役割は警察と共に行う治安維持など。魔法使いとして一定のレベルまで達していれば、未成年や学生であっても資格を得るのは可能。起源は古く魔法がまだ世界的になっていない時から、魔法を持たないもしくは極端に低い人間を守る守護役とされている。能力や強さによって、ランクがつけられる。

ペルソナ
制御装置

魔力や魔法、魔装具の力を抑える時に使用する道具の一種。札のような物から、装飾品などを加工してペルソナとするなど、その形状は様々。

魔力

魔法や魔装具、その多のものを扱うために使う、人に宿る潜在能力。その量に個人差はあるが、原則として魔力を持たない人間はいないとされる。魔力の性質は人それぞれで、同じ魔力を持つ者は現れないと言われている。

魔力を持つ者は熱のように微弱ながら、それに似た性質の魔力を放出する。これを『残留魔力』と呼び、指紋のように個々によって同じものは無いと言われている。

魔法

人間が自身に宿る魔力を使って行う技法。魔術革命の際、科学と共にその存在を確立させる。人間の使う魔法は魔力の影響を強く受け、特性は一人に一つ。

魔装具

使用者の魔力を媒介とし使う武器。物によって様々な特殊効果等が付くが、基本的には魔力の増加と使用者の運動能力向上。申請書とペルソナがあれば、誰でも持つことが可能。昔の魔法使いが使用した杖によつとは類似している。

魔眼

片目、もしくは両目が魔力を宿し、それ自体が魔法として存在している物の総称。

魔陣獣や怪異、人も持つことがあるが、これは魔法と言うよりも『呪い』と呼べる体質。

悠夜は右目の魔眼を普段は眼帯型の制御装置ベルソナによつて力を抑えている。

魔結晶エレメント

魔力の弱い人や扱いにたけてない人のために作られた補助装置。

ゴルフボールぐらいの大きさで、水晶のように透き通っている。魔力を貯める性質があり、インストールした者ならば貯めた魔力を使用できる。

また、その性質を利用して特殊な用途に使われる特殊魔結晶も開発されている。

・ファインド・エレメント記録用特殊魔結晶 映像を記録化でき、他の魔結晶と併用すれば再生することも可能。

・コールド・エレメント通信用特殊魔結晶 インストールした他者と離れていても対話ができる。一度に複数の人と通信することも可能。

・ダイス・エレメント匣型特殊魔結晶 悠夜が持つ黒い七面体のサイコロの外観。右耳にイヤリングとして装着することが多い。悠夜はこれを黒い鎌に変え、戦闘をする。

インストール 登録

魔装具や魔結晶に所持者の魔力の性質を覚えさせ、所持者以外に使用させなくしたり、他人の魔力を登録することで多機能型の魔結晶を拡張したりする。

フェーデ 魔術決闘

現代において確立する、魔法使いの私闘。お互いの年齢や能力によりルールを変更可能。元は中世からある騎士同士の決闘から来ていて、その歴史から『敗者は勝者の言うことを一つ聞く』というル

ールがある。もちろん、これも自治体等の許可が必要になる。強大な魔法使い同士の戦闘を想定して、各地にはフェーデ用の特設ワールドが存在する。

学園都市アストラル

日本圏内に存在し、エーテル・シャーマ・ネクターと並ぶ四大学園都市の内の一つ。学生が人口の九割をしめ、都市の中にあるほとんどの設備は教育と言う形で学生が運営し、様々な形で学生の向上をはかっている。

魔陣獣

自然界の生物が何かしらの魔力の影響を受け、急激に進化した生物の総称。個体によっては強力な魔力を有するものもあり、討伐の依頼も出される。また、魔陣獣と心を通わせ自分の手足のように扱う魔法使いを『魔陣獣^{テイマー}』と呼ぶ。

怪異

異形ともいう。魔法が災厄化した生物や現象をさす。危険度が極めて高く、これらの討伐がエクソシストの主な任務と言える。昔は魔陣獣と同一視されていたが、こちらの方が極めて有害。

怪異と魔法使いの魔力が『同化』することで、大きな力や魔法を得られるが同化した魔法使いはもはや『人』と呼べない。

陰陽師

日本圏内において、昔に栄えた魔法使いを指すが、彼らが編み出した『陰陽道』という魔法を使う魔法使いに使う場合もある。

科学

魔術革命の際その可能性と共に研究されたが、魔法の方が著しい発展を遂げる中科学は徐々に廃れていき、物語やファンタジーの世界でしか語られなくなった。

だが、魔法を日常とする世界で、非日常で活動するものは科学を学問として探求し続けている。それが『禁忌』に触れると知っていないながら……

科学を研究、もしくは扱うものを『科学者』と呼ぶ。その行動理念から科学者は過激派と合流派と中立派に別れる。

アンドロイド 機巧人形

科学力によって造り出された生きる人形。神が造ったヒトを科学の力で造るという野望の下実行された禁忌の一つ。

主要登場人物紹介（前書き）

キャラプロフィールです

一度書いたキャラでも、物語の進行によっては追加します

キャラのこんなことが知りたい等あれば、ご意見お願いします

ネタバレ要素をふんだんに含みます

主要登場人物紹介

もりあみ ゆしや
森羅悠夜

○年齢 15歳

○誕生日 12月25日（育て親の将矢・優希に拾われた日）

○身長 169？

○容姿 中性的な顔立ちに背中半分に達する黒の長髪^{ストレート}。瘦身^{スリム}だが、肉体は引き締まっている。右目に眼帯を常時つけている。顔の造形は上の下あたり。

趣味 読書、家事全般、裁縫

好きなもの お茶

嫌いなもの 雪

魔法 魔眼『灰色ノ夜眼』^{ダスト・アイ}

科学 破壊者^{アクマ・プログラム}

幼い頃から武芸や家事に励み、そのスペックは常人をはるかにしのぐ。

基本他人との関わりを持つとしないが、知り合った者とは温厚に接する。

黒色や灰色のものを特に好み、科学者としての顔も持つ。右腕が科学によって作られていて、起動すると巨大な鎧や鎖の外観となる。

右眼の眼帯は制御装置^{ベルツナ}となっていて、外すことで魔眼が発動。基本クーデレ、時々ツンデレ。

つきしづ
月弦玲

○年齢 15歳

身長 165?

誕生日 10月2日

容姿 肩までかかるくらい茶色がかったソバージュヘア。顔は上の中。胸は平均的に見えてサイズはC。

趣味 刃物の手入れ

好きなもの ウィンドウショッピング

嫌いなもの 蛙

魔法 錬金術

その性格は明るく他者からも好かれる傾向があるが、過去のトラウマで『一步』踏み出すのに抵抗を抱くが、悠夜との出会いを通して解消される。内気なところは完全に治っていないが、明るい性格が表に出てくるようになってきた。

また、そのトラウマのせいで刃物をやたらに取り出す悪癖（本人無自覚）がある。

ヤンデレ予備軍。

霧坏恋華きりつきれんが

年齢 15歳

身長 168?

誕生日 3月22日

容姿 黒髪をストレート（悠夜よりは短い）にし、爽やかな印象の顔立ちで上の中ほど。胸はやや大きくサイズはD。

趣味 音楽鑑賞

好きなもの チョコレート類のお菓子

嫌いなもの 束縛

魔法 疾風操作系

有名な社長の令嬢。『お嬢様』な生活から逃れるため中学校へ上がる際、強引にアストラルへやってきた。けれど少しだけ世間とずれたところもある。

悠夜とは小学生の頃、誰とも自分と遊んでもらえなかった時、話しかけられてから知り合いとなる。悠夜の抱える事情を多数知っている。

隠れ肉食系。

かなぎりょう
神薙亮

年齢 15歳

身長 180?

誕生日 8月22日

容姿 黒の短髪に引き締まった長身。顔の造形も整っている。

趣味 野球練習、筋トレ

好きなもの 野球

嫌いなもの ノー魂

魔法 火炎操作系

天宮響とは幼なじみ。実家は代々続く鍛冶屋で、中学頃から家を継ぐか野球を選ぶか悩んでいる。

気さくな性格と言動で誰とでもすぐ仲良くなるが、場の空気を読む能力に欠けるため悠夜に次ぐトラブルメーカーでもある。

あまみやびき
天宮響

年齢 15歳

身長 178?

誕生日 9月20日

容姿 金髪の髪と眼鏡がトレードマーク。口元から覗く八重歯も特徴的。ルックスは申し分ない。

趣味 プラモデル

好きなもの 『萌え』全般

嫌いなもの 退屈

魔法 雷電操作系

陽気でお調子者な面が目立つが、周りを常に気遣う等の優しさを合わせ持つ。情報収集能力は極めて高い。

日本人の父親とアメリカ人の母親から生まれたハーフ。頭の上がない妹が一人いる。

猫語を使用し、悠夜の次に手先が器用で、物覚えが早い。

刈柴大地 かりしば だいち

年齢 15歳

身長 172?

誕生日 9月8日

容姿 祖父の覚醒遺伝の影響で瞳は緑色。顔立ちには悠夜と同じで中性的だが、こちらはどっちかというとかわいい系。

趣味 植物栽培

好きなもの 探検

嫌いなもの 掃除

魔法 地質操作系

亮とは席が前後だったため、話しをする内に打ち解け、響や悠夜とも仲良くなった。

見かけによらず身体能力は高く、じつとしているよりは体を動かす方が好き。

悠夜のグループでは、比較的まともで悠夜と一緒にツッコミを入れることもしばしば。考え事や落ち着かない時にペン回しをする癖がある。

ふゆぞら みき
冬空美姫

年齢 16歳

身長 171?

誕生日 6月23日

容姿 黒い髪をポニーテールにしている、ほどくと腰まである。

大和撫子を思わせる美貌。胸は小さめでBと言いはるが、本当はA（気にしている）。

趣味 剣術稽古、将棋

好きなもの 猫、祖母

嫌いなもの 炭酸飲料水

魔法 氷冷操作系

現在五人いる学園都市アストラルの最高理事長のうちの一人の孫娘。自身も祖母を敬愛していて、祖母のいるアストラルへ中学の頃に入学。

魔法、部活として所属している剣道部ともに歳相応以上の実力を持ち、経験は浅いとはいえ魔^{エクス}術師の資格を持ち、将来有望とされる。自身の美貌と魔法の実力からファンクラブが多数あるが、本人は特に気にしていない。

悠夜が通う國桜高校の生徒会長も務め、最初は魔力を持たない悠夜と反発するが彼との戦闘を通して和解。以後、悠夜を師匠とし慕う。

家は代々強力な魔力を宿す家系で、美姫もその中に属するが強い力を持つ故に周囲と孤立した経験あり。

XXXXXさんが描いてくださった『冬空美姫』のイラストを張らせていただきます > i 1 6 4 6 9 — 2 2 5 2 <

リリース・ペンドラゴン

年齢 不詳。製造されたのは一年以内と思われる。

誕生日 11月4日（モーガンが勝手に決定）

身長 173？

容姿 腰まであるブロンドの銀髪。顔立ちはまるで美しい人形のように整っている。スタイルも良く、胸のサイズはG。見た目の年齢は15歳前後。

趣味 魔法探求

好きなもの 悠夜、モーガン

嫌いなもの 悪意のある科学

魔法 ×（扱えない）

見た目は人間のようなだが、科学者集団によって造られた愛玩兼戦闘用の機巧人形^{アンドロイド}。現段階の科学界ではもっとも高性能なアンドロイドでもある。モーガンが襲撃した科学者集団の研究所で休眠していたところ発見され、以後彼女の養女として向かい入れられる。

初めはモーガンが所有権を持っていたが、悠夜との対面を期に所有権が移り現在は悠夜の所有物となっている。また、悠夜の所有物であると同時に戸籍上義妹でもあるので、本人の意思で悠夜への接し方を変える。

あまり世間に馴染みがないためか、知的好奇心が旺盛で特に魔法

に関することは意欲的に知ろうとする。

魔法は扱えないが、自身に内蔵された火力兵器と卓越した格闘センスがあるため戦闘能力は極めて高い。

篤兎京とくとみや

年齢 15歳

誕生日 2月15日

身長 159?

容姿 ショートカットにした髪で、悠夜の周りの女子と負けず劣らずの美少女。胸のサイズはBで、よくスポーツをやっていそうと言われる。

趣味 切手集め

好きなもの 演劇、激辛料理

嫌いなもの 偏見

魔法 カラーパレット
特殊絵画

國桜高校一年E組の生徒で、演劇部所属。当時同好会扱いだった演劇部に悠夜を（無理やり）入部させた張本人。

性格は明るくさばさばしている為、男女両方友人は多いが言動に遠慮がないところも見られる。

大物女優（今は引退）の母親を持ち、憧れる形で自身も女優になるため演劇を続けている。だが周囲の目からは『元大物女優の娘』としか見てもらえず苦悩していた。そんな感情をつけこまれ怪異と同調した白樺雲雀に、自分のやることに加担しろと要求されるが、当の本人は悠夜の志に憧れを抱き拒否。その後怪異に取り込まれた雲雀と一緒に、悠夜によって救われた。

また、大の辛党で普通の食事にタバスコ等の調味料をかけるのもちろん、自作の激辛料理（常人には劇物）も作っては一人で食べ

る。だが、炊事を始めとする家事スキルはちゃんとある。

白樺雲雀 しらばね ひばり

年齢 16歳

誕生日 3月3日

身長 175?

容姿 黒髪・黒目だったが、怪異と同調した後遺症で白金・赤目ロンゲとアルビノのような色合いに。容姿は目を引かれるような美貌だが、性同一性障害のため精神と肉体の性別が一致していない。胸囲は言わずもがな……

趣味 かわいいぬいぐるみ集め

好きなもの 可愛い服

嫌いなもの ホラー映画

魔法 ファンタジー 天夢輪

國桜高校の演劇部に所属している悠夜の先輩。

清楚で内気な性格。その美貌から隠れファンも多い。悠夜曰く『自分の周りにいる唯一の常識人にして癒し系の女性』とのこと。しっかり者だが良くドジするところもあり、被害は大抵悠夜へ向かう。物心ついた頃から自分が性同一性障害であることを自覚し、そのことで苦悩し周囲とも馴染めないこともあった。学園都市アストラルに来てからそのことをひたすら隠し、普通の『女子生徒』としてすごしていた。悠夜の異常性に引き寄せられた怪異と接触した後と同調、後輩の京や他校の不良を利用して『世界』を破壊しようとするも悠夜らの活躍で阻まれる。悠夜の言葉で同調が弱まったことで、怪異に京と一緒に直接取り込まれるが悠夜に救われた。今はもう『世界』を破壊したり、後輩や友人を危険な目に合わせようとは考えていない。

現ヒロイン群では唯一武装せず、悠夜へもドジをする以外危害を加えない。

かじわぶとむ
柁原努

年齢 17歳

誕生日 4月16日

身長 179?

容姿 中性的な顔立ちのため、女装が似合う。普段は単髪だが、女装時はウィッグを使用する。

好きなもの 彼女、ハヤシライス

嫌いなもの 毛虫

趣味 女装

魔法 火炎操作系

國桜高校演劇部の部長。雲雀、キララとはじゃんけん勝負し、負けたことで部長の座についた。

部長らしく意欲的に取り込み、部員のことを常に配慮する優しさを持つ。

部員であり恋人のキララとは非常に仲がよく、誰の前でもイチヤイチャするので悠夜に『バカップル』と言われるほど。デートの際は女装をし、その完成度は努を見知った人でも本人と気付かないほど。また、努が女装にはまったのはキララのせい。というか、元凶。

たむこしやう
祭場キララ

年齢 16歳

誕生日 8月18日

身長 160?

容姿 肩あたりで髪を切り揃え、ボーイツシユという言葉が似合う。胸のサイズはCで、男装のさいはさらしを巻き厚底の靴を履き身長を少しでも伸ばす。

好きなもの 彼氏、女装が似合う男子

嫌いなもの トマト

趣味 男装、コスプレ

魔法 氷結操作系

國桜高校演劇部に所属する悠夜の先輩。部活動に真剣に取り込むが将来の夢は看護師なので関係ないとも言える。入部した理由は自由にコスプレでき、たくさんの男子に女装できそうだから。ある意味、現演劇部の中で動機が一番不純。

男子に女装させるのに喜びと興奮を感じ、主な被害者は彼氏の努今は努も女装が趣味になったが、付き合った当初は嫌がっていた。自身もコスプレや男装が好きでよく理由もなしに着ている。また努の女装服や自分の男装服、コスプレは全て彼女のお手製。裁縫スキルはあるものの、その他の家事スキルは平均以下。

モーガン・ペンドラゴン

年齢 不詳。悠夜にも不明。 誕生日 1月21日(正しいかは不明)

身長 185?

容姿 長い髪、大きな瞳の色は薔薇を思わせる深紅。悠夜が絶世と称するほどの美女。見た目の年齢は二十代前半。

趣味 悠夜、リリスとのスキンシップ(と名ばかりのセクハラ行為)

好きなもの 悠夜、リリス

嫌いなもの 仕事

魔法 ????

悠夜とリリスの保護者で、悠夜の師匠でもある。詳しい素性や実力あまり知られていないが、魔法使いとしての実力は群を抜いている。

悠夜の両親とは旧知の仲で、悠夜が幼い頃何度か会っているが悠夜は詳しく覚えていない。

プロローグ そして時計の針は廻りだす（前書き）

初めてまして

初投稿になります

この物語に興味を持ってくださって本当にありがとうございます

文才不足の自分ですが、自他も満足できるよう頑張ります

プロローグ そして時計の針は廻りだす

「はあ」

少年の口から、今日何度目かになるのかわからない溜め息がこぼれる。

全8両からなる汽車の最後尾の車両の、一番後ろの席。対面式で四人まで座れる座席だが、座っているのは少年一人だけだった。強いてあげるなら、この車両には少年しかいなかった。単純にすいているだけなのだが、例え乗車人数が多くても、思わず他の車両に移ってしまいたいような、なんとも近づき難い雰囲気少年からはにじみ出ていた。

少年の服装は、上から下まで黒で統一され、他の色がいつさい見られない。加えて、春先にも関わらず見ていて暑苦しいと思えるほど肌を出していない。両手には手袋という徹底ぶりだ。そしてその顔も右目の眼帯と口をすっぽり覆うマスクのせいで表情というものがかくわかない。

唯一の美点とも言える長く伸びた黒い髪は、女性のそれと思わせるほど美しく艶がある。それ単体ではとても魅力的なのだが、少年が装備するとむしろ不気味さがますますのが不思議なくらいだった。

「はあ」

少年は左目を僅かに横に向けて、流れる風景を写し出す車窓を見る。

天気は快晴。柔らかな陽射しが街を照らす光景は絵になっているのだが、そんなものでは少年の憂鬱を晴らせない。むしろ憂鬱を加速させていた。

しばらく視線を車窓に向けていると野良であろう白い猫が一瞬視界に入り、すぐに風景と一瞬に流れて消えていった。

「……そう言えばあの時も」

そう言ってまぶたを閉じる。

脳裏に焼き付いた猫から過去を連想し、自分の中の憂鬱とこの汽車に乗った原因を思い出した。

くく過去・記憶くく

話しは約半月前にさかのぼる。

少年が暮らしていたのは一つの地方都市。首都圏ほどとはいかなくとも、それなりの発展を遂げていた。

事の発端はそんな地方都市の住宅街に面した大通り。

『ひったくりだ!』

声のした方をむけば、目元を隠すように帽子をまぶか目深にかぶった男が走っていた。左手には盗品と思われる高そうなハンドバッグ。右手には魔法でも使ったのか火で刃が燃えている大振りのナイフが握られていた。

休日の昼下がり。場所と時間帯もあってそれなりに人はいたのだが、誰もが刃物への恐怖心から道を避けるばかりで止めようとする者は出て来ない。

（まあ、そうなるでしょうね。ナイフと言っても充分に殺傷能力はあるわけですし、盗人が全くの素人という可能性も捨てきれない。

魔法を使うにしても、発動する前にばれてしまい反撃をくらってしまつのがおちですね。こんな白昼堂々と反抗に及ぶのですから無警戒という訳でもないでしょうし。おまけに体術を心得ている人もいなさそうですね、よほどの正義感の持ち主でなければ立ち塞がる人はいないでしょう)

一通りの評価を終えると少年のすぐそばにもひったくり犯が迫っていた。やはり止めようとする者は出て来なかったようだ。

少年も他の通行人のように体を端によせ、ひったくり犯に道を開け渡す。

自分の前を横切る瞬間、足を前に出すのを忘れずに。

「あがつ！」

全力疾走していたのが仇^{あた}となったのだろう。少年の足につまずいてひったくり犯は盛大にこけた。

少年はうつ伏せ状態で地面に倒れている盗人に素早く近づき容赦なく足でその背中を踏みつける。そうするとまるでひっくり返った亀のように身動きが取れなくなり、ナイフを振り回すものの文字通り空回りに終わってしまう。

ひったくり犯は大声で騒ぎながら首を最大限に稼働させ、少年の方を向くと目を見開き硬直してしまった。

その視界に写ったのはつまらなそうに自分を見下ろす隻眼の少年と高く上がった片方の足。

声一つあげる間もなく、上げた足を鉄槌の如く落とされたひったくり犯は完全に気絶してしまった。

少年が足を引っかけたから一分もしない内に犯人は伸びて動かなくなつた。

しばらく呆然としていた通行人も事件が解決したことを理解すると、歓声を上げ口々に少年を褒め称えた。

少年はそんな周りの変化を無視して、火の消えたナイフとバツクを手に持ち盗品の持ち主を探す。すると、こちらへ駆け寄って来た老婦人の姿が目に入った。どうやら持ち主が自分からやって来たようだ。

少年は無言でバツクを返そうとするが、突然バツクが動いたことに驚き手を止めた。バツクの中から出現した白い何かが老婦人の元へ飛び付いた。

「……猫？」

だった。老婦人は白猫を抱き抱えると涙を浮かべながら頬擦りし始めた。猫をひとしきり愛で終わると少年へ声をかけた。

「礼を言うのが遅くなってしまつてごめんなさい。ありがとうございます。本当に助かったわ。こんな老体じゃ満足に追いかけることもできなくて。でも、本当に良かったわ。あなたのような勇敢な人がいてくれて」

「いえ、思いつきで足を引つ掛けたら運良く転んでくれて、それ为本に書いてあつたことを思い出して実行しただけです」「そうなのでもチーちゃんを助けてくれたことには変わりないわ。お時間大丈夫かしら？良かったらお礼をさせてくださいな」

少年は老婦人の好意に甘えることにした。バツクを返し、盗人の身柄とナイフは少年の通報でやって来た警官へ引き渡して二人は移動することにした。

場所は変わって喫茶店。老婦人に連れられて入店し、窓側の席でお互いに向かいあって座っている。ちなみに猫はバツクの中で大人

しくしている。

少年はホットコーヒーを、老婦人はミルクティーをそれぞれ注文する。

定員が注文を読み上げ、オーダーを伝えるに行くため席を離れる。それを見るやいなや、老婦人が話しかけてきた。

「あなた歳はいくつ？　みたところ、私の孫と変わりないようだけど」

「15です。今年の12月に16になります。お孫さんがいらつしやるですか？」

「あら。私ぐらいの歳にもなると孫の一人や二人、いつの間にかできてくるのよ。とても可愛いくて目に入れても痛くないくらいなの。この子も4年前の私の誕生日に孫がプレゼントしてくれたのよ。一人暮らしでも寂しくないように、って」

そう言ってバツクを掲げる。この子とはおそらくあの白猫のことを言っているのだろう。

「動物を飼うのなんて初めてだったから最初のころはお互いびくびくしていたのだけれど、今じゃもう大事な家族だわ。週に一度チーちゃんお気に入りのおバツクを持って一緒にお散歩するのよ。この子つたら狭いところが大好きで」

「楽しそうですね。僕も知り合いの犬を数日預かったことがあるんですけど、全然なついてくれませんでしたよ。僕って動物にはあまり好かれないようですよ」

「あら、そうなの。でも大丈夫よ。世界は広いのだから、あなたになついてくれる動物もいるはずよ。そうね、竜なんてどうかしら？　「遠慮させて頂きます。じゃれている最中に、鋭い牙で噛みつかれたらひとたまりもありませんよ」

「ふふふ、それもそうですね。ところで、その歳だと高校新一年よね。」

高校はこの近く？」

「……いえ、僕は高校には通いません。一応就職の予定で、今は日雇いのアルバイトに勤しんでいます」

老婦人の顔が瞬時に驚き一色になる。自分の出した問に予想外の言葉が反ってきたのだろう。

「高校には行きたくないの？ それとも何かわけが？」
「……………」

親身になって尋ねてくる老婦人の顔をしばらく見つめると、ズボンのポケットから一枚の紙を取り出し、老婦人へ渡す。

老婦人は受け取ると目を通し、先ほどよりも強く驚愕の表情を浮かべた。

「これって本当なの。何かの間違いではなく？」 「残念ながらそれが真実です。義務教育は問題無く受けれたのですが、高校まではそういうわけにはいかずに門前払いされたというわけです」

少年が言い終わると同時に注文された品が運ばれた。

まだ湯気の昇るコーヒーを何も入れずに口へと運ぶ。少年の表情からして美味しかったのだろう。口元が和らいでいる。一方老婦人はミルクティーを見つめるだけで手に取るうとはしない。その顔はどこか思案しているように見えた。

「あの、僕のことでしたらどうかお気遣いなく」
「あなた、学校には行きたい？」

芯のこもった声。強い意思を思わせる瞳。常時浮かべていた笑顔に似ていて、それと異なる凜とした表情を老婦人は浮かべていた。

「……わかりません。でも、入って欲しいと言われる気がします」
「どなたに？」

「父と母です。二人とも他界しています。今は二人の知り合いが保護者になっています」

「……そうだったの。でも、それならなおのこと高校に入学した方がいいと思うの。ご両親のためにも。あなた自身のためにも」

「確かにそうなのかもしれませんが。でも、現実はそう簡単にいきませんよ。現に僕はどこも断られて」

「それなら大丈夫よ。私のところに来れば心配はないわ」

「私、の？」

「アストラルってご存じかしら」

「それは知ってますよ。魔法学園アストラル。小、中、高からなる大魔戦争終結直後からある由緒正しい学園。数々の名高い魔法使いを輩出し、世界の中で五本指に入ると聞いています。……もしかして、私のということは」

「ふふふ、鋭いのね。ええ、そうよ。私はアストラルの理事長の内の一人なの」

「……。あなたがそこまで入学を薦めるのは納得がいきました。でもそれってご自身の立場を利用して僕をアストラルに入れようとしていますよね。これって立派な裏口入学じゃないですか？」

「ええ。そうなるわね」

……………。
あつさり認められた。

そんなのでよろしいんですか。あなたは教育者のはずでは？

「大丈夫よ。他の理事長も頭の堅い人なんていないわ。むしろ、私みたいな毎日遊んでいるばかりのひとだっているんだから。それに君の境遇を話せば絶対に賛成してくれるわ」

「そ、そうですね」

あくまで毅然と言い張る老婦人に対し、少年は目線を下げ毒気を抜かれたようにため息をついた。

「それにね、私はこう考えているの」

老婦人の言葉に目線を戻し、その両目をまっすぐ見つめる。

「学校というものは学ばせる所ではなく、学びたい人を向かい入れる所だと思うの。どんな事情や境遇があっても、その意思を曲げさせることをしてはいけない。若者（あなた達）の未来を手助けすることが大人（私達）の仕事ですもの」

少年はその言葉を聞くと左目を大きく見開いた。

そして、考え事をしているのか、黙りこむ。老婦人はそんな少年を急かすことなく、優雅な動作でミルクティーを口に運ぶ。

しばらくして少年もまだ湯気の立つコーヒーカップを手にとると一気に飲み干す。口と喉を充分に潤してから、嘆願する。

「僕をアストラルに入れてください」

~~~~~過去・記憶 終了~~~~~

「……寝てしまいました」

いつの間に眠っていたのだらうと不思議に思いながら、あくびをひょうひょう。

するとどこからか社内アナウンスが流れ、もうすぐこの汽車の最終目的地　学園都市アストラルに到着することを告げた。

（もう、後戻りできませんね）

汽車に乗り込んだ当初は数回窓から飛び降りようと思ったが、結局思い付きだけで終わり今に至る。

（嫌ではない、ですけどね）

老婦人の想いを拒絶したいわけじゃない。

半場諦めていた高校生活を手放したいわけじゃない。

それでも少年は考えてしまう。

やはり自分にはこんな陽のあたる日常はふさわしくないとと思うのが一番だった。

あの日を境に影の中で生きる非日常に身を投げた存在が、再び戻ってきてもいいのだろうか。

『仲間』にこんなことを聞いたらどんな言葉を返されるだろうか。

（とりあえず殴られそうですね）

少年の思考がぐるぐると迷宮のようにさ迷っていると、車輪とレールが擦れる音が響き汽車はゆっくりと停止した。外の景色を見れば、空は茜色に染まりもうすぐ黄昏時を迎えようとしていた。

「……降りますか。これも運命。慣れてしまえばいつも通りにいきますよ」

そう言って少年はポケットから親指よりも小さなサイコロを取り出す。

サイコロと言っても形状は正六面体ではなく、数字が一から七まで有りとても馴染みのない外観をしていた。目の部分は白、他は黒く塗り潰されていて、なんとも少年に似合った小物だった。

少年はしばらくサイコロを手の中で転がしていたが、おもむろにしまい下車した。

人は少ないようだがやはり乗客は他にもいたようで、ちらほらと下車しては改札口へと吸い寄せられるように歩いて行く。

少年も向かおうと足を動そうとし、風に乗ってヒラヒラと目の前を浮遊する物体に気がついた。

物体はハンカチだった。やがて地面に落ちたそれを拾うと、声をかけられた。どうやら落とし主らしい。

「す、すみません。それ、私のなんですっ」

女の子がこちらへかけてきた。おそらく少年と同じくらいの年頃だろう。

少年はハンカチを綺麗に四折りにしてから手渡した。

「どうぞ」

「あ、あの、どうも。し、失礼します」

女の子は少年からハンカチを受け取るなり足早と立ち去ってしまった。

「……僕も行きますか」

脱兎の如く立ち去る人影を呆然と見送りながら、少年も足を進め

る。  
けれど、突如として少年を頭痛が襲いその場にうずくまってしま  
った。

『ねえ、ゆう。この世界は好き？ 生きてて楽しい？』

「うるさいですよ」

少年は乱暴に吐き捨てると立ち上がり改札口を抜け、在学中に借  
りている我が家へと地図を頼りに足を運ぶ。

駅の出口では様々な国の言葉でアーチ状の看板にこんなことが書  
いてあった。

『ようこそアストラルへ 輝かしい青春と魔法が君を待っている！』



ブログ そして時計の針は廻りだす（後書き）

お付き合いありがとうございます

本当はもっとコンパクトにする予定でしたが……

次話からは少年（イコール悠夜くん）の周りを賑やかにしつつ、  
基本的に登場人物の視点から書かせていただきます

感想等がありましたらどうぞよろしくお願いいたします

第一夜 出会いと再会、それは日常の奇跡（前書き）

交信すごい遅れました。初心者故に失敗してしました（涙）

それでは、どうぞ

## 第一夜 出会いと再会、それは日常の奇跡

1

僕の朝は早い。

毎朝の恒例となっている筋トレをし、汗をシャワーで流す。継続は力成り。いい言葉だと思う。

その後は朝食作り。ご飯にネギと豆腐の味噌汁。それと焼き魚の和食。シンプルだけど、それなりに納得のいくものができた。料理を覚えてもう10年になり、いつの間にか趣味の一つになっていた。師匠に言わせると僕の腕前は

『八星シェフも裸足で逃げ出す腕前』

だそうです。誉めてくれるのは嬉しいですが、八星ってそんなのありましたっけ、師匠？

食べ終わると食器を洗い片付け、自室へと戻り登校の準備をする。準備と言っても制服に着替えて鞆の中身を確認するだけなので5分くらいで終わってしまった。特にやることもないのでそのまま登校することにした。

全ての窓の戸締まりを確認し、靴を履き玄関を出る。

「いってきます」

と言っのをもちろん忘れずに、扉を閉めて鍵をかける。

まだ早い時間帯らしく、通学路には人影が見当たらない。

アストラルにやって来て一週間、家の周辺や学校までの道のりは頭の中にインプットされている。おかげで迷うことも、トーストを

くわえた女子生徒ともぶつからずに無事学校へとたどり着いた。

『学園都市アストラル』

最高理事長5人が治める四学園都市の中の一柱。日本圏内にも関わらず外国からの入学生も多く、学生人口が異様に高い。何よりも驚くのはその校舎の数。高校のものだけでも20校以上あり、小中を合わせると数えきれない。建設途中の校舎もあるというから、つくづくアストラルの規模に驚いてしまう。

僕が通うのはアストラル第四高等学校（たつとくこうこう）桜高校。名前の通り桃色の花弁が当たり一面を舞い、校舎やグラウンドを鮮やかに彩っている。

玄関の前には大きめの掲示板があり、新入生のクラス分けが掲示されていた。僕の名前はD組の欄にあった。ちなみに教室への案内図もあり、1-D組へと移動する。学校へ入るさい、掃除をしていた用務員さんに登校が早過ぎて驚かれてしまった。

2

もちろんと言つべきか、D組はおろか他の教室にも他の生徒はいなかった。

僕の席は一番後ろの一番右側。教室の後ろにあるドアに近い。というか、隣。近いので良しとしましょう。

しばらく自分の席に座って今日の昼と夜の献立を考えたり、今読んでいる推理小説の真犯人を活字の情報だけで推理していると、黒板側のドアが開き女子生徒が入ってきた。

女子生徒は僕を発見するなり驚きに顔を染め、こちらまでやって来た。

「あ、あの。一週間前に駅で会いましたよね？」

そう言われて思い出す。

一週間前。

僕がアストラルにやって来た日に駅で落とし物のハンカチを拾った。

あの時は私服姿だったのでわからなかったが、目の前にいる女子生徒はあの時のハンカチの持ち主その人だった。

「ああ、あの時の」

「はい、そうです。くだいようですけど本当にありがとうございます。あのハンカチ、入学祝いでもらった物だったから。拾ってくれて本当に良かった」

「そうでしたか。それならば、手助けできて良かったです」

「私は月弦玲ツキノハル。よろしくね。……あの、ところで敬語やめていいかな？　なんだか慣れないし。君も使わなくていいからさ」

「お心遣いありがとうございます。でも、この喋り方はこれが素になりますのでどうかご了承ください。僕の名前は森羅悠夜もりあみ ゆづやと申します。名の意は森羅万象（全て）の悠とほき夜となります」

「へえー、綺麗な名前だね」

「ありがとうございます。けど、良く僕とわかりましたね。あの時はそれほど会話もしていませんのに」

「いや、だって森羅くんを一度見たら早々忘れることはないと思うよ？」

「と、言いますと？」

僕ってそんなに目立ちましたっけ？

「見た目が奇抜というか。男子で長髪っただけでも珍しいのに、眼帯とマスクのせいで全然表情わからないもん」

「そんなものですか」

僕自身、自分の身なりについてあまり考えたことありませんからね。

「うん。正直狙ってるの？、って思っちゃうくらい。そうしてるのって何か意味あるの？」

「ありますよ」

こうしている意味はもちろんある。この長髪にも、この眼帯にも。

「じゃあねマスクはどうして着けてるの？ 花粉症？」

どうでしたっけ？ この数年で着け初めたのは覚えているんですが。記憶力はいい方ですのに。

「じゃあ、外したら？ そのままじゃ怪しいもん」

「……わかりました」

怪しいと言われたことにショックを受けつつ、マスクを外してゴミ箱へと捨てる。

僕がマスクを外すと、月弦さんはわぁと驚いたように声を上げた。

「……森羅くんって隠れイケメンだったんだ。しかも中性的な女の子顔っ」

「あの、どうかしました？」

ぶつぶつと呟いているが、何を言っているのか聞こえない。

「え、いや、何でもないよ。でも森羅くんはそのままの方がいいよ。うん、決定っ」

「わかりました」

評価されているのに、言外で絶対着けるなと言われた気がしました。何でしょうかね、この言い様の無い圧力。

「でも良かった。このクラスで最初に知り合えたのが森羅くん」

「そこまで言って貰えて恐縮です」

「うん。そんなことないよ。私ね、内気だからさ。誰かに話しかけるのって正直苦手なんだ」

「そうだったんですか」

意外だった。一週間前に面識があったにすれ、とても明るい感じで会話していた。そんな月弦さんが内気というのは、あまり想像ができなかった。

「うん。だからね、昔からあんまり友達できなくて」

僕も友達と呼べる間柄の人はあまりいなかった。まあ、大半が僕を避けたのが原因ですが。

「それでね、小学生の頃はイジメられたこともあったんだ」

「そうだったんですか。あの、ところで何でそんな物を手にしてるんですか？」

おもむろに自分の過去を語りだす月弦さん。

それはいいとして、いつ間に取り出したのか月弦さんの手には良く研がれた刃物。包丁が握られていた。

「それで耐えきれなくなっ、わたしがこんな風に『もうやめてっ』って言ったんだ」

こんな風とは包丁を持ちながらと言うことですか？

「それでね。イジメはぱったりやんだの。でもね、その後はあまり友達もできなかった。なんか、イジメとは違うけど私避けられてて」  
月弦さんには悪いですが、そうなるのは妥当だと思います。親によつてはろくに刃物を触る機会のない当時の小学生にとって、月弦さんは恐怖の象徴だったんですね、きつと。

「卒業するまでには友達はできたんだけど、クラス替えとか中学校に入学する時とかはとも怖かった。特にアストラルは地元とかじゃないし、知り合いなんて全然ないから本当に不安だった」

僕も不安です。主に今の自分の安全が。

「ねえ、森羅くん」

瞳は虚無色。月弦さんは据わった目線と包丁の先を僕にむけ、

「森羅くんは、私と友達になってくれる？」

「なります。ぜひならせさせていただきます。例えこの肉体が減びようとも僕と月弦さんの絆は不滅です」

「本当に？ ありがとう！ じゃあ、私のことは玲って呼んでね。

私も悠夜くんって呼ぶから」

「……了解です」

僕がなんとも言えない恐怖の中、間髪入れずに答えると雰囲気が一変、僕に満面の笑みを向ける月弦、いや玲さん。

茶色がかったソバージュヘア、他者に優し気な印象を与える容姿。そんな彼女が微笑めば、大輪の花が咲いたような華やかさがあった。



僕の鼓動もドギマギしてしまい、こんな部分が僕にも残っていたのかと不思議に思うほどでした。

それよりも僕は包丁の方が気になっていました。僕の友達宣言を聞くと同時に包丁はポケットにしまわれた。あの、そんなところにはいるんですか？ というか、常備しているんですか？ 等とは聞けない。好奇心が生存本能に負けた瞬間だった。

目の前でニコニコしている玲さんに気付かれないよう心の中でため息をつく。

自分はこの学園で非日常から離れたはずだ。なのに、どうしても数分前に戦場と間違っほどの緊張感を味わなければいけないのか。

## ヤンデル

この娘はヤンでいる。どこがと言うより、根本がネジ曲がってる。今はデレッと笑っているが、玲さんからはうすら寒い恐怖を感じる。

僕の高校生活友達第一号の月弦玲さん。

彼女がヤンデレという聞き慣れないカテゴリーに属すると知るのにはもう少し先の話し。

## 3

しばらく玲さんと話していると、ちらほらと他の生徒も教室へ入ってきた。

席の近いものと親交をとろうとする者、新しいクラスに緊張を隠せない者、席に座って担任が来るのを静かに待つ者。気付けばいるんな人がクラスに集まっていた。ちなみに僕は一人で机に座り、玲さんは他の女子生徒と楽しそうに話している。包丁を使わずに親交を深められたようで僕はとてもうれしいです。

時計がその時を刻んでチャイムが鳴る。けれど、先生はやってこ

ない。他の生徒も不思議そうに扉を見ている。

誰もが不審がる中10分経過。不意に扉が開き初老の男性が入って来た。このクラスの担任でしょうか。

「えー、まずは皆さんに謝らなければならぬことがあります」

クラス中のみんなが遅れたことへの謝罪かと思った。僕も思いました。でも、

「このクラスの担任である瀬野樹伊先生ですが、今日は二日酔いの為欠席になります。明日には来られると思いますので、どうかご了承ください」

『……………』

クラスのみんなが絶句。ぽかんと男性教諭を見る。  
入学式当日にバツくれるのも充分いけないのに、来ない理由が二日酔いってどうなんですか、瀬野先生？

「本日は私が臨時担任をさせていただきます。世界史担当の五十嵐百峰ももたかです。どうぞよろしく願います。では、遅くなりましたが、これから自己紹介に移りましょう。出席番号一番の方から前に出て願います」

なんだかやつと『クラス』って感じになって来ましたね。

クラスメイトの自己紹介を聞いていると、なかなか個性的な人が多いようだ。ウケを狙う人もいれば、淡々と思ってもよらぬ趣味を暴露した人もいた。……なんだかにぎやかになりそうですね。いろんな意味で。

出席番号40番の人の自己紹介が終わり僕の番になった。どうしましょう。苦手なんですよね、こういうの。趣味や特技と呼べるも

のは持ち合わせていますが、口に出して言うことでは。おまけにクルスのみんなが『最後なんだから何かおもしろいことを』オーラを惜しげもなく出している。期待しても何も出ませんよ？

正直に言えば気が進まない、けれどいつまでも待たせるわけにはいかず、重たい腰を上げなるべくゆつくりと自己紹介をする黒板前へ移動する。ちらりと見れば玲さんが『頑張つてね』とばかりにウインクをされました。応援してくれるのはうれしいですが、プレッシャーはより増しました。

死刑台の階段をのぼる気持ちで黒板の前へ立ち、回れ右。早々に自己紹介をして席へ戻る算段でしたが、総勢40人の目線が僕に集中。思わず怯んでしまった。

（大丈夫。大丈夫です。ここは学園都市アストラルの中の第四高等学校國桜高校の一年D組の教室。なんの危険もないたかが生徒40人ではないですか。大丈夫。普通にこなせばいけます。ファイトです、悠夜）

やっぱり緊張していたのでしよう。若干取り乱した僕は自分に喝を入れると、深呼吸を一回。自己紹介を始める。

「皆さん初めてまして。僕の名前は森羅悠夜。森羅万象の上二文字に、悠然の夜で森羅悠夜です。名前の意は森羅万象（全て）の悠とき夜です。趣味は読書と裁縫。特技は料理に掃除です。若輩者ですがどうかよろしくお願いいたします」

言い終わると同時に腰を折る。耳をすませば自己紹介が終了した者へ平等に送られる拍手が聞こえる。

僕は頭を上げると足早に席へと戻る。その際『家政夫？』『女の子かと思った』『あいつ本当に同学年か』等聞こえてきた。無難にこなしたつもりですが、反応はイマイチのようですね。はあ。

五十嵐先生は僕と入れ替わるように黒板の前へ立つと

「それでは、これから体育館で入学式が行われます。体育館までは私が誘導しますのでついて来てください」

その言葉でクラスメイト一同は席を立ち、五十嵐先生の後をついて行く。

体育館には既に上級生がいるらしく、移動は一年だけだったが全部で9クラスもあるためそれなりに混雑した。

大きな入り口をくぐると吹奏楽部による演奏と紙吹雪が出迎えてくれた。結構凝ってますね。

先生の指示の元、一年生がクラスごとに並ばされた。ちなみに、一年生が前半分。残りを上級生がややきつそうに座っていた。先輩はいろいろ大変ですね。

司会進行役の教師が入学式始まりを告げ、校長先生らしき人（おそらくズラ装着）が壇上に立ち挨拶を述べ、学生にとって全くありがたくない話しが15分くらい続いた。眠い。

校長先生の話しが終わると次は新入生代表が挨拶をした。どうやらこの学校に学年トップの成績で入ったらしい。まあ、定番ですね。

同級生の言葉はそれなりに共感するものがあつたのか、耳を傾ける人もいたが、あまり熱心に聞いているようには見えない。

5分弱で新入生代表の挨拶も終了し、次は上級生代表として國桜高校の生徒会長が挨拶することを司会が告げた。

その瞬間。

それまであまりやる気のない拍手か司会に促された礼しかしなかった上級生が、まるでここがワールドカップの会場かと錯覚するほどの歓声を上げた。

唖然とする新入生一同。もちろん僕も先輩の豹変ぶりに目を丸くしていた。一体何が彼らをこれほどまでに変えたのでしょうか？

原因はすぐにわかった。

「新入生諸君」

いつの間にか壇上に立っていた生徒会長が静かに告げる。

鈴を鳴らしたような透き通る声。聞き惚れるのには十分な美声だが、それだけではないだろう。

艶のあるサラサラな髪はポニーテールに結われ、雪を思わせる白い肌に浮かぶ整った形の鼻梁と柔らかかそうな唇。瞳は大きくまつ毛も長い。文句のつけようがない美少女（生徒会長）がそこにいた。

「アストラル及びこの國桜高校への入学おめでとう。我々上級生は心から歓迎しよう」

あれほどうるさかった上級生が水を打ったように静まりかえっている。生徒会長の言葉を一言一句聞き漏らさないつもりなのだろう。現に新入生のほとんどが熱心に耳をすましていた。

「國桜高校、アストラルに来たからには様々なことが起きるだろう。その中で自分の『青春』をしつかりとつくり、たくさんのことを学んで欲しい。以上で私の話しは終わりだ。では、良い高校生活を」

そう言っつて生徒会長が綺麗なお辞儀をすると、再び割れんばかりの拍手と歓声が巻き起こった。

新入生もしつかり上級生に交じって拍手を送っている。僕はというと、自分の列へ戻っていく生徒会長をポーッと見ながら、ペチペチとやる気のない拍手をしていた。気合い入れると手のひら痛くなりますからね。

直視とは言わなくても、生徒会長のことを見ていたせいか綺麗な姿勢であるいていた本人と目が合った。

(?)

司会が生徒会長がちゃんと戻ったことを確認すると、入学式が終了を告げ一年生から退場となった。

出口となった扉をくぐる時も吹奏楽部の演奏と紙吹雪で再び彩った。

教室へ戻る際、他の生徒はまだ興奮が冷めないのか生徒会長の話題で持ちきりだった。

僕も廊下のすみを歩きながら、生徒会長のことを考えていた。正確に言うなら彼女と視線が交差した時のことを。

あれってやっぱり僕のこと睨んでましたよね？

4

教室へ戻ると今日はこれで解散ということだった。ちなみに上級生は体育館の後片付け及び午後の授業があるようです。先輩は本当に大変ですね。

五十嵐先生は明日の連絡事項を言い、プリントを数枚配ると早々に立ち去った。なんだか本当に忙しそうですね。幸うすそうなところとか、親近感がすごく湧いてしまう。

僕も特によろがないので帰り仕度をしていると不意に声をかけられた。

「 ゆーくん 」

声のした方を向けば、整った容姿に指通りの良さそうな髪をストリートにした女子生徒が立っていた。玲さんを優しげとするなら、

こちらはおしとやかで爽やかな感じのする美少女だ。

「あ、あの、私のことを覚えていらっしやるでしょうか。小学生の頃は二人で良く遊んだ中なのですが……」

「ええ、覚えていますよ。カレンさん」

僕が昔のあだ名を口にするると女子生徒

きりつきれんか  
霧坏恋華さんは表情を

喜色満面にした。

「けれど、よく私だとお分かりになりましたね」

「僕からして見ればあなたが僕のことを覚えていた方が驚きです。

あなたの小学生時代は平均的記憶力が下の方になりましたからね」

「む、昔のことですわっ。そんな風に過去をほじくり回さないでください」

しかし、驚きました。まさかこんな形で旧友と再開するとは。昔はあまり大差なかった身長も、今では……かわりませんね。まあ、僕の背丈は一般男子高校生のそれよりも低い方なので、仕方ないと言えばその通りですね。

「あの、これから帰られますか？」

「ええ。特にすることもありませんし」

「なら、ご一緒してもよろしいですか？」

「構いませんよ」

と、いうわけで一緒に下校することになった。教室へ出るなり、

「これからは恋華とお呼びください。私も名前でお呼びしますわ」

「わかりました、恋華さん。あの、これでいいですか？」

「はい」

こんなやりとりがあり、下の名で呼び会うことになった。その時から恋華さんとはとてもニコニコしながら僕の隣を歩いている。……距離が近くないでしょうか。あと半歩ずればお互いの肩が当たるくらい近いので、なんだか落ち着かない。

玄関口まで来ると、不意に恋華さんの表情が強張った。

「どうかしましたか？」「悠夜さん、私たちどうやらつけられています」

「え、そんなんですか？」

だとしたら、なんででしょうか。僕は悪目立ちしたり、誰かに目をつけられるようなことはしていないはずですが。

「犯人を撒きますのでどうかついてきてください」

「えっ、あ、はい」

そう言われて恋華さんに手を握られ誘導される。しばらく校内をぐるぐる歩いた後、資材置き場と思われる部屋に入った。

「あの、追跡犯を撒くのは賛成ですが、何故部屋に？ そのまま学校へ出た方が」

窓の景色を見ながら、問いかける。そんな恋華さんは答えずに扉の鍵をしめる。

「あの、恋華さん。どうして施錠を？」

「駄目ですわ、悠夜さん。そんな無粋なことを言ってしまったわ…

…」



恋華さんはそう口にすると妖しく微笑み、こちらに歩いてきた。何故か僕は言いよ用の無い違和感を感じ、後退するもすぐに背中が壁についてしまう。横に動こうにも恋華さんが僕を挟むように両腕を壁につけた。女の子一人を押しつけるのなんて造作もないのに、なんでかできなかった。恋華さんの瞳の輝きから目をそらせることができなかった。

「ふふふ、悠夜さんったら。あの時よりも可愛らしく、かっこよくなられて……。もう溜まりませんわ」

恋華さんは唇を舌で湿らすと、僕の首筋に口をつけた。

「ひゃあやっ」

首筋を這う暖かい唇と舌の感触に思わず声を上げてしまう。全身に力が入らず、抗うという意識が徐々に薄れて消えてゆく。そんな僕の状態を知ってか知らずか、恋華さんの両手が胸と太股を滑らすように撫で上げる。

「ちやぶ、んん、あむ、あん、ちゆる」

「ら、らめれす。そんな、んっああ」

「クス、そう言ってもかわい顔してまわよ。じゆる、れろ」

「あひゃううっ。れ、恋華ひゃんっ」

「んう、あむ、ん、じゆる………なんですか、悠夜さん」

「こ、こっこうというのは。ただ、駄目です」

僕が必死の説得を試みるも、恋華さんはただ妖しく微笑むと耳元ギリギリまで顔を寄せると、

「悠夜さんこそいけませんわ、自分に正直にならなくてわ」

「ひゃううううっ」

今度は耳を噛まれた。電流のような刺激が脊髄を直撃し、脳がぐにゃぐにゃに溶けたような錯覚に陥った。

そんな僕を見ると恋華さんは悪魔のごとく笑うと、

「では、一緒に気持ち良くなりましょうね」

ズボンのベルトを外しにかかった。駄目だ、という考えが頭をよぎるがピンク色の霧がそれを邪魔した。

そして、ベルトが外されそうになった瞬間　大きな破碎音と共に扉が壊れ、玲さんが入ってきた。

「あ、玲さん!？」

「悠夜くん、大丈夫?」

「なんなんですか、あなたは?」

先ほどの妖艶な表情から一変、突然の乱入者へ不満を隠さずイライラした様子で静かに睨む。

「それはこっちのセリフよっ。こんなところで何をしてるのっ」

玲さんもそれに怯むことなく包丁を恋華さんに向け言う。あの、刃物を人に向けたら危ないですよ。というか、あの扉って包丁で破壊したんですか?

「えーと」

僕はというと完全に腰が抜け、床に情けなく座っている。あれ、おかしいですね。お二人の殺気が徐々に増している気が……。

僕と玲さんと恋華さん。

なんとも言えない恐怖の三角関係が出来上がってしまった。

「全くストーリーキングだけでなく、こんなところにまでこられるなんて」

「え。僕たちをつけてたのって玲さんだったんですか？」

「ひ、人聞きの悪いこと言わないでよ。友達が変な人と歩いてたら、誰だって気になるでしょっ」

「そんなこと言って、私と悠夜さんの仲がうらやましいんじゃないんですか？」

「う、うるさいわよ。この痴女！」

「なんですって！」

止める間もなく、口喧嘩にまで発展してしまった。

仲裁しようとするも、二人の剣幕に押されて口をはさめない。

一人で帰ろうかなとも思い足を動かすも、その瞬間二人に『どこへ行く』的な目で睨まれてしまい、動けないでいる。

ああ。女性は怖いって本当だったんですね、父さん。

終わりの見えない戦いに終止符を打ったのは、意外なものだった。

『ぐううう』

……お昼時ですものね。

「私は違いますっ」

「違うからね。全然違うからねっ」

僕の方を向いて、二人が息を合わせて言う。この場での否定は肯定と一緒にですよ、とはもちろん言えない。変わりに、

「僕もお腹すきましたし。何か食べにいきましょう」

言うが早い二人の手を引いて、無惨な扉を踏みつけ学校を後にし、近くのファミレスへと避難する。移動していた間ずっと、二人の顔が赤かったですけど、息でも上がったのでしようか？

店内は運良く空いた席が有り、店員さんに四人掛けの席へ案内される。

着席する際玲さんと恋華さんが軽い小競り合いをおこし、結局僕と向かい合う形で二人が席についた。何を争っていたんでしょうね？

メニューを見て全員が食べるものを確認してから店員を呼ぶ。僕は鯉の煮付け定食（ご飯のおかわり自由）で玲さんはハンバーグ、恋華さんは麻婆豆腐をそれぞれ注文。……和・洋・中の三種類をメニューに入れるとは。このファミレス、やりますね。

料理を待つ間は自然にトークタイムとなった。最初は険悪と思われた女子二人の仲も、話しているうちに打ち解けたのか楽しそうにお喋りしている。ちなみに僕は積極的に話しに加わらず、基本受け身の姿勢を取った。苦手なんです、フリートーク。

「へえー、じゃあ中学の時からアストラルに住んでるんだ、霧坏さん。食事とかはどうしてたの？」

「私は中学生時代の時も寮で生活していましたが、基本食堂ですましてました。でも、月に二、三回は友達と一緒に調理場を借りて料理に挑戦したこともありましたわ。食堂でも結局お金を払うわけですから、料理の腕を磨いても損はありませんでしたわ」

「そうなんだ。悠夜くんはどう。料理が趣味だったというし」

「僕も基本は自炊にしようと思っています。アストラルに来る前からそうでしたから」

「うーん、やっぱり私も料理覚えようかな。コンビニとか寮の食堂ばっかりだとお金すくなくなりそうだし」

「まあ、本は初心者向けのがありますからそれをオススメします。」

あ、どうやら料理が来たようですわ」

蓮歌さんの言った通り、店員さんが巧みな技で三人分の料理を運んで、テーブルへ並べてくれた。

鰯の煮付けを口に運んで咀嚼。うん。この味は充分、合格ラインですね。しっかりと煮汁が身にまで染みて、ふんわりとした歯ごたえが心地いい。他の料理も当たりのようで、二人とも美味しそうに食べている。

「悠夜さん、悠夜さん」

「はい？」

「あーん」

恋華さんに呼ばれたかと思うと、麻婆豆腐がのせられたれんげが目の前にあつた。食べさせられるのでしょうか？ なら、素直にいただきます。美味しそうです。

「いただきます。パクッ」

あ、やっぱり美味しいですね。とろみ加減もちょうど良く、辛さ上手い具合に効いている。

「おいしかったですか？」

「はい」

「ふふふ、良かった」

なぜかご満悦の恋華さん。その横では、

「っ。(ザクッ)悠夜くん、あーん」

「い、いただきます」

今度は玲さんが食べさせてくれた。けれど、ナイフに刺さったものをもらった為正直怖かった。あと、玲さんの目も。

「美味しい？」

「はい」

「良かった」

嘘です、すいません。怖くて味がわかりませんでした。

僕もお返しをしようとするも、鰯の煮付けはとっくに胃袋の中でした。よっぽど食べたかつたらしく、二人は酷く落胆していた。

食べ終わると、ファミレスの迷惑になるので長居はせず、その場で別れることになった。

「それでは、悠夜さん。失礼します」

「悠夜くん、また明日ね」

「さようなら。帰路お気をつけて」

こうしてやっと、僕は家へと足を運んだ。あ、スーパーによらないくは。

5

「……疲れましたね」

時間は23時44分。もうすぐ、4月8日火曜日が終わろうとしている。

掃除から洗濯まですべての家事を終わらせ、自室に戻り布団を敷き消灯して横になっている。

天井見ながら考えるのは今日あったこと。本当にいろんなことがあった。

玲さんと知り合い、生徒会長に睨まれ、恋華さんと再会。その後、玲さんと恋華さんと三人で食事

「誰かと一緒に食事をしたのって久しぶりですね」

馴れない日常は心身ともに疲れた。

でも、それ以上に

楽しかった

心が弾んだ

笑える気がした

自分自身、まだ僕の中にそんな人間らしさが強く残っているのに深く驚いた。でも、悪い気はもちろんしない。

「……明日も何かおこるのでしょうかね」

変化を言んでいるのか、それとも疎んでいるのか。

どちらかはまだわからない。

でも、それが必ず訪れるのなら受けてたつしかないのでしょうかね。

『日常』はどこまで楽しませてくれるか。まあ、期待しまし  
よう。

目を閉じて闇へと意識を沈める。

眠りへと墜ちるのに時間はいらなかった。



## 第一夜 出会いと再会、それは日常の奇跡（後書き）

長めかもしれませんが、基本これくらいのペースで進めたいと思います

あと、これからは主要人物が出る度にキャラプロフィールを書きたいと思います。

感想、ご意見、その他もろもろありましたら、どうぞよろしくお願いたします。

## 第二夜 誰かのスイッチは突然押される（前書き）

今回は國桜高校について、少し書かせていただきました。

長いのは嫌という方やそんなのいらないう方は、どうぞナレーションはすつとばしてください。

それでは、どうぞ。

## 第二夜 誰かのスイッチは突然押される

1

昨日は早く来すぎたため流石に反省し、今日は五分早めに登校した。でも、結果的には変わらず、学校の敷地に入っても人の気配をあまり感じられない。

廊下を歩いてもやはりひっそりとしていて、廃校のような印象がある。入学二日目で思うことじゃありませんね。

教室に着いて扉を開ける。すると意外なことに男子生徒が一人、すでに登校していた。

男子生徒は僕の姿を視界に入れると嬉しそうにこちらへ歩みよってきた。

「いやー、良かった。早く来すぎて一人でいる間ずっと暇でさ。話し相手が欲しかったんだ。お前確か森羅悠夜もりあみ ゆっやだよな？」

「はい。あなたは神薙亮かんなぎりょうですよね？」

「おう」

「何でこんな朝早くに？ まあ、人の事言えませんが」

「いやー、朝練があるかと思って早起したら、まだ野球部に入部してないのすっかり忘れてたわ」

そう言えば、神薙くんは昨日の自己紹介の時趣味は野球で、國桜高校の野球部に入部すると告げていた。でも、國桜高校は体育系、文化系どちらも今日の放課後からの入部となっている。

「ところで悠夜、お前は何か部活入るのか？」

「いえ、これと言って決めてませ」

「なら、野球部だ！」

僕の言葉を半ばさえぎると、神薙くんは目をキラキラさせながら断言した。

「決まっていけないなら、断然野球部だつ。野球はいいぞ。仲間と共に輝かしい汗を流し、夕日に向かって夢を叫びながら走る。これぞ青春！」

熱くなつた神薙くんが熱い内容を暑苦しく語る。って、本当に熱いつ。

「あの、神薙くん。のつてるところ悪いのですが落ち着いてください。陽炎かげろふだつて出てますっ」

「ん？ おお、悪い悪い。俺って魔力高い方だけど、コントロール微妙だからさ。で、野球部入るか？ 見たところお前って筋肉ついてそうだし、充分エースは狙えるぞ」

反省しつつも、しつかと入部の意見を聞いてくる。けど、神薙くんの観察眼に驚いた。服の上から見ただけじゃわからないけど、毎日の筋トレと師匠し匠の特訓のおかげでマツチョとは言えないが筋肉はそれなりについているし、引き締まっていると思う。

野球について（必要以上に）熱く語ってくれた神薙くんには申し訳ないけど、入る気は毛頭ないのでしつかり自分の意思を告げなければならぬ。

「あの神薙くん」

「よし、放課後は一緒に野球部の顧問へ入部届けを出そう」

「聞いてくださいっ」

おかしい。なぜこのやり取りで、入部届けの話しになるのか。話  
しがおかしいのか、神薙くんの頭がおかしいのか。

「そうじゃなくて、ちゃんと聞いてください。僕は野球部に入  
りません」

僕の言葉を耳にした瞬間、神薙くんがものすごい勢いで落ち込み  
床に手をついた。頬には涙も伝い、なんだか非常に申し訳なくなっ  
てきた。

「なぜだ、なぜなんだ！ どうしてお前は野球を否定するんだ！？」

「いや、否定はしてないのですが……」

聞いてませんね。

はあ、あまり言いたくはなかったんですが……

「神薙くん。僕が野球部に入らないのは、それなりの理由があるん  
ですよ」

「理由？」

僕は神薙くんの頭を見る。

「野球部って基本短髪たんぱつじゃないですか」

そう、野球部員は機動性や熱中症対策として、髪を根元近くまで  
切っている。事実、神薙くんはスポーツ刈りではないが、ずいぶん  
と短めだ。とてもじゃないが、今の僕はまだこのヘアースタイルを  
崩す気はない。

神薙くんはしばらく僕の長髪を見ていると、

「なんだそんなことか。心配するな、悠夜。ここにちゃんと……」

いつの間にか神薙くんの手には

「カミソリ持ってるから」

違いますから!!

神薙くんはどうやら、僕が散髪をめんどくさがっているだけだと勘違いし、カミソリを手にしながら必要に頭部を攻撃してきた。

僕はどうにかそんなに広くは無<sup>ふ</sup>い教室の中を逃げつつ、必死の説<sup>ふ</sup>得<sup>ふ</sup>でとりあえずは諦めてくれた。不承不承。

「頼むよー、入部してくれよー」

カミソリはしまったものの、まだ勧誘する気はあるようだ。

「いいだろう。お前が入ってくればマネージャーが二人も入るんだから」

「入りません。というか、マネージャーが入るとはどういうことですか？」

「だって付き合ってたんだろ？ 月弦と霧坏と悠夜」

「……………はい！？なんでそんなことになってるんですっ。

いや、まずどちらとも特別な友人関係を築いていませんよっ」

「え、そうなのか？でも、お前が二人の手を引いたまま下校、その勢いでファミレスに連れこんだって1年D組の間で持ちきりの噂だぞ？誰か本命か、それか二人ともか。どうなん？」

「どうなんって、一緒に帰って食事をしたのは事実ですが、恋仲等ではありませんっ。というか、クラス中に知れ渡っているんですか？」

「なめんなよ、俺らの情報収集能力及び情報伝達能力」

「誇らしげに言わないでください。人のプライベートをなんだと思っ  
っているんですか」

「そう言わずに頼むよ。月弦と霧坏の彼氏であるお前が入れば、あ  
の二人もマネージャーになつてくれるから」

「彼氏ではありません。というか、なんであの二人がマネージャー  
に？」

「野球部の彼女つてみんなマネージャーだろ？」

「……その考えは安易すぎる気が」

「とにかくっ。部員になるか、マネージャーになるかどっちか選べ」  
「僕の人権はどこに？」

その後、他の生徒が来るまで僕と神薙くんの噛み合わない論争が  
続いた。

何か部活入りましようかね、野球部意外で。

2

いつの間にかクラスメイト全員が登校し、チャイムを合図に着席  
した。

けれど、担任は現れない。

もしかして、また欠席？

僕がそんなことを考えていると、扉が開く。入ってきたのは我が  
クラスの担任ではなく、五十嵐<sup>いがらし</sup>先生だった。

正確に言うのなら、五十嵐先生が押してきた台車に人を乗せて入  
ってきた。

服装は秘書を思わせる女性もののスーツ。けれど、ところどころ  
に皺が目立っている。髪も綺麗なのに無造作に束ねているだけだ。

(誰?)

そんな疑問が頭をよぎると、五十嵐先生が衝撃的なことを言った。

「瀬野先生、瀬野先生。起きてください。教室に着きましたよ」

呼ばれた名前を聞いてギョツとした。

瀬野樹伊。

それがこのクラスの担任の名前なのだ。

「うーん」

名前を呼ばれて意識が覚醒したのか、ゆっくりと瀬野先生が起き上がった。顔を見ると結構整っている。そんな彼女の第一声、

「マスター、ハイボール一つ」

駄目だ。ここをバーか何かと勘違いしてますよこの人。まだ飲む気なのでしょうか？

そんな瀬野先生を見て呆れながら、五十嵐先生は

「では、私は戻りますのでちゃんと職務をまっとうしてくださいね」

念を押すように五十嵐先生が退出。瀬野先生は、頭を押さえながら

「あー、痛てて。それじゃあ、委員決めだな。まずはクラス委員長。誰かやりたい奴いるか？」

今日は一時間目に委員決め。それからの昼休みまでは普通授業。午後は部活動紹介がある。

クラス委員長と聞いたとたん、クラス中が息を殺し、しんと静ま



り帰った。まあ、みんながみんな面倒な役職に就きたくないのはわかる。僕？ これ以上厄介事はごめんです。

「誰かやらないのか？ 早く決めてくれ、頭がくらくらするんだ」

それはあなたが飲み過ぎたからでしょうっ、と脳内で一人呟いていると誰かが拳手をして立ち上がった。驚いたことにその誰かとは神薙くんだった。

「俺は悠夜がやった方がいいと思いますっ」

「よし、他にいるか？ ……他に候補がないようなので我がクラス委員長は森羅となった」

……………はい？

「ちょっと待つてくださいいっ。僕はやるなんて一言も言ってませんよ！？」

「そりゃあ、そうだ。言い出したのは神薙なんだからな」

「どうして推薦がありなんですか？ そんなの聞いてませんよっ」

「まあ、落ち着け。お前には見えないのか？ クラス40人プラス一人の教師からなる、お前に期待しているぞという輝いた眼が」

「クラス40人プラス一人の教師からなる、こいつに押し付けようという淀んで濁った眼なら見えますけど？」

「そう言うな、一番大変なのは副クラス委員長なんだぞ。ただでさえ面倒だし、無能な上司の尻拭いまでしなきゃいけないんだから」

「押し付けられてる拳げ匂に無能呼ばわりまでされた！」

……………酷い。僕がいつたい何をしたと言うのでしょうか。

「ちょっとみんな、いくらなんでも可哀想だよっ」

「そうですね、もっと悠夜さんの意見を尊重するべきです」

そう助け船を出してくれたのは、玲あきじさんと恋華れんかさんだった。ああ、人間不信に陥りかけたところへこの言葉。涙が流れそうです。流れませんけど。

「ちなみに副クラス委員長（二人）はクラス委員長を手取り足取りサポートできるぞ」

「悠夜くん（さん）がいいと思います！」

「お二方！？ どうしたんですっ」

瀬野先生の話を聞いたとたん、二人は手の平をあっさりとひっくり返した。本当に人間不信になりそうです。

「で、森羅。異論はあるか？」

「もうどうでもいいです。疲れました」

「そうか、では今日から森羅がクラス委員長だ。みんな、拍手」

そうして沸き上がる盛大な拍手。なんだかここまでされると、むしろ癢ですね。まあ、怒ったところでしょうがないですが。

「じゃあ、よろしく頼むぞ。私は頭痛がするため保健室で睡眠

休養を取ってくる」

「先生、明らかに保健室のベッドで寝る気ですよ？ というか、もう何しに来てるんです」

「私には構わなくていいから、後の委員決め頼んだぞ」

「是非せひそうさせていただきます。僕も頭が痛くなる前に」

僕はため息をつきながら、瀬野先生と入れ換わるように黒板の前へ立つ。

「それでは、次は副クラス委員長を」  
『はい!』

手を上げたのは玲さんと恋華さんでした。元気いいですね、羨ましい限りです。

3

四時間目終了のチャイムが鳴り、今は昼休み。  
疲労感のせいで体重が標準の二倍ほどに感じる。

原因はクラス委員長になったからだ。最初は面倒事の少なそうな  
役職につこうと考えていたのに……。

「悠夜さん、昼食と一緒にしません？」

「一緒に食べようよ」

机に額を付けて無気力に時間を潰していると声をかけられた。声の主はもちろん、恋華さんと玲さんだ。二人はお互いに同じタイミングで口を開いたことに気付くと、キツと睨み合った。すごいシンクウ率ですね。実は双子とかでしょうか。

「悠夜くん」

「何か失礼なこと考えてませんでした？」

「滅相もございません」

失礼かどうかはわからないけど、本人にとって色好いろよい回答でなかった場合の報復が怖いので無難に回避する。

「ふーん。まあ、いいや。それより早く食べようよ」

「でしたら、お一人でどうぞ。悠夜さんは私と食べますから」

「そんなことないよね、悠夜くん。友達と一緒に食事をするのは普通だよな？」

いつの間にか僕に決定権が握らされていた。これってあれですか？ 一方を味方すれば、一方と敵対してしまう。そんな針のむしろ。今僕が陥っている状況はそれなのでは。

二人を改めて見る。どちらの手にはかわいらしい弁当の包みを持っていて、綺麗な瞳に眼光が眩しいほど輝いている。怖いほどに。

「三人で食べましょう」

どちらかを敵に回す勇氣など僕にはなく、こんな提案しかできなかった。

「まあ、悠夜くんがそう言うなら」

「そうですね。このままでは昼休みも終わってしまいますし」

良かった。なんとか丸く収まってくれて。二人は近くの机を僕のに繋げてテーブルを作ると、弁当を広げた。さて、僕も弁当弁当。

「え？」

「悠夜さん、それ全部食べるんですか？」

「そうではけど。どうかしました？」

「いや、だって重箱だよな、それ」

玲さんは僕の重箱（弁当箱）を指差しながら、まるでUMAでも発見したかのように僕を見る。

「これぐらい30分弱あれば食べ終わりますよ」

「すごい胃袋だね。朝ごはん食べてその量？」

「もちろんです。三食毎日食べるのは健康の基本ですよ。さあ、食べましょう。いただきます」

僕が食べ始めると恋華さんも手を合わせ続ける。けれど、玲さんは何故か弁当を開けずにじっと睨んでいるだけだった。

「どうかしました？ 具合でも優れないんですか」

「駄目ですわ、そんなに詮索なさっては。女が食事を取り立がらない理由なんて」

「紛らわしいこと言わないでよつ。一応作っただけど……」

嫌々という感じで弁当のふたが開けられた。中身を見た瞬間、玲さんが渋っていた理由が良くわかった。

白米は弁当の半分を占め、焦げた肉らしきものや一口サイズの野菜が残り半分に詰められていた。

お世辞にも上手とは言えないでございました。

「……………」

「せめてなんか言っつてよ！」 「僕には玲さんを傷つけることなんてできません」

「ボキャブラリーの乏しい私を許してください」

「……………どう転んでも私が傷つかないという選択肢がないのはよくわかったわ」

玲さんは明らかに落ち込んでしまいました。どうしましょう？

「玲さん。そんなに気落ちしないでくださいよ。僕の手作りミニハンバーグ、良かったら食べませんか？」

「え？」

僕の提案に玲さんはきよとした表情で僕と重箱の中のハンバーグを交互に見た。

「……悠夜くんの手作り……」

「あの、いりませんか？」

「いやっ、食べるよ。うんっ。是非とも頂戴」

「わかりました」

内心で良かったと思っていた。玲さんが立ち直ったのもそうだけど、誰かに自分の作ったものを食べてもらえるのはとても嬉しい。

「では、どうぞ」

「いや、人の弁当箱に箸をつけるのは良くないと思うからさ、……悠夜くんが食べさせてよ」

律儀なんですね。僕はそんなの気にしませんのに。

「わかりました。どうぞ」

「うん。あゝん」

ハンバーグを一つつまみ、雛鳥に餌をあげる親鳥のように玲さんの口へ運ぶ。

「お味はいかがでしょうか？」

「う、うん。とても美味しいよ」

「それは何よりです」

玲さんの笑顔から好評なのは本当のようだ。けれど、頬に赤色が

浮かんでいる。昨日作っておいたハンバーグには、発汗作用はないはずですが。

「……」

楽しそうに咀嚼している玲さんの隣では、対称的に恋華さんはムスツとしていたけれど何かを閃いたのか、箸で自分の弁当箱にあるミートボールを一個つまんで、

「あ〜ん」

昨日のように食べさせてくれるのでしょうか？ 美味しいそうですし、いただかせてもらいましょう。

「いただきます」

「どうぞ」

「もぐ。？」

ミートボールを口に入れると恋華さんは、箸ごと口内へ押し込んだ。別に、苦しくはなかったんですけど……。

「あの、どうしたんです？」

「い、いえ。なんでもありませんわ。私にも一口いただけませんか？」

「構いませんよ。どうぞ」

「あ〜ん」

今度は僕が食べさせると、恋華さんは顔を赤くしながら口を動かしている。……やはり、僕のハンバーグには発汗作用があるのでしようか。

ハンバーグを飲み込むと恋華さんは自分の弁当へ箸をのばす。そ

くへ、

「その箸どうするの?」

玲さんの声で箸がピタリと止まる。

「ど、どうするも何も私は自分の箸を使うだけですわ」

「ふ〜ん」

「な、なんですか?」

「別に。ただ、霧坏さんって結構やらしいんだなって」

「何を言ってるんですのっ? そんなことは料理の腕が少しは上達してから言ってください」

「関係ないでしょ!」

あれよあれよと言う間に口喧嘩にまで発展してしまいました。この二人、仲とか相性が悪いわけではないのに、どうしてこうやって歪み合うことがしばしばあるんでしょうか? 二人とも止めてください。クラスの皆さんが雰囲気怯えていますから。だから視線をぶつけて火花を散らさないでください。

「お、あんだけ否定してた割には仲いいじゃん。一緒に弁当なんか食べちゃって。憎いね、このー」

場の空気を読まずに僕の脇腹を小突いたのは、今朝知り合い理不尽な目に合わされた神薙くんだった。購買に行ってきたのだろう、手にはパン等を入れた紙袋を持っている。そして彼の友人だろうか。二人の男子生徒が神薙くんの横で興味深そうにこちらを見ている。

「おー、修羅場かニヤ? いやー、たった一日でフラグを立てるなんて大したもんだニヤー」



金髪に眼鏡をかけた男子生徒　天宮響くんあまみやびき。自己紹介で、自分はハーフだと言っていたのを覚えている。まあ、外見よりもその口調の方が特徴的ですが。

「で、結局どっちと付き合ってるんだニヤ？」

「あなたもそんなことを言うんですか」

「ちなみにクラス中に情報と噂を流したのこいつだぞ」

「歯を食いしばってください」

「ちよつ、ばらすなよ亮つ。あと、お前さんはその握り拳で何する気ニヤ！？」

「多少の記憶は飛ぶかもしれませんが、我慢してくださいね？」

「無表情なのが一層怖いニヤっ」

「情報と噂ってなんですか？」

逃げようとする天宮くんの襟首を掴んでいると、いつの間にか喧嘩（？）を終えていた恋華さんが会話に加わってきた。

「あー、お前と月弦。どっちが悠夜の本妻かって話し」  
「なっ」

神薙くんの知らない説明で、恋華さんの顔が真っ赤になってしまった。何故かは知りませんが。見れば玲さんもよほど驚いたのか、箸を落とし口をパクパクさせている。

『……………』

僕の周りの空間で沈黙が生まれる。玲さんと恋華さんはそわそわしながら、たまに僕を見てはピッと視線を反らす。神薙くと天宮くんはそんな僕らをニヤニヤしながら傍観者気取りで見ている。

なんだかムカムカしますね。

「……それぐらいにして食事を再開したらどうツスカ？」

そう提案したのは神薙くんと一緒にいた二人目の男子生徒だ。今まで黙々と食べていたが、助け船を出してくれた。彼の名を刈柴大地<sup>かりしば だいち</sup>。今の僕には非常にありがたい援護です。

「そ、そうですね。時間は有限なことですし」

「うん。残るのはいけないもんね」

おかしな雰囲気になっていた二人は食事を再開。神薙くんと天宮くんもつまらなそうに購買で購入したパンを口に運ぶ。

僕は箸を動かさず、刈柴くんに頭を下げて礼をのべる。

「素晴らしい鶴の一声、ありがとうございます。おかげでこの通り事態を鎮静できました」

「いやー、さすがに見えていて可哀想だったスから」

そう言っただけで楽しそうにサンドイッチを口にする。見ていて安心感を感じ、なんだかすごい新鮮です。これが日常なのでしょうが。

「いえ、本当に助かりました。僕の周りの人はどういうわけか、無駄に个性的に対応に困るひとばかりですので」

「そういう評価をくれるのは嬉しいツスけど、後ろ見た方がいいツスよ？」

「はい？」

そう言われて振り向くと、怒りに身を震わす二人の女夜叉<sup>メノ</sup>がいた。

「無駄に個性的？」

「対応に困るとはどういう意味でしょうか？」

「俺は熱いだけだつ。野球に対する情熱は永久機関だ！」

「まー、自分がアブノーマルなのは認めるけどニヤ」

やぶ蛇でした！

「あの、聞いてください」

「悠夜くん(さん)？」

「はい、なんでしょう」

とても、あなた方のことではありませんとは言えませんでした。

4

午後には予定通り、部活紹介が行われた。

内容は各部活動の練習場所や部室へ一年生が足を運んで、上級生の説明を受けるというもの。ちなみに、A～D組は文科系、E～H組は体育系からの案内になっている。

(不本意ながら)クラス委員長になった僕はクラスメイトを誘導しながら、文科系の部活の設備が整っている文科教室棟へと向かう。國桜高校はこの他にも、生徒の教室がある普通教室棟、家庭科室や実験室からなる特殊教室棟、体育系の部室や設備がある体育教室棟からなっている。ちなみに、食堂は普通教室棟の、体育館は体育教室棟の隣に建っている。

文化教室棟は一見ただの校舎だが、中身は違っていた。新入生勧誘を意識してか、ところどころ装飾がされ部活を紹介した貼り紙等が壁に貼ってあった。

最初に行った料理部ではクッキー等のお菓子が振る舞われた。僕も一口いただきましたがなかなか美味しい。

「玲さんはこちらに入るんですか？」

先ほどまで熱心に上級生の話し聞いていた玲さんに尋ねる。

「えっ、う、うん。そうしようかなって。初心者歓迎って言ったし。ここのなら、料理も上達できそうだし」

よっぽどお昼のことが応えていたのでしょうか。恥ずかしそうにうつむいてしまいました。

「頑張ってくださいね」

「うん。ありがとう。……それでね、上達したらでいいんだ。その時は、私の手料理 食べてくれる？」

身長の関係でしょう。上目遣いの彼女はとても魅力的で

「わかりました。その時を楽しみにしています」

思わず後押ししてしまいました。

「うん。私頑張るから！」

笑顔でガッツポーズをする玲さん。僕はそれとなく調理台に目を向ける。

……やっぱり包丁は使いますよね？

調理場に笑顔で立ち、手には包丁を持つ玲さんを想像して思わず寒気がした。……応援しておいてなんですが、大丈夫ですよ？

料理部を後にしたD組一向は次に吹奏楽部が準備している音楽室に向かう。音楽室は第一と第二があり、吹奏楽部は第一に、軽音部は第二に待機しているらしい。

二つとも漫画でありがちな敵対関係とかはなく、のほほんと構えていた。両者とも素晴らしい演奏とパフォーマンスで、僕らを迎えてくれました。天宮くんは軽音部のメンバーが6人だったことに、何故かショックを受けていましたが。

思わずアンコールしたくなる吹奏楽部と軽音部を後にして畳の敷かれた和室へと移動する。

畳が約30畳分ほどもある広い部屋では、茶道部である和服姿の先輩が出迎えてくれた。そこでは和菓子をご馳走になり、立候補した数人が実際にお茶をたてたりしました。最後に部長さんが、座る時の作法から飲み方まで実に品が有って綺麗な茶道を見せていただきました。

クラスみんなが正座だったため退出する頃には大勢の足がしびれ、僕を含めた数人しか動けませんでした。恋華さんも大丈夫だったようですが、立ち上がった後も廊下に出ようとはせずお茶の道具を魅いつていました。この、反応は……

「茶道部に興味があるんですか？」

「あら、悠夜さん。そうですね、興味というより懐かしい感じがします」

そう言われて思い出す。良家である恋華さんの実家はとても広く当然のように和室がある。恋華さんはそこに先生を招き、茶道を教わっていた。小学生の頃の話ですが。

「そう言えば一度、恋華さんの家でお茶を振る舞ってくれたことがありますね。とても美味しかったです」

「それよりも私はびっくりしましたわ。まさか悠夜さんが作法を存

じていたなんて、予想もしていませんでしたから」

「本で読んだことがあるんです」

「どんな本を読んだんです？ まあ、昔からあなたは何をやっても万能でしたから。はあ、あの時美味しいお茶を振る舞ってびっくりさせようと思いましたが」

「どうか、しました？」

「いえ、別に。でも和服もそう言えば最近着てませんわね。中学では着る機会なんてありませんでしたし」

「そう言えば恋華さんの和服姿、とても似合っていましたよね。今でももちろん似合うと思いますが」

家と招かれお茶をいただいた時、恋華さんは明るい色の和服を着ていた。身長が伸び大人びた今でも、いや今の恋華さんの方が和服がとても似合うと思う。

そんなことを思っけて口を開くと、恋華さんは頬を真っ赤にしうつむいてしまった。あれ、逆鱗に触れてしまいましたでしょうか？

表情をうかがうように、恋華さんの顔を除きこむと、突然手を取られた。振りほどける程度だが、その力は強かった。

「私、茶道部に入りますわ」

「それは良かったですね」

「それで、もしよろしかったら、悠夜さんも一緒に」

「はいはい。みんな復活したし、次のところ行きましょ」

いつの間に近くにいた玲さんに背を押された。そう言われて、みんなが廊下に並んでいました。クラス委員長を待っているようなので、駆け足で列の先頭へ向かう。

「……本当に邪魔をいたしますわね、あなたは」

「私だつて誘えなかつたんだから、あんただけいい目は見させない」

わよ』

『ウフフ』

『アハハ』

僕の後ろでは玲さんと恋華さんが笑っている気配がした。でも、なんででしようね。異常な寒気と恐怖を感じるのは。

その後もいろいろな部活を回った。ごく普通に耳にするものや、初めて見たユニークなものも多数存在して驚かされた。

途中、美人の先輩に詰め寄られて玲さんと恋華さんに睨まれたり、時折やけにテンションの上がった天宮くん（漫画研究部という部活の案内だった頃が一番すごかった）を神薙くん達で静めたこと以外は、何事もなく進んでいった。

いよいよ文科系最後の部活案内となり、魔法学実験室へと向かう。

「やあ、ようこそ。私が実験部部长だ。ここでは、魔陣獣ましんじゅうや古代の魔法の研究。その成果を定期的に報告しあってもらおう。何か質問はあるだろうか？」

「具体的にはどんな魔陣獣を管理してるんツスか？」

刈柴くんが勢い良く手を上げたかと思うと、すらすらとよどみなく質問を口にした。まるで質問タイムを待っていましたと言わんばかりの、手際の良さでした。

「あいつ、魔陣獣マニアなんだってさ」

神薙くんが横で耳打ちしてくれた。なるほど。目がすごいキラキラしてると思ったら、暴走状態の神薙くんと天宮くんと同じ目をしてますね。

……彼もやつぱりまともではありませんでしたね。僕の周りにはどうしていろいろおもしろすぎる人が集まるのでしょうか？ もし

かしたら、僕が引き寄せているのでしょうか。だったら結構シヨックです。

刈柴くんはまだ質問していて、女部長さんも快く答えています。しばらくそんな光景を眺めていると、

「っ！」

目が合ってしまった、部長さんがニヤリと笑う。その瞬間、殺気とは別なトラブルでも起きそうな、言い様のない恐怖と不安が襲ってきた。

……今のは忘れましょう。

「移動しますので、そろそろ退出してください」

クラスメイトを促し、そそくさと魔法学実験室を出る。

その間ずっと、部長さんが僕を見ていた気配がしましたが、気のせいだと信じたい。

僕らD組は一旦靴を履き替えると、運動部が待っているグラウンドへと足を運ぶ。

「とうとう野球部の時代が来たー!!」

「まずは陸上部からですよ」



## 第二夜 誰かのスイッチは突然押される（後書き）

今回は部活動紹介の後半と生徒会長との絡みがある話とを考えています。

今回も悠夜くんは七転八倒でしたが、あれが基本だと思ってください。主人公不幸体質はもはや王道ですからね（笑）

それでは、感想やご指摘、キャラへの質問がありましたらどうぞお願いします。感想は特に嬉しいです。

では、次回まで失礼します。さよならー

**第三夜 死神が笑うとき、僕は眠れぬ夢を見る（前書き）**

間をあけてすいませんでした。

評価及びお気に入りはこの作品を加えていただい方、本当にありがとうございます。

それだけで伝助の投稿スピードは上がってしまいます（当社比）

それでは、本文をどうぞ〜

### 第三夜 死神が笑うとき、僕は眠れぬ夢を見る

1

「じゃあこの中で入部希望者はいるかな？」

人の良さそうな野球部部长が質問しました。

「はいっ」

「神薙<sup>かなき</sup>くん。手を離してもらえませんか？」

笑顔で元気よくあがる神薙くんの右手。左手では僕の手を掴み無理やりに上げさせようとしている。神薙くんは力が強い方ですが、僕も負けていなかったなのでお互いに腕が震えるまでの激しい攻防になりました。

けれどばつちりと僕も部長さんの目にとまり、神薙くんと一緒に先輩の投球をバッティング体験をさせていただきました。やりたくありませんでしたが。

神薙くんは流石野球部入部希望者。先輩の鋭い球を二回カットし、最後の三球目は見事ヒットを記録しました。

クラスからも野球部部員からも歓声があがる。先輩も本気ではないとはいえ、速くて重い球を捉えたのはとてもすごいです。

「ありがとうございましたっ」

「うん。君もいい腕してる。入部を楽しみにしてるよ」

「はいっ」

マウンド場で握手しあう神薙くんと部長さん。

あつい光景に再び拍手が送られた。  
握手が終わると照れたように神薙くんがこちらへ戻ってきた。僕の目の前までくるとバットを渡されました。

「よし、気張って行ってこい！」  
「適当にやります」

笑顔の神薙くん（元凶）を視界から外し、一礼してからバッターボックスに立つ。

「悠夜く〜ん。頑張って」  
「応援してますわ」

玲さんあまひと恋華さんれんかの声援が聞こえる。それと同時に一部の男子（先輩も含む）から強烈な殺気が出ていた。

それがまずかった。  
適当なタイミングで振って三振しようとしたのに、殺気を感じることで神経が鋭敏になってしまい、気付いたらストレートの白球を打ち返していた。

…… やってしまった。  
野球部入部希望者よりも綺麗に長打を決めたクラス委員長。今の僕はそんな風に写っているのでしょうか。

そう言えば師匠は修行がある程度終了した段階で

「今なら突然殺気を感じたとしてもきつと大丈夫？」

なんて言っていました。が、大丈夫どころか僕にとっては大惨事ですよ。しばらくボールの軌跡を見ていましたが、観念してすぐく目をキラキラさせている野球部員さんへ視線を向けました。

「……野球部に入らないかい!?」「……」

「お断りしますっ」

その後の体験では、ある意味予想通り野球部は（本当は良くありませんが）いいとして、サッカー部やテニス部でも体験（生け贄）に僕が選ばれ、というよりも素晴らしいD組の団結力のせいで、先輩と対戦することになった。対戦する度に

僕がスタンバイする 玲さんと恋華さんの声援 男子が殺気を放つ 殺気に反応して神経が研ぎ澄まされる 好プレー

という、負の連鎖が発動してしまい、野球部以降の部活では勧誘を断るのがとても苦勞しました。

グラウンドで行われる部活動見学は一段落し、僕らD組は卓球や柔道等の室内競技を見に行くため再び下駄箱へ向かう。

「それにしても、めんどくさいニヤー。室内競技終わった後でグラウンド行けばいいのに。これじゃ二度手間だニヤ」

問題発言の多い天宮くんあまみやですが、これは僕も同意です。この疲労感を背負ったまま、部活動見学を続けるのは流石におっくうです。

「しょうがないツスよ。CとD組はグラウンド、AとB組は室内競技から回ることになってるんスから」

天宮くんの横では刈柴くんかりしばが合いの手を入れていました。刈柴くんの言う通り、この部活動見学は先生達が勝手に考え生徒の意見を100%無視されたローテーションが組まれていて、悲しい中間管理職（クラス委員長）の僕は担任に渡された用紙を見ながらクラスメイトを誘導するだけです。え、担任はどうしましたって？ おそらくまだ寝てるんでしょうね、保健室で。もちろんずる休みです。

「大丈夫、悠夜くん？」

「顔色が優れませんが、少し休んではどうでしょうか」

「心配していただいてありがとうございます。僕は平気ですし、職務をしなければいけないので」

僕の状態を見かねてか、玲さんと恋華さんが心配してくれました。気持ちはとても嬉しいのですが、この二人も原因でないとは言いきれないのでなんとも難しい心情で口を開くと、玲さんはおもしろそうにクスリと笑った。

「どうかされました？」

「ううん。でも、悠夜くんって偉いよね。嫌がってたクラス委員長の仕事ちゃんとやってさ。実はまんざらでもなかったりして？」

「そんなものではありませんよ。でも、役職をもらった以上はきちんとなさなくては」

「その発言だけでも十分真面目だけだな。悠夜くんってもしかして、不幸請け負い体質？」

「否定はしませんが……」

思えば僕はこれまでいろんな意味でいろんな貧乏くじを引いていた気がします。

とりあえず、室内競技だけは何か厄介ことがないことを祈りましよう。

けれど、そんな僕のささやかな願いは無惨に塵ました。

なぜなら不幸は回避しようとしても、向こうの方がまるで死神のようにつきまとうのですから。

「はあ。疲れました」

例え室内競技であっても、スポーツということには変わりなく、毎度のことのように先輩との交流対戦がもうけられた。

そして、すっかり生け贄に選ばれた僕は、屋内でも負の連鎖を發動してしまい先輩方の熱い勧誘を断るのに必死でした。

「けど、悠夜ってなんでもできんだな。野外競技を一通りこなした時は驚いたが、室内競技もできちゃうなんて。お前って万能人間だな」

「そうでもないですよ」

僕の横で神薙くんが驚きと賞賛をまじらせてしゃべる。褒められるのは光栄ですが、神薙くんが僕を野球に薦めなければこんな疲労を感じずにすんだのに。

「でも、それは言えますわよね。悠夜さんって、何かできないことがありますの？」

恋華さんがさも興味があるという顔で聞いてきました。そこまで僕って万能に見えます？

「もちろんありますよ。たくさん」

狂おしいほど願っても、叶えられないものはたくさんありますよ。

「でも、いい加減俺も疲れたッス。次で終わりッスよね？」

刈柴くんが投げ槍に言うのも無理はないでしょう。

この部活動見学は言い方を悪くすれば、強制的に行われるので前半に自分の興味がある部活の見学を終えた人のほとんどはめんどくさそうについてきている。

「そうですよ。最後は剣道部です」

「マジかニヤっ。やつほーい」

「どうしたんです？ 急に元気になりましたけど。何かあるんですか？」

刈柴くん同様だるそうに歩いていたのに、天宮くんは目に見えてテンションが高くなっていった。まあ、もともと高めの人ですが。

「何かってお前知らニヤいのか？ 剣道部には麗しの生徒会長が所属してるんだニヤ。お近づきになるも良しっ。遠くから眺めるのも良しっ。そんな剣道部を見学できるなんて、テンションが上がらないわけないニヤ！」

拳を握りながら力説する天宮くん。直視できないのは僕だけではないか。

天宮くんは結構大きな声でしゃべっていたので、他のクラスメイトにも会話が聞こえ、生徒会長に会えるということとで意気揚々と歩みを速めた。すごい変わりようですね。一時はゾンビみたいに見えるて少し怖かったのに。

「……生徒会長さんですか」

僕はというと、周りとの温度差を感じ心の中でため息をつく。

「どうしたの。やっぱり悠夜くんも美人生徒会長さんが気になるの



「？」

玲さんが怖い目で、美人というところを強調しながら聞きました。ポケットに手を通り込んでるのは僕の返答しただけでは包丁を即座に出す準備、と思ってしまう僕は臆病者なんでしょうか？ 見れば恋華さんもジト目で僕を見ています。

どうしましょう。

生徒会長に昨日『睨まれた』とは言わない方がいいですよ……

「実は昨日の生徒会長の祝辞のさい、偶然目があったてしまいそれ以来気になっていのです」

刹那。

僕の顔、正確には左目をめがけてアイスピックが飛んできた。

間一髪で察知し頭を下げて避ける。アイスピックはそのままダァツのように壁に突き刺さった。

思わず床に腰をつけ、投げた人を恐る恐る伺う。

玲さんは悲しみ2割、怒り3割、狂気5割の眼差しで僕を見ていました。

「どうして私とは何回も目があつてるのに気になってくれないのっ。私がポニーテールじゃないから！？ 私か年上じゃないから！？」「落ち着いてくださいっ。それと、もう一本アイスピックを構えな

いってくださいっ」  
このままでは両目に眼帯をしてすごさなくてはならなくなりそうです。

「悠夜さんも月弦つきなづなさんも落ち着いてください。単純に刺すよりも、それで眼球をかき混ぜる方がよっぽど苦痛ですわ」

「落ち着けませんよ。どうしてそんな嫌なベクトルにアドバイスを  
するんですかっ。玲さんも笑顔でなるほどと言わないで速く手に持  
っているそれをしまってくださいっ」

「全く悠夜さんったら……。昔はボーツとしてるだけでしたのに、  
今となつてはいろんな女の子に目移りしてしまつて。いけない人」

「いけないのはあなたの発言ですからね！」

「ねえ、悠夜くん。どうして私のこと見てくれないの？ そんなに  
生徒会長や霧坏さん（きりつき）の方がいいの？」

「あー、見たいのはやまやまなのですが、僕の顔を押さえながら  
アイスピックを構えられたらそれは生存本能が働いてとてもじゃあ  
りませんが向けません」

「あ、そうだ、いいこと考えた。悠夜くんの目がそこにあつて動い  
ちやうからいけないんだ。私が持つてれば、ずっと私のこと見てく  
れるよね？ そうだよな？ だから、さ 左目えぐらせて？」

「とてもじゃありませんが、Yesとは言えませんよ！？」

「ありがとう。嬉しい」

「何をどう聞き間違えたのかあえて追求しませんが、笑顔で僕の目  
にアイスピックの照準を合わせないでくださいっ」

振りほどこうにも、力が強く到底かなわない。細い腕のどこにこ  
んな剛力が宿っているのでしょうか？ あーっ、あと数ミリで左目  
がアイスピックと

「ちよっ、月弦も流石にストップっ。刃傷沙汰はまずいつて」

「霧坏さんも黒い笑み浮かべてちゃ駄目ツスよ！？」

廊下で惨劇が繰り広げられようとしたその時、神薙くと刈柴く  
んが助け船を出してくれました。地獄に仏とはこのことなんですね  
……。天宮くんは『ヤンデレヒロインによる猟奇エンドが……』と  
どこか残念そうに呟やいていました。

玲さんと恋華さんはしぶしぶといった様子で諦め

「うん。生徒会長の両目をえぐるので我慢する」

「わかりましたわ。闇討ちをかける機会なんて、いくらでもありませんものね」

諦めてくれたのでしょうか？

玲さんは当たり前のようにアイスピックをポケットにしまわないうでください。そこは武器庫なのでしょうか？

僕のピンチを平然と（おかしくないですか？）見ていたクラスメイトも、生徒会長を速く見たいのか足早に剣道場を目指しました。玲さん達もそれに続きました。

「気をつけた方がいいぞ？」

僕も急いで先頭に戻ろうとすると、天宮くんが小声で話してきました。

「どういうことですか？」

「女の扱いは気をつけた方がいいってことニヤ。霧坏の方は腹黒お嬢様タイプだからそこまで実害はニヤいけど、月弦はヤンデレだから本当に危ないニヤ」

「ヤンデレってなんなんですか？」

「簡単に言うと依存症と独占欲を合わせもつ女の子のことニヤ。お前、鈍そうだから忠告するけど、背中にいきなり刃物で刺されないようにした方がいいニヤ」

「わかりました」

正直天宮くんの説明だけでは良くわかりませんでした。下手なことをすれば僕の身が危ういというのは充分理解できたので素直に

頷きました。

ヤンデレ

その言葉は僕の脳裏に恐怖と一緒に刻まれました。

「悠夜ー。置いてくぞー」

「いつの間にか一人ぼっち!？」

3

「以上で剣道部の説明は終わりです。何か質問はありますか？」

剣道部部长さんが主な剣道部の活動や成績を説明していましたが、聞いている人は半数にも満たしていませんでした。

なぜならほとんどの人は他の部員と一緒に稽古している生徒会長さんを見ていました。お可哀想に部長さん。目元が少し潤んでます。僕はと言えばおかしなことをしてかさないう、玲さんと恋華さんの手を両手で握っています。ある意味、犯罪予告をしていたのですから、抵抗するのかもしれないや何もしませんでした。それどころか、二人ともニコニコしていると思ったら、僕を挟んで睨み合ったりしたり忙しいですね。

「では、質問もないようなのでこれで剣道部の見学はこれで終了です。ぜひ、剣道部に入部してくださいね」

部長さんはそんなこと言いましたが、生徒会長さん目当てで大半の生徒が入ると予測されますので心配はないでしょうね。

僕は最後の仕事として、クラスをきちんと誘導。出口に向かう皆さんは実に名残惜しそうです。生徒会長さんとそんなにお近づきになりたかったんでしょうか？ まあ、僕も昨日のことを聞くこと

ができないのは残念ですが。

最後に一礼をして剣道場を後にしました。

先に行かせたみんなは黙々と歩いて、僕も追い付こうと歩調を速めます。

その時

「少しいいだろうか？」

鈴を鳴らしたような綺麗な声。間近にいた僕だけではなく、クラスメイトも振り向きました。

そこにはまだ剣道着を着用している生徒会長が、手に竹刀を持って立っていました。

「なん『なんででしょうか!?!』……」

僕が口を開こうとすると、クラスの男子がすごい勢いで僕と生徒会長の間に入ると、すさまじい声量と熱量で喋りだしました。そんなに生徒会長さんと話したかったんですね。

「いや、私はその眼帯の生徒にようがあるんだが？」

生徒会長も生徒会長で、淡々と説明しクラスメイトを一瞬にして落ち込ませました。床に手をつく男子とは反比例して、玲さんと恋華さんの眼光はまた鋭くなりました。お願いですから、流血沙汰だけは勘弁してください。

「何か僕に用件でもあるのでしょうか、生徒会長？」

「少し聴きたいことがあって」

そう言って可憐に微笑む生徒会長。でも目が全然笑っていません

ね。

「僕は構いませんよ。何でも聴いてください」

「そうか、じゃあ 何故お前はアストラル（ここ）にいるんだ？」

その一言で生徒会長さんの周りが凍りついた。比喻とかではなく、魔力が溢れて気温が低下していた。

生徒会長に近い男子も遠目に見ていた人も、急な展開と異様な雰囲気の中で押し黙ってしまいました。

「どういうことでしょうか？ 意味がわからないのですが」

「それは一番お前がわかっているじゃないか？ 森羅<sup>もりあみ</sup>悠夜」

お互いに笑顔で向かい合う。

けれども、目は笑っていない、眼光はギラつき敵意を隠さずに剥き出しにする。

「なんのことだかさっぱり」

「それなら、単刀直入に言わせてもらおう。お前はここに居る

資格があるのか？」

「ちよっと待ってください！」

生徒会長さんの言葉に反応したのは僕ではなく、恋華さんだった。その場を飛び出すと、僕と生徒会長さんの間に割ってきました。

「それはいったいどういう意味なんですか！？ 私としては、詳しいことをお聞きしたいのですが」

「君には関係ないことだよ。それより私は森羅と話しているだが」「今質問しているのは私ですっ」

僕の時とは違い、緩やかな敵意から剣呑なそれへと変化し、恋華さんと生徒会長さんの間に強大な重圧が生まれる。

「恋華さん。僕は構いませんよ」

「けど、」

「大丈夫です」

そう口にすると思華さんの手を握る。恐怖があるいは怒り、それとも両方のせいなのか、僕の手のひらに収まった白い手は震えていた。

無言で恋華さんを庇うように前へ出る。そんな僕らをつまらなそうに見る生徒会長と再び向かい合う。

「あなたの望みはなんですか？」

「私はただ、お前の存在が許せないだけだ」

「なるほど、ではどうしよう？」

「森羅悠夜。お前に決闘<sup>フェーデ</sup>を申し込む」

「フェーデを？」

フェーデとは正式に認められている私用試合のことで、当然学園都市内でも申請すれば許可は降りる。もっとも、学生同士の場合はルールの改変等が可能になる。

そして、フェーデのある意味原則的とも言えるルール、『敗者は勝者の下す命<sup>めい</sup>を一つ受け入れる』がある。このルールはよっぽどのことがない限り、改変はされない。

「僕に拒否権は？」

「生徒会長権限」

「職権乱用では？」

「構わないさ。確かにこの申し出を断る権利はお前にある。だが、

だからと言って私はあきらめない。お前が首を横に振れば、事態は複雑になるが手を緩めることはしない」

生徒会長の強い眼光。それは揺るぎない決意の現れなのでしようか。

「……わかりました。そのフェーデ、お受け致します」

「そうか。なら細かいルールや、勝利条件はお前は決めて構わないぞ」

「では、方式は魔術戦闘。魔法や魔装具の使用はありということ、どうでしょうか？ これより詳細なルールは後で報告致します。あ、ちなみにフェーデは明後日、金曜日の放課後でどうでしょうか？」

「……お前は私を馬鹿にしているのか？」

「僕に決定権をゆだねたのはあなたですよ」

「そうか。いいだろう。お前がどんな小細工をしようとも、森羅悠夜。必ずお前を 排除する」

生徒会長はそう言い残すと、剣道場へと引き換えして行きました。

4

「どついうことなんだ悠夜っ」

「そうだよ。フェーデなんて本当に受けちゃうの!？」

生徒会長が去った後、僕も踵かかとを返して教室に戻りました。他の生徒も遅れて移動、教室へ帰ると瀬野先生に『遅いつ』と怒られつつ帰りのホームルームを終了し、今現在に至ります。

神薙くんと玲さんはホームルームが終わるや否や、僕にすごい勢いで尋ねてきました。周りでは他の生徒も聞き耳を立てている様子。



「どうもこうも、ありませんよ。フェーデを持ち掛けられたので応じた、それだけのことです」

「うちの生徒会長って、魔力が半端なく高いだけじゃなくて、魔<sup>エクス</sup>術師の資格も持つてるんだニヤ。お前このこと知ってるのかニヤ？」

「そもそも、何で受けたのよ？ 断れば良かったのに」

「何か、訳ありッスか？」

「……今日はもう帰らせていただきます。さようなら。また、明日」

次々と来る質問を強引に打ち切り、鞆を持って教室を出る。

(申し訳ありません)

僕を追う人もいなく、夕日が照らす帰り道を一人で歩く。

そこに、

「ごきげんよう。一緒にお茶なんてどうかしら？」

目の前には、僕が高校生活を送る原因にして元凶 にこやかに笑いながら、彼女の腕にいる白猫を優しく撫でる貴婦人がいた。

僕らは初めて会った時のように近くの喫茶店に入り、ホットコーヒーを注文した。

「約半月以来かしら？ どう、元気にやってる？」

「概ね良好 だと思えます。むしろにぎやかすぎるかもしれませ  
ん」

「それぐらいがちょうどいいものよ。若い頃はたくさん友人に囲

まれて、笑うのが一番なのよ」

「笑うどころか、顔がひきつって頬の筋肉がつりそうです」

「ふふふ、楽しそうね」

「そう聞こえますか……」

「孫にはもう会ったかしら？」

「ええ。つい先ほど、フェーデを申し込まれました」

「そう」

終始笑顔を浮かべていた婦人の顔が陰る。そこには憂いと哀しみ、わずかな後悔が見えたような気がしました。

「あの子、やつぱり……」

「これはあなたの考え通りですか？ あなたが高校の選択はするということでおまかせしましたが、自分の孫娘と僕を会わせるのは計画のうち、だと考えているのですがどうでしょうか？」

「確かにあなたを孫と会わせるために、國桜高校へ入れたわ。でも、まさかフェーデまで……」

一つため息をつき、店員さんが運んだミルクティーを口に持っていく。僕もせっかくなのでブラックのままコーヒーをいただく。あ、美味しい。

「ごめんなさいね。家族の事情に巻き込んでしまったって」

「いえ、僕は気にしていません。フェーデを申し込まれるのも、一度や二度ではありませんから」

「豪傑なのね」

そう言うのにこやかに笑い再びミルクティーを口にする。

「もう少し時間はあるかしら？」

「大丈夫ですよ」

「そう。なら、もう少し聞いてちょうだい。

哀しい鬼の子の話を」

**第三夜 死神が笑うとき、僕は眠れぬ夢を見る（後書き）**

どうでしたでしょうか？

作者としては書いているうちに、中間にありました玲さんのヤン  
デレ具合がメインになってしまいましたかね

でも、後悔はしてません！

生徒会長さんを期待していた方はごめんなさい。

来週はややしリアス、バトル、魔法多めになる予定です。

（やっと、ここまでできました）

それでは、第三夜ありがとうございました。

第四夜もどうぞお楽しみに待っていてください。伝助は楽しく頑  
張らせていただきます。

それでは失礼します

さようなら！

**第四夜 歩き続けることとその先と（前書き）**

バトル及びシリアスを含みます。

それと一人称の視点も変化します。それではどごごご

## 第四夜 歩き続けることとその先と

時は流れて、四月十一日金曜日

魔術決闘当日

1

選手控え室。

らしき場所に案内され、椅子に座って読書をしていました。

プロレス等の選手は精神統一をするのでしようが、僕は特にする必要がないので天宮<sup>あまみや</sup>くんから借りました文庫本（ラノベでしたっけ？）を読んでいきます。

サンダー文庫の人気小説、ツンツン髪で口癖が『不幸だー！』の主人公の学園物語。科学が当たり前の世界で、主人公の少年が魔法使いや能力者との出会いを重ねてゆくアクションコメディ。読んでいてとても面白いのですが、天宮くんが貸してくれた理由が、この物語の主人公がお前さんに似てるから貸すニヤァ。読んでみ？

だ、そうです。主人公のキャラは好きですが、そんなに似てますかね？

あ、そう言えば生徒会長ってこの物語に出てくる日本刀とワイヤーを使う魔法使いと似てますね。ポニーテールのところとか。

「はあ」

思い出したのは生徒会長の鋭い眼光と白猫を連れた婦人の憂う表情。

『あの子はね、鬼の子なのよ』

「……だからといって僕には関係ありませんよ」

心の中で嘆息する。

理事長の話しを聞いて帰った翌日、そして今日。

その間。クラスは当然、他クラスや上級生、登下校中は他校の生徒まで魔術決闘フエーデのことを聞かれました。もちろん、適当にはぐらかしましたが。

玲あまひさんに恋華れんかさん。神薙かんなぎさんと天宮くん、刈柴かりしばくん。

いつの間にか僕の周りにいた人達も例外なく、僕の置かれた事情を聞いたそうなオーラと言いますか心配を強く出していました。特に詮索はしてきませんでした。中でも特に恋華さんは聞きたそうでしたが、何度もとどまっていたようで上の五人の中では一番会話してないかもしれせん。

けれど、僕の周りにずっといてくれました。

『いい、悠夜。どんな時でも傍に居てくれるのが友達なのよ。だからあなたも、誰かの傍に居てあげなさい』

……最近やけに師匠のことを思い出しますね。これも日常に踏み込んだんでしょうか？ でも、あの僕が友達ですか……。実感が沸きませんね。

まだ非日常に足を踏み入れなかった頃、恋華さんをカレンさんと呼んでいた頃。僕の周りにも少なかつたけれど、友達と呼べる人はいた。でも“あの日”を境に決別した。それは誓いのようなものだった。

けれど、“あの日”から遠ざかるに連れいろんな人と交流を持つようになった。

そしていつの間にか日常の中にいて、誰かが傍にいる。非日常にいた時も、僕の傍には誰かがいましたけど、友達とは少し違いますかね、彼らと僕の関係は。

これが進歩なのか、歪んでいるだけなのか、今の僕にはわかりません。けれど、変化しているのにはかわりないのでしよう。

（だとしても、恋華さんはまだ覚えているんでしょうか？ あのこ  
とを）

しばらく物思いにふけていると、扉をノックする音が聞こえた。僕は文庫本に頬をとじ、どうぞと声をかける。入室してきたのは『アストラル学生連盟』の腕章をつけた男性。

「森羅もりあみ選手。そろそろ始まりますのでスタンバイお願いします」  
「わかりました」

……なんだか本当にボクサーやそんな感じになってきましたね。

身支度もほどほどに、学生連盟の方に誘導されて廊下を歩く。舞台（戦場）への橋渡り。

普通ならばこの状況。歳上の学生、しかも魔エクソシスト術師の資格を持つ人を相手に不安を抱くものなのでしょう。けれど普通ではない僕の心臓は高揚していました。ドキドキしていました。ワクワクしていました。身体中の血液が熱く巡り、全身が活性化されているのがわかる。

（思えば久しぶりの舞台ですものね。どんな状況下であれ、こうなってしまうのも仕方ありませんね）

廊下は行き止まりになり、そこには扉があった。

すぐ前に立つと重々しい扉が一人で開く。



薄暗い廊下に幾筋の光が射し込む。

「さあ、今宵もおどけた道化と踊りましょう」

2

悠夜ゆいが控え室を出る数分前

「どこに行くの？ そつちは悠夜くんの控え室じゃないよ」

私は聞き慣れた声

月弦つきづなさんの声に振り返る。

「こんなところで会うなんて奇遇ですわね。あなたも何か用事？」  
当たり前障りのない言葉で自分の中の動揺を押し隠す。

「……道を間違えたとは言わないんだね。ここ、まっすぐ行くと生徒会長さんの控え室だよ」

道は間違えていない。始めからそのつもりで来ているのだから。

「あら、そうですね？ わざわざ忠告ありがとうございます。ですけど、私もやる必要がありますので、失礼しますわ」

「生徒会長さんに闇討ちをかけるの？」

心臓をえぐられるような感触。そんな衝撃が全身を駆け巡った。

「……だとしたら？ まさか、あなたも同じとは言わないでしょう」

もしも目的が私と一緒になのでしたら、こんな周りくどい言い回しはしないはずですよ。

「もちろん、あなたを止めに来たわ」

「……どうしてですか？ 私の見解だと、あなたも私と同じことを考えると思っていましたのに」

「うん。確かに私も今回のことで生徒会長さんには怒ってるし、まだ両目えぐるうかなとも思う。でもね、私考えただ　　悠夜くんなら絶対に止めるって」

「……あなたに悠夜さんの何がわかるんですの？」

「もちろん、全部はわからないよ。出会ってこれまでの時間だって一週間前のあの日とこの4日しかないもん。でもね　　悠夜くんが誰よりも優しく、誰よりも強いつてことぐらいはわかるよ。だから、悠夜くんならあなたのこと止めると思う」

その通りなのでしょう。

悠夜さんは否定すると思いますが、博愛などの言葉では片付けられないくらい、その優しさは深い。

事実私は幼いころや再会してからも、悠夜さんの優しさを何度も目のあたりに感銘を受けている。昔はそんな悠夜さんに何度も救われたことがある。

だから私は

「邪魔をするのなら、あなたとて容赦はしませんわ！」

私が頭の中で魔方陣を浮かべると、月弦さんに向けて突風をおこす。華奢な彼女の体を吹き飛ばすには十分でしたが、月弦さんは臆することなく踏み出す。

風の流れを呼んだのか身を翻して回避すると、月弦さんは素早く

取り出したカッターで私を切りつける。

体を横にずらして避けた私は後方へ跳び、再び踏み出そうとする月弦さんとの間に旋風つむじかせを起こしてそれを阻止する。

お互いが相手の出方を伺うようにたたずみ、沈黙が流れる。思わず左頬に触れると、私の手は血でわずかに濡れた。

「私を止めても、生徒会長さんと対決して足止めしても悠夜くんは喜ばないよ」

「っ！……だとしても私は、やらなければいけないっ。私を守って救ってくれたのに、また何もできないで失うだけなんてもう嫌！だから、私は悠夜さんの傍にいたために、好きでいるために」  
「私もね、悠夜くんが好き」

そう呟いた月弦さんは飛びつきりの笑顔で、とても輝いて見えました。

「悠夜くんに会ったのは約一週間前の駅でね。ハンカチ拾ってくれたの。それで教室で再会して、思わずいろんな話しちゃった。友達になって内気って言った私にこう言ってくれたんだ。『僕はあなたを応援します。成功しても失敗しても応援します。ですから、そんなに不安がらずに笑ってください』って。励まされのって私初めて嬉しくて、勇気付けられた。それでね、内気が治ったわけじゃないけど、一歩踏み出せた。

優しくて勇気をくれる。だから私は悠夜くんを信じる。悠夜くんがすることも、信じたい。あなただってそうでしょう？」

彼女の目を見れば今までの言葉が嘘ではないことが容易にわかる。でも、私は違う。

「私は彼を一回裏切りました。私にさしのべてくれたその手を、私

は払ってしまった。だから、償わなくてはいけない。でない」と

湧いた音が廊下に響く。

私の言葉は月弦さんの平手打ちによって途切れた。

「あなたは悠夜くんの傍にいたいのか？ それとも過去を精算したいのか？ どっち？」

「私は」

『どうしてそこにいるんです？』

『……私は“れいじょう”だから、誰とも遊んでくれない。誰とも遊べない』

『そうなのですか。あなたの名前は？』

『……』

『名無しですか？』

『違う。……霧坏恋華』

『では、カレンさんです』

『？』

『親しい間柄は名前をひねって呼び合つと父と母に聞きました』

『親しい……？』

『あなたは孤独がつらいのでしょうか？ ですから、僕が傍にいます。そうすることで孤独が解消されるのなら、どうか笑ってください』

『い、いいの？ トモダチでいてくれるの？』

『トモダチの定義がまだ把握できていませんが、あなたが笑顔になるのでしたら喜んでならせていただきます』

『うん。あなたの名前は？』

『森羅悠夜。名前の意は森羅万象（全て）の悠おとき夜となります』

『じゃあ、ゆーくんだね』

『わかりました。では、握手です』

『どつしてっ』

『握手をするとより良い友人関係を築けると聞きました』

『わかった。よろしく、ゆーくん』

『こちらこそ、カレンさん』

「私は悠夜さんの傍にいたい。悠夜さんを信じて、笑っていたい」

気付けば私は床に腰をつけ泣きじゃくっていた。

「じゃあ、戻ろう。神薙くんたちが待つてるよ」

「……一つ聞いてよろしいですか？」

あくまで穏やかな月弦さんに私は尋ねる。

「悠夜さんを好いているのなら、私の存在は邪魔じゃなくて？」

「うん。どうやって処分しようかと思って思ったとき、お姉ちゃんに相談したんだ」

あくまで穏やかな月弦さん。その手にはカッターが未だに握られていることに気付き、思わず後退りしてしまう。

「そしたらお姉ちゃんがね、敵なら手助けしてでも最後まで戦いなさい、って。それで勝ちなさいって。だから、私はあなたと戦うことにしたの」

「どうやらお姉さんのおかげで、私は一命をとりとめたようですね」

「私も友達を失わなくて良かった」

「友達ですか。ふふふ」

悠夜さんと知り合い、社交性を学んで友達はいつの間にか増えています。

これも全て悠夜さんが私に手をさしのべてくれたから。悠夜さんが私を深い闇から引つ張り上げてくれたから。

（私はいつかこの恩と気持ちを悠夜さんに伝えることができるのでしょうか？）

「でしたら私たち、名前で呼び合いませんか？ どうでしょうか、玲さん」

「うん。いいよ、恋華。それよりもさ、あなたが悠夜くんを想うのと同じくらい恩を抱くのはなんで？ それくらい聞いても罰は当たらないと思うけど」

「わかりましたわ。ちゃんとお話しします。けど、神籬さん達のところにはまずは戻りましょう。彼らだって悠夜さんの友達なのですから」

私は腰を上げて、服を軽く払う。

「そこで少しだけ語ります。恐らくことの発端であろう、悠夜さんの過去を」

3

「大丈夫ツスカねー」

「どつちがだ？」

不安げな大地だいちの声に亮りやうが尋ねる。

「両方ツスよ。悠夜くんも生徒会長と真っ向勝負なんかして平気じゃないと思うし、霧坏さんと月弦さんも帰ってこないし……」

「まあ、大丈夫とは信じたいけどニヤァ。両方」

大地のやつは結構心配性なのかもしれない。亮も一見平静を装おっているが、落ち着かないのか視線をキョロキョロ動かしている。ま、そういう俺も内心不安でいっぱいだけニヤァ。

月弦は勝手に一人でどこかに行っちまった霧坏を探しに席をたつた。まさかこんな状況でラブコメ漫画の裏でありそうなどろどろな展開が起こるとは思わないが、あの二人は絶対に喧嘩しないとは言いきれない。悪いと言うよりむしろ月弦と霧坏の仲はいい方だが、いかせん恋敵のため100%争わないわけではない。

そして月弦は感情が昂ると刃物を取り出すのは、もうクラス中に知れ渡っている。悠夜と親しい俺はもちろん何度もその現場を間近で見ている。怪我人が出ず、悠夜が五体満足でいられるのが不思議に思う場面もしばしば。多分月弦とは悠夜を通していなきや、友好的な関係を築けていなかったかもしれない。だって怖いし。

けれど、そんな悪癖がさらけ出されても月弦はクラスの中で孤立することも無く、彼女の周りには常に霧坏や他の友人がいる。被害が悠夜限定ということもあるが、月弦自身の明るい性格が友人の心を惹き付けるのだろう。けれど驚いたことに、月弦は本来内気で友人があまりつくれない性格だと聞く。月弦の人格補正に協力したのはもちろんおそろく悠夜なのだろう。根拠こそないが、何故だかそんな気してしまう。

悠夜にはきつと、そう思わせる魅力があるのだろう。

「あ、二人が帰ってきたツスよ！」

「お、ほんとだニヤァ……」

大地の嬉しそうな声に俺もそっちの方を向いて 絶句した。

戻ってきた霧坏。その左頬には傷があり、そこから血が流れていた。

「おい、何があった!？」

亮がテンパリながらも叫ぶ。叫びたいのはこっちだって同じだニヤ。

「ああ、これですか？ 忘れてましたわ」

「いや、そんなのんきに構えるなよっ。自分の顔が傷ついてるんだぞっ」

「確かに。ばい菌が入ったらどうしましょう」

「そっちツスか!? てか、その発想がどうしようツスよっ」

「大丈夫よ。私の刃物は常に殺菌してあるから」

「心配しつつも自分が加害者であることを暴露するな!」

「そんなことより座りません、玲さん?」

「うん。あ、じゃあ私こっちでいいかな恋華」

「さりげなく名前で呼び合うほど新密度上がってるし」

女子二人のポケ(?)に、亮と大地が次々にツツコミを入れてゆく。ツツコミの才能があるのかもしれないニヤ。

別にシリアスな雰囲気望んでなかったけど、こんな空気は想定外だニヤ。

月弦と霧坏が戻ってきたことで、悠夜を除く俺らのグループは全員集合した。ちなみに、月弦 霧坏 俺 亮 大地の順に座っている。

俺らの目の前には透明なドーム状の結界が、縦、横、高さにおよそ500メートルの範囲で発動している。ちよつとやそつと魔法ではひびすら入らない、フェーデ専用の魔法。ドーム内は整えられたグラウンドのような地面に、障害物を思わせる大小様々な岩が見える。

俺らが今いるのはそんな結界を囲むようにできている観客席。結



ファイナル・エレメント  
界内を浮遊するいくつもの記録用特殊魔結晶と、映像を写しだす巨大なスクリーンも完備。他の席もほぼ埋まり、伝わる熱気はまるで昔の闘技場を思わせる。

「しっかし、スゲーなこりや。てつきりプロレスのリングみたいなところでバトルと違ってたけど、こんな設備満載とはニヤ」

「まあ、フェーデは制式な試合だからある意味当然ツスね。こんな春先にやるのはとても珍しいから、人も多く集まるらしいツス」  
「悠夜のやつ緊張してなきやいいけどニヤ」

と言いつつも、基本ポーカーフェイスのあいつが緊張するなんてあまり想像できニヤいが。

「それなら大丈夫ですわ。悠夜さんは昔から緊張や不安とかそんなものとは無縁ですもの」

「……ずっと気になってたんだけど、悠夜くと恋華って昔からの知り合い？」

それは俺も疑問に思っていた。

悠夜と霧坏の関係は話す内容や様子から、昔の馴染みのように思える。

「幼馴染みと言ったところでしょうか。私と悠夜さんは小学校の頃からの付き合いです」

「へー。あ、じゃあ昔の悠夜ってどんな感じ？」

「あ、それ気になるツス」

「私も」

「ニヤー」

「……そうですわね。口調は今と同じですけど、いつもニコニコしてて天真爛漫と言った感じでしたわ」

「マジでかニヤ」

それが本当だとしたら、驚愕以外の何ものでもない。根暗ではないが明るいとあまり言いがたい悠夜。しかも天真爛漫でニコニコ？……想像ができない。てか、ですます口調ってガキの頃からやってたのかよ。親御さんの教育のおかげかね。

「ニコニコの悠夜くん……」

月弦はそんな悠夜の幼少時代を想像したのか、ニコニコというかニヤニヤしていた。近よりがたい雰囲気を出しているが、刃物を取り出さないだけましなのだろう。

「でも、あんな風になってしまったのは、私のせいですわ……」

震える声が横から聞こえた。霧坏の声は小さく、離れている亮や大地には聞こえなかったみたいだ。

「そろそろ聞かせて。このフェーデの引き金かもしれない、悠夜くんの過去」

俺らの視線が霧坏に注がれる。

霧坏は姿勢を正すして毅然と前をまっすぐ向き、双眸そっぼうに強い決意を光らせ口を開く。

「悠夜さんは魔力が無いんです。魔法を使えないんです」

俺らは揃って絶句した。周りの喧騒が遠いもののように感じ、自分達が居るこの空間が隔絶され沈黙が埋めつくした。

「……マジでか？」

亮が信じられないと言うふうに呟く。信じれないのは俺だって同じだ。

いや、信じたくないのかもしれない。

「本当ですわ。現に悠夜さんはそのせい で何度かトラブルにあっていきます」

「そ、それなら、なんで悠夜はアストラルに居るんスか？ いくらなんでも、魔力がなきゃここには入れないはずッス」

「私もそれとなく聞いてみましたが、答えは帰って来ませんでしたわ。おそらく裏口入学なのでしょうね。方法までは推測できませんが」

「だから、生徒会長は怒ってフェーデまで申し込んだのかニヤ？」

悠夜が、裏口入学した魔力ゼロの生徒が許せないから」

『お前はここに居る資格があるのか？』

生徒会長の言葉が脳裏に浮かぶ。あの人は悠夜が魔力を持っていないって知っていたのか？

魔法を使えないものが、魔法学園へ入学。それを可能にするのなら、まず裏口入学を考える。

生徒会長は正義感の強い人だと聞く。裏口入学という汚い手を使った悠夜のことを良く思わなかった。だから、フェーデを。

「ちょっと、待って。今日のおつて魔術戦だよね？ じゃあ、悠夜くんは」

月弦の発言でまた衝撃が走る。

魔祓師エクソシストの資格を持つ生徒会長。対する悠夜は魔法も、魔力を原動

力に起動する魔装具も使えない。

勝敗の予想は容易にできてしまう。

フェーデに勝利した暁には、生徒会長は悠夜に何を要求するのか。

『私はただ、お前の存在が許せないだけだ』

「まさか、悠夜がフェーデに負けたら退学とかにはならないよな？

いくら敗者が勝者の言うことを一つ聞く、ってルールがあつても学生連盟がそれを受理しないだろ」

「それはそうかもしれないツスけど、魔力がないことや裏口入学したことを発表されればわからないツスよ。アストラルはあくまでも魔法を学ぶための学校ツスから」

「そんな」

亮が絶望したようにうなだれる。基本マイペースでポジティブなこいつにしては珍しいが、当然と言えばそうだろう。せっかく高校でできたダチがこんな形で失うなんて。俺も自分の顔から血の気が失せているのがはっきりとわかる。

「 負けないよ」

おもむろに聞こえた月弦の声。

今度は月弦にみんなの視線が集中する。

「負けない。悠夜くんは、絶対に負けない」

祈るように願うように。自分の絶望を振り払うように紡がれる言葉。  
葉。

……………全く悠夜は幸せものだニヤー。こんな健気な子に惚れられて。

「そうですわっ。私の悠夜さんが負けるはずがありませんっ」  
「一部間違いがあつたけど、悠夜くんはきつと勝手みせるっ」  
「よおし、燃えてきたー！」  
「そおツスよね。俺らがちゃんと悠夜くんを応援しなきゃ駄目ツスよねっ」

「ニヤハハハ。なんかワクワクしてきたニヤ」

俺らは一様に声を上げテンションをあげる。

悠夜を信じるために。不安に呑まれないように。

「そつだぜ。きつと、少年漫画特有の法則で『バトつた後に仲良くなる』法則が働くに決まつてるさ。フォーリン・ラブするかも」  
「亮、ばかつ」

亮のいらぬ一言で、女子の儂いオーラが黒くなっていく。

「ウフフ。もしもそうなら、どうしましょうかね」  
「なんか明らかに悠夜が痛い目見るのは確定そうツスね」  
「……………爪」

「怖っ。誰の爪をどうする気ニヤ！？ 切るだけだよニヤっ。爪切りで切るだけと言ってくれ、月弦っ」

「悠夜、なんだかすまん」

不穏な空気（俺らの周りだけ）をはらみながら、時間は過ぎ迎えた試合開始時間。一人の学生連盟の生徒がスクリーンに写し出される。本体は結界の中にいた。司会は元気が取り柄といった感じの女生徒だった。…………ツインテール似合いそつだニヤ。

『レディース、アンド、ジェントルメン！ お待たせいたしました。

これよりアストラル新年度初となる魔術決闘、フェーデを行います  
っ  
っ

司会の声で客席にいた者、そのほとんどが歓声をあげる。スゲー  
お祭り騒ぎだニヤ。見れば席はほぼ満席。空いた席を探す方が難し  
いだろう。

『それでは、今年の春からアストラルへやってきた新入生の方に簡  
単に説明しよう。』

フェーデは現代で唯一認められた魔法を使った私闘試合。ルール  
はその都度変更ができ、バリエーションの広い戦い数多く記録にあ  
ります。今回のルールは魔法・魔装具を使ったガチバトル。あつ  
ても、魔装具には制御装置ヘルツナがかけられており、結界も特殊な魔法が施  
され危険とみなされた場合は止めにかかれるシステムになっており  
ます。ですので、血生臭いことにはなりませんのでご安心を』

「でも、それって死なないだけで、痛い目は見るってことだよな？」

「まあ、決闘ツスからね」

「私以外が悠夜くんを傷付けるなんて……」

「あ、やべ。月弦のヤンデレ度が上がったニヤ」

「しかも自分は悠夜さんを傷付けるの承知なんですよのね」

『それでは、選手を紹介させてもらいましょう。まずはアストラル  
第四高等学校國桜高校、二年生で麗しの生徒会長。その美貌は國桜  
高校だけではなく、他校の生徒も首ったけ

氷ひよひなこ替かノ舞まい姫ひめ      冬ふゆ空くり美み姫ひめ！！！！』

司会さんの隣に魔方陣が浮かび上がる。転移魔法だったらしく、  
陣の中心から光の粒子と一緒に我らの生徒会長が姿を現した。

その瞬間、観客席が入学式同様、盛大な盛り上がった。一部の席

では『冬空様ファンクラブ』の横断幕を持ったやつまでいた。そのファンクラブには女もいたから驚きだ。

生徒会長は剣道で着る胴着を着ていて、防具は付けていなかった。手には魔装具 鞘に収まった日本刀を持っていた。その容姿と出で立ちから、大和撫子という印象が強くとれる。

『そんな冬空選手の対戦相手は、同じ國桜高校の一年生。高校生活に心を踊らすミステリアスボーイ

黒衣ノ道化師 森羅悠夜!!!』

生徒会長と同じように魔方陣が浮かび、光の粒子を纏って悠夜が出現した。その姿を見て、司会さんの言葉に納得した。

悠夜の着ているものは全て黒色で統一されていた。

体を覆うのは春先には暑そうなロングコート。サイズがあつていないのか袖に両手は隠れ、裾は地面すれすれ。まるでマントのようだ。コートの前を止めるのはファスナーだがこれが全開になっていて、中に着てもものもこれまた黒い。よく見れば、右耳に黒いイヤリングを着けている。

「なんかスゲーニヤ、悠夜の格好。なんか悪魔みたい」

「あ、そう言えばあの服装。私が駅であった時の一緒だ。イヤリングはしてなかったけど」

「そう言えば、悠夜さんって小学生の頃も黒でかためてましたね」

「……黒フェチ？」

「それよりもなんかむなしツイスね。この反応の違い」

大地の言つとおり、華やかな歓迎ムードの生徒会長とは違い、悠夜は軽い拍手が送られただけだ。

『それでは、試合を始める前に軽くインタビューしたいと思います。』

では、冬空選手、一言どうぞ』

『みなさん、今日はお集まりいただきありがとうございます。私はどんな結果になっても全力を尽くすので、どうか応援お願いします』

生徒会長が一礼し、再び盛大な歓声を送られる。

「全力で潰す気ツスね」

「まあ、それが目的だからな。あの女狐」

『では続きまして、森羅選手に聞きたいと思います。では、一言どうぞ』

『眠いです』

本当に一言で済ませやがった。

『え、えと。そういうことではなくて、その戦いに向けての意気込みとか……』

『墓穴があつたら入りたいです』

『だから違つてつ。あと、その穴は入つたらだめでしょっ』

悠夜のゆるいボケにところどころで笑いが起きる。おそらくあれは素だろつな。

『そ、それでは、これより魔術決闘、フェーデを開催いたします！』

司会さんが宣言しより一層の歓声が沸き上がる。

悠夜と生徒会長は学生連盟のスタッフに誘導され、お互いに距離をとり300メートルほど離れると止まった。

司会さんやスタッフが転移魔法で結界の外に出る。スクリーンには巨大な時計が映し出され、静かに開始への時を刻んでいく。



あんなに騒がしかった闘技場は一切の物音がせず、誰もが直接、あるいはスクリーンをとうして結界の中で睨み合う二人から目を離さない。

永遠とも思える一瞬が何度も過ぎ、時計の針が真上へ開幕のベルが鳴った

#### その瞬間

悠夜の周辺に数えきれないほどの魔方陣が展開され、魔方陣の中から巨大な氷柱が出現しては悠夜に降り注いだ。

認識した直後には悠夜の立っていた場所には乱雑に積まれた氷柱が積み木のようにそこにあっただ。

俺らはもちろん、他の観客、生徒会長のファンクラブでさえ、魔法の強大さに声もあげられなかった。

『な、なんと言っことでしょう！ 圧倒的。まさに圧倒的実力っ。

冬空選手、森羅選手に一切の抵抗も許さず、この戦いを終わらせ

ちよっ、ちよっと待ってくださいつ。折り重なった氷柱の一番上

！ あ、あそこにいるのはっ』

司会さんの声で闘技場中の視線が、氷柱の頂上を捉えるスクリーンに集まった。そこには、

悠夜は傷一つ無く、実に涼しげな顔で折り重なった氷柱の上を立ち、生徒会長のことを見下ろしていた。

私は昔からお婆様を尊敬していた。もちろん孫としての親愛もあ

ったが、やはり尊敬の念が私の中では一番強い。

お婆様は若い頃、世界に名を馳せた魔女で、凄腕のエクソシスト。引退後は魔法使いを育てるため教職の道に進み、立派な魔法使いを数多く輩出している。

学園都市アストラルの理事長となったのが8年前。その知らせを聞いた当時の私は、すぐさまアストラルに入学する決意を固めていた。けれど、当時は普通の小学校に通っていたため、入学は中学までお預けとなった。理事長就任祝いとして、一人暮らしが寂しくないように白猫をプレゼントしたのを良く覚えている。嬉しそうなお婆様の顔は今でも鮮明に思い出せる。

中学に上がる時はもちろんアストラルの中の学校を選んだ。慣れない一人暮らしはそれなりに苦労したが、それなりに楽しむことができた。お婆様も忙しい身でありながら数ヶ月に一度は会いにきてくれたし、もちろんお婆様の名に恥じないよう魔法の訓練も怠ることなくこなしていった。それが効をなして学生連盟に声をかけられ、見習いだが魔<sup>エクソシスト</sup>祓師の資格を得れた。これでまた一步お婆様に近づけた。その事が堪らなく嬉しかった。

一人暮らしがそれなりに様になり、高校生活も順調に行き私は一年で生徒会長となった。これといった理由はないが、少しでもお婆様に誉めていただきたかった。時は過ぎて、三月の中ほど、急にお婆様から連絡があり会うことになった。出会って渡されたの一枚の少年に関する資料。國桜高校に入学するからその少年の面倒を見て欲しいとのことだった。お婆様の推薦なのだからきつと素晴らしき魔法使いの素養をもった者だろうと考え、資料に目を遠さずに私は二つ返事で了承した。

しばらく談笑し自室へと帰宅。椅子に腰をかけ、資料に目を通す。私は絶句した。

魔力ゼロ。魔法を学ぶどころか、その欠片もない。

いくら魔法を学ぶ意欲があれば、全ての人が入れると言っても過言ではないアストラルでも、いやアストラルでなくても今の時代こ

んな人間を受け入る高校なんてどこにもないだろう。

この時私は初めてお婆様のことが理解できなかった。  
でも、これだけはわかる。

この少年　森羅悠夜がお婆様の名を汚す可能性があること。  
だとしたら、やることは一つ。

森羅悠夜をこの手で排除する

試合開始の合図とともに私は頭の中で呪文を詠唱。手にした刀型  
魔装具　刀雪嶺斬とうせつれいざんを抜刀し発動。

森羅悠夜（敵）の頭上に魔方陣を展開。そこから氷柱を生み出し、  
雨の如く降り注ぐ。森羅悠夜は何の抵抗も出来ず、氷柱の下敷きに  
なる。まあ、特殊な魔符が私同様かけられているのだから、死には  
しないだろうが、戦闘不能は免れないだろう。

あっけなく幕切れたフェーデに私は特に何も懐くことはなく、後  
ろを向いて私はその場を去ろうとした。

だが、

『　ちよっ、ちよっと待ってくださいっ。折り重なった氷柱の一  
番上！　あ、あそこにいるのはっ』

司会の声につられて、まるで何かのモニUMENTのようになった  
氷柱の一番上に視線が勝手に定まる。

そこには森羅悠夜が傷一つ無く、悠然とたたずんでいた。

私は森羅悠夜を魔法が使えない無能者と認識していた。だからと  
言って、手をぬくつもりはなかった。

己の持てる魔法。

それを全てぶつけて森羅悠夜を打ち負かす。

そのはずだった。

だが森羅悠夜は、私が自分よりも格上の魔法使いを退けられる魔法を使っても、それを易々と回避し涼しい顔をしている。

けれど、何よりも驚いたのはその左目だ。

ここからでも難なく見れるその瞳は、初めて肉眼で森羅悠夜を確認した時の弱々しいものではなく、獣を思わせる鋭く強く光る眼光を灯していた。森羅悠夜が何者かと入れ換わったかと、錯覚するほどの豹変ぶりだった。

これが同一人物の変化だろうか。

私は彫像のように動かない森羅悠夜から視線をそらせないまま、妙な寒気を抱くことしかできなかった。

「冬空美姫さん」

森羅悠夜に名前を呼ばれ、私は我に返り刀雪嶺斬を構えた。

「あなたは科学を信じますか？」

（カガク？）

森羅悠夜はそう口にするると一歩踏み出し、そのまま空へと墜ちた。地面に落下しながらも、綺麗に体を曲げることで衝撃を完全に吸収し着陸すると、私めがけて突進してきた。

予想よりも速い足だったが、まだ対処できない距離ではない。

私は半身を退いて刀雪嶺斬の刃先を森羅悠夜に向ける。刀による突きの構え。

一呼吸もしないうちに刀雪嶺斬に魔方陣が刻まれ、それを突きの動作と共に射出。

直径一メートルほどの氷塊が森羅悠夜を襲う。

そんなものに目もくれず、紙一重で回避し速度を落とさずこちら

へ向かってくる。狙い通りに。  
時間差で発動した魔法が、森羅悠夜の目の前に突如現れ氷塊を生む。

回避行動直後の攻撃。これは直撃だろうと思った瞬間、またしても私の予想が裏切られた。

森羅悠夜は右腕を振るうと、袖口から出た黒い紐状のもので氷塊を破壊した。

それは鎖だった。

『なんと！ 森羅選手の魔装具は鎖、暗器でした。鎖を鞭のように使用し冬空選手の魔法を撃破っ。両者一步も譲りません！』

司会の言うとおり、森羅悠夜の魔装具はあの鎖なのだろう。ただの鎖で魔力の籠った氷を壊せるはずもなく、扱いにたけたとしてもあそこまで柔軟に的確に使うことができないだろう。

だが、おかしい。

魔装具は使用者の魔力を通して魔法を発動し武器自身も強化する。昔で言う杖のようなものだ。どんなに優れた魔装具でも、魔力を使わなければ単なる物だ。その半分も生かせることはできない。

なのに森羅悠夜は魔力ゼロの無能者。魔法どころか魔装具なんて扱えないはずだ。

あの資料は偽り？ いや、低く標記するならまだしもゼロとするなんて何のメリットもない。だが森羅悠夜は鎖型魔装具で私が射ち出す氷塊を破壊しながら私に迫る。

(だったらこれです)

空中に出現した魔方陣の中心から先ほどのものとは二回り細い氷

柱が森羅悠夜へ伸びる。相手はそれをやはりかわすが、

(かかった！)

森羅悠夜が氷柱を横切った瞬間、横から新たな氷柱が枝分かれるように発生し森羅悠夜を襲う。

視界外からの不意打ち。完全に後ろを取ったはずなのに、森羅悠夜は回転　回し蹴りを放ち粉碎した。

『なんとということでしょう！　冬空選手の巧妙な作成で後ろに魔法をくらった森羅選手は、なんとそれを蹴りで破壊。魔装具を使わず、しかもまるで後ろに目があるかの如く的確な攻撃っ。森羅選手。一体何物！？』

司会の声が聞こえる。だが、それに気を取られることなく、また魔法を使おうとするが、森羅悠夜が強く地面を蹴って高く跳ぶ。それに伴い、重力に従っていた鎖が直立に並び黒い鉄棍てつこんとなる。

(っ！？)

距離は開いていたと思っていたが、跳躍で射程圏内に入ったのか、鉄棍となった鎖を私に打ち付ける。私は刀雪嶺斬でガード。森羅悠夜は防がれるとすぐに数歩下がり、先の氷柱を破壊した鋭い蹴りを放つ。今度は鞘で受け止めるも細い足からは考えられない重みに耐えきれずに後退してしまう。

その好きを見逃さず、森羅悠夜は鉄棍をまるで刀剣のように振るい凄まじい速さで連撃を繰り返してきた。

私は日頃剣道部で反射神経と動体視力を鍛え、なおかつ『刀』を扱いその軌道を目で養っているのに、私は防ぐのが精一杯だった。

「このっ。舐めるな！」

鞘で鉄棍を受け流し、刀雪嶺斬で斬るためふり上げ斬撃をたたみがけようとするが、鉄棍が今度は鎖の形状へと戻り巻き付くことで刀雪嶺斬を拘束。

森羅悠夜はノーガードとなった私に左手で掌底ていひんを撃ち込む。掌底が私の鳩尾に入る瞬間に鎖の拘束を解いたため、私は数メートル吹き飛ばされてしまった。

腹にとてつもない痛みと不快感を感じながら、鎖を遠心力で振り回す森羅悠夜を見る。どうやら追撃はせず、私の出方を伺っているようだ。

「お前は、なんなんだ？」

知らず知らずのうちに口を開いていた。

争いに慣れているとしか思えない高い戦闘力。

魔力がないというのに、魔装具を扱えるという事実。

本人とは、数十分前とは明らかに違う雰囲気と気配。

その全ては私を酷く困惑させた。

森羅悠夜は鎖を振り回す手を止めず、ゆっくりと呼吸するように言葉を吐き出す。

「誰が決めたんです？」

(?)

「僕は魔力がありません。魔法が使えません。魔装具を扱えません。そのせいで蔑まされました。疎んじられました。虐げられました。世界に捨てられました。」

でも、誰が生きれないと決めました？

僕は生きました。歩きました。歩き続けました。強くなりました。僕は生きています。魔力がなくても、魔法が使えなくても、魔装具が扱えなくても、こうしてここにいます。

だから僕は　　これからも生きて、歩き続けます」

私は言葉が出なかった。いや、考えていなかったのかもしれない。森羅悠夜の言葉でやっと気付いた。

魔力ゼロという事実。

それはこの現代社会に置いて、とてつもないハンデだ。森羅悠夜が言った通り、弱いというだけで白い目を向けられるのに、弱いどころかないというのは迫害の対象だろう。自分がそんな立場だったらと、想像もしたくない。

それでも森羅悠夜は、生きて歩き続け強くなった。そして、この私と対峙している。魔力ゼロ。それだけでお婆様の名に泥を塗ると思ってしまった自分と。

そう思うと酷く情けなく思えた。

器が小さく相手の力量どころか、表面上の感情すらわからないほどに。

フェーデのルールに魔法及び魔装具の使用許可を加えた理由。それは魔法を使ったとしても、それを乗り越えるという強い意志の表れなのだろうか。

（　　負け、だな）

私の負け。完敗だった。戦う前から、私はこの男に負けていた。そう悟ると、何故だか肩が軽くなった。未だ戦闘中だというのに、笑いたくなった。理由はわからない。もしかしたらこれも、森羅悠夜の『強さ』なのだろうか。



(だが、このフェーデはまだ )

「 負けない! 」

単なるいじかもしれない。けれど今の私にはもつと純粹に森羅悠夜に勝ちたいと思っていた。

森羅悠夜も私の声に軽く頷くと、鎖を回転させたまま身構える。私も集中し、今の自分が出せる最大の魔法を想像する。

さあ、ここからが本当の勝負だ!  
フェーデ

5

スゴイと思った。漠然としか思えないのは、きっと次元が違うとかそんな風に考えてしまったからだろう。

それほどまでに悠夜くんは強かった。

試合開始とともに使われた魔法をかわした時も、生徒会長目掛けて疾走した時も、鎖を使って生徒会長の魔法を迎撃した時も、刀と鎖による激しい戦闘を繰り広げた時も、今こうして睨み合っている時も。

悠夜くんはとても強く輝いて見え、心から沸き上がる熱い興奮が全身を駆け巡る。

かっこいい。

スクリーン越しの悠夜くんを見て思わずそう思ってしまう。今の悠夜くんはいつも教室で見かける時とは別の雰囲気がある。

睨み合うことしばらく、生徒会長はその顔に笑み(それも嘲笑などではない、どこか優しいもの)を浮かべると、魔装具を地面へと突き刺した。

すると、悠夜くんの足下、地面が強く澄んだ水色に発光し巨大な

魔方陣が刻まれていた。

事態に気付き悠夜くんはいち早く陣から出ようとするが、中心にいたため間に合わず凍った。

魔方陣の辺り周辺。その全てがまるで氷河期の再来のように、厚い氷に覆われ悠夜くんは見えなくなつた。生徒会長も魔力を今ので魔力を使い果たしたのか、膝を地面につけ呼吸を荒くしている。

(悠夜くん！)

『こ、これは完全に氷結<sup>フリーズ</sup>つ。さすがに森羅選手、身動きが取れないでしょう。この勝負、冬空選手の　！？』

悠夜くんの敗北を告げようとした司会さんの声。それを止めたのは突然聞こえてきた、不気味な音だつた。

パキツ、ピキツパキツ、メキツ、パリツ、ピシシツ

音のした方向を見る。

冰山のようにたたずむ魔法の産物には、一つの大きなひびが入つていた。

鏡やガラスに出来るように、最初のひびを中心に広がり枝分かれしていきやがては冰山全体を包むように亀裂が覆つた。

そして、

パンツ！！！！

鋭い破裂音。それと一緒に砕けた冰山から鎖が伸びる。

生徒会長は再び臨戦体制を取ろうと魔装具を握るが、それよりも早く飛来した悠夜くんの鎖が魔装具に直撃。破壊した。

無防備になつた生徒会長に冰山から生還した悠夜くんが突撃。生

徒会長に左手を伸ばし触れようとし、悠夜くんの体は前触れもなくドサリと音を立て崩れた。

生徒会長も呆然と倒れた悠夜くんを見る。起き上がる気配はない。

「立って！」

誰かが叫ぶ。

私だったのかもしれない。他の人や、もしかしたら複数の人が言っていたのかもしれない。

けれど、悠夜くんに声は届かず

『 森羅選手が30秒起き上がらない為試合終了！ 勝者は冬空選手！！！！』

悠夜くんが負けた！

#### 第四夜 歩き続けることとその先と（後書き）

いかがでしたでしょうか？

コンセプトはバトル、テーマは歩く道を基に書かせていただきました。

戦闘描写やその他もろもろにつきましては、どうかアドバイスお願いします

前書きでも触れた通り、作者はテスト習慣なので次回の更新がす  
ごい遅れます。

ですので、どうかこの話を忘れないでください。

それでは、失礼します。ありがとうございました。

第五夜　そして氷は溶け、清らかな流れとなって

見上げたのは白い天井。

周りのカラーも清潔感溢れる白色で統一されている。

病院。の個室。のベッドの上に僕は寝ている。

あー、帰りたい。好きじゃないんですけどよね、病院。

「……負けたんでしたね」

魔術決闘<sup>フエーデ</sup>の敗北。僕は生徒会長に最後の一撃を繰り出そうとした瞬間、意識を失った。

（まあ、わざとですが）

さて、これからどうしましょうかね。

「今すぐ病院から出ていくのは当然として、生徒会長さんに話をつけるかそれとも」

「私がどうかしたか？」

これには素直に驚いた。生徒会長さんの声が聞こえたかと思うと、声の主が扉を開けて入室してきた。

「しばらくたつても起きないから心配したぞ。顔色も良さそうだな。ああ、医療費は気にしないで欲しい。お婆様が快く手配してください。つたからな。ん、どうした。鳩に豆鉄砲くらったような顔をして」「いえ、あの」

感じ違いすぎませんか？ 以前は敵対心が剥き出しでしたのに、今は友達と話すようにフランクだ。

僕の反応を見て心情を悟ったのか、生徒会長さんは表情を陰らすとその場で腰を折り、僕に謝った。

「今までの私の無礼な態度。どうか許して欲しい。私は何もわかっていなかった。君の心情も、お婆様の考えも。フェーデの後に説教をされたよ。あなたはもつといるんなものを見据えるべきだ、と。まったくその通りだよ。本当に情けない限りだ。私は君の背負うハインデの十分の一も理解していなかったというのに。もう君とは敵対するつもりも、アストラルから追い出そうとする気もないことをどうかわかって欲しい。本当に申し訳なかった」

「あ、いえ、その、顔を上げてください。別に僕は気にしていませんから。というか、そんなこと気にしませんから」

「そうか……。ありがとう。そう言ってくれるだけで、心が救われるよ」

そう言つと生徒会長さんは淡く優しく微笑む。……ファンクラブが自然発生するのもわかる気がしますね。まあ、入る気は毛頭ありませんが。

「ところで、フェーデ勝利の件なんだか……」

「構いませんよ。アストラルに出ていくなり、何なりと命令していただいても、僕はあなたの言うことを聞きますよ」

「いや、だから、そんなつもりはもうないんだってっ」

「わかっていますよ」

「……からかったのか？」

「ご想像にお任せします」

「まったく。まあ、いいか。では、正式なフェーデのもと、ここに

宣言する。

森羅悠夜<sup>もりあみゆうじや</sup>。私の　　」

生徒会長さんの言葉が言い終わる寸前。ボタンと病室のドアが勢い良く開いた。入ってきたのは玲<sup>れい</sup>さんに恋華<sup>れんか</sup>さん。開いたままのドアからは神薙<sup>かんなぎ</sup>くん、天宮<sup>あまみや</sup>くん、刈柴<sup>かりしば</sup>くんという同じみの顔ぶれが見えました。

「悠夜くん……。すっごく心配したのに……………」

「その心は大変嬉しいです。その手に持つ包丁とアイスピックをしらべていただけなら、より一層の高ポイントなんで　　いだっ」

ゆっくりと、まるで間合いでも計りながら僕に歩みよる玲<sup>れい</sup>さんを必死になだめようとすも、僕の言葉は恋華<sup>れんか</sup>さんの拳（綺麗な右ストレート）により閉口せざるおえなくなりました。

恋華<sup>れんか</sup>さんはこれまた額に怒りのマークを浮かべ

「フッフ。まったく、悠夜さんつたら。またいらないフラグをたてて。私の気も知りもしないで、ねえ」

「いはやいれす。は、はにやしてくらしゃい」

陰のある笑顔のまま、まるで万力のように僕の両頬をつねる恋華<sup>れんか</sup>さん。爪をたて、肉を抉るように力を込める恋華<sup>れんか</sup>さんの頭に二対の角が見えるのはきつと僕だけなのでしょう。

助けを求めて視線をさ迷わずと、玲<sup>れい</sup>さんは次は私と言わんばかりに包丁を丁寧<sup>ていねい</sup>に研いでいました。その光景を見るとこの万力地獄の痛みが少し退くのが不思議です。

男子三人を探すと、開けたままのドアからこちらをうかがいながら、恐怖で震えていました。……望みは薄いですね。

痛いを通り越して麻痺してきた頬。その頬に雫が垂れた。

視線を上に向け、気付く。

恋華さんは目に涙を浮かべ、唇を強く噛んでいた。激しい感情の波を押さえるかのように。

「……………」

僕は無言で恋華さんを自分の胸へ抱き寄せる。抵抗しない恋華さんの頭を、左手でできる限り優しく撫でる。

「本当につ、本当に心配したんですからねっ。また、悠夜さんがどこか遠くに行ってしまう気がして私っ」

「ご心配をおかけました。でも、大丈夫ですよ。僕はここにいます」

僕の言葉で感情が和らいだのか、恋華さんは僕の背中に手を回して さば折りをした。イタタタタツッ！ 全然和らいでないっ。

「次また勝手にどこか行くようでしたら、もっと酷いですわよ？ ゆーくん」

恋華さんは僕にしか聞こえない声でそう言い、静かに解放すると部屋のすみへと歩いていきました。

……………ふう。これで簡単にアストラルからは出れなくなりましたね。

「……………悠夜くん」

僕が恋華さんの右ストレートをくらってから、ずっと黙って包丁の手入れをしていた玲さんがいつの間にかベッドにいました。一瞬玲さんが亡霊に見え、思わず恐怖を覚えたから不思議です。

「な、なんででしょうか？」



「……私も」

「はい？」

「ハグ」

抱擁の要求でしたか。僕としては一向に構わないのですが

「わかりましたので、手に持っている包丁を置いてください」

「やだ」

かたくなに僕の要求は拒否されました。頬を少し膨らますその仕草はかわいらしいのですが、手に見える刃物がミスマッチすぎます。

「……………わかりました」

僕は観念し、刃物に対する恐怖心を必死に押し殺しながら、腕を広げて玲さんを抱擁。

玲さんは少し恥ずかしいのか、頬を赤くしながらも僕の胸に頭を押し付け、背中に手を回しました。もちろん包丁を持ちながら。背中に玲さんの温かい腕と冷たい鉄の感触がありありと伝わり、冷や汗がすごい勢いで流れました。

しばらくして満足したのか、玲さんは照れたようにはにかみながら包丁をポケットにしまいました。……やっぱりそこに収納されたたんですね。

「さて、そろそろいいだろうか？」

傍観していた生徒会長さんがやや不機嫌そうに切り出しました。

「大丈夫です。あなた方もそんなところにはいないで入室してください」

「お、おう」

「おじやまするツス」

「わかつたニヤ」

玲さんが包丁をしまい恋華さんの表情から険しいものがとれたからか、恐怖心もすつかり引つ込んだようできちんと神籬くん達も入室。さすがにこの人数だと個室も広く感じますね。

生徒会長さんと玲さん達は僕のベッドを挟んで、お互いに向かい合う。どこことなく、生徒会長さんを警戒してるようにも見える。

「変なこと要求したら承知しないから」

「ちゃんと人権に乗っ取った発言を期待しますわよ、会長？」

訂正。警戒どころか雰囲気険悪でした。生徒会長さんはアストラルは追い出さないと明言していますが、無茶な注文が来ないのか心配して下さっているのでしょうか。

「もちろんそのつもりだ。森羅、お前も私の頼みはお前の意志で承諾してくれ。フェーデなどは関係なしにだ。でなければ、意味がないし私も嫌だからな」

そう言うつと一呼吸おき、自身を落ち着かせる。生徒会長さんのそんな姿は、まるで一世一代の告白をするような緊張感がともなっていて、僕ら固唾をのんで見守りました。玲さんと恋華さんは睨んでいました。

「森羅悠夜」

私の 師に、君の弟子にしてくれないか？」

「? ? ?」

この発言には僕だけではなく、皆さんも沈黙し驚愕していました。

「それはどういうことですか？」

「文字通りだ。私は 強くなりたい。腕力や魔力だけではなく、それ以外のことでも。フェーデのあの時、私はお前を『強い』と思つた。現に勝利したのは私だが、追い詰められ一発くらつた瞬間は勝てる気がしなかった。だからな、森羅。私は『強い』お前のそばで、強くなりたいんだ。そのためにどうか、力を貸して欲しい」

謝る時同様、綺麗に腰を曲げる生徒会長。

まあ、大丈夫ですか。弟子、のようなものを持つのも初めてではありませんし。

「わかりました。あなたを弟子にします。玲さん、包丁をお借りできますか」

「え？ あ、うん」

しばらく皆さんと一緒に呆けていた玲さんは、僕の要求に戸惑いながらも応じてくれました。……たいして大きくないポケットから刃物が簡単に出し入れできるのが相変わらず不思議でなりません。丁寧に渡された包丁はとても綺麗に研がれていて、食材だけなくまるで………考えるのはよみましょう。

「利き手を貸してください」

「な、何をするんだ？」

「ご心配なさらず。『契約』、と考えていただいて構いません」

「そ、そうか」

「それでは失礼します。刃物への抵抗がありましたら、目をとじていても問題はありません」

「いや、大丈夫だ」

そう気丈に言い張る生徒会長さんですが、瞳を見れば不安がっているのは一目瞭然です。さっさと終わらせませうか。

生徒会長さんの手を優しく握り、手の甲を上に向ける。包丁を滑らすように動かし、手の甲に小さな五芒星を描く。皮膚を最小限傷つけただけで流血はせず、問題なくこの行動は終了。

次に僕は自分の人差し指を切りつける。先ほどとは違いある程度深く傷つけたため、血が小さい傷口からあふれる。その一滴を生徒会長さんに刻んだ五芒星の中心に垂らす。

「我、汝に我が血を持って刻む 汝はこの時より我が星の元旅立つ存在なり」

そして僕は生徒会長さんの手に顔を寄せ、軽く唇で触れる。

「なっ……／＼／」

「これで終了です。これからよろしくお願いします。？ どうかされましたか？」

「いや、別になんでもない。そうか、私はこれで正式に君の弟子か。……なんて呼べばいい？」

「変わらずでいいですよ。それに変な気を回さなくても別に何も言うつもりはないので、普段通りに接してください」

「うん。了解した」

生徒会長さん、いや冬空先輩はどこか嬉しそうでした。まあ、僕の弟子になりたがってましたし。とりあえずはスキルアップを重視して……あ。

「冬空先輩。そう言えば魔装具ってどうしちゃいました？」

確かチエーンで破壊したような……

「ああ、刀雪嶺斬とうせつれいざんのことか？ ただいま大破中だ」

「うわっ、やっぱり……」

あの時は戦闘中だったとは言え、まずいことをしてしまいましたね。……あつ、そうだ。

「その刀雪嶺斬の破片はありますか？」

「ああ、大きな物はいくつか私が持っている」

「そうですか。では、明日早速集まっていただけませんか？」

「修行か？」

「ええ、まあ、そんなところです」

「わかった。それなら是が非でも行かせてもらおう。ふふふ、初特訓だな」

さつきからずっとニコニコが止まらない冬空先輩。そんなに稽古に励む意欲があるとは真面目ですね。

と、考えていると、

「悠夜さん。その弟子は私もなるのは可能ですか？」

恋華さんがやけに真剣な表情で聞いてきました。

「はい。複数の人を見ることも可能だと思います。もしかして、なるつもりですか？」

「ええ、私も強くなりたいんです。それに、悠夜さんの元で強くなれるのでしたら、願ったり叶ったりですわ」

「うーん。わかりました。了承します」

「うふふ。ありがとう。悠夜さん」

楽しげに笑うと、恋華さんは冬空先輩の方を向くと。

「よろしくお願ひしますね、姉弟子さんあねでし」

「うん。こちらこそよろしく頼む、妹弟子よいもうとでし」

お互いに笑い合いました。笑い合ってるはずなのに、何故か怖い  
です。

「悠夜くん。私もいいかな？」

「俺も、俺も！」

「右に同じニヤ」

「俺も魔法とかいろいろ学びたいッス」

なんと恋華さんどころかみんなが手をあげる始末。

まあ、大丈夫ですか。最大七人、いや八人持った経験もあります  
し。

その後は皆さんが弟子になることを了承し恋華さんに続き玲さん  
と『契約』をする。終えた二人は一樣に頬を赤くして、とても上機  
嫌でしきりに利き手を撫でていました。なんででしょう。

「なあ、悠夜。最後の血垂らした後のやつ、どうにかなんねえかニ  
ヤ？　なんか、背德的に問題あると思うし」

天宮くんのこんな要求。ふむ、一理ありますね。

「わかりました。では、握手しましょう」

「え、そんなんでいいのかニヤ？」

「握手だつて起源をたどると立派な契約の証なんですよ？」

「なるほど。じゃあ、それで頼むニヤ、悠夜師匠」

こうして男子群は若干の改良を元に行いました。……仕方ないとは言え、六回も同じ行為をしたのはなんか恥ずかしいですね。

「俺らってこれで弟子仲間だな」

「そうツスね」

「後輩も一度でこんなにできたのも、初めてだよ」

「なんか賑やかになりそうですわね」

「ま、いいんじゃないかニヤ」

「よろしくね、悠夜くん」

……まあ、楽しそうな顔も見れましたし、良かったのでしょうか。

「では、皆さんも明日は集まってくださいね」

「それはいいけど、悠夜くん大丈夫？」

「体調は万全です。今日中にも退院できます。冬空先輩、医師の人に、もう帰りたいと伝えて欲しいのですが、お願いできますか？」

「無論だよ」

「助かります。それでは、今日はお開きにしましょう。本日は見舞いに来ていただいてありがとうございます」

集合場所と時間を告げ、さよならの挨拶をかわす。一人また一人と退室していく。最後に残った冬空先輩が、

「森羅。本当にありがとう」

「そんなお気になさらず」

「お前はお婆様から私の家のことを聞いたんだろ？」

「そうですよ。ですが、同情等してません」

「そうか。ふふふ。ではな、森羅。また、明日」

「はい、さようなら」

冬空先輩も退室。これで僕だけになりました。  
あれだけ騒がしかったのに、今ではまるで音がないように静まりかえっている。

「不思議ですね。周りに人がいるというのは」

玲さんに恋華さん。神薙くんと天宮くん、刈芝くん。  
そして、冬空先輩。

「鬼は鬼でも優しい青鬼ですか」

また、天井を見上げながら思う。

世界は本当に汚いな、と。

悲しまなくていい人が胸を痛める。ここはそんな世界ですから。



第五夜　そして氷は溶け、清らかな流れとなって（後書き）

お久しぶりです。

今回は魔術決闘その後ばいつ感じで作らせていただきました。

一部の人にはこの展開が読めたでしょうか？　伝助はベタもの好きです。

次回は悠夜くんの回想のような形で、生徒会長さんの過去を少しのぞければと思います。

それでは失礼します

第六夜 哀しき鬼はいつその涙を流すのか（前書き）

PV10000アクセス突破!!!

ユニークは1000を越えました!!!

本当にありがとうございます！

## 第六夜 哀しき鬼はいつその涙を流すのか

1

病院から問題なく帰宅できた僕は、ずいぶんと久しぶりに感じながらお茶を淹れ飲みほしました。

アストラルへ来る際、愛用している茶葉等が手にしにくくなると危惧していましたが、ほどよく手入るルートを見つけられこうして毎日愛飲しています。ああ、これぞ至福。

僕の借り住まいは木造建築の一戸建て。瓦屋根の見た目通り、中は畳がほとんどで僕は座布団の上でのんびりとしていました。

これからする明日の準備の前の小休止。

(冬空先輩が僕と師弟関係になったと聞いたらどうという反応をしますかね、あの理事長さん？ まあ、喜びそうな予感がありますが。それとも、冬空先輩がもうすでに伝えているのかもしれないね)

そう思い、心の中で小さく笑う。

(一体誰が考えるでしょうね？ 科学者が魔法を教えるなんて)

僕は右手を天井へ伸ばし手のひらを広げ、目線でそれを追う。

「鬼、か。それは僕のことですよ。そうでしょう、父さん？ 母さん？」

けれど、答えは返ってこず、僕はただ理事長さんの言葉を思いすだけでした。

「哀しい、鬼の子？」

理事長さんの唐突な言葉におうむ返しで聞いてしまいました。

「ええ、そうよ。」

「あの子はね、鬼の子なのよ」

「……………」

あの子、とは当然生徒会長　冬空美姫のことを指すのでしょうか。

「あ、もちろん『鬼のようにかわいい』って、ことじゃあないわよ？　まあ、美姫<sup>みき</sup>ちゃんは目に入れても痛くない、かわいいかわいい孫だけねど」

「……………」

頬に手を添えながら、笑顔で自分の孫娘　生徒会長さんをおかわいいという理事長さんにどういふ反応を示していいかわからず、とりあえずコーヒーを一口いただくことにしました。子煩悩ならぬ、孫煩悩というやつですね。

「あら、ごめんなさい。退屈しちゃったかしら？　お茶飲み友達とはこういう話しかしないからつい。」

あなたも薄々わかつていると思うけど、鬼というのはストレートに怪異や魔陣<sup>ましんじゆう</sup>獣<sup>じゆう</sup>のことではないの」

「鬼神の如く強き者、という意味ですね？」

「さすがだわ。冬空家は代々続く由緒正しい陰陽師、今で言う魔<sup>エクス</sup>被<sup>ソシ</sup>スト」

師を輩出していた家系なの」

「それなら耳にしたことがあります。『鬼斬りの冬空』といえば、有名ですから」

アストラルに在学してる人がいったい何人冬空家のことを知っているかは知らないが、僕のようにほんの数週間前まで非日常にいた僕は、度々その名を耳にしていた。

曰く、『鬼斬りの冬空』。そして『鬼喰らいの冬空』。

「むかしむかし。人はまだ魔法なんて特定の誰かしか使えない、魔術や呪いと呼ばれていた頃、当然怪異や魔陣獣は存在していた。人に仇なす存在は到底非力な人間ではかなわず、人は異形と同じ力。魔力を宿す人を探した。人はそれを初めは陰陽師と呼び、重宝した。人が異形の災厄から守られるようになり救われるも、こう考える者が出てきた。『鬼を斬るもまた、鬼ではないか』と」

理事長さんは語る。魔法使いの歴史を。

「そして陰陽師は少しずつ疎んじまれていった。救世主と崇められながらも、影では恐れ畏れられた。

時が流れた今、魔力の存在が全ての人に平等にあっても、強大な者への畏怖はなくならなかった」

理事長さんは一息つくと、ミルクティーを口へと運ぶ。僕はじつとその様子を見守る。

もちろん僕も記録上、過去の魔法使い達が迫害こそされないにしろ、様々な意味で普通の『人間』とは違う扱われ方をされていたのは知っている。

けれど、そんな祖先を持つ人の口からその話を耳にするのは、文字だけでは得られない歴史を重圧を感じる。

魔を被えば魔に染まる。

鬼を斬れば鬼となる。

魔法が魔術や呪いと言われた時代、人はそれにすら恐れを抱き自分達にないものに抵抗を持ち、恐れのみだけが膨れ上がる。

「さつきも言った通り、冬空家は陰陽師を代々その血筋から輩出してきたの。そのためには強力な、魔を被えるほどの力を必要とした。ご先祖様がどういう秘法を使ったかは知らないけど、自身の強い魔力を子や子孫に『残す』術を見いだしたの。……今になって思えば、ご先祖様の意地だったのかしらね。人のためにあつても人とは認めてもらえず、存在意義だけは守ろうとしたのかもね。」

美姫ちゃんはね、ご先祖様の強力な魔力を、自分の意思とは関係なしに受け継いでしまったの。小学生の頃から大人よりも強いせいで、あまりお友達もできずこう言われていたそうよ。鬼の子、つて美姫ちゃんも美姫ちゃん、そんな自分の境遇をどう思ったかひたすらに強くなるうとしたの。美姫ちゃんに聞いたら私の影響だつて言つてたけど、それだけじゃなくてきつと根本的なところで怖がつていたのかもしれないわね。先祖の魔力という、強大な鎧を宿したが故にそれに見あつた刀を持たなければ、捨てられると。あなたに反発して、魔術決闘<sup>フエーデ</sup>を挑んだのも魔力のないあなたに勝つことこそういつた者を乗り越えたいのかも。あの子、一人で抱えようとするから。」

悠夜くん

僕の名前を呼んだ理事長さんは、まるで孫でも見るような優しい眼差しで、

「こんなことになってしまったけれど、あなたにお願いしたいの。どうか、美姫ちゃんの力になって欲しいの」

「……………一つ言わせてください」

僕はコーヒーを一口飲み、言葉を言う。

「冬空家の歴史も、生徒会長さんが抱える事情もだいたいはわかりました。では、それを踏まえて言わせていただきます。

どうでもいいんですよ、そんなこと」

理事長さんは驚いたように目を見開く。僕は構わず喋り続ける。

「生徒会長さん自身が僕に助力を求めたのでしたら、快く応じましょう。ですが、僕自らが手を差し伸べるなんてまねはお断りです。救いや助けなんて望むものではなく、得るものです。

「だいたい、そんな環境の人なんてさらにいますし、もっと酷く嘆いている人だっていますよ。

「そんなもので不幸面しないでください」

僕の言葉でぽかんとしていた、理事長さんですが何がおかしいのか笑いだしました。

「ふふふ、そうよね、そうなるわよね。ふふふ。今まで何人かの人にこの話をしたけれど、あなただけよ？ そんな反応を示したの  
は」

「それは、僕は僕だけじゃないから」

「そうね。でも、ようは美姫ちゃんがあなたに頭を下げればいいのか  
よね」

「ええ、まあ」

「優しいのね」

「そんなんではありませんよ」

「わかったわ。……今日は時間を取らせてしまつてごめんなさい。でも、話しを聞いてくれてありがとう。やっぱり孫はいくつになつてもかわいくて。それじゃあ、失礼させてもらうわね。あ、お代は気にしないで、私が払うから。いいのいいの。お婆さんの話しを聞いてくれたんだから、これぐらい当然でしょ？ それじゃあ、御武運を」

僕は口を挟む好きもなく、理事長さんは伝票を持ちながら優雅にはけて行きました。

やることもないので、僕も最後の一口を飲み干すとその場を後にしました。

3

今にして思えば、理事長さんはこの展開をよんでいたのかもしれませんね。

僕のことをよく知っていたのか、それとも誰かから聞いたのか、はたまた偶然か。理事長さんの孫はある意味あの人の思惑通り僕の弟子になりましたし。おまけもついてきましたが。

「なんか日常の中にも、やることは変わりませんね」

結局はそこまで変わらないということですか。

でも、僕に出会ったことでみんなには変化が訪れるのでしょうか。もしもそうなら まあ、悪い気はしませんね。

さて、明日の準備をするために、段ボール箱をあさらなくては。

今日の夜はいつもより少しだけ長く感じた。



そのレストランはいわゆる五つ星レストラン。調度品からスプーンやフォーク、何から何まで一級品の品物が使われている。

学園都市アストラル。

自炊のできない学生のためにレストランや飲食店が、都市の各地にたくさん看板が軒を列ねている。だが、学生の財力では入店も困難になりそうな、いかにも『大人が入る場所』という雰囲気をもし出すものは極めて珍しい。

店内には客が三人。

一人は鮮やかな薔薇色の髪を長く、膝くらいまで伸ばした二十代後半とおぼしき女性。瞳や唇も燃えるような深紅を宿す美女だ。

美女は上品に皿の上で、分厚くいかにも高そうな肉をナイフで切り口へ運ぶ。ベジタリアンでなければ誰もが垂涎ものの極上のステーキだが、女性はたいして美味しそうに咀嚼せず、

「うん、いまいち……。やっぱり、ユーちゃんの作ってくれてるご飯が一番いいわね」

「あらあら、羨ましいわね」

「なによ？ あんただって、美姫だった？ お婆様ってなつかれてるんでしょ？ いいなー。ユーちゃんなんてまだ私のことを『モーちゃん』や『ママ』なんて言うてくれないのよ。はあ、反抗期なのかな。中学に上がってからは一緒に風呂や寝るのも拒否するのよ」

「大変なのねえ。まあ、あの年頃の子は難しいって言うし」

「ふーん。ツンツンしてるユーちゃんもかわいいけど、やっぱりデレデレのユーちゃんの方がいい」

女性は子供のように手足をバタバタさせるも、優雅な雰囲気は崩れない。対面に座るアストラルの最高理事長と、女性の傍らで使用

人のように控える少女は苦笑気味にそんな光景を見守る。

じたばたし終わると少しは気が晴れたのか、女性はグラスに残っていたワインを一気に飲み干すと席を立った。

「あら、もう行くの？ もっとゆっくりしていったら」

「うん、そうしたいのはやまやまだけど、そのんびりしてられないのよ。それに、速くユーちゃんに会いたいし」

「あらあら。久しぶりに再会した友人よりも、子供を優先するなんて。歳はとりたくないものね」

「なによ、まだまだ現役じゃない」

「いつまでも若々しいあなたにそう言ってもらえると嬉しいわね。

ねえ、一つ聞かせてちょうだい」

「ん？」

「今回事怒ってる？」

「別に。これはユーちゃんが決めてユーちゃんがしたことなんだから、私ごとやかく言うことじゃないわ。あなたもかわいい孫娘のためにも思ってたことでしょ？ なら、それでいいじゃない」

女性は『ごちそうさま』と言い手を振ると、足早に立ち去ってしまった。少女も理事長に会釈して頭を下げると、後に続く。

広いレストランの中で一人となった老婆は、優しく楽しそうに微笑を浮かべる。

「森羅悠夜くんか……。おもしろい子ね」

その声は誰も耳にする事なく、夜の静けさにへと霧散していった。

第六夜 哀しき鬼はいつその涙を流すのか（後書き）

今回は短かったです。というか、作者の見苦しい裏会わせです。  
（期待された方すいません）

今回は休日の風景や、特訓（？）第一段をやりたいと思います。  
それと、いろんな単語が出てきたので、人物紹介とは別にワード  
辞典を作りたいと思います。作者も混乱気味なので。

前書きでも述べましたが、『あなたは科学を信じますか？（いい  
略称募集中）』を読んでくださって本当にありがとうございます。  
伝助はより一層励みますので、どうかお付き合いください。

それでは失礼します

第七夜 星は空を巡り、再び輝きだす（前書き）

今回は魔法使いぽいことをします。

## 第七夜 星は空を巡り、再び輝きだす

1

天候は快晴、ではなく曇り空。

他の人にはあまりよろしくない空模様なのですが、僕としては  
すごしやすくうれしい限りです。午後には晴れると予報で出ている  
ので、実にもつたいない。

朝のトレーニングを終えた僕は今、お弁当を作っています。

というのも、今日の特訓では10時にみんなが集まる予定なので、  
一応ですがこうして全員分の食事を用意している。あとで、あーだ  
こーだ言われるのは癪ですからね。

おかずを作り終え、重箱に詰めてゆく。うん。彩りも鮮やかで、  
十分合格ラインです。人様に出すのですから、ちゃんと見栄えも気  
にしないで。

読書で時間を潰し、読み終えたところでちょうど家を出る時間帯  
になったので、服を着替えて弁当をふるしきで包み、昨日段ボール  
から取り出したものがあるかちゃんと確認し外出。

「行ってきます」

学校へ通う時よりも多い荷物ですが、それほど苦にはなりません  
でした。待ち合わせ時間の1時間前に着く予定なので、朝の空気を  
堪能しながらのんびりと歩きました。

待ち合わせ場所の國桜高校の校門前に来ると、意外なことに僕よ  
り先に待っていた人がいました。元気はつらつとといった感じの神薙かんなぎ  
くんといかにも眠そうな天宮あまみやくんでした。

「おはようございます。お二人とも、早いですね」

「おーすっ。悠夜、昨日は眠れたか？俺はぐっすりだ！」

「そりゃそうだろうよ。10時にはぐっすり寝て、6時には起きてんだから。付き合うこっちの身にもなってくれニヤ」

「無理やり起こされたんですか？」

「そんな感じだニヤ」

幼馴染みという二人でも、トップギアの効いた神薙くんについていくのは難しいようですね。

その後は三人で談笑（僕は基本受け身）しました。集合時間30分前に冬空先輩が、10分前に少しの差で玲さんと刈柴くんが、5分をきつたところで息を弾ませながら恋華さんがやって来ました。

「お、おはようございますっ。時間に間に合いましたでしょうか？」

「大丈夫ですよ。それでは、全員揃いましたし移動しましょう」

「どこに行くんスか？」

「ここから15分ほどの距離にある公園に行きます」

國桜高校の入学式前、家の周辺を探索している時に見つけました大きな公園。フェーデ用の競技場を小さくして、芝生や遊具を足したような感じですよ。中心には大きく開けた空間があり、そこでは祭りなどが行われるようです。今日やることにも好都合ですね。

「にしても悠夜くん。いくら晴れじゃないからって、その格好は暑くない？」

「大丈夫。僕は外出する時は一年中この服装ですから」

「え、そうなの？悠夜くんってすごいね」

そうでしょうか？僕の今の格好はフェーデの時に来たものと一緒にです。イヤリングはしてませんが黒で統一したロングコートにそ

れに合わせたシャツとズボン。手袋もはめ、肌をさらしてません。太陽は嫌いです。

「森羅もりあみはそんな格好の服しか着ないのか？ もっと似合いそうな服が他にもあると思うぞ」

「そう言われましても、僕の箆笥やクローゼットを開けても黒いものしかありませんよ」

「……なんか家具も黒一色のような気がしてきたな」

「良くわかりましたね。もしかして冬空先輩はエスパーですか？」

「その真実と発想に私はびっくりだ」

そうこうしてる内に、お目当ての『四季原公園』へたどり着いた。まだ午前だからか、人は僕ら以外にはいませんでした。みんなを公園の中心である、学校のグラウンドを思わせる更地へ誘導。さてと。僕は背負った荷物から先端の尖った、長さが大きなシャベルほどある折り畳み式の棒（一見細い槍）を取り出した。

「平然と取り出したが、なんでそんなもん悠夜が持つてんだ？ 俺としてはあきらかに普通の高校生が持つものじゃないと思うんだけど」  
「手品の種を聞くのと同じですよ、神薙くん。世の中には知らない方がおもしろいことがたくさんあります。それでは、少しそこで待機しててください」

僕はみんなから離れると、棒の先端で地面を突き立てて、そのまま動かすことで即席の地上絵を描く。

最初は小さな円を描き、中心や外側に梵字や古代文字を足していく。そうやって何重にも円を地面に刻んで巨大な魔方陣を創っていく。

数歩離れて全体を見渡し、陣が正確であることを確認。

僕はコートエレメントのポケットから魔結晶を取り出す。わずかな陽光に煌

めきながらも、夜の闇のような暗さを宿すエレメントをしばらく手の中で転がし、

「それでは、お願いします」

宙へほつる。小さい放物線を描いて地面へ落下、勢いが消えないままコロコロ転がり、エレメントは吸い寄せられるように魔方阵の中心でピタッと止まった。

準備完了。

さあ、初めましょう。

2

今まで師匠と呼べる人はいなかった。

お婆様から魔法の手解きてほどをしていただいたことは過去に数回あるが、幼い頃からお婆様には深い親愛を抱いていたから師せんせいと言うよりは特別講師と言える。

私の初めての師匠（今後、他の人が私の師匠になるのはいまいち想像できないが）はまずどういう指導をするのだろうか。

師匠（森羅）に連れてこられた公園で待機を命じられながら、そんなことを考える。

やはりまずは小手調べだろうか？ 私は昨日のである意味済んでいるし、他の弟子の魔力などを測るのだろうか。

美姫（私）はそれとなく、自分より後に森羅の弟子になった（と言っても、数分の差だが）後輩達を見る。みんなはそれぞれに森羅の動向をうかがったり、広い敷地の公園を眺めていた。だがそれもつかの間、『ジャキン』という音が聞こえ一斉に音源の方へ振り向く。それは森羅の手の中にあつた。巨大とは言えないが十分な長さがあり、先端はまるで槍のように鋭く尖っている。というかどうみ



ても槍だった。

「平然と取り出したが、なんでそんなもん悠夜が持ってた？ 俺としてはあきらかに普通の高校生が持つものじゃないと思うんだけど」

神薙の意見と同意見だ。私と戦った時の暗器（鎖）と言い、今の槍と言いなぜ森羅はそんなものを持っているのだろうか。

「手品の種を聞くのと同じですよ、神薙くん。世の中には知らない方がおもしろいことがたくさんあります。それでは、少しそこで待機しててください」

森羅はそう言って数メートル離れると、槍を使って地面に何かを刻みだした。私達はそれを静かに見守る。

最初は小さな円だった。コンパスを使って出来上がったような、とても綺麗で正確な円だった。その円に今まで見たことがない文字を中や外側に槍で刻む。そしてまた綺麗な円を作り文字を描いていく。その繰り返し。誰でもできそうなことだが、何より正確でしかも速い。森羅の手先の器用さがうかがえる。

一番外側にある円の大きさが四メートルくらいになったところで森羅は作業を終了させた。開始から五分とかかかっていない。まるで本のページから抜きだしたような、とても複雑な魔方陣が完成していた。

次に森羅はコートのポケットの中から、黒色のエレメントを取り出した。

エレメント  
魔結晶

十数年前に発明された、魔力を宿し自由に使うことができる補助装置。

「それでは、お願いします」

それを優しく投げる。

エレメントは地面へ落下すると、そのまま転がり魔方陣の中心部で止まる。

するとエレメントが一人でに発光し、中心からまるで水を流すように魔方陣を作る模様が黒く光る。

朝とも昼間とも言い難い時間帯に浮かぶ、黒曜石を思わせる光はなんとも幻想的でとても素晴らしかった。

「冬空先輩」

突然呼ばれてはっとする。森羅は私に手を差し伸べるように出すと、

「魔装具の欠片かけらありますか？ 出してください」

「あ、ああ、わかった」

私は肩に提げていたバツクの中から、小さな茶巾袋ちやきんぶくろを取り出しその中から、残骸となった魔装具回収した中で一番大きな欠片を摘まむ。

私の魔装具 刀雪嶺斬とうせつれいざんの成れの果て。

「これでいいか？」

「はい。ありがとうございます。あの……」

「いや、森羅は気にしないでいい。むしろ私をしかってくれてもかまわない。これは 私が未熟だった故の誤ちの結晶なのだから」

そう。私の相棒がこうなってしまったのは、自分の力量不足。私が犯した罪。

「じゃあ、冬空先輩は魔方陣に近付いて、どこでもいいので触れないように右手をかざしてください。他の皆さんは念のため離れてください」

刀の破片を渡すと、私は森羅の指示で魔方陣に近付き手をかざし、後輩達は更に数歩距離をおく。右手の甲に悠夜が着けた傷が目に入る。傷と言っても、一日たってももう治りかけているそれは森羅の巧みな腕で刻まれたものだ。正直あの時は物が包丁だったし、痛みは覚悟していたが全然なかった。

(フェーデの鎖といい、病院での包丁を使った『契約』といい、今やってのけた槍による魔方陣生成といい、森羅はどこでそんな技術を習得したんだ？ 森羅にも師匠のような人がいて、教わったりしたのだろうか)

そんなふうにと考えていると、突然手の甲の傷が魔方陣同様黒く輝きだした。

私は驚き森羅を見る。

森羅は目をつぶりながら、

「我、輪廻の流れを導き再び逢い見えん 我が星に集う者に再び栄光と知恵と安らぎを与える」

森羅は左目をあけ視線だけ私に向ける。

「冬空先輩、イメージを。魂の中から溢れ輝く霊泉、手繰り寄せる右手に、流れの終着点は一つの想いと二振りの刃」

言われて私は目を閉じ意識を集中する。

まぶたの裏に映ったのは、暗闇の中でたっている自分。右手を前

につきだすと、服の袖から蛇のように水流が二つ出現する。二本の水流は意思を持つように動き、螺旋を作りながら闇の奥へ奥へと進んでいく。だんだんと水流はお互いに距離を近付かせ、二つが一つに

「想像構築ダウンロード、確認。これより具現化を開始します。」

我は願う 安らぎを運ぶ流れを、邪悪を隔絶する氷河を、遙か彼方を見る広大な海陽を ここに顕現せよ 過去の軌跡と未来の道標、今の想いを繋ぎとめ汝の姿をここに現せ！！」

森羅の手の中にあつた刀雪嶺斬の破片が一人でに動き、魔方陣へと浮遊する。それと一緒に、魔方陣から柔らかな光に包まれた光球が幾つも出現した。半透明な光球の中にはジグソーパズルを思わせる何かの欠片があつた。そして何の前触れもなく、ジグソーパズルは刀雪嶺斬の破片へと集まりだした。一欠片、一欠片ずつ破片同士が結合していき、全てが一つになった時そこにあつたのは一振りの刀だつた。

その刀は大きさから刀身の反り具合そ、波紋の形まで刀雪嶺斬と似ていて

「どつぞ」

森羅は完成した刀を手にとると私に差し出した。

私はおそるおそる受け取り、柄の部分を強く握りしめる。握つた感触さえ、懐かしいものを感じる。

「もしかして、森羅。刀雪嶺斬を作り直したのか？」

今手にある刀は、まさしく壊れた私の愛刀、刀雪嶺斬と非常に酷似していた。

「いいえ、違いますよ。僕は魔装具の記憶と冬空先輩のイメージを反映して作ったんです。それに、ほら。こことかは原型と違いますよ」

森羅が指さしたのは柄の中心部。そこには握るのに邪魔にならないように埋め込まれた水色の珠があった。確かに前の刀雪嶺斬にはこんな物はないなかった。これはいつ……？

「エレメントの原石、を加工したものです」

「どういうことだ？」

「つまりですね。僕はエレメントの中の魔力を使って、ここにある魔方陣を発動。で、この魔方陣というのは二つの魔方陣の複合型なんです。一つは『融合』、もう一つは『製造』。魔装具の欠片と冬空先輩の魔力、原石状態のエレメントを『融合』して新しい魔装具を『製造』したんです。ちなみにエレメントの原石を加えたのは、そうやって魔力を集中させないと『製造』が困難になるんです。冬空先輩、愛されていますね。いくら元の素材と本人がこれを行ったとしても、ここまで復元はできないですよ」

「そうか。刀雪嶺斬が私のことを……」

刀身を指でなぞる。

ありがとう。

弱くて未熟な主を慕ってくれて。

気付けば私はいつの間にか涙を流していた。急いでそれをぬぐうがすでに時おそく、森羅がおずおずとハンカチ（これも黒い）を渡してくれた。無言で受け取ると顔を隠すようにハンカチを広げ、強く両目をこする。この師匠であり、後輩の少年に泣き顔を見られる

のは何故だか恥ずかしかった。

「……礼を言わせてくれ。ありがとう、森羅。本当に感謝している」  
「そんな。魔装具を壊したはやっぱり僕ですし、それにこれから僕のもとで修練をするのなら魔装具は必須ですから。ですので、これは師匠から弟子への送り物ってことで」

そう言うのと森羅はニツコリと笑った。人を安心させる、暖かな笑み。普段は感情に乏しいというか表に出さなくせに、こういう時だけ笑うのはずるい気がする。何がずるいとかはいまいちわからないが。

「さて、と。皆さんもこちらに来ていいですよ」

森羅が月弦たちを呼ぶ。彼女らは森羅が融合と製造やらやってい  
た際、驚きのあまり固まり凝視していたのだ。まあ、私も立ち位置  
が違ってたらびっくり仰天すると思うが。

衝撃という呪縛から解かれ、小走りでこちらに近付いてくると、  
私の真・刀雪嶺斬（新しい名前をつけるべきだろうか？）や魔方阵  
を不思議そうに見る。

「では、とりあえずじゃんけんでもなんでもいいので、順番を決め  
てください」

「えっ？ 俺らにも作ってもらえるんすか？」

「ええ。今日はそのために呼んだのですから」

「あ、でも、学生連盟とかに魔装具所持の申請しなくてもいいんす  
か？」

「それは別にすぐやらなくても平気です。冬空先輩。霧や靄ものよう  
なものが一ヶ所に集まって、一つになる様子を強くイメージしてく  
ださい」

私は再び森羅の指示に従って想像する。空中に文字通り霧散する霧が、一つの雫になるイメージ。

すると、刀雪嶺斬は淡く発光すると、粒子状に分解され柄にはまったエレメントに吸い込まれていく。私の手にはエレメントしかなかった。

さらに驚く私達、森羅が説明してくれた。

「これがエレメントを『融合』させたもう一つの理由です。エレメントは形状を覚える ことにも秀でています。それが魔力が通っていない原石の状態ならなおさらです。イメージするなり、呪文を唱えるなり、名前を呼ぶなりすればまた武器の形をとることが出来ます。それに、武器を出さなくてもある程度の魔法なら使えると思います」

「……………スゲー。スゲー！ スゲー！ スゲー！ 悠夜、お前って本当になんでもできんだなっ」

「なあなあ。もしかして、生み出した武器って、擬人化とかできるのかニヤ？」

「できません。でも、皆さんの場合は設計図も何もない中で創るわけですから、ちゃんとイメージしてくださいね」

「うーん、私はどんなものにしようかしら。悠夜さん、何かオススメ等ありますか？」

「俺も迷うツスねー。やつぱり剣とか、かつこよさそうツスよね」

「あ、じゃあ私は包丁にしよう。人ぐらいの大きさのあるやつ」

「……………考え直してください」

月弦つきじゆんの提案に私以外の五人が一斉に口を開いた。私はいいと思うのだがな、大きい刃物（包丁）。そう言えば月弦は病院でも抜いていたし、刃物の心得があるのかもしれないな。

にしても、何故みんなはあんな必死な顔をしているのだろう。森

羅に至っては、嫌なことでも考えたか顔が真つ青だ。

月弦をなんとか思い止まらせ別の物を考えると言い、他の物達も頭をひねらせていた。森羅は次の準備のため、ポケットから無色のエレメントを取り出し握りしめた。私の時もそんな風に行ったのだらう。

私も手の中にあるエレメントを握りしめる。気持ちのいい冷たさが肌に伝わり、思わず顔が綻ぶ。

(約束しよう。もうお前を壊したりはしない)

3

やはり一から創るのは難しく、全員分の魔装具を創るのに時間がかかり昼過ぎまでかかった。

僕が作った弁当をみんなで食べた後は、解散した。皆さんはもつといるんなことをしたがつていましたが、いかせん僕が疲労していたので、帰らせることにしました。

帰宅してからは早めに夕食をつくって済ませ、こうして読書も裁縫も何もせずボーッとしています。

いくらエレメントと言う補助装置があっても、魔力ゼロの僕にとつてはそれを扱うのも高い精神集中が必要なためとても疲れてしまふ。おそらく明日は一日中寝ることになるでしょうね。

(まあ、皆さんの笑顔が見れたからよしとしましょう)

リンリンッ

突然、ドアベルが鳴った。

時刻は9時を大きく過ぎたところ。こんな時間に訪問者とは珍し



いですね。

「今開けます」

そう言っつて僕は玄関まで行き、ドアの鍵を解除する。

これがいけなかった。僕は次の瞬間、自分の無警戒さを強く呪った。

「ユーちゃん！」

「うわっ」

鍵が開くなり自分でドアを開けた訪問者は、すごい勢いで僕に抱きついてきた。甘い体臭と触れる柔らかい体の感触がひどく落ち着かない。

「何でここに？ どうして僕の居場所が？ 玄関の外にいる少女は誰ですか？」

「聞きたいことはたくさんありましたが、とりあえず僕はこれと言いました。」

「お久しぶりです、師匠」

第七夜 星は空を巡り、再び輝きだす（後書き）

魔法使いにとって、杖は必要ですよね。

この世界では杖でなく魔装具ですが（笑）

次回にはついにあの人が……

更新をお待ちください。それでは失礼します。ありがとうございました。

第八夜 入学祝いは冥土への片道切符（前書き）

サブタイで内容がだいたい想像できた人は挙手

## 第八夜 入学祝いは冥土への片道切符

1

「お久しぶりです、師匠」

「まあ、そんな固いこと言わないの　今はオフなんだから、マ  
マってよ・ん・で」

「とりあえず離してください」

「照れちゃって、可愛い？」

今僕は、突然やってきた師匠にハグをされている。昔から師匠は  
こういう過剰なスキンシップを僕に昼夜問わずしてくるのだ。ああ。  
せっかく癒えてきた疲労が、また溜まっていくのを感じる。

これが僕の師匠兼保護者のモーガン・ペンドラゴン。鮮やかな薔  
薇色の長髪。瞳や唇、内に秘める情熱も深紅を思わせる絶世の美女。  
師匠には武術や魔結晶エレメントの扱い、サバイバルテクニクや雑学など  
実に様々なことを教わった。保護者として僕を養ってくれているし、  
無条件で信頼をおける人物だ。尊敬はしにくいけれど……。

「いい加減離れてください。そろそろきついで」

「たっちやった？」

「僕に母親と呼んで欲しいのなら、その前からちよくちよく挟む下  
ネタトークをなんとかしてくれませんかね！」

「誰がいつ下ネタなんて言ったのよ？　まあ、思春期なんだから。  
イ・ケ・ナ・イ・子」

思わずキレそうになる自分を必死に押さえる。キレたところで師  
匠には敵かないませんし、保護者でもある女性に手をあげるのは極力避

けたい。こんなスキンシップを取る保護者も嫌ですが。

「……………(ジーツ)」

そして、先ほどから玄関の扉の一步手前に居て、僕と僕に抱きついている師匠を凝視しているこの少女はいったい誰なのでしょう？  
綺麗で輝くような銀髪を二つに纏め、顔のパーツ一つ一つがとても綺麗に整っている顔立ち。黒と白を貴重とした、フリルの多くついたあまり見ない服を着ています。僕は初めてですが、師匠の知り合いでしょうか。わからないので聞いてみます。

「あの、師匠。先ほどからそこにいる少女は誰なのですか？」

「うん？ ああ、そっか。ユーちゃんはリツちゃんのこと知らないか。ごめんね、リツちゃん。よし、一緒にユーちゃんとイチャイチャしようっ」

「ちょっと、待ってくださいー！」

「は、はいっ」

「あなたも待ってくださいー！」

師匠の言葉でそれまでじっとしていた少女が、靴を綺麗に脱ぎ(師匠はヒールを履いたまま)僕の後ろにまわると師匠と同じように抱きついてきました!?

「ちょ、ちょっと、離してくださいよ！」

「クンクン。あー、ユーちゃんの匂い〜」

「暖かい……………」

離すどころか、自身の体を押し付けるようにより強く僕を抱きしめる。

匂いが…………、吐息が…………、伝わる熱が僕の頭を麻痺させていく

。(二人とも、柔らかい……。恋華さんや玲さんも柔らかかったですが、師匠とこの少女は発育がすごいことに　　って、何考えてるんですか、僕は!?)

その後師匠達は僕がトイレに行きたい(嘘)と言い出すまで開放してくれませんでした。

2

僕はあまりもので作ったお好み焼きを師匠とリツちゃん(仮)さんにふるまった。師匠が小腹がすいたと言い出したので作ったのだ。リビングとして機能してある部屋に二人を案内し、テーブルにお好み焼きとソースを並べ師匠達を座らした。

「こんな物しか出せませんが」

「いいの、いいの。ユーちゃんの手作りなんだから、なんだって美味しいわよ。いっただきま〜す」

「いただきます」

「どうぞ」

たいして特別な具など入っていないけど、美味しそうに箸を進める二人。師匠は知っていましたが、外見から日本人ではないリツちゃん(仮)さんが箸の使い方に長けているのには少し驚きでした。

まあ、嬉しそうに食べたからって、質問の手を緩める気はありませんが。

食べ終わった頃を見計らい、二人に聞いてみることにしました。

「ところで、その銀髪のお嬢さんはいったい誰なんです？」

「ユーちゃんの許嫁だよ」

「歯を食い縛ってください」

「グー！？ D.V.!? ドメスティックバイオレンス!? ごめん

ごめん冗談。この子はあなたのもうとよ」

「もう一度言います。歯を食い縛ってください」

「いや、これは本当よっ。ほら、リッちゃん。自己紹介して」

「はじめまして。私はリリス・ペンドラゴンって言います。よろしくお願いします」

「いえ、こちらこそ。僕の名前は森羅悠夜。名の意は森羅万象（全て）の悠き夜となります」

「あっ、本当だ。モーガン様の言った通り長ったらしい自己紹介ですね」

「……あなたはリリスさんに何を言ったんです？」

「睨まないでよ。そんな風に見つめられてもママは興奮しないぞ」

「……………」

「姓が師匠と一緒にということは、師匠を保護者とする僕とリリスさんは一応兄妹ということになるのでしょうか。」

「リリスさんは戸籍上僕の義妹と言ったことであってるんですね？」

「そうよ。ユーちゃんもちょうど欲しかったでしょ、自分の色に自由に染めれる女の子が？」

「あなたは僕を変態扱いしたいんですか!？」

「わたし、がんばるっ」

「頑張らないでください。お願いしますから」

「いつも師匠を相手にするのより、二倍は疲れる気がします。リリスさん、まるで本当の母娘のように師匠とそっくりだ。きつと悪い

影響を受けたんですね。

「ところで、ユーちゃん。学校生活はどう？　楽しい？」

「反対してます？」

「まさか。今でも忘れられないわよ。ユーちゃんが私に通話してコル高校に通うことになりました」って聞かされた時は本当に嬉しかったわ。私思わず溜まりに溜まった仕事をほっばいて、ユーちゃんに会いに行こうとしたもん。残念ながら止められたけど」

「止める側は実に妥当な判断ですね。仕事を溜める方が悪いですよ」

「ユーちゃんも溜まってるでしょ」

「何が、とは聞きませんからね」

「何が溜まってるの？」

「リリスさんも僕に聞かないでください」

「それはね」

「師匠も答ええないっ」

「友達はできた？」

「また鋭い角度から無理やり話しを変えてきましたね。……友達という定義はまだわかりませんが、今のところ五人、いや先輩を入れて六人ですね」

トモダチ。

そう言われて真っ先に浮かんだのは、今日一緒に魔装具を造った六人の弟子たちでした。

「　　そっか」

師匠は対面に座る僕に手を伸ばすと、髪の毛をすくように頭を撫でる。その顔には安堵と思いやりの表情が浮かんでいた。

「……その六人はいつまでも友達と呼べるかはわかりませんからね」



「いいんじゃない。それでも、ユーちゃんは楽しいんでしょ？　じやなかったら、さっきの質問は無視するか一蹴してろくに答えないはずだもの」

さすがと言うべきか、師匠はやっぱり僕のことを良く理解している。この世で一番の理解者なのかもしれない。

「では、師匠。僕も質問していいですか？」  
「うん。まあ、ユーちゃんも聞きたいけどまだあるだろうしね」

リリスさんを見る。視線を感じ、リリスさんが頬を何故か染めましたが今は無視します。

玲さんに恋華さんや冬空先輩。

三人とも、鼻肩目に見てもどれも綺麗な顔立ちの少女たち。リリスさんもそんな彼女たちに負けず劣らず、まるで西洋人形を思わせる造形の美少女。

そう、その美しさはまるで、人工的に美を追求されて作られた精巧な人形のようにで

「あなた、<sup>アンドロイド</sup>機巧人形ですね？」

僕は宣告するように言うと、リリスさんは驚きと困惑を混ぜたような表情をしました。

「さすがね、ユーちゃん。希代の科学者、森羅将矢<sup>しんら</sup>の忘れ型見……」  
「いえ、最初は気付きませんでしたけど、少したって時間経過と共にわかってきました」

「どうして」

「僕があなたの正体を見破ったか、ですか？　科学者というのは、この世の理　魔法から逸脱した存在。同じ『歪み』を見つけるの

は possible の範囲内ですよ」

「じゃあ、ユウヤさんも？」

「科学者です」

「違うわ」

「????」

師匠と僕が同時に口を開いたので、リリスさんは頭に疑問符を浮かべてしまいました。

「……まあ、僕が科学者であるかはいは置いておいて、師匠はどこでリリスさんと出会ったんです？」

「ちよろつと目障りな科学者集団がいたから潰した時に奇跡的な出逢いを果たしたんだよ」

「その様子だと『過激派』の連中っぽいですね」

「うん、そうみたい。潰した時にいっぱい武器見つけたし。でも良かったわ、研究所ごと壊さないでちゃんと中に入って壊して。多分リツちゃんごと破壊してたもん」

師匠は能天気に言いますが、全然笑えません。師匠がその気になれば、地形を変えてしまうことだって可能なのだ。

「しかし、なくなった組織に興味はありませんが、実に良くリリスさんを産み出しましたね。ここまで人間に近いアンドロイドは僕も見ることがありませんよ」

「私は愛玩用と戦闘用を兼任して造られたから……」  
「なるほど。中身は重火器の塊ですか」

「ま、そういうわけで、廃棄したり倉庫に閉じ込めておくのも可哀想だし、あたしが娘として引き取ることにしたの。それよりどう、このメイド服？ 私の手作りなのよ。愛玩用ならやっぱりメイドよね？ オーダーメイドのメイド服。どう？」

「笑えません」

「冷たいな。あ、冷たいついでにお茶持ってきて」  
「わかりました」

空となった皿をついでに台所へ持っていく、三人分のお茶を煎れ  
師匠のところへ持っていく。……リリスさんは紅茶の方がいいです  
かね？ ありませんが。

「師匠、お茶持ってきましたよ………」

扉を開け絶句。

そこには酔っぱらいとなった師匠とおろおろしているリリスさん  
がいた。

今すぐ逃げだせば良かったものの、過去のトラウマがフラッシュ  
バックし体が固まってしまった。

床に散らばる何本もの酒瓶

部屋の家具は嵐が通った後のように悲惨なことに

無敵の使徒と化したスキンシップ200%オーバーの師匠

(に、逃げなくちゃっ！！！)

「ユウちゃん。どこに行くのかな？」

「うわっ」

急いでヒターンするも、伸びた薔薇色の髪の毛が僕の手足を拘束  
され抵抗も出来ずに師匠の前へと連れてこられた。

( 毎度思つんですけど、なんか軟体動物に補食されてるようになし  
か  
思えないんですよ、これ。もしくは妖怪、毛嬢楼 )

「こらー、今失礼なこと考えたでしょう？ ママにはわかるんだか  
らね〜」

「離してください!」

「や〜だ〜よ〜」

師匠は無類の酒好きで、しかも酒癖がとても悪い。ものすごい量  
を飲まなければ酔わないので大半の人は知らないが、家へ帰ってき  
り祝いの日は無礼講という大義名分の下、どこから用意したのか日  
本酒からワインまで世界中のお酒を飲みほして、酔い、僕をおもち  
やにする。

大量の酒を持ち込んでいる形跡もないし、家中どこを探しても酒  
瓶どころかチューハイの缶すら見つからなかった。

今日だって師匠は手ぶらで来たはずなのに、こうして酔っぱらっ  
ている。もう5年ほどの付き合いになるが、この人は未だにわから  
ないことが多い。僕が言えたことではありませんが。

「ちよつと〜、聞いてるの〜？ もう、ママずっと寂しかったんだ  
からね〜」

「わかりました。わかりましたので、離してくださいっ」

「や〜」

「ちよつ、どこさわってるんですか!？」

「ユ〜ちゃんのあんなところやこんなところ〜」

「セクハラで訴えますよ!？」

「むしろ近親相姦?」

「いや、僕たち血はつながってませんからねっ。というか、何をす  
る気ですか!」

「ムフフ。ユ〜ちゃんって、本当にいい体つきしてるよね〜。ハアハア」

もうやだ。

その後は師匠が泥酔による睡眠（エネルギー切れ）になるまで、必死の攻防を繰り返して、死んだように眠る師匠を引きずり僕はげっそりとながら空いた部屋へ運び二人分の布団を用意し、それまでどうしていいかわからずじっとしていたリリスさんも呼びそこで寝させた。

師匠が散らかした後片付けをし、僕はフラフラになりながら自室へと戻り敷いた布団へダイブ。

時計を見ると、夜中の二時を回っていました。夜型の僕とは言え、きつい……。

明日、というより今日が日曜日で本当に良かったと思う僕でした。

3

起床。

睡眠をとったはずなのに、昨日から今日の深夜にかけて蓄積された疲労とストレスは回復しませんでした。

（師匠といるといえるんな意味で生きた心地しないんですね）

嫌がる体に鞭を打って、台所に行き冷や水を用意。これがないと二日酔いの師匠は不機嫌になる。

「師匠、リリスさん。入りますよ」

師匠達を寝かせた和食の襖ふすまを開ける。

「お、おはよう」

「おはようございます」

もうすでにリリースさんは起床されていて、枕元に立っていました。昨日のことがあるからか、その笑顔がぎこちない。

（まあ、自分の存在を拾ってくれた人の養子とはいえいきなりあばかれたら、それはびっくりしますよね。しかも、あばいた内容がこの世界では『非常識』とされる科学ですからね）

さて、とりあえず師匠を起こし……、あれ、いない。

見れば師匠が寝ているはずの布団には、無人で枕の上には封筒に入った手紙が置いてありました。

……なんだかすごく嫌な予感がしてなりません。

「私もありました」

リリースさんは自分が持っていた封筒を見せる。僕のとはいちかわいらしい花柄がところどころあしらってありました。

「……失礼します」

僕は自分の手紙を回収し、部屋へと引き返す。

戻ってきて畳んだままの布団の上に正座し、中身を開ける。

手紙は全部で二枚。

一枚目に見えるキスマークに苛立ちを覚えつつ、黙読する。

『愛しのユーちゃん。これを読んでいるころには、もう私はあなたのそばにはいないでしょう。』

なんですか、このシリアスなで出し！？  
どうせ、僕に怒られたくないからとかに決まっています。

『これには深い理由があるんだからねっ。べ、別にユーちゃんに怒られるのが怖いとかじゃないんだからねっ。』

今度は情緒不安定者の真似事ですか。師匠はどれだけ僕をイラつかせたいんでしょうね？ 早く本題に入らないのだろうか。

いや、それよりもどうやら師匠、酔っついていなかったみたいですね。見事に騙されました。そう言えば師匠のセクハラ攻撃を防ぐのに一杯だったせいで気がまませんでした。よくよく考えると空になった酒瓶や缶がなかった気がします。僕に飲酒を薦めてこなかったです。もしかしたら、あれは全部しばいだっただけでしょうか。

『そう言えば、せっかく高校に入ったのに、お祝いしてなかったでしょ？ だからママね、プレゼントすることにしました、リリスちゃんを。』

.....  
はいはいはいはいはい！？  
いったい何言ってるやがんですか、あのアホ師匠はっ。ひ、非常識にもほどがありますよっ。

落ち着いて、僕。落ち着くんです森羅悠夜。師匠の妄言に騙されてはいけませんっ。これはきつと、面倒見て欲しいという意味に決まっています。

『いくらもらって自分の物にしたからって、エッチなことしち

やダメよ？ ちゃんとお互いに将来のこと話し合ってからね。まあ、リッチちゃんは私みたいにもものすごくスタイルいいし、我慢できなくなったらちゃんと責任とるのよ？』

.....  
絶縁しましょうか。

あろうことかいつもとの秘め事を促すような文面を養子に手紙としてよこすとは。ち、血はつながっていませんが、そういうのは駄目です、絶対っ。

ともあれ、一枚目はこれで終わっていた。二枚目にはいったいどんな内容が.....。やっぱり読まなきゃいけませんよね。

二枚目には、

『まあ、リッチちゃんは一応機巧人形としての所有権は私が持つてるんだけど、あげることだし所有権もあなたに譲るわ。インストール登録を忘れないでおいでね？』

あなたにはわかってると思うけど、リッチちゃんは世界で唯一、完成されたアンドロイドと言っても過言ではないわ。私が潰した過激派の連中が一体どんな手法でリッチちゃんを産みだしたかは知らないけど、現在の科学の裏世界、いや、魔法の表の世界をも震撼させてしまう存在なの。だから、あなたが面倒をみてあげて。

完成してるなら僕はいらないとユーちゃんは思うでしょうけど、リッチちゃんは完全ではないの。【アンドロイド】としては完成していても、【リリス・ペンドラゴン】としてはまだ不完全。言ってみれば、あの子は今とても不安定なの。

科学と人間。

その二つの間に二つの属性を持つように作られたから。あの子は迷ってる。自分がどういう存在なのかを。

だからね、あなたが手伝ってあげて。あの子が笑顔でいられるように。



ママとの約束よ、リッチちゃんのお兄さんとして、リッチちゃんのご主人様として可愛いがってあげて』

「……………はあ」

僕はため息混じりに手紙を封筒へしまい、机の中の引き出しに入れる。

(まったく。師匠は相変わらず言いたいことばかり言って……………)  
「よっ」

僕は再び自室を後にした。

4

まだ部屋にいたりリスさんは僕と同様師匠の手紙を食い入るように読んでいて、入ってきた僕の存在に気付くと急いで、というよりも慌てながら手紙を封筒にしまう。その表情はどこか照れたようにも見える。

(まあ、そんな感情を、そういうふうになるようにプログラムされているからでしょうね)

アンドロイドは完成度がどうであれ、臓器から体液、そして心までも科学の力で造りだすことを目的に生まれた存在。ヒトは魔力宿し世界によって生まれたと習う、魔法使いに対する科学者の反乱。

師匠のいうようにアンドロイドとして完成されたリスさんは心臓の鼓動から血液の流れ、高度な技術をもって内蔵される感情すら持っている。

だが、例えどんな科学力を使つたとしても、それは偽物ではない。あらかじめ作られたマニュアルにそつて、進んでいるだけに過ぎない。

「師匠の手紙、読めました？」

「う、うん。……あの一つ聞いていい？」

「どうぞ」

「あなたは、科学者なの？」

「ああ、そう言えば師匠が否定してましたね。まあ、師匠は科学者や科学を毛嫌いしてるわけではありませんが、認めていないというか僕にそんな道を進んで欲しくないんでしょうね。僕自身、魔法が使えないので科学者と名乗りたいところですが、そういうわけにもいかず、科学を扱つたり知識があるぐらいですね。もっとも、ヒトとアンドロイドを見分けることぐらい可能ですけど。まあ、自称科学者と言つたところですね」

「魔法が使えないっ？ モーガン様の話しでは、一つの例外を除いて全てのヒトは魔力を持ち魔法が使えるって」

「その一つの例外が僕なんです」

「……………」

「その師匠からの手紙にあなたの面倒を見るように頼まれました」

「！」

「それで」

僕は言い渋つていた。これは自分がやるべきことだし、そうしなければ始まらないことにはもちろん気付いています。でも浮かぶんですよ。師匠のニヤついてる顔が。

リリスさんは言葉の続きを待つように、僕の心情を探るような眼差しで僕を見る。

僕は覚悟を決め、深呼吸を一回行つたあと言葉を続けた。

「もしあなたがよろしかったら、ここに住んで僕の家族になってくれませんか？」

昨日の師匠の話しでは、僕とリリスさんは制式に義兄妹ということになる。

でもそれは師匠のしたことだ。

僕自身がリリスさんを家族と認め、向かい入れなければいけない。僕はそう師匠の手紙を読んでいるときにそう思った。

だから、実行するだけです。そう実行しただけっ。ですからこんな恥ずかしいセリフを吐くのはしょうがないというか、必然だったんですっ。

ああ、顔が熱い。きっと僕の顔は今とても赤いのでしょね。

必死に部屋にこもりたい衝動をなんとか抑え、リリスさんの反応を伺っ。

「……………ううっ」

泣いていました。  
ええええっ!?

「どうかしまたっ。やっぱり僕に何か至らなかったところか？」

「……………いの？」

「はい？」

「私でいいの？ 科学でもない、ヒトでもない私が 家族になってもいいの？」

「問題ないに決まっています。師匠も望んでいるはずですし、それに僕も家族が増えるのには賛成です」

「ありがとうございます」

まだ涙は残るものの、その表情には笑顔が戻っていました。

『君ね、森羅悠夜って子は』

『誰ですか？』

『私はモーガン・ペンドラゴン。 あなたの家族よ』

そう言っつて師匠に抱きしめられた感触は鮮明に覚えている。  
だからでしょうか。

気付けは僕はリスさんを抱きしめ、綺麗な銀髪を撫でていまし  
た。

「一つ、お願いしていい？」

「どうぞ」

「私はアンドロイド。でも、モーガン様の娘でもある。だから、このメイド服も脱げないしあなたの妹でいたい。だから、ね。あなたには、お兄ちゃんであつて私のご主人様でもいて欲しいの。ため、かな？」

「平気ですよ」

「そう、じゃあ。ご主人様、どうかこのアンドロイドを自分のものとして、インストールしてください」

「わかりました。えっと、あなたの場合どうすればいいんですか？」

アンドロイドをインストールする場合、個々によつて方法が異なる。一番ポピュラーなものは、血などから遺伝子の構造をもとに行うのだけれど、リスさんはいつたいどのような方法であればいいのでしょうか。

「……」

「……」

抱きしめていたことによる零距离だったせいもあるのでしょう。心地よい匂いとともにリリスさんの端正な顔立ちが迫ってきたと思うと、声を上げる間もなく唇を唇にふさがれた。おまけにリリスさんの舌が口内へと侵入し、僕の舌をまるで蛇がするように絡ませる。「ん、んむ、はん、んっ、ちゆる、ぷはあ。……はあはあ。インストール完了です、ご主人様」

僕は呆然としていた。こんなインストールの方法は聞いたこともないし、僕のファースト

「な、えと、その」

「あ、そうだ。ご主人様、私決めました。メイドと妹を一変にやるのはきついで、これからは私の気分で変えさせていただきます。よろしくね、お兄ちゃん」

動揺する僕とは違い、顔を赤らめつつも涼しい表情をしていたリリスさんは、今度は満面の笑みで僕に抱き着いてきました。

妹バージョンのリリスさんに全くの不意打ちで密着してしまい僕はとてもあわててしまいました。

だって数センチの差とは言え、リリスさんの方が背が高くて僕もつま先立ちではないため、彼女の豊満と表現するのに申し分ない胸が顎のあたりに

「お兄ちゃんのえっち」

「違います!!!」

「そんなこと言って、顔真っ赤だぞ ……なんなら、キスの続き、する?」

「~~~~っ。いいから離してくださいっ」

僕は無理やりにリリスさんから逃れる。

だって、上目遣いと頬を朱に染めたリリスさんとあれ以上密着していたら、何かまずいことが起きてしまいそうな気がしてならなかった。

「お兄ちゃんのイケズ」

「黙ってください。僕はこれから、ロードワークをしてきますので、留守番をお願いします。朝食を食べた後はリリスさんの日用品を買いに行きましょう」

「うん。デートだね」

「否定はしませんが肯定もしませんよ」

「私、メイド服が欲しい」

「既に着用してますよね」

そんなやりとりが有りつつ、僕は部屋へ戻りジャージに着替える。その時リリスさん（メイドVer.）が手伝うと言って僕を強引に脱がそうとしたので追い出しました。……本当に師匠そっくりですね。

冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、玄関で靴を履いているとまだメイドのままのリリスさんが出迎えのためか綺麗な姿勢で後ろに控えていました。

「いってきます」

「いってらしゃいませ。ご主人様」

呼び方はともかく、誰かに『いってらしゃいと』と言われるのは久しぶりで、思わず最初からランニングのペースを上げてしまいました。

リリスさんに何を買ってあげようか。

僕は走りながら、ずっとそんなことを考えていました。

5

『はい、もしもし?』

『あ、やつと繋がった。どこに行ってたんですか、クイーン?』

『ちよつと娘を息子にプレゼントしてきた』

『娘? もしかして、あのアンドロイドですか? あれは下手したら、科学の連中やそれを良く思わない魔法使いが襲撃するかもしれないんですよ!?!』

『大丈夫よ。ユーちゃんの実力は私が保証するわ。あなたも知っているでしょ、クラウンの強さは』

『ええ、まあ……。はあ、わかりました。では、リリース・ペンドラ。ゴンはそちらの息子さんをお願いします』

『あら、今回はすんなりオーケーしてくれたわね』

『過ぎたことですし。それに、あなたの意見であれば逆らえませんが。その変わり、帰ったら溜まった仕事をちゃんとしてもらいますからね。それじゃあつ』

『ちよつ、ちよつと。……きれちゃった。ああ、帰るの怖いな。』

道化と人形か。ねえ、ユーちゃん。

あなたは今笑ってる?』

## 第八夜 入学祝いは冥土への片道切符（後書き）

伏線（？）どおり、悠夜くんの師匠登場。義妹メイドのおまけつきで。

この二人は物語のキーマンになる予定なので、わりと詰めて書かせていただきました。読み憎かったらごめんなさい。

あと、リアルの方が立て込んでいるので、次回と人物紹介などの更新は遅れると思います。

今回も読んでいただきありがとうございます。それでは、失礼しまゝす



第九夜 日常と非日常、交わるその時生まれるものは（前書き）

今回は悠夜くんたちのプチコメディでお送りします。

間を開けた分長くなってしまったので、頑張ったのでどうぞお願いします。

後書きを読まれる方はどうか広い心でお願いします

それでは、どうぞ。

第九夜 日常と非日常、交わるその時生まれるものは

1

僕の眠りは深い。加えて、全くと言っていいほど寝返りをうつこともないので、お前の睡眠は死んだように見える、とよく言われていた。

だから、でしょうか。

「ご主人様、起きてますか？」

「……」

「どうやら、起きてませんね。とても静かですし」

「……」

「そ、それじゃあ、時間もないことですし早速」

「……」

メイドであり義妹である女の子に、布団の中を侵入されているのは。

「はあはあ。ご主人さ イタタタツッ！！！」

「おはようございます、リリースさん」

僕は息を荒げながら顔を近づけてくるメイド服の少女に朝の挨拶をする。アイアンクローのおまけつきで。

「ちよっ、ご主人様っ。酷いです、痛いんです。寝たふりするなんて〜」

「うるさいです。人の寝込みを襲うようなメイドに言われたくはあ

りません」

むかし、師匠が仕事をほっぽり出してよく家にいた頃、毎朝のよ  
うに僕の布団へ入ってくる師匠を撃退するため、どんなに深く眠っ  
ていても人の気配がすれば起きれるスキルが身についたんですね。  
師匠が（以前よりは）真面目に仕事に取り組むようになってあま  
り使わなくなりましたが、よもや高校に入学してまでこのスキルが  
役立つとは。何が起こるかわかりませんね、ほんと。

「あ、でもこれだんだん癖になりそう。      きゃっ」

手遅れにならないうちに手を離し、起き上がるのには邪魔なので、  
強引にどかし部屋から追い出す。

何故って？

着替えるために決まっています。

「さっぱりしました」

朝の鍛練後のシャワー。実に爽快です。汗は付着しているだけで  
うっとおしいですからね。

「あ、お兄ちゃん。お疲れー。朝ご飯できてるよー」

僕が鍛練とロードワークで家を留守にしている間、リリースさんが  
朝食を作ってくれていました。ちゃぶ台に並ぶ和食がとても美味し  
そうです。

茶碗にご飯をよそってくれているリリースさんの髪型はストレート  
になっています。

なんでも、僕のメイドの時はツインテール。僕の妹の時はストリートというふうに髪型を変えているようです。理由は僕にもわかりやすいというのと、その方が切り替えがしやすいからだそうです。メイドと妹。機械とヒト。二つの存在を内に抱えるからこそその決断なのでしよう。

けど、そんな髪型よりも今はリリスさんの服装が気になっていました。

昨日、リリスさんの日用品や服（メイド服以外は所持していません）を買いにいきました。けれど、今リリスさんが着ているのはメイド服でも、昨日購入した服でもなく、僕が通う國桜高校の制服でした。

「リ、リリスさん。その格好はいつたい……？（コスプレだと言ってくださいいっ）」

「あ、これ？ えへへ、実はね、ママがくれたんだよ。お兄ちゃんと一緒に高校に通っていいんだって。どう、似合うかな？」

上機嫌な様子でくると回って制服を見せるリリスさん。  
師匠、なんてことを……。

「に、似合いますよ」

わーいと素直に喜ぶリリスさんとは違い、僕は新たなトラブルの気配を強く察知し渴いた笑みを浮かべることしかできませんでした。

「ささ、そんなところにつっ立ってないで早く食べよ」

「そ、そうですね。いただきますしよ」

「いただきます」

初めて食べるリリスさんの手料理はとても美味しかったです。で

できればブルーな気持ちで食べたくはありませんでしたが。

2

「行ってきます」

「いってきます」

二人揃っての登校。

僕が鍵をかけて歩き始めると、リリスさんは自然な動きで隣に並びました。……並ぶのは歩行者の邪魔になるので僕はあまり薦めにくいですが、黙認しましょう。リリスさんもニコニコなことです。

けれど印象つてずいぶん変わるものですね。

最初ツインテールとメイド服の組み合わせで対面した時は、どことなく冷たい印象がありましたが、今はおろした銀髪に制服なので天真爛漫といった感じでも楽しそうです。

師匠の狙いはこういうことなのでしょうか。

「ねえねえお兄ちゃん。学校つてどんなところ？ 楽しい？」

「知らないのですか？」

「うーん。知識としてはある程度インプットされてるけど、私が本格的に起動してママに拾われたのがつい2、3ヶ月前だからあんまり世間のことかわからないんだ。だからとっても楽しみ」

確かに彼女も、僕と立場は幾分か違うとは言え、『非日常』の住人だ。

やはり『日常』での体験は新鮮そのものなのでしょう。リリスさんを拾った師匠自身、ある意味で非常識な存在ですし。

僕らは会話（主にリリスさんが僕に質問）しながら、國桜高校の

校門へと到着した。まだ桜の花弁が綺麗に舞う校舎は、たった二日しか登校していないのに何故だかとても懐かしく感じました。グラウンドでは運動部が元気に練習をしている。うちの高校は特に力を入れてるわけではないが、この周辺の地区では強い部類に入ると神薙くんが言っていたのを思い出す。

「わあー、きれー」

リリースさんは早速、桜に心を奪われているようでした。

「桜を見るのは初めてですか？」

「うん。話しには聞いてたけど、本物は初めて。へえー。この樹からさくらんぼができるんだ」

「多分できないと思います」

入学手続きをするリリースさんを職員室まで送る。これが結構精神的につらい。

いくら人があまり校舎内にいない時間帯とはいえ、人目を引くほどの美貌を持つリリースさんと一緒にいるのは正直精神的に辛い。教室で玲さんひなや恋華さんれんかという時は、『二人きり』という状況ではありませんでした。いまさらながら、女性に免疫がないことを痛感する。

職員室に到着し、ここからは別行動。少し肩の荷が軽くなった気がしたのは内緒です。

「それでは、僕は失礼します」

「お兄ちゃん。お兄ちゃん」

「はい？」

安心して油断していたのもありました。

呼ばれて振り返ったとたん、リリスさんは僕の顔を固定しあろう  
ことがキ、キスしてきました。

(!!!)

突如の事態に驚き、柔らかな唇に意識が朦朧としてきました。  
唇をふさがれて十秒ほど僕は解放されました。

「じゃあ、お兄ちゃん。いつてきます」

輝くような笑顔でそう言つと、元気良く『失礼します』といつて  
職員室に入る。

僕はそんな光景を呆然と眺め、やがてゆっくりと自分の教室へと  
足を運びました。

(無邪気な分、師匠よりもたちが悪いっ！)

「悠夜<sup>ゆうや</sup>くん、おはよう。あれ、どうしたの。なんか元気ないよ？」  
「おはようございます。ちょっと疲れました」

やはりクラスの中で一番速い出席。入学式同様、玲さんもずっと  
二番目です。

「もしかして、寝不足？ 実は私もなんだ。悠夜<sup>ゆうや</sup>くんに魔装具を造  
ってもらったから、ついつい練習しちゃって」

土曜日は魔装具を造って解散したが、管理の仕方や個別のアドバ  
イスは各々に言ったので実践したのでしょうか。

「ねえ、悠夜くん。あんなことって、いったい誰に教わるの？ もしかして独学？」

「いいえ。違いますよ。師匠がいるので、その人から教わったんです」

「へえー。悠夜くんの師匠か。じゃあ、私たちにとっては大師匠だね」

「そうなります」

「ねえ、どんな人なの？ 私会ってみたいな」

「一言で言えば騒がしい人ですかね（師匠とみんなを合わせるのは絶対回避しなくては）」

「そうなんだ。なんだか意外だな。もっと寡黙そうな人かと思った。長い髭でもはやしてそうな」

「寡黙というものにかげ離れてますからね、師匠は。髭もはえていませんし」

「というか、女性です。」

これ以上師匠のことを追求されて、特定されてしまうような情報が漏れないかひやひやしていました。が質問は終わり、変わりに無言で歩みよると玲さんは僕の首筋に顔を近付けてきました。

玲さんの突然の行動と香ってきた甘い匂いに鼓動がはね上がり、身体中が熱くなりました。

「メスの匂いがする」

けれどその熱も一瞬で引き、玲さんのいつもより低いトーンに背筋が凍りました。おまけに腹部には何か固い感触。先端が尖っているように思えるのは、気のせいだと信じたい。

「この匂い、恋華とも冬空先輩とも違うよね？ ねえ、誰なの？」

「は、母親です。昨日突然僕の借り住まいにやってきたんですよ。」



た、多分匂いとやらはその時についたのではないのでしょうか。いえ、きつとそうですっ」

メス。

そう言われて脳裏に浮かんだのは、手術に使う医療道具ではなくリリースさんの顔だった。

リリースさんの名前を出せば100%とまずいことになるかと直感した僕は、嘘とも真実とも言えない証言を口にしていった。

「なんだ、そうだったんだ。もー、余計な心配しちゃったよ。悠夜くんのお母さんって、どんな人。お母さんにも会ってみたいな」  
「騒がしい人です。それと仕事があるとかで、今朝早くに帰りました」

帰った本当の理由はわかりませんが、師匠のことですし仕事が多まっているのは間違いないでしょう。

「そうなんだ、残念。お母さんって若い？」

「そうですが。どうかしました？」

「ううん。ただね、匂いがちょっと 若い人のものに思えたから」

ギクリ。

リリースさんは確かに若い。若すぎる。見た目こそ僕や玲さんこそ変わりませんが、稼働してからの時間は一年もないでしょう。

もし、匂いの元がリリースさんとわかったら、僕はどうなってしまうんでしょう。

「確かに、若いかもしれませんね。僕、ししよ 母さんに拾われた身ですし」

「あっ、そうなんだ……。えっと、そのごめんなさい」

「ああ、いえ。お気になさらず。まあし　母さんとは楽しくやっていますし」

確かに師匠は迷惑な性格の持ち主だ。でも、師匠のおかげで救われたのも事実だ。

師匠と出会わなければ。想像はしたくない。きっと今よりも泥沼の道を歩んでいくことになっただろう。

玲さんがそつと僕から離れていく。

「……悠夜くんってさ、すごいよね。辛い境遇の中に居ても強くて優しくて」

「そうでもありませんよ。僕がそんなふうに見えたのなら、それは幻想です。不幸に慣れてしまっただけですよ。

それに、悪いことばかりではありません」

「どんなこと？」

「秘密です」

玲さんは『イジワル』と言って微笑む。

だって言えませんよ。

皆さんに会えたことで僕の日々は少しましになりました、なんて。

3

「なんだ森羅<sup>もりあみ</sup>。まだ生きていたのか？」

「担任のセリフとは思えませんね」

「だってそうだろう。冬空はこの学校、いや、アストラルでも屈指の魔法使いだ。それと戦って敗北したからって、生きてるとは喜ばしいことだぞ」

「そんなのはわかりきっているので、早くホームルームを行ってく

ださい」

よりもよって魔術決闘フェーデの話題を持ちだすとは。

クラスメイトのみなさんも僕が冬空先輩にフェーデに負けたことはわかってるし、フェーデ前日以上に聞きたいオーラを出す中、狸寝入りをして我慢していたのにここで口にするとは。……この人本当に教師なのでしょうか。

「まあまあ、そう言うな。今日はホームルームをする前に、新しい仲間を紹介しよう。このクラスに 転校生がやってくる!!!ん、どうした森羅。まるで青酸カリでも飲んだみたいに顔が真っ青だぞ」

「いえ、お気になさらず」

……リリスさんが制服着た時からする嫌な予感が、今最高潮に高まって脳に危険信号を出している。

いや、そんなあり得ませんよ。いくら入学式一週間で転校生が珍しいからって、リリスさんの他にもいる可能性は十分にある。いや、ある。絶対にあるっ。あるのですから、これ以上僕にトラブルや不幸はいらない

「んじゃ、サクツと自己紹介しちゃって」

「はじめまして。私はリリス・ペンドラゴンって言います」

「さようなら。早退しますっ」

「落ち着け悠夜っ。まだ朝のホームルームだぞっ」

「というか、なぜ窓から出て行こうとするんスかっ。ここ4階ツスよー」

あともう少しで出口(窓)を通れたというのに、かんなき神薙かりしばさんと刈柴

くんに押さえられ失敗に終わる。

「離してください!」

「とりあえず何かあったか話せよ」

「時間が惜しいので無理です」

「ちよつ、そんな暴れちゃ駄目ツスよ……………ひっ」

突然二人の拘束が解け、足を踏み出そうとするが 見てしまった。同時に気付いてしまった。神薙くんと刈柴くんが縮み震えあがっている理由が。

「ねえ、悠夜くん。どこいくの？ 悠夜くんについてた匂いがあるメスの匂いと一緒なんだけど、いったいどういうこと？ 教えて欲しいな？ もちろん、二人きりで」

右手に包丁、左手に五寸釘を持った玲さんがゆっくりとまるで亡霊のように歩いてきました。

「…………理由、わかっていただきました？」

「…………これ以上ないくらい明確に」

「…………止めて本当に申し訳なかったツス」

「…………というわけで本当にさようならっ」

二人きりになったらあの包丁と長い釘でいったい何をされるのでしょうか。…………考えたくもありませんが。流血沙汰になるのは目に見えています。

命、というより自分の身が惜しい僕は障害もなくなつてので生存本能を最大限に利用し、この教室（魔城）から脱出を試みる。

窓まであと一步 けれど、通ろうとした瞬間まるで強い力で押されたようにバンツと窓がしまった。…………あのまま進んでたら、僕

の首飛んでましたね。

古い処刑のような形で死なずにすんで思わず安心しましたが、また強烈な寒気が。

振り返ればそこには、綺麗な鉄扇を持った恋華さんが影があるというか、とても恐ろしいものを内に秘めた女夜叉といった雰囲気をかもし出していました。

「駄目ですわ、そんなところから出ようとしては。それよりも、玲さんが言っていた『匂い』がなんとやらと言っの、私も非常に興味があるので、話してくださいますわよね？」

恋華さんも加わり、僕の死亡率はさらに上がってしまいました。いったい僕はどこで選択肢を間違えてしまったのでしょうか。

神薙くんたち一般人は自分らに被害が及ばないように、教室の隅へ隅へと避難していった。無理なのはわかってはいますが、誰か一人ぐらい助けてくれてもいいのでは。

「とりあえず悠夜くんには」

「痛い目にあっていたくださましようね」

「ちよっ、僕の意味やその他もろもろは!？」

「覚悟!」

「問答無用ですわ!」

投擲された鈍く光る包丁に、扇を振るうことで放たれた魔法は、的確に僕を狙う。回避しようとするも、金縛りにあったように体が動かなかつた。

刃物が僕に突き刺さり、鎌鼬かまいたちとなった風が肉をえぐるうとした瞬間、

「だ、め」

目の前が一瞬ぶれたかと思うと、リリスさんが出現。危ないと叫ぼうとしましたが、それは無用でした。

リリスさんは飛来する包丁を避けるでもなく人差し指と中指を使って真剣白羽取りをし、持っていた学生鞆を横に振ることで風を打ち消した。

自分の技を無効化された二人はもちろん、クラス全員が優雅に攻撃をさばいたリリスさんを見ながらポカーンと固まってしまった。もちろん僕も。

そしてクラス中の視線をかつさらったリリスさんは、まるで飽きたオモチャのような扱いで包丁と鞆を床に投げると、

「お兄ちゃん」

くるつと一回転。そのまま僕を抱きしめました。って、ちょっと離してください、みんな見てますから。

「え、悠夜くんが お兄ちゃん!？」

「お前外人の妹がいたのかっ」

「私の魔法が鞆なんかで……」

「転校生は妹キタニヤー……!!!」

「てか、妹さんスゴすぎッス」

『森羅いいいいいい!!!』

個人個人の感想や、男子の叫びがちらほら。ああ、やっぱりこんな展開になるんですね。

その後は一時間目担当の五十嵐先生いかりが教室に来るまで、騒ぎは収まらなかった。え、担任の瀬野先生せのはどうしたって？ あの人は僕が窓から脱出しようとした直後にエスケープですよ（怒）

昼休み。

それは途中休憩を挟みながらも約4時間の授業を終えた生徒たちの憩いの時。

なのに、そのはずなのに

「食堂で食べてきたら？ リリスさんは知らないと思うけど、あそこって料理とても美味しいよ」

「私はお兄ちゃんと食べるから平気だよ」

「その悠夜さんが嫌がってますわよ。ねえ、悠夜さん？」

「は、ははは」

昼休みになっても平穩はありませんでした。僕はどこに行っても休まることはないのでしょうか。

四時間目が終わり僕たちはいつものメンバーにリリスさんを加えた六人で昼食を食べようとしたのですが、入学二日目の時のように暗雲が立ち込めてしまいました。

一時間目終了後クラスの半分以上はリリスさんの机（僕の隣）に集まり質問。残りもリリスさんが兄と慕う僕にこれまた質問。正直とても疲れました。僕は質問のほとんどを義務的にこなしましたが、リリスさんがいらぬことを口にしないかとても冷や冷やししながら見ていました。事実、僕とリリスさんが同じ住まいと知られた時はクラスのほとんどの男子や玲さんたちに追いかけられました。……シャーペンって本当に壁に刺さるんですね。本の中のフィクションかと思っていました。

そんな地獄とも言っている午前をすごし、美味しい昼食を食べようとしたのにまたこの三人は……。元気ですね、ほんと。

「すげー。俺あの三人から黒いオーラが見えるツス」

「女が三人いれば姦<sup>かしま</sup>しいって言うけど、あいつらの場合は魔法大戦争が起こつてもおかしくないニヤ」

「俺、女には気をつけよう」

「のんきなことを言っていないで、この場をどうにかしてくださいよ」

「それを俺らに言うか。むしろお前しかいないだろ、状況を打破できるのは」

「選択肢を間違えれば一気にデッドエンドまっしぐらだけどニヤ」

「だから嫌なんですよ」

「大丈夫ニヤ。主人公は死亡フラグを立てても、すぐにリバースするからニヤ。安心して逝つてこい」

「ちよつ、背中押さないでくださいっ」

「それより速いとこ飯食べないツスか。俺もうペコペコツス」

「そうしたいのはやまやまですが、僕の弁当はリリースさんが持つてるんですよ」

「ファイト」

「じゃあニヤ」

「応援してるツス」

「どこ行くんです？ 逃がしませんよ」

「離せーっ。俺らまで飯食べなくなるだろ」

「皆さんにだけ美味しい思いはさせません」

「ああ、昼飯なだけに」

「うーん、いまいちツスね」

「別に狙ってやっているわけではありませんから。あー、それにしてもお腹減りましたね」

「ん、お兄ちゃんお腹減つてたの？ はい、お弁当」

僕から漏れた一言で静かに睨み合っていたリリースさんが、自分の鞆から二つの弁当箱を取り出した。



普通サイズの。

「お、お兄ちゃんどうしたの？　なんで床に手をつけてうなだれるの？」

「昼食、僕の昼食が……」

弁当も自分が用意するからと言っていたのでリリースさんに頼んだのですが、僕お気に入りの重箱ではなくリリースさん用に買った弁当箱両方を使うとは……。

「ちっちゃ。ニヤるほど。ペンドラゴン。悠夜はいつも弁当に重箱を使ってるんだニヤ。多分これじゃ、少ないニヤ」

「悠夜さんのお弁当、少なく見積もっても三人分ですものね」

「えー！　確かにご飯を一気に六杯もおかわりした時は成長期だなあとは思ってたけど……。うう、お兄ちゃん、ごめんなさい」

「いえ、用意していただけでも嬉しいですよ」

「わーい〜（＾o＾）ノ」

「こらっ、悠夜くんに抱き付かないっ」

「たくしよーがねえニヤ。よし、俺のおかず一つあげるニヤ」

「あ、じゃあ俺もあげるッス」

「貸し一つな」

「私のも食べてください」

「それなら私もあげちゃお」

「私を食べて」

「リリースさん、学校ではおかしなこと言わないように。皆さん  
ありがとうございます。では、食堂にいきましょう」

「は？　おいおいおい。俺らの話し聞いてたか」

「だって、皆さんから一品ずつもらったとしても足りませんよ」

「どれだけ胃袋ブラックホール!？」

神薙くんの言葉は無視して、食堂へ歩きだす。楽しみですねえ、はじめてですし。

5

うちの学校の食堂はとにかく広い。食堂というより大型のレストランと言った方がしっくりくる。それぐらい広い。正確な席数はわからないが、國桜高校の全ての生徒が入っても席が余ると思われる。一説によれば、扉には転移魔法が使われているとかないとか。まあ、確証はないが。

食堂は持ち込みオーケーで、弁当派の人もここで食べられるようになってる。また、メニューも豊富で他の学校よりも数が少ないとは言え外国人の生徒にも幅広く対応している。

大地（俺）も亮りょうに誘われて一回来たことがあるが、その時たべたカルボナーラはとても美味しかった。

209

「え、リリスちゃんと悠夜くんって一昨日はじめて会ったの？」  
「うん。正確には一昨日の夜中。ママと一緒にアストラルへ来たんだ」

「そう言えば悠夜とペンドラゴンは何で名字違うんスか？」

「それは私にもよくわからない。多分ママの考えだと思う。あ、私のことはリリスでいいよ」

「そうツスカ。じゃあ俺も大地だいちで構わないツス」

「にしても、悠夜は本当に羨ましいニャー。ただでさえフラグを乱立させてるのに、こんなかわいいデレデレの妹が居るなんて。世の中不公平だニャ」

「何言ってるんだ。お前にだって妹の奏かなでちゃんがいるじゃないか」

「ニャー！ ここで、奏のこと言うニャー！」

「それは初耳ですわね。どんな方ですの、その奏と言う人は」

「うーん、元気はつらつと言ったところかな。ちなみに響はアストラルに来る前、奏の尻にしかれた生活を送っていた」

「……なるほど、だから『萌え』とかに走ったんだ」

「ちよつ、やめるニヤ月弦。そんな残念な存在を見る目を向けるのはっ」

「響も苦勞してたんすね」

「今度は暖かい目つ。うう、どっちにしるハートが痛いニヤ」

「にしても、悠夜さんも遅いですわね。それほど混んでいるわけでもありませんのに」

「そうツスね」

俺らは各々の昼食のテーブルに広げ、雑談を交えながら食事をしている。ちなみに悠夜は一応俺らのおかずをもらいつつリリースちゃんの用意した弁当を完食したのだが、足りないと言って注文しに行った。……彼の辞書に『満腹』という言葉はあるんすかね。

「今日はやけに賑やかだと思ったら、お前らだったか」

「あ、冬空先輩。こんにちはツス」

トレイに乗った蕎麦を持ちながらこっちへやって来たのは、この学校の生徒会長にして悠夜の一番弟子にあたる冬空美姫先輩だった。

「あら、冬空先輩も学食でしたの。なんだか意外ですわね」

「料理はできなくはないが、忙しい時はどうしてもな。席、いいか？」

「構わないニヤー」

「私の隣どうぞ」

「ありがとう、月弦。さて、私もいたどころ」

こうして冬空先輩も一緒に食べることになったが、余裕のある多

人数用のテーブルに陣取っていたので別に積めたりもしなかった。

「ん、この銀髪の少女は？」

「リリス・ペンドラゴンって言います。よろしくお願いします」

「この子、今日転校してきたんですの」

「ああ、お婆様が言っていた転校生か。初めまして、私は冬空美姫。ここに居る者たちの先輩にあたる。……ペンドラゴン？ はて、どこかで聞いた名だな」

「リリスちゃんって、悠夜さんと兄妹なんですよ」

「確か……なに？ 森羅と。……腹違いか」

「まあ、そんなところですね。でも、私がお兄ちゃんの妹であることには変わらない！」

「ハハハ。愛されてるようだな、森羅のやつは。で、肝心の森羅はどうした？ 見当たらないが」

「悠夜なら食い物取りに行ったから、もうそろそろ来ると…………お、噂をすれば」

亮が話し途中で絶句、固まってしまったので俺も亮の目線へと顔を向ける。そして、亮同様絶句してしまった。

俺らの、いや食堂中の人の目が静かにやってきた悠夜に釘付けになる。

悠夜は右手と左手にそれぞれ、どんぶりを乗せたトレイを持っていた。それだけならまだわかる。俺にだって、難しいとは思いつけどできなくはない。でも、トレイは二つだけではなかった。

頭の上。悠夜はそこに絶妙なバランス感覚で、第三のトレイを頭に乗せていた。もう修行か何かにはしか、見えない。しかもその状態でスタスタ歩くもんだから、すごいとしか言いようがない。……悠夜って、仙人かなんかスかね。そんな感想が頭をよぎる。

「お待たせしました。さすがに三品は時間がかかってしまいました」

あまりの衝撃映像に言葉が出ない俺らをよそに悠夜はテーブルの前まで来ると、綺麗な姿勢のまま膝だけを曲げて手の位置をテーブルに合わせ滑らすように両手のトレイを置く。そして仕上げとばかりに、まるで王冠をとるように頭の上にあるトレイを持ち静かにテーブルへと置いた。

俺らだけでなく、食堂中の人に関心し安堵の表情を浮かべ、拍手をする人もいた。

『スゲーなあいつ。曲芸師とかに向いてるんじゃない？』 『あれ一人で食べるのか』 『にしてもあの一年、どっかで見た気が……』 『あ、森羅悠夜だよ。ほら、生徒会長と戦った』 『へえー、あの子が……』 『……こうして見ると結構いけるかも』 『てか生徒会長と飯食ってるぞ。あの二人って知り合い？』

「なんだか騒がしいですね。まったく、食事ぐらい静かにすればいいものを」

いや、悠夜のせいツスよ！ とは言えなかった。

リリースちゃんの衝撃的な登場ですっかり忘れていたけど、悠夜は先日の魔術決闘フェイテのせいでも有名になっている。魔法に長けた冬空先輩に健闘し、その対戦相手と食事をしてるとなれば話題にはなるだろう。

そんな悠夜は周りに大した反応も見せず、食事を始める。どんぶりの中身は天井にカツ丼、鉄火丼だった。しかも大盛り。よく噛みすごいスピードでたிரらげる。今度はその姿に視線が集まる。本当に、冗談みたいな食生活ツスね。

「そ、そうだ。せっかくだし、リリースちゃんの歓迎会やろうぜ」

「ああ、いいニヤそれ。やろうぜ！」

「確かに名案ですわね。楽しそうですし」

「え、でも……。いいの？」

「何言ってるんすか。いいに決まってるッスよ」

「お兄ちゃん……」

「まあ、誰かの迷惑にならないければ、問題無いと思います」

「うん。ありがとう」

「私も参加していいか？」

「もちろん。よし、料理部で磨いた腕見せちゃお」

「清々しい笑顔と一緒に包丁を出さないでください。でも、玲さんたちは部活があるのでは？」

「あ、確かに」

「こういうのはどうでしょうか？ 部活動に所属していない僕とリスさんが先に帰り会場を準備。あなた方は部活が終了しだい、食材を何品か持ち寄りこちらへ向かう。会場は僕の家でいかがですか？」

「いいと思うッスよ」

「では、皆さんそういうことで」

こうして悠夜の家開催、リスちゃんの歓迎パーティーが決まった。

その後は楽しい食事を済ませ昼休み終了の放送が流れる前に冬空先輩と別れた。悠夜がみんなに住所を教えるの、もちろん忘れずに。

「なんだか楽しくなりそうッスね」

俺は廊下歩きながら、そう呟いていた。

**第十夜 宴は始まる前から慌ただしく（前書き）**

まずはお詫びを。

第九夜の後書きでしたが失敗してしまい、伝助の都合で消しました。誠に申し訳ございません。

今度は失敗しないようにします、はい。

本編は前回引っ張って終わったパーティー偏です。

それでは、どうぞ。

## 第十夜 宴は始まる前から慌ただしく

1

「あの、私も手伝った方が……」  
「気にしないでください。準備は僕に任せて、リリースさんはのんびりしててください」  
「……でも」

今は神薙かんなぎくんが考案したリリースさん歓迎会の準備中。

食材は後から来る神薙くんたちが持ち寄ることになっていますが、米を炊いておいたり家の掃除や飾り付け等やることは少なくない。

リリースさんはそんな僕を見ながら、不満そうだ。あれですかね。制服ではなくメイド服とツインテール状態ですから、給仕とかそういうのをしたいのかもしれないね。

確かにリリースさんの家事スキルはとても高い。けど、だからと言ってこれから行われるパーティーの主役を働かせるのはいけないと言っ考えに至りこうして説得しているのですが、一向に承諾してくれません。

「やっぱり私も何か手伝います。ご主人様だけに仕事をさせるわけにはいきません！」

「そんなにメイドとして今の時間を過ごすのが嫌でしたら、私服に着替えて義妹のリリースさんになればいいじゃないですか？」

本人がどんな基準で、メイドと義妹の区別をつけているかわかりませんが。



「わかりました！　じゃあこのメイド服　脱ぎます！」  
「ちよつ、ここで脱がないでくださいっ！」

突然、まるでそれが己の持つ使命と言わんばかりに脱衣をするリリースさん。着替えるのはとても賛成ですが、それは自分の部屋でしてくださいっ。

この時僕は選択を誤ってしまった。

リリースさんの生着替えに対して、目を背けるか自分の部屋へと逃げれば良かった。

けれどリリースさんの突飛とっぴな行動にひどく動転してしまい、僕は半脱ぎ状態となったりリリースさんに駆け寄って手を取りそれを阻止しようとする。リリースさんの動きを封じることには成功したけど、勢い余ったせいか僕とリリースさんのバランスが崩れてしまい床に倒れてしまった。最悪な形で。

「きゃっ」

「わっ、ととっ」

必死の踏ん張りも効果なく、二人して床に折り重なる。そう、僕はリリースさんを不可抗力とは言え押し倒していた。

え、えーとどうしてこうなってしまったんでしょう。確か、

家の掃除中にリリースさんとプチ口論　僕がメイドから義妹になることを提案　その場で服を脱ぎだすリリースさん　それを止めようとする僕　僕、リリースさんを押し倒す

.....。

おかしい!!!　特に後半が！

何故こんなことに！？　なんでいろいろと危険な状況に！？

途中まで服を脱いでいたせいで、ところどころ白い肌があらわになっっている義妹、いやメイドを押し倒す僕（主）。

今の様子を描写すれば、これが一番的確なのだろう。

つまりこの状況は　かなりまずい。まず過ぎて客からクレームがきてしまうくらいに。

リリスさんと言えば、頬を染め息を荒げながら、

「もう、ご主人様ったら。だ・い・た・ん？」

「ち、ちちち、違いますっ。こ、これは不慮の事故でして、決してそういうわけでは……」

「そんなことをおっしゃって、私の着替えて興奮したのでしょうか？」

ご主人様って、素直じゃないんだから」

艶っぽい声で囁くと、その豊満すぎるバストを動かして僕の胸板へ擦りつける。背中に走った刺激と強く感じる甘い匂いから反射的に逃げようとするも、いつの間にかリリスさんの足が僕の腰を固定していたためできなかった。

「はあ、はあ、ご主人様あゝ」

その間もリリスさんは自分の胸を絶えまなく動かし、僕の思考を狂わせる。僕の呼吸も次第に荒くなっていき、落ち着いて息を整えることもできなくなってしまう。やがて胸の運動が終わるとリリスさんは目を閉じ、顔を僕に近付ける。

「ご主人様」

甘くこぼれた言葉、感じる鼓動。まるで体が理性を拒むように制御が効かず、リリスさんの唇が僕に触れ

リンリンッ

ようとしたところでドアベルが鳴った。

そのおかげで、僕の意識は正常レベルにまで復活。呼び鈴にリリスさんが気をとられていているすきに、急いで離れる。危ない危ない。もしあのままだったら……、やめましよう考えるのは。こうして何事もなく終わったのですから。

ジト目を向けてくるリリスさんを無視し、玄関へと向かう。だつて、ね。とてもじゃありませんが、きまずいのはごめんです。

扉を開けると、部活に出ていた六人が集合していました。

「みなさん、ようこそ。どうぞ入ってください」

「うん、ありがとう。ところで悠夜<sup>ゆうや</sup>くん、一つ聞いていい？」

「どうぞ」

「なんでリリスちゃんはメイド服なんて着てるの？ しかも服装が変に乱れてるみたいだけど……」

え？

慌て後ろを振り向く。

僕の後ろでは、玲さんの言う通りの姿でリリスさんが立っていました。した。

ギャー……！！！！

すっかり忘れた。ていうか、何故そのまま。私服に着替えてくださいよ。僕の感性がいろいろ疑われてしまっつ。

（ちよっ、何故あなたはそんな格好で玄関にいるんです！？ 誤解を受けますよ！）

（誤解もなにも、ご主人様と私の体が折り重なったのは事実ですし、それに今の私はメ・イ・ド。客人を出迎えるのは当然の理です）

行動をたしなめようとアイコンタクトを送るも、リリスさんはむしろ誉めると言わんばかりの表情。

……無邪気な分、本当にたちが悪い。

と、そこで、忘れていたわけではありませんが、背後から強烈な邪気を感じ。

勇気を振り絞り、まるで壊れたブリキ人形のようにギギギと後ろを向く。

そこにな三人の邪姫が恐ろしい笑みを浮かべて僕を見ていました。

この時、僕は身を持って『死亡フラグ』というものを体感した。痛みと一緒に。

2

「シャーシャー（包丁を研ぐ音）」

「さて森羅。何か言い残すことはあるか？」

「そこはせめて『何か言いたいことはあるか？』にして欲しいんですが……」

現在僕は和室の一つで正座させられている。この部屋には僕と玲さん、冬空先輩にリリスさんしかいない。恋華さんはリリスさんのメイド姿を見た後、『負けられませんわ……！』と言って、家へと帰ってしまった。忘れ物でもしたのでしょうか。男子三人は僕が拘束されるなり、そそくさと避難してしまった。妥当な判断ですけど、やっぱり癪ですね。

「森羅、聞いているのか？」

「すいません、現実逃避をしていました」

「そうかそうか。そんなに刀の錆びになりたいか」  
「本当にごめんなさい！」

冬空先輩の刀型魔装具『刀雪嶺斬・零式』はさつきから発動（抜刀）状態。その刃先は僕にまっすぐ向けられている。危険と言えば充分危険ですが、魔装具よりも危険なのはむしろ冬空先輩だ。だつて目が笑ってませんし。

「冬空先輩、ちょっと待って」

今にも斬りかかってきそうな迫力を内に宿す冬空先輩に待ったをかけたのは、包丁を研ぎ終えた玲さんだった。

玲さんはすっかり研がれ、もはやなんでも切れそうな包丁を脇に置くと、

「悠夜くんをお仕置きするのは……………私」

制服のポケットからアイスピックを取り出しては、並べ始めました。

わー、すごいです。凶器アイスピックがどんどん出てきます。ほら、もう二桁更新です。包丁とセットで何に使うんでしょうね。あー、わからないわかりたくない。

「ち、違うの！」

さつきまで部屋の隅でおとなしくなっていたリリースさんは声を上げ、発言をするように高らかと右手を天井へ向ける。

「ご主人様が私に服を脱ぐよう提案して、脱いでいる最中にご主人様が私を押し倒して、いい感じになってお互いの体が火照って今ま

さに18禁ストーリー開幕!、つてなつた時にドアベルが鳴つたの  
つ。だから、ご主人様と私はまだ何もしてないの!」

顔を真つ赤にしながらも、僕を庇うため口を開くりリスさん。そ  
の賢明な態度はひしひしと伝わってくるんですが、リスさんの行  
動は空回りと言うより、ボクシング中に相手選手めがけて放たれた  
パンチが審判や専属トレーナーに当たった、いわゆる『事故』に近  
い。

だって、ね?

今のご時世、未遂でも充分犯罪扱いですから。

「へ、へえー、私たちが来る前にそんな羨ま　いやらしいイベン  
トがあつたんだ……。あはは、私とは手を握るイベントすら未だに  
ないのに。嫉妬しちゃうな。嫉妬しすぎて私、おかしくなりそう」  
「森羅、貴様はそこまで死にたいのか……!」

この場合は助太刀と言うより、火に油を注ぐと言つた方がいい。  
だって、二人の怒気がまるで地獄の業火のように燃え盛っていた。  
……あはは、まずいこれは確実に五体満足ではいられない。いや、  
下手したら五臓六腑の内なにかが欠けてしまうかもしれない。

僕は必死の思いで退路を探していると、本日二度目のドアベルが  
鳴る。

まるで天国からの福音に聞こえた。

「あ、私が行つてきますね」

けれども福音は冥土の死者によって、地へと墮とされた。

仕事を見つけたからか、とても上機嫌で玄関へ向かうメイド・リ  
リスさん。僕は止めることもできずに、立ち上がりかけた姿勢のま  
ま固まってしまった。

「さて森羅」

「そろそろ逝こうか」

執行人は無情にも獲物（凶器）をそれぞれ握りながら、ジリジリと間合いを積める。畳十畳分のスペースでは逃げ回るわけにもいかず、僕はあつという間に壁へおいやられた。

刃物を持った美少女二人が今まさに斬りかかる瞬間、この部屋唯一の出口である襖が勢い良く開いた。

襖を開けたのは恋華さんだった。その隣にはリリスさんも。いつの間にか戻っていた恋華さんは、國桜高校の制服ではなく鮮やかな赤地に花柄の着物を着ている。長い髪は金色の髪留めで一つにされている。

突然の乱入者に僕だけでなく、玲さんと冬空先輩もぼかんと恋華さんを見る。

そんな僕らを見ながら満足げにフン と笑い、その場で回る。袖や髪がふわっと舞う。

「どうでしょうか、悠夜さん。私の着物、似合います?」

「は、はい。とても綺麗です」

和風な雰囲気を漂わす恋華さんの着物姿。幼いころも、恋華さんの着物姿を見たことがあります、今の方が格段に似合っていて綺麗で 思わず見惚れてしまいました。

僕の反応見て気を良くしたのか、ニヤリと笑うと隣のリリスさんに視線を移す。

「悠夜さんは私の着物姿にメロメロのようですね」

「カチンッ。……そんな色気のない格好より、ご主人様はこういうの方が興味津々ですよ」

そう言ってリリースさんは膝下ぐらいまでを隠すロングスカートを両手でつまむと、さりげなくそれでいてこちらへ見せつけるようにパタパタとスカートを動かす。黒い布地がひらひらと舞い、リリースさんの健康的な太ももが見え隠れする。危うく足の根元まで見えそうになった時は、思わず目を背けてしまった。恋華さんはそんな光景をイライラと言った様子で見ながら、

「フッフ、『色』でしか悠夜さんを釣れないあなたはそうするしかありませんわよね？ まあ、私はそんなことしなくても悠夜さんの視線を独占できますけど」

「そんなの、派手な色彩に惑わされたただけでしょ、この夜光虫。胸が小さいあなたは、カラフルにすることでしか気付いてもらえないでしょうけど」

「だ、誰が小さいですって！？ 私は日本人女性の中では大きい方ですよ」

「でも、私のと比べたら、ぺったんと思うけどな」

リリースさんは余裕のある笑みを浮かべると大きく伸びを一つ。その際、メイド服から自己主張するものが、揺れて僕の視界に入る。

「ご主人様つたら。そんなにリリースの胸が気になるんですか？

そんな熱い視線を……。もー、ご主人様つたらエッチなんですから」

「う、ごめんなさい」

直視していたつもりはありませんが、見てしまったことは事実なのでなんだか申し訳なくなってしまう。そんな僕らを冷やかな目で見ていた恋華さんは、わざとらしく手をうちわにしてあおぐと



「ふう。なんだかここ、暑いですわね」

着物をわずかに崩し、胸元を顕にした。必然的に整った谷間が見えてしまい、自分の顔が沸騰したように熱くなった。

「へー、そうなんだ、暑いんだ……。だったらその重たそうで目がチカチカする布切れを、切り刻んであげようか。少しはマシになるかもよ？」

「あなたの方こそ、その無駄に多いフリフリを全部取り去って、ただのエプロンとワンピースにしてさしあげましょうか？その脂肪の塊も削ぎ落とせば、少しは軽くなると思いますわよ」

バチバチッ

リリースさんと恋華さんは互いに笑顔を浮かべつつも、視線を交わせる。その視線が光って見えるのは、僕の気のせいですね。恋華さんの手には鉄扇、リリースさんの手には銀色で大きめの盆が握られていた。……いったいつの間に取り出しんでしょうね。

今にも一発触発といった雰囲気はどうしたもんかと考えていると

ガキンッ

すぐそばで金属が擦れるような音が聞こえた。……………絶対に高校生の部屋で聞こえていい音じゃない。

音の発生源に目を向けると玲さんと冬空先輩が、鏝迫り合いをしていた。日本刀と包丁で。というかこの二人、途中から完全に忘れていた。

「どけ。お前が邪魔で森羅が斬れない」

「違う。悠夜くんにおしおき（雄死悪鬼）するのは、私」

どうやらこの二人、どちらが先に僕を加害するかで争っているようです。

冬空先輩は魔装具を持ち鬼のような（それでも綺麗と思えるから不思議だ）笑みを浮かべ、玲さんはどういいう原理か両目を単色にし右手に包丁、左手には四本のアイスピックを器用にもっている。両者とも、完全な戦闘体制と言える。

「邪魔をするなら先輩だつて容赦はしない……！」

「やれるものならやってみろ！」

二人して一旦離れると、すぐさまお互いの獲物で斬りつけ合う。

日本刀と包丁の連撃が互いにぶつかりあって、まるで戦国時代の映像を見ているようだ。

って、何をのんきに観察してるんですか僕は！？ このままじゃ、家が半壊してしまうっ。この二人ならやりかねない。

僕は意を決して指摘することにした。

「玲さんも冬空先輩もやめてくださいっ。人の家でなにしてるんです！？ 暴れないでください！」

「わかりましたわ。なら、外へ出ます。表で決着つけますわよ」

「望むところだよ」

「いや、あなた達ではありませんからっ。あなた達も争いごとはやめてくださいっ」

「森羅どけ、危ないぞ」

「ちょっと悠夜くんは下がって。あとでちゃんと料理してあげるから」

「あなた達もです……！」

その後は、地獄だった。

外へ出て行こうとするリリスさんと恋華さんをなんとか止め、玲さんと冬空先輩の刃物合戦を死ぬ思いで仲裁し、僕の部屋でまったりとしていた男子三人を呼びだしてなんとか誤解をとき、リリスさんがメイド服を着ている理由を趣味と偽って説明しなんとか混乱と言っか混沌とした騒ぎは収まった。

約一時間半かけて。

まだパーティーの料理も作ってないのに……。

3

「さて、いろいろありましたが、いい加減パーティーの準備を始めたので、皆さんが持ち寄ってくれた食材のお披露目としましょう」

仕切り直しとばかりに、僕は全員を見回す。

リビングとして機能している部屋にみんなを呼んでいる。

僕がアストラルと学生連盟から借りているこの家は二階建てで、見た目は瓦屋根の日本風の造りだ。敷地も四十五坪弱あり寮住まいの生徒が多い中、僕は珍しい部類に入っている。玄関は北を向いていて、西東を半分にして洋室と和室がそれぞれ十部屋ずつある。洋室の中で一番広い部屋にテーブルやソファを置いてリビングのようにつるげる空間となっている。

キッチンにも近くここで食材を見て、ちゃちゃつと料理を作ろうと考えていましたが……、みなさんの荷物を見る限り不安要素はまだ消えない。

「うっしっ、じゃあ頭は俺が行ってやるぜ」

妙に意気込んで手を上げた神薙くん。

「俺がもってきたのは、これだ！」

- ・スポーツドリンク×八人分
- ・飲むゼリー（スポーツドリンク味）×八人分

「あなたはいつたい何が食べたいんですか！」

「うおっ、な、なんだ」

思わず怒鳴ってしまった。でもこれは酷い。パーティーに持ち寄る食材に何故ゼリーとジュースを選ぶのでしょうか。

「え、だって俺はいつもこんなのはっか食ってるぞ」

「……スポーツドリンクをがば飲みたからって、体力が向上するとは限りませんからね」

「うまいじゃん」

「だからと言って、他の人の食卓に普及しようと思わないでください」

なんだか最初からおかしな方向に。忘れていた。メンバーがメンバーだと言うことを。

「亮はしょうがないニヤー。ここは、俺が一発かましてやるかニヤ」

次は誰かとお互いに探り合う雰囲気の中、あまみや天宮くんが立ち上がる。その手にはスーパールの紙袋が。

「刮目せよ。俺が持って来た食材に！」

- ・ポテトチップス（コンソメ味）
- ・ポテトチップス（薄塩味）

- ・ポテトチップス（バター醤油味）
- ・ポテト（じゃがいも）×八個

「このいもマニア！」

「うまいニヤ」

「まともな食材はじゃがいもだけじゃないですかっ」

「いいだろ。このじゃがいもでポテチを作れば」

「あなたはどんだけ食べたいんですか」

「ちなみに、俺の主食はだいたいこれニヤ」

「あなた達はまず食生活を改善してください」

こんな生徒がいては、家庭科の先生も嘆くでしょうね。

「……じゃあ、次、私でいいか？」

「お願いします」

さすがに冬空先輩なら、変な方向に暴走はしないでしょ。

- ・キャベツ（大）×十五

「ベジタリアン!？」

大きな段ボールから取り出したのは大量の緑黄色野菜。一回で買う量ではありませんね。

というより、何故キャベツ。

「べ、別にいいだろう。キャベツには普段人が取れないような栄養も豊富だし、豚カツ等の影の主役とも言える。そんな材料を目の前にしてそんな反応とは、森羅お前もまだまだ未熟も」

「おっきくなるもんね」

冬空先輩の言葉を遮り、玲さんがぼそりと呟きながらニヤリと笑う。

その瞬間冬空先輩は固まってしまふ。

「あー、なるほど」

「なるほどニヤー」

「そういうことですね」

「そういうことツスね」

他もそれぞれに納得した様子。僕とリリスさんだけが頭に疑問符を浮かべました。

「どうということなんです？」

「ん、悠夜は知らなかったっけ？ キヤベツを良く食べると胸がお  
」

今度は神薙くんの言葉が遮られた。冬空先輩が魔装具を発動し、刀を鞘に入れたままおもいきり殴りつけたからだ。……日本刀を鈍器変わりに使うなんて。というか、神薙くんは無事なのでしょうか。

「無事だニヤ」

「そうですか。」

神薙くんの殴りつけた体勢のまま肩で息をしていた冬空先輩は、キツと鋭い眼光を僕に向け

「余計な詮索はするな」

「そうさせていただきます」

女子高生の目付きと言うよりは、殺人鬼のそれに近い物を感じ首を縦に振るしかありませんでした。

「じゃあ、次は私かな」

不機嫌な冬空先輩とは違い、今にも鼻歌をしそうな玲さんが大きな手提げ袋を出し中身を僕らに見せた。

「じゃじゃ〜ん」

・包丁（血塗れ）

「「「「「?!?!?!?!?!」」」」」

「あ、間違えた」

「アキラはドジッ子だね〜」

「そそっかしいやつだな」

玲さんの刃物を恐れていないリスさんと天然の疑いがある冬空先輩意外の人は、テーブルに置かれた包丁に驚き声も出ませんでした。うん、きつとトマトピューレ的なものを調理して、洗い忘れてしまったんでしょうね。きつと、いや絶対そうです。

「ごめんごめん。本当はこっち」

・下ごしらえ済みと思われる鳥の股肉×三羽分

「料理部の冷蔵庫の中にあつたの、部長に頼んでもらってきたんだ。あ、下ごしらえとかは私がやったんだよ？ ど、どうかな？」

「やはり調理に使わなければわかりませんが、見たところ充分合格

ラインに思えます」

「やったー！」

僕の評価にガッツポーズを作る玲さん。大袈裟かもしれませんが、玲さんの料理の腕は大きく上がったと言えます。

「むー、なかなかの食材を用意しつつ、自分のスキル向上を見せつけるとは……。やりますわね」

そんな玲さんの横では、口に手を添え思案げな表情の恋華さん。その隣にはクーラーボックスが。皆さんの荷物の中で一番大きいです。

「では、次は私がいかせていただきますわ。私がつけて来たのは、これです！」

- ・ 伊勢海老
- ・ キヤビア
- ・ 鮪と思われる綺麗な切身

『……………』

勢いよくオープンしたクーラーボックスの中には、スーパー等ではお目にかかれないような高級食材が。思わぬ伏兵にみんなが絶句。

「先日ちょうど屋敷の使用人から送られてきたのを用意したのですが、これで良かったかしら？」

……………そう言えば、恋華さんはどこの巨大企業の令嬢でしたね。



アストラルでも、普段からこんなものを食べているのでしょうか。一般人には年に一、二回あるかないかの食材を出したのに、いたって平然としている恋華さんはやはり『お嬢様』なのですね。

まあ、これと言ったハプニング（魔装具による暴力行為は除く）もなく、食材披露もいよいよラスト。僕としては早く作ってしまいたい。

最後はもちろん刈柴かりしばくんですが、少し様子がおかしいように思えます。口数が少ないと言うか、妙におとなしい気がします。まるで自分の気配を消すように。

「最後は刈柴くんですね。では、お願いします」

「え、えと、俺ツスカ……？ いや、俺のはいいツスよ。お腹も減ったし、早く悠夜の料理が食いたいツス」

「？ でも、食材は持って来たんですよ？ それなら、刈柴くんのも使用すれば、より良いものになると思いますよ」

「うっ。……一理あるツスけど」

遠慮、よりも何かを隠しているように思える刈柴くん。僕だけではなく、他の人も訝しげに刈柴くんを見る。そこへ、

「とっつ」

「あああつ。ちよっ、やめっ」

天宮くんが隙をみて、刈柴くんの持つ袋を取り上げ中身を開ける。

・牛挽き肉（300g）

・ニンジン

・じゃがいも

・玉ねぎ

・カレーのルー

・福神漬け

……………。  
カレー？

「し、仕方ないツスよ。何にしようか悩んでた時に、カレーのいい匂いがどこからともなくしたんスもん」

恥ずかしそうに言う、刈柴くん。

他の人達は、失望とはいかなくとも、がっかりした様子。まあ、皆さんがとても奇抜なのに対し、ラストが至って普通。少しの期待は持ちますよね。

「…………さてと、では皆さんの食材を使って料理を作ってきます。それまで時間をつぶしててください」

『はい』

「スルーって結構痛いスね…………」

刈柴くんが何か言っていました、気にしない方がいいですね、うん。

僕は自分のエプロンを装着して、キッチンへと向かう。

さあ、腕の見せどころです。

4

『いちそうさまでした』

みんなで一緒に手を合わせ食事を終わらせる。

途中からリリスさんと玲さんも手伝っていただき（じゃんけんで

決めたらしい)、作った料理は。

- ・鮪と伊勢海老とキャビアを使った高級お寿司
- ・鳥の甘辛に味付けにして焼いた物＋キャベツの千切り（全部は使いきれなかった）
- ・ポテトチップスを散りばめたグラタン
- ・カレーコロッケ
- ・ゼリーとフルーツを砂糖で煮た物<sup>デザート</sup>

……結構な量になりましたね。

「あー、美味しかったニャー。やっぱ、お前は料理の天才だニャー、悠夜。マジでスゲーよ」

「うん。本当にすごい。……私も、もつと頑張らなくちゃ」

「悠夜さん、私の専属シェフになりませんか？」

「ご主人様は私のですよ」

「け、喧嘩するなよ。あーでも確かに驚いたな。ゼリーも甘くて旨かったし」

「カレーコロッケも美味しかったツスよ……」

「皆さんありがとうございます」

やっぱり、自分の好きなものを褒めてもらうのは、とてもうれしい。

食材をそれぞれ持ち寄ったと言うのも、大きなアクセントになったのかもしれない。

食後はリリスさんとや玲さん達が質問をお互いにしたり楽しそうに談笑し、僕はそんな光景を見ながら読書をしていました。

時計の針が10時を指した頃、パーティーはお開きになった。

見送るリリスさんも、手を振りながら帰る方達もみんな終始笑顔  
を浮かべていました。

第十夜 宴は始まる前から慌ただしく（後書き）

次回では悠夜くんの過去を少し垣間見ようと思います。

感想お待ちしてます!!!

それでは、ありがとうございました。失礼します

第十一夜 地獄から見つめるこの世界（前書き）

前回述べたとおり、悠夜くんの過去について触れます

それではどうござい

## 第十一夜 地獄から見つめるこの世界

1

パーティーの後片付け。

特に装飾などもしていなかったので、皿洗いが主ですが。

「お兄ちゃん。お風呂空いたよ」

リリースさんはメイドではなく義妹状態ですがやはり手伝わすわけにもいかず、先に休んでもらい風呂に入るよう言っていました。

片付けを終わらした僕は自分の部屋で読書をしていました。

「ごめんね、お兄ちゃんばかり働かせて」

「気になさらないください」

「だからね、お兄ちゃんのためにはいっぱいお湯に浸かったからね」

「そんなにあなたは僕に変態のレッテルをはりたいんですか？」

「興奮しない？」

「しません」

「私は興奮するのに」

「……………」（明日からからはなるべく後に風呂を入りましょう）」

「変だなあ。ママはこれ言ったら絶対悩殺、もしくはリリースのことを襲うって言うってたのに」

「あのバカ師匠……………！」

あの師匠にしてこのアンドロイド有りですか。

でもきつと、これはリリースさんなりの頑張りなのでしょうね。

子は親に似るといふ現象を再現しようとしている。少なくとも僕

にはそんな風に見える。

僕にもそれは同じで、経験済みだからだ。

近くにあるリリスさんの頭を撫でる。綺麗な銀色の髪。

最初は驚いていたリリスさんも、気持ち良さそうに顔を綻ばせ座っていた僕の膝に頭を乗せる。あえて抵抗はしない。

膝に暖かみを感じながら、昔の僕もこんなものだったかなと思案する。

## 2

### これは十一年前の物語

とても寒い冬、真っ白な雪が降り積もっていました。

広大な敷地。公園か何かだろうか。

僕はその中心で力尽き、倒れていた。重さを感じさせない雪が僕に積もり、まるで世界から僕の存在を消そうとしているかのように思える。

自分の名前も過去も記憶も使命も意思も何も無いまま僕はここにいた。

自然発生。

そう、まるで何かから引つ張り出されたようになんの前触れもなく、僕は真っ白な雪と真っ暗な闇が彩る風景に一人であらずんできた。

僕が『自我』というものを認識した瞬間から、僕は一人だった。

ヒトは僕を見て、皆一様にこう口にする。

バケモノ、と。

僕はヒトに追われた。

ヒトだけではなく、エクソシスト魔祓師や時には野犬にも命を狙われた。



生存本能が働き僕は今日この時まで逃げ延びることができたけど、体を蝕む寒さや飢餓、恐怖のせいで限界に来ていた。

活動時間の夜になり、あてもなくフラフラとさ迷って、こんな場所まで力尽きている。

昼、特に太陽は嫌いだ。

黒い僕はまぶしい光に当てられるだけで、目立ってしまい格好の標的となる。自分に学習能力があることを心から感謝したい。

同様に雪も嫌いだ。

白い雪の中ではもちろん目立つし、動きは制限され肌を貫くような寒さは耐えられるものではない。

そんな嫌いでたまらない雪を払う力すら今の僕には有りはしなかった。

矛盾してるかもしれないけど恐怖は感じない。

どうやら僕は『敵』に対する恐怖心は有っても、『死』に対する恐怖心は全くと言っていいほどなかった。

多分、『死』によつてこの苦痛から解き放たれるとでも、考えていたのだろうか。

それとも、全てがどうでも良くなって、命がなくなってもいいと考えていたのだろうか。

どちらにせよ、僕の命はゆっくりと確実に磨り減り、亡くなっていくのがわかる。

僕は目を閉じる。

最期の時くらい、嫌いな世界ではなく、僕が唯一安ぐことができる闇の世界に浸っていたかった。

「やっぱり人間がいた。しかも子供だ！」

その声は突然聞こえた。

ヒトの声。

おかしい。

今はヒトの活動時間ではないはず。個体差はあるとは言え、それでもこの時間帯はまずヒトは外へと出ない。

積もった雪を踏む音が聞こえ、僕に近づいていることを理解した。僕に構うな。

殺すぐらいなら僕を一人で死なせてくれ。

「本当だわ、将矢さん。可愛いそうに……………」

また声が聞こえた。さっきの声は違う。

どうやらヒトは二人、もしくは二人以上いるようだ。

僕は心の中で悪態をつこうとすると、体が強い力に引かれた。

大地にうつ伏せだった僕の体は、力任せに扱われ気付けば立っていた。

さすがに目を閉じるわけにも、無視するわけにもいかず僕は目を開けて事態を確認する。

確認して、とても驚いた。

ヒトは二人。それぞれが男と女。

最初に言葉を発した男は眼鏡をかけ、女は長い髪が印象的だった。

この時間にヒトが活動しているのは充分衝撃だけど、驚いたのはそんなことはない。

僕をみる二人のヒトの四つの目。

その目には今まで僕を見てきた目とは違い『敵意』がなかった。

「ごめんね、辛かったよね？」

ヒト、女の方がそう言うので僕に向かって両手を伸ばしてきた。それを『攻撃』と思った僕は反射的に数歩後退った。

そんな僕を見て、女は微笑みを浮かべ再び手を伸ばす。

何故か抵抗するという意思は頭の中に出てこなかった。

女の伸びた腕に僕はすっぽり収まる形で、抱きしめられた。

女の熱を暑すぎるほど感じる。事実、ずっと雪の中にいた僕の体はとても冷えきっていて、女の熱のせいで火傷するかと思った。僕の体が徐々に暖められ、女の体温も苦にならなくなった。初めて感じる、ヒトのぬくもり。

「……良かった。最初は野犬かと思ったけど。とにかく君が無事で良かったよ」

傍観していた男が僕の頭に手を置くと、撫で始めた。その手も暖く、とても大きく感じられた。

男は言葉を続ける。

「きみ、名前は？」

「ない」

「そうか……。優希」

「ええ、将矢さん」

頷き合うヒト。

男が僕の身長にあわせるように腰を低くする。

「ぼくらの養子にならないかい？」

「ヨウシ？」

「わからないか。家族になるってことだよ」

「カゾク……」

その言葉の意味は僕にもわかっていった。

脳裏に浮かぶのは手を繋ぎながら歩く三人の家族<sup>ヒト</sup>。誰もが笑顔を浮かべる『幸せ』と言う名の夢。

「いいの？ バケモノの僕が、家族でいいの？」

僕はいつの間にか涙を流し、女の服の袖を強く掴んでいた。

「いいに決まってるわ。あなたはもう私たちの家族よ」

「そうだ。せつかくだし、名前を付けてあげなくちゃ」

「名前？ 僕の？」

「ああ。そうだね……」

男は顎に手をあて考える素振りを見せると、不意に顔を輝かせ、

「きみの名前は、悠夜。森羅、悠夜」

「モリアミ ユウヤ」

「そうそう。名前の意味はね。森羅万象、全てに訪れるはるか悠とあくまでに広がる夜空という意味なんだ。ほら、見てごらん」

男が指を使い上の方を指し示す。つられる形で僕も上を向く。

あげる言葉もなかった。

黒い絵の具を使ったかのような闇の中で、星が幾つも存在しづらいとは言えないが確かな輝きを放っていた。

「暗い闇の中で光る星のように、白い雪の中にいた悠夜を見つけたことができたんだよ。だから、悠夜の名前はこういう風にちなんだんだよ」

「いいと思うけれど、そろそろ家に帰らない？ 私達も悠夜も冷えてしまうわ」

「それもそうだね。帰ろうか、悠夜」

「帰りましょう、悠夜」

二人は僕を挟むように立ち上がると、両手をそれぞれ握った。肌から直接感じる感触に、僕は戸惑いを覚えていた。

「あのっ」

「ん？」

「どうかしたかしら？」

「ア、ア、アア、……………アリガトウ」

それぐらいしか言えない僕を二人が見てクスクスと笑う。

『僕ら』の歩く速さは、ゆっくりとお互いを労るような遅い歩みだった。

この後僕は正式に森羅将矢とその妻、優希の子供となった。

3

「あれ？ 確か僕……………」

おぼろ気な意識の中で記憶を探る。

なんだか、昔の夢を見ていた気がする。それも、かなり前の。ん？ 夢ということは、僕は先ほどまで寝ていたのか？

「あ、起きた。もー、お兄ちゃん寝ちやうんだから」

やっぱり寝ていたらしい。

それよりも気になるのはリスさんの声だ。何故か至近距離かつ、真上から聞こえた気がしたんですが……………。

上体をお越しながら、頭を上に向けようとするも、『モフッ』としたもの阻まれた。なんででしょう？ どかそうと、それを掴む。

「あん。もおお、お兄ちゃんつたら……」

だから何故リリースさんの声が至近距離かつ真上から聞こえてくる。物体を掴んだまま考え　最悪なシチュエーションを思い浮かべてしまった。

「うわあああ！」

掴んでいたそれから手を離し、横に転がって体制をたて直した。そして状況確認。

目の前には頬を赤くしながら正座するリリースさん。

じゃあ、僕が掴んでたものってやっぱり……。

「お兄ちゃんのエツチ」

「うっ！」

「頭撫でながら寝ちやうから今度はリリースが膝枕してあげたのに……

……。調子乗って妹に痴漢行為しちやうんだ」

「ぐあっ！……！」

うう、イヤらしくねちねちと……。悪いのは完全に僕ですが。

「というわけで、今日は一緒に寝よう」

「何がどういうわけです!?!」

「寝てくれなかったら、アキラたちに『お兄ちゃんに胸揉まれた』って言っちゃおう」

「……。一晩だけですよ」

「わーい」

「もっと離れてください」

「狭いから無理」

「だったらリリースさんの布団を持ってくればいいじゃないですか」

「それじゃあ、意味ないもん」

「どんな意味ですか」

あの後風呂に入った僕はリリースさんに自分の部屋へ素早く連行された。……逃げて野宿しようとしたのがばれたみたいですね。

部屋には既に布団が敷かれていて、枕が二つあった。決して変な意味ではないはず！

「さつきはあんなにリリースの胸をいじってた癖に」

「掴んでしまっただけです」

「ほんとそうやって事故を装う。素直じゃないんだから」

リリースさんはただでさえ一人用の布団に二人で狭い中、更に体を押し付けてきた。僕はリリースさんに背を向けているため、背中に先ほど掴んでしまったものが……！

「なんなら、もっと味わってみる？」

ギャー！！！！

耳元で変な声出さないで、体をくっつけないで！

僕が必死に祈っているとそれが通じたのか、リリースさんが離れた。

あれ、助か　うおっ！

体を無理やり仰向けにされ、リリースさんにキスされた。インストール登録の時

同様、舌を入れられた。

抵抗もできないまま、リリースさんが好きにされていると、ゆっくり唇と唇を離れた。

「うふふ。今日はこれで我慢してあげる。今度はもっと気持ち良くしてね？」

そう一方的に言うと、僕の腕をつかむとリリースさんは寝息を立ててしまった。しかも、その胸で僕の腕を挟むように。

この状況で寝ると？ あー、明日は寝不足確定ですね。だってリリースさんの鼓動が伝わって、僕の鼓動もすごい速いんですもんっ。でも、まあ。

横に誰かがいる中で寝るのも、とても心地よい気がする。  
暖かさが伝わり、心が安らぐ。

たまにはこういうのいいかな？  
そんなことを考えてしまっていた。

実はニヤリと笑うリリースさんの計画通りと露も知らずに。



第十一夜 地獄から見つめるこの世界（後書き）

……なんで過去話よりコメディが多いんだろう？

やっぱり作者の力不足！？（泣）

うう、悠夜くんの過去と時々見せる執着の理由をわかっていただければ幸いです。

感想お待ちしております

それでは失礼します

第十二夜 その門を越えた先に見えるモノ（前書き）

遅れ本当にごめんなさい！！！！！

今回は新キャラ登場です。

それではどござ〜

## 第十二夜 その門を越えた先に見えるモノ

リリスさんが転校して来て一週間後

1

「うーん、どうしましょうかね」

僕は文化教室棟を歩き回っていました。理由は単純明解。入る部活を探しているから。

初めは入る気など毛頭ありませんでしたが、神薙かんなぎくんあまじに玲さんれんや恋華さんれんかと天宮くんあまみやと刈柴くんかりしば、冬空先輩ふゆそらまでもが自分の部に僕を入れようとするのでこうして逃げ場所を探しているわけです。ちなみに天宮くんは活動日の少ない漫画研究部に所属しているとか。一度だけ見せてもらった原稿がとても綺麗に描かれていたのを覚えている。ヒロインらしき少女の服装が露出の多い物というのも。

僕は必ずしも入りたくないわけではないですが、みんなと関わりを持つようになって良い意味でも悪い意味でも僕の周りには賑やかになった。賑やかになりすぎた。

（みんなには悪いですけど、僕にも心休まる時間が欲しいんですよ……）

学校では僕を中心にみんなが巻き起こすトラブルや不幸、刃状沙汰未遂に加え家に帰ればリリスさんが居て僕に師匠のようなスキンシップを仕掛けてくるのだから、本当に心と体が休まらない。

一人で居るのに慣れているとかではなく、身がもたない。本当に

寝不足気味ですし。

せめてあの濃いメンバーから離れた放課後を送りたい。そう思って文化教室棟を徘徊しているのですが……、なんだかまとまとな集団が見つからない。なんだか僕の周りにいる人の雰囲気というか匂いしかない。一步でも足を踏み入れたら最期、取り返しのつかないこと（強制入部）になりそうで怖い。仮入部することさえ躊躇ってしまう。

入部によってみんなの勧誘意欲を削そごうとしたのですが、諦めた方が良さそうですね。無駄な傷をおいかねません。帰りますか。

僕は文化教室棟の出口へと向かう。ちょうど階段の真横を通ったところで

「あぶないっ！！！」

声が聞こえた。悲鳴と言ってもいいのかもしれない。

階段の方を向けば、大きな角材や釘が宙を舞っていた。僕を  
めがけて。

(っ!?)

僕はとっさに後ろへ飛んで避ける。

けれど壁のすぐ側を歩いていたらため階段から離れようとしたら、離れた代わりに壁と激突してしまった。しかも後頭部を。

ゴンッ

「いっ………！」

電撃のような痛みに、思わず疼くまってしまう。

おまけに未だ宙を舞っていた角材はまるで狙ったように、僕の頭、

しかもさつき壁にぶつけた所に勢い良く。

カツンッ

「っ!?!?!? 痛い……………」

一瞬意識が途絶えかけ、ふらつと足を前に出したら今度は釘を踏んでしまった。上履きを挟んでも、尖った釘はとても痛かった。的確としか言い様のないこの不幸。……………僕って呪われてる?

「すまん。大丈夫か、怪我あらへん?」

僕をいたわる声。声の方へ目を向けると、ショートヘアの少女だ。歳はおそらく僕と同じくらい。手には僕の頭に当たった物と同じ角材を抱えていた。

「いえ、大丈夫ですよ」(とてもとても痛いですが)

「いや、ごめんな。運んでたら階段こけそうになって、何本か落としてしもうたわ」

少女は申し訳なさそうに言うと、床に落ちた角材を拾い始めた。全部の角材を拾い終わると、また僕を見て思い出したように言った。

「あーっ、ウチあんた知ってるで。森羅悠夜もりあみ ゆつやや。ウチ、魔術決闘フェーテの試合見に行ったで。惜しかったな」

はあ、またですか。

僕はあのフェーテのせいで有名とは名ばかりのマスコットになっている。

知らない女性の上級生に握手を要求されたり頭を撫でられたり)

その度に玲さんと恋華さん、リリスさんまでもが激怒)、いかにも熱血な人にフェーデを挑まれたり(無言で逃げましたが)、瀬野<sup>せの</sup>先生や他の先生には将来有望な魔法使いと勝手に思い込まれてしまった(本当は科学者です)。今思えばフェーデの申し出を断っておけば良かったと思う今日この頃。

人前にも関わらず、自分の受難(女難?)ぶりにため息をついてしまう。

「どうかしたんか? 気分悪そうやけど」

僕の嫌な記憶による心情の変化を察知したのか、関西弁の少女は僕に問いかけてきました。

「大丈夫です。ちょっと嫌なことを思い出しただけです」

「そっか。いや、あたりどころが悪かったらどないしようと思っただけど、その様子じゃ大丈夫そうやな。あ、そうや……。なあ、森羅」

「なんですか?」

関西弁少女の目が話している途中で、僕をいたわるものから獲物を見るそれに変わる。

嫌な予感

「失礼します」

「どこへ行くんや?」(ガシッ)

「ひいっ」

早々に立ち去ろうとするも、襟首を掴まれ行動を封じられた。

「ちょっと、ツラ貸しや」

関西弁少女は右手で角材やら袋に入った釘を脇に抱え、左手で僕を猫のように引きずる。

抵抗？

頭が角材の痛みを覚えてそんなの無理です。

くくく

吹奏楽部の演奏でしょうか。

気付けば『ドナドナ』の曲が僕の耳に入ってきました。

高校生レベルではとても上手な演奏に送られながら、僕は胸の前で手を合わせながら平穏な未来を祈っていました。

2

「ここやで」

関西弁少女に連れて来られたところは、文化教室棟の一室。扉には『演劇部 部室』とカラフルに書かれていた。

「あなた、演劇部だったんですか」

「そうやで。………正確には演劇同好会やけど」

「何か言いました？」

「別に。こんなところで立ちどまらんと、サクサク入るで」

引き返すという選択肢はないですね。

僕も抵抗する気は失せ、自分の手で扉を開ける。

中には三人の学生がいた。

「もしかして新入部員!？」  
「違いますっ」

三人の内、一人が熱い声で僕を見るなりそう言った。  
なんででしょう。この人、神薙くんに近いものを感じます。

「実はな森羅。ウチらは四人、つまり演劇部やのうて演劇同好会な  
んや。正式な部としては認められていないんや」  
「そうですか。あの、ところでなんで扉を閉めるんです?」

僕の入室を確認して、関西弁少女がしずかに音もなく扉を閉めた。  
まるで僕を閉じ込めるように。最初から部屋にいた三人も距離をつ  
め、関西弁少女と一緒にあって僕を囲むような陣形をとる。

「……………え、なんですか?」  
再び嫌な予感を感じるも、囲まれているためどうすることもでき  
ない。

「なあ、森羅。アンタ、どの部活も入ってへんよな? もしへエー  
デに出场して有名になった森羅がどこかに入部したら、たちまち噂  
が昇るもんな」

「いえいえ有名だなんて。それよりもあなたはなぜ僕の手首を掴ん  
で拘束してるんですか? 力が強すぎて痛いんですが」

「我慢しいや。その内気持ち良くなるから」

「なりませんよ!」

「単刀直入に言うで。森羅、ウチらの演劇部に入ってくれへんか?」

「断りま」

「なお、拒否した場合はこの短刀をお前の体に直に入れるから覚悟  
しいや」

「怖っ。なんですか、そのリアル『短刀直入』は!？」

「要するに、お前には拒否権は無いつちゆうことや」



「脅しですか……」

「頼むつて。演劇は同好会やのつて部活ではなくてはいけないんや。幽霊部員でもかまへんから」

「そう言われましても」

「なんなら葉っぱついた枝持って、『木』のフリしてくれるだけでええから」

「なおさら嫌ですよつ。……一応聞いておきたいのですが、活動はまともですよね？」

「まともじゃない活動がいまいわからんけど、ウチらがやってるのはいたって普通やで」

「そうですか……」

改めて周りを見る。

僕を期待を込めて見る視線。

何故だかとてもキラキラしている視線。

不安そうな視線。

関西弁少女の有無を言わさない視線。

……今更ですけど、本当に逃げ道が見つからない。  
はあ。

「わかりました。この森羅悠夜、國桜高校演劇部に入部させていただきます」

根負けした僕の敗北（入部）宣言を聞いた途端、先輩部員さん達は皆一様に笑顔を浮かべた。

「いやー、助かったよ。おかげで引退して行った先輩達に、顔向けできるつてものだ。俺は<sup>かしわらじこむ</sup>柁原努。二年生で部長をやらしてもらつてる。よろしくな」

先ほどまで僕を期待の眼差しで見っていた先輩が自己紹介。

「んで、こっちが俺の彼女の祭場キララ」

「もー、つくんたら。恥ずかしいよ　あ、ちなみに私も二年生だよ」

恥ずかしいと言いながらも照れたように頬を染める祭場先輩。

照れんなよと恋人に笑いかける柘原先輩といい、これが天宮くんが言っていた『リア充』なのでしょうか？

「え、えと、私は白樺雲雀<sup>しろはくうづは</sup>。私も、に、二年生だよ」

色素の薄い髪を持った白樺先輩。シンプルな眼鏡越しに、不安そうな視線を僕に送っていた先輩は、少しおどおどした様子で僕を見る。

「最後はウチやな。ウチは京<sup>みやこ</sup>。篤兔京<sup>とくと</sup>や。同じタメ（一年）同氏仲間<sup>どうし仲間</sup>よくしようや」

関西弁少女　篤兔さんが笑顔で言う。できれば笑う前に、拘束を解いて欲しいんですが……。

「おお、すまんすまん。忘れてたわ。ほな、次は森羅の番やで」

「僕もですか？」

「当たり前やろ。いくら森羅のこと知ってるゆうても、初対面には変わりあらへんで？　挨拶をちゃんとしかへんと」

篤兔さんの発言にも一理ある。

「では。

僕の名前は森羅悠夜。名前の意は森羅万象（全て）の悠<sup>と</sup>き夜  
となります。

若輩者の身ですが、どうかよろしくお願いいたします」

「よろしくね」 あ、そうだ森羅くん。去年のアルバム見る？

雲雀の綺麗なドレス姿が見れるよ」

「ちょ、ちょっとやめてよキララ！」

小さめのアルバムを手にする祭場先輩と、顔を真っ赤にしてその  
アルバムを取り上げようとする白樺先輩（背は結構高い）。それを  
ニコニコと笑いながら見る柘原先輩。

（……………楽しそうですね）

「強引なのはわかるけど、退屈はしないから安心しいや」

と、僕の横で篤兔さん。

僕も笑顔を浮かべて応え、心の隅で考える。

（僕って流され易い体質？）

3

「冬空先輩、失礼します」

「なんだ森羅。お前が生徒会室に来るとは珍しいな」

「はい。実はにゅ」

「そうかそうか。森羅もようやく我らが剣道部へ入る決意を持って  
くれたか。ほら、入部届けはここだ。（剣道部）部長と（剣道部）  
顧問のサインは書いてあるからな。後は自分の名前を書くだけでい

い

「違う違う違います！『入部届けをください』とは言おうとしましたけど、剣道部へ入るためではありません。というか、良く語頭の『にゅ』だけで入部届けとわかりましたねっ」

「なんだ、違うのか。では、いったい何の部活に入ろうとしてるんだ」

拗ねた子供のように頬を少し膨らます。一見幼稚に見えるしぐさだが、冬空先輩ほどの美貌を持つ女性がそれをするとても魅力に見えるから不思議です。

「演劇部に入ろうと思っています」

「演劇部？ 國桜高校にそんな部活あったか？」

「まだ僕は正式に入部してないので、正しくは演劇同好会ですが」

「ああ、演劇部同好会か。それなら確かあったな」

ポンツと手の平を打つ冬空先輩。

……この人の頭の中では、部活と同好会では決定的な壁でもあるのだろうか。

「そうか。しかし前々から決めていたのか？ 私だけでなく、他の弟子達からも勧誘を受けていたのだろう」

「いいえ。僕自身演劇部の部員と接触したのは、部活動紹介以来昨日が初めてです」

ちなみに昨日、自己紹介を終えた後は、少しだけ見学させてもらった。

「昨日!?!」

何故か冬空先輩はうなだれてしまった。

「私はじっくりと剣道の素晴らしさを教え、学ばせよう近頃睡眠時間を削ったにも関わらず一日だとは……。ハハハ、演劇部、どうしてくれようか」

そしてそのままぶつぶつ呟く。

怖いです。

「あの、冬空先輩。何にも書いていない真っ白な入部届けが欲しいのですが」

「む、ほれ」

渋々といった様子で、棚から一枚の用紙を取り出し僕に渡す。

良かった。至って普通、何もされていません。ただの入部届けです。

……僕って心配症？

「それじゃあ、要件も済みましたので、僕はこれで帰りますね」

「森羅」

僕が退室するため振り返った途端、冬空先輩が抑揚の無い声で僕を呼ぶ。

「な、なんででしょうか？」

「一回教室には戻るのか？」

「は、はい。鞆も置いて来ましたし、一旦戻ろうかと」

「そうか」

僕の答えを確認すると、冬空先輩は打って変わって晴れやかな声

と微笑で言う。

冬空先輩の変化に違和感を覚えつつも、一礼してから退室し、自分の教室へと向かう。

『もしもし、月弦か？ 冬空美姫だ。森羅のことなんだが、今お前らの教室に向かっている。演劇部に入るそうだ。それでは、失礼する』

冬空先輩が秘かに通信していたとも知らずに。

4

「………………。ふん。つまりそういうことなんだ」  
「そういうことなんです、はい」

教室に戻った僕は何故か僕は尋問を受けていた。しかも机の上で正座という、あまりの類の見ない状態で。

放課後であるこの時間帯はいつものメンバーしかない。と言っても、神薙くんは見えませんが。なんでも、みんなは部活中だったところを玲さんに収集され、神薙くんだけが中途半端に抜けることができなかつたようです。目線で高い分、ここからグラウンドで白球を追いかける野球部員達の姿が見える。

「？ そう言えば、リリースさんは何か部活に入ったんですか？」

「漫画研究部だよ」

「え、そうなんですか？」

驚きを隠せずにリリースさんと、少し離れたところで刈柴くんと一緒にいる天宮くんを見る。

正直リリースさんが天宮くんの所属する、漫画研究部に入るとは思いも寄らなかつた。

『なんでリリースちゃん、入部したんスか？』

『俺がこの前うつかり同人誌をあいつに見せちまつたんだニヤ』

『同人誌って、二次創作作品のことツスよね？　なんでそんなの見たら入ったんスか？』

『リリース×悠夜の同人誌を自分で書くんだと』

『……理解できたツス』

『さすがに罪悪感沸いたニヤ。文化祭でも、出品あるっていつのに。18禁以上の描写使用は絶対に止めさせなきゃニヤ』

「あのね、リリースね、部長さん達に絵がうまいって誉められたんだよ」

「そうですか、それは良かったですね」

喜びべきことなのに、何故か悪寒を感じる僕がいる。

「悠夜くん。今お話ししてるのは私だよ？」

「人の話を聞かないなんて、ウッフ、お仕置きですわね」

僕の正面、玲さんの横で恋華さんが手を口に当て優雅に、それでいて怖い微笑を浮かべる。

二人ともそれぞれエプロンと和服を身に着けている。……ちゃん  
と着替えてくればいいのに。

「要するにこういうことですか？　悠夜さんは情を動かされ、半ば強制的に入部させられたと？」

「いや、強制というわけでは　玲さん、（包丁を持って）どこに行くんです？」

「ちょっと演劇部の部室へ？」

「駄目ですよっ！ 絶対に行かせませんよ!？」

もし玲さんを行かせてしまったら、赤いエプロンが更に赤く染まってしまう！

「そ、それって、『私をずっと離さない』ってどういう意味？」

「違いま わー、せっかく止めた足を動かさないでください!」

「悠夜さん。今は私と話しているんですよ？」

「この局面で玲さんを止めるなど!？」

「そ、それって、『僕達の愛の領域に入るな』ってということ？」

「意味がわから わー、僕に刃物を向けないでください!」

あーもー、埒があかない！

「そもそも、どうして僕が他の部活に入ると起こるんですか？ どうしてそんなに自分の部へ入れたがるんですか？」

一番強く自分達の部活を押ししていたのは、玲さんと恋華さんでした。

「なんでって、えーと……………」

「それは、ですわね……………」

意気消沈。

まるで空気の抜けた風船のように覇気がなくなってしまった。

僕の時間稼ぎ目的の問いかけに、予想以上の効果があったのでしようか？

うまくいけばこの場を切り抜けられるかもしれない。

そう思った直後、突然教室の扉が開いた。



そこから、見たのは篤兔さんと白樺先輩がいた。  
何故ここへ？

「森羅が遅いからわざわざ迎えに来てやったんや？」

「そ、そうなの。えとっ、一緒に行こ」

篤兔さんは教室へ入り僕の手首を握ると、廊下を出てスタスタと歩き、白樺先輩がそれに続く。

最初から教室に居た玲さん達は突然の侵入者と、僕をさらった（？）一連の動作に驚き身動きが取れず、しばらくして金縛りが解けても後の祭り。

「悠夜くん……。夜道は気をつけてね。いつ背中に包丁が刺さるかわからないからね……………」

「うう。せつかくお揃いのお茶セットを注文しようと思いました」「お兄ちゃん×リリース。リリース×お兄ちゃん……………。イイ！」

「俺、思ったんだけどニャー。悠夜って結局、どのルート選んでも不幸フラグ？」

「それは言えてるツスね」

教室から聞こえてくるみんなの声。ああ、こうしてまた僕の思い描く『日常』とは離れていくのですね。

「？ 森羅」

「ど、どうかした？」

「なんでもありません。それよりも先輩方、指導の方よろしくお願  
いします」

「まかせとき〜」

「頑張つてね。応援してるから」

僕がくぐった演劇部の部室ははたして、どこに向かっているのか。  
結末を少しだけ楽しみにしている僕がいました。

第十二夜 その門を越えた先に見えるモノ（後書き）

今回は部活です。

悠夜くんもリリースも、これで帰宅部卒業です。

なお、演劇部メンバーのキャラ紹介はしばらくお待ちください。  
何卒、ご迷惑おかけします。

今回は悠夜くんと愉快的な弟子達との修行パート？を予定しています。  
パート？があんまり修行っぽいことしていなかったの……。

それではそろそろ失礼させていただきます。

今回も読んでいただきありがとうございました。

さようなら〜

第十三夜 選択肢と分岐点の狭間で（前書き）

時系列は悠夜くんが入部してから最初の休日です。

それではどごごぞ〜

## 第十三夜 選択肢と分岐点の狭間で

1

演劇部としての活動は忙しい中にも新鮮で、篤兔とくとさんの言った通りいい意味でも悪い意味でも退屈な時間はありませんでした。

演劇部の活動は大きく分けて二種類有り、舞台上で演じる役者としての稽古と、小道具や舞台背景等を自分達の手で一から作る大道具となる。

更に演劇部員を分けるのなら、舞台上で演じる『役者』と舞台には直接的に参加しない『裏方』に分かれるらしい。

部員数が多いところではきちんと区分するみたいですが、我らが國桜高校の演劇部は総勢五人と少ないため役者と裏方の両方を兼任しなければならぬと部長が言っていた。

驚いたことに、二年生組では白樺先輩しろかばが一番の演技力を持っていると聞いた。本人は顔を真っ赤にして否定していたが、きっと謙遜だと思う。

僕と同じ一年の篤兔さんも中学生の頃は演劇部に所属していたと言っていたし、完全に僕は出遅れている。

他の部員の足を引っ張りたくありませんし、部活動とはいえ身を引き締めなければ。

「だからって、筋トレしてどうにかなるのか？」

「無駄口を叩かないで、速く折ってください。残り時間僅かですよ」「げっ」

週末の休日に僕らは『四季原公園』へ再び集まっています。前回は全員分の魔装具を用意しただけで終わったので、今回はちゃん

としたことをしようかと集まったのです。

現在弟子の六人は公園の中にあるテーブルに座らせ、折り鶴を折らせていました。

「あーっ。やっぱり俺には合わねえ、折り紙なんてっ。もー無理。こんなちまちました作業俺には無理！」

「素振りと思えば大丈夫ですよ」

「おお、そうか……………余計疲れた」

予想通りに神薙かんなぎくんが早々にダウン。

他の人も折れてはいるものの、明らかに集中力が乱れていました。それが狙いですけどね。

魔法は主に使用者のイメージで決まってしまう。そのイメージが崩れてしまわないよう、こうして単純な作業を言って精神力と集中力を養おうとしている。ちなみに僕は近くで腕立て伏せを、リリスさんが読書（タイトル『冥土への花道』）しています。

皆さんに言ったのはただの折り鶴ではなく、『全員で二十分以内に千羽鶴を作る』というもの。協同作業なので全員というのがミソ。誰かが頑張れば、その分速く終わる。女性群や手先の器用な天宮あまみやくんが着々と鶴を折っていく中、慣れないためか神薙かんなぎくんと刈柴かりしばくんはスローペース。おかげで二人は可哀想に、睨まれることもしばしば。

そんなこんなで制限時間ギリギリで千羽鶴は完成。大した運動もしてないのに、みんなとても疲れていました。

「疲れるわっ！ 何なんニヤ、この地味な耐久レースっ。鶴を折り過ぎて指先がつれーよ。初めてニヤ、こんな感覚！」

「カブトムシの方が良かったですか？」

「あんの！？ 折れんの！？」

「ちなみに僕、自慢ではありませんが折り方が分かれば、なんだっ

て折れますよ」

「お前スゲーな！」

「悠夜……、魔法の修行ってこんなもんなんスか？ 俺の予想ではもつと派手なのか、それとも風の声に耳を傾けるとかそんなのを考えていたんスけど」

「それはレベル1の修行ですね」

「あの折り鶴はレベル1にも満たないんスか！？」

疲労のせい何か何かと文句を言ってくる男子陣と違い、幾分か楽しそうにしていた玲さん達は疲れはあるものの綺麗な色合いの千羽鶴を嬉しそうに見ている。やっぱり女性は折り紙好きなんでしょうか。

「では、この千羽鶴ですが………、燃やすか切り刻んで紙吹雪にするか、どれがいいですか？」

『酷過ぎる！！！』

「笑えないジョークですよ」

「自分から笑えないジョークって言う人初めて見たツスよ……」

ブラックユーモアって素敵ですよ。

まあ、冗談はさておき、そろそろ『魔法』を開始しましょうか。

僕は千羽鶴を段ボール箱に入れ、皆さんをテーブルから移動させて以前魔方阵を書いた時と同じ大きく開けた空間へ集める。

「さて、ではそろそろ魔装具の扱いにも慣れていただきましょうか」

僕がそう言うときまでとは違って変わって、皆一様にテンションを上げる。まあ、ある意味これが目的とも言えますからね。

「そう言えば、リリスさんっていったいどんな魔法を使いになられるんですの？」

(うつ)

恋華れんかさんの問いかけに、思わず冷や汗を流してしまふ。

科学の力で人工的に生み出されたリリスさんは、その身に魔力を宿していない。魔法が使えない。ある意味で、僕と一緒にと言える。

「治癒ヒーリングだよ」

おかしいことを言い出さないか不安の眼差しをリリスさんに向けていると、僕のそんな杞憂を気にすることなくにこやかに義妹が質問に答える。

「へー、そうなんですの。珍しいですわね」

「うん、そうなの。だからアキラが刃傷沙汰を起こしても、私がなんとかするよ」

「それってどうゆうことかな、リリスちゃん」

「リリスの疑問も解けたことだし、そろそろ始めないか？」

冬空先輩ふゆぞうが待ちきれない様子で僕を促す。折り紙も一番一生懸命でしたしね。

「それではそろそろ始めましょうか。リリスさんは僕の傍で補佐をお願いします。神薙くんから前へどうぞ」

「おうつ」

勇み足で僕の隣へやって来る神薙くん。その手には綺麗な紅色の魔結晶エレメントを握っていました。



俺こと神薙亮は代々鍛冶屋の家系で、昔から刀剣や斧、魔法が世界に認知されるようになってからは魔装具も創っていたらしい。実際親父も俺達家族を鎚一つで養ってきた。幼い頃は何度も鍛冶場に入ったり、親父が鎚を降り降ろす姿を見学したりした。幼稚園に通っていた時は、やはり憧れを抱いていた。

野球に出会ったのは小学生入ってからだ。当時二年生だった俺はクラスメイトに誘われ野球部に入部。親父も所詮は小学生の『遊び』と思ったのか、特には反対してこなかった。俺自身級友の顔を立てるために入ったものだ。けれど

いつの間にか、気付けば白球を目で追いかけている俺がいた。

いつの間にか、暇さえあれば素振りをしていた俺がいた。

いつの間にか、プロの野球選手に憧れている俺がいた。

親父もそんな俺の心境の変化を感じつつも、対して口には出さなかった。口に出さない分、長男の俺に家督を継いで欲しいという思いはひしひしと伝わってきた。

中学校に進学してからも、俺は野球を続けた。鍛冶師という幼い頃に描いた夢も捨てきれないまま。授業で行われた『将来の夢』という作文は、期限ギリギリまで悩んだあげく内容はとても陳腐なものだ。

幼馴染である天宮響に誘われたのは進路を考え始めた中二の三学期のことだった。

一緒に『学園都市アストラル』に行かないか？、と。

俺も名前は聞いたことのある学園都市。大人が一握りしか居なく、

学生で都市が回っていると言っても過言ではない、魔法を学ぶ為の巨大都市。

魔法を学べるというのも魅力的だし、何よりアストラルに行けば親父と顔を合わせずにすむからだ。

喧嘩や口論などはないが、俺と親父の間にはなんとも言えない緊張感が生まれる。これは結構きつい。

響のやつは俺のことを考えて　　るとしても、一番は響の妹の奏かなでちゃんから逃げたいからだろうか。あの頃は頻繁に『かくまってくれ』と言って泊まりに来たし。

そんな誘いも断る理由もなく、俺は両親に相談、説得させ高校生活をアストラルですごすことにした。

アストラルですごす三年間で、俺が進む道を見つけられることを祈りながら。

「来い　　紅煉獄くわんたいく」

俺がその名を呼ぶと、手に持っていたエレメントが発光し、粒子状に碎け飛散する。その一瞬後、元粒子のエレメントが再び集まり形を作る

今エレメントは先程までの球体ではなく、燃えるような紅色をした大きい鎚になっていた。ヘッドと柄の部分に合わせて俺の身長弱ぐらいある鎚は、持ってみてもちっとも重さを感じない。

紅煉獄、真っ赤な鎚が俺の魔装具。

「なあ、悠夜。俺はやっぱり鎚を握ってる方がお似合いってことか？」

悠夜の手助けで魔装具を手にした時、俺が最初に感じたのは興奮や喜びではなく戸惑いだった。

魔法が、俺の奥底が『お前は鎚を握れ』と言っている気がしてならなかった。

「……僕はその魔装具を持つ神薙くんはとても絵になると思いますが、バットを持ち球を投げる神薙くんも輝いて見えますよ」

「悠夜……」

「ですから、せめて魔法を学ぼうとするこの時ぐらいは、家のことなど考えない方がいいですよ」

「！ お前、知ってたのか……？」

「鍛治家の『神薙』はそっちの方面では有名ですからね。出会った頃は確証は持ってませんでした。あなたの魔装具を見てそう思いました」

「……………」

「あと、今の発言」

「ははは、悠夜には構わねーや」

「ありがとうございます」

では天宮くんも魔装具の発動を」

「ニヤー」

響の気の抜けた返事。

エレメントを取り出し、俺と同じように集中する。

俺はそつと魔装具を握る手に力を込める。

ま、頑張るしかないか。

「はい、では皆さんちゃんと魔装具を発動できましたね」

お兄ちゃんがアキラ達を見ながら満足げに言う。

簡単に言えばみんなは武装していた。

リヨウは赤いハンマー、ケイタは両手両足に黄色の手甲と具足。

ダイチはスパイクのついた剣。ミキは日本刀で、レンカは綺麗な扇子。アキラだけは武器を持っておらず、両手の人差し指に同じ指輪がはまっていた。

お兄ちゃんとみんなとで造ったと聞く、魔装具。魔法使いの武器。

こんな光景を見るとお兄ちゃんが科学者が魔法使いか、本当はどうかなのかわからなくなってくる。お兄ちゃんは自分のことを自称とは言え、科学者と言っていたし。

「ではこれより皆さんには魔装具の扱いに慣れてもらいます」

「具体的には何するの？」

と、アキラ。

「僕VS皆さんの対戦やっていただきます。魔法を使っても構いません。僕は素手でやります。あ、もちろん制御装置ヘルメットは着けたままで」「む……、森羅、それはさすがに私達をなめていないか？」「少なくともあなた方を過小評価はしていませんよ」

お兄ちゃんはいくまでも冷静に返答する。クールなところもかっこいいけどね

「簡単に言えば、鬼ごっこです。制限時間は5分とし、僕に触れればよしとします。時間はリリスさんが計ってくださいね」

「うん。わかったよ」

「一つ聞くツスけど、俺らが負けた、悠夜に触れることができなかった

「たったならどうなるんスか？」

「ペナルティとして、千羽鶴をあと二つ折っていただきます」

みんなのやる気がものスゴく上がったのがわかる。……そんなにしたくないんだ。

「悠夜さん、悠夜さん」

「なんですか？」

「私達が勝った場合、あなたにもリスクをおっていただきますわ」「僕にどうしろと？」

「もし私達が勝ったら……、悠夜さんを一日自由にさせてもらいますわ」

「採用っ」

「あの、玲さん、勝手に決めないでください」

「男に二言はないよな、森羅？」

「二言も何も、一言も言っていないのですが……。まあ、いいです」

「ちよつと待ったあああ！！！！」

お兄ちゃんを守るべく私は声を上げて立ち上がった。まあ、さっきから立ってたけどね。

「お兄ちゃんはリリスのもの！ だって、昨日（すぐに追い出されたけど）一緒にお風呂入ったもん！」

ママは手紙でこう言っていた。一緒に風呂へ入れば、もう夫婦だつて。

「………………。そ、それではスタート。僕は少し逃げますので、30秒後にリリスさんの持っている砂時計と『鬼ごっこ』を始めて

ください。し、失礼しますっ」

お兄ちゃんは何故か冷や汗を出しながら、ものすごいスピードでその場を走り去る。足早〜い。

「……………」

そんなお兄ちゃんの華麗な走りに刺激されたのか、アキラとレンカ、ミキの三人はより一層やる気が上がった。怖いくらいに。

「フッフ、鬼ごっこか……。幼い頃、鬼の子と言われた私だが、今日は童心に帰って楽しむとしよう。なあ、刀雪嶺斬<sup>とうせつれいざん</sup>？」

「悠夜くん悠夜くん悠夜くん悠夜くん悠夜くん悠夜くん悠夜くんお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置きお仕置き……死」

「あなた達、わかってますわよねっ！手を抜いたらただじゃ済ませませんわよ？」

「う、ウツス」

「も、ももも、もちろんだニヤ」

「頑張るぜ……。悠夜、すまん」

そろそろ30秒。

私はみんなに開始を告げる。

「それじゃあ、みんないっくよー。ヨーイ、ドンー！」

第十三夜 選択肢と分岐点の狭間で（後書き）

年末は忙しいです。多分これが年内で最後となります。

魔法の特訓で『鬼ごっこ』は前から考えていましたが、話しが長くなりそうなので次話へ継ぐ形になりました。

学生であまり時間はあまり取れないかもしれませんが、どうかよろしく願います。

感想もお待ちしています。

それでは失礼します。さようなら

## 第十四夜 鬼は嘆き、狩人は血を欲す（前書き）

……………更新遅れてすいません。いろいろリアルでありまして。  
やっと思き上げました。

それにお知らせがあります。

XXXXさんが、なんと冬空美姫先輩のイラストを描いてくださ  
ったので、貼らせていただきました。

主要登場人物に掲載しています。

描いていただいたXXXXさん、本当にありがとうございます！



## 第十四夜 鬼は嘆き、狩人は血を欲す

1

(リリースさんのバカアアアアアア!!)

僕は全力疾走しながら、心の中で叫ぶ。

陰口を言うのは趣味ではありませんが、このやり場の無い怒りを抑えることはできなかった。

だいたい、一緒に入ったと言っても、ほんの数瞬ですし、リリースさんもちゃんと体にバスタオルを巻いていましたから、セーフです。セーフのはずです。

にしてもリリースさんの爆弾発言後のみんなの反応ときたら……。

( 殺気!?)

僕は身の危険を感じて足を止め、大きく後退する。

その瞬間、僕が足を踏み出していたであろう場所には、50?ほどの大きな氷柱ツバキが何本も刺さっていた。あのままだったら……。

「流石さすがだな森羅もりあみ。今のをかわすとは」

「あの、完全に今のは命取りに來てましたよね」

「私だってこんなことにあまり熱を出したくないが、罰ゲームもあるしちゃんとやらせてもらうぞ」

「あれは緊張感を生み出そうとしたもので、嫌なら却下しても……」

「だから刀雪嶺斬(真劍)で真劍にやらせてもらうぞ。ん? 真劍で真劍……。私としたことが、つまらないことを。忘れてくれ」

「ところで、僕もなんか武器使っていいですか?」

「ああ、今日はいい天気だな」  
「会話が微妙に噛み合っていない！」

それにしても冬空先輩ふゆあきはいつたいつの間に現れたんでしょう。聞きたいのはやまやまですが、目がとても怖すぎて声をかけるのはばかまれてしまう。

今の状況を表現するなら、竜に睨まれたとかげでしょうね。もちろんとかげは僕。

今のところ冬空先輩の存在しか確認できないところをみると、どうやら個人個人で探しに来たみたいですね。ここはそれを逆手に

「しかし、自分の運を感謝したいくらいだ。

こつやって、一人でお前を斬れるのだからな」

取れそうもありませんね。むしろテンション上がってますよ。

「ひよつが氷呀！！！」

何の予告も無しに、冬空先輩が魔装具を横に振るう。それによって生まれたつららが三本。僕を襲う。

「こつっ！」

僕はそれを横に避け、避けきれなかったものを蹴って壊す。だが冬空先輩の攻撃はこれだけでは終わらず、僕が避けた瞬間にすごい速さで接近。上から降り下ろす形で僕に斬りかかる。なんとか反応できた僕は真剣白刃取りの要領で受けとめる。

「こつ……………！！！」

「ちっ」

舌打ち！？ 今この生徒会長舌打ちしましたよっ。

ペルソナがあるとはいえ、形状が日本刀の物で斬られたりしたら……。大丈夫ですよね。

にしてもまずいですねこの状況。

男女の体力差を差し引いてもこの均衡状態は長く続かないと思う。相手は冬空先輩。体力は充分にあると思う。第一、僕がづらい。せめて少しだけでも冬空先輩の注意を引くことができれば

「あ、冬空理事長」

「どこだ？」

視線だけチラリと横に向けると、冬空先輩は顔ごと僕の視線を追う。

おばあちゃん子な冬空先輩なら何かリアクションを取ると思っていました。これもあっさりひっかかるとは。

「隙ありっ」

「なっ……!!」

僕は力が緩んだ瞬間、刀雪嶺斬とうせつれいざんを無理やり取り上げる。すぐさま体制を低くして、足を前に出し冬空先輩を転ばせる。

「つうっ」

「失礼します」

仰向けになつた冬空先輩から離れる。もちろん刀雪嶺斬は預かっ  
たまま。

あー良かった。これで難は逃れられましたね。

「森羅……………。いいだろう。お前がその気なら現代の氷河期の見せてやる。必ずな！」

……………。

僕は無言でスピードを上げた。

2

「あー、疲れた。こんなに全力疾走したのいつ以来でしょうか」

僕は冬空先輩から逃れた後、公園の中で一際木が生い茂り、自然の目隠しになっている場所に腰を落ち着かせている。 さっきまで持っていた刀雪嶺斬は、今魔結晶エレメントの形になっている。本人の意思があれば、離れていても魔装具の発動解除はできると言っていますし、さて、これから先はどうしましょう。

僕としては一ヶ所に留まりたくないですし、少し休憩したらまた移動して

「無駄だよ」

突然の声にその場を離れようとするも、両手と両足首を細い糸のような物で拘束され身動きが取れなくなってしまった。

「ウッフ、見いつけた」

木の影から現れたのは 玲あけみさんでした。

さ、最悪だ……………！

手足の動きを封じられ、僕の目の前にいるのは無自覚刃物少女玲

さん。

こんな状況、飢えた獣の檻に、足の骨を折られたうさぎを放り込むようなものですよ。

「まさか私の魔装具の最初の相手（獲物）が悠夜くんなんて………  
…運命感じちゃうな」

赤くなった頬に手を添えて、可愛いらしく恥らう玲さん。思わず魅とれそうになります。そんな暇は無い。速く逃げなくては。

「逃げようとしてるの？ 駄目だよ。私の『弦』はそう簡単に干切れないよ」

玲さんの弦 魔装具『鋼銀線蟲』。玲さんが指に着けている指輪から伸びる無数の鋼糸が彼女の武器。

冬空先輩が扱う刀雪嶺斬のように直接的な戦闘には結びつかないものの、こうやって対象を拘束できたりする、トリッキーなタイプと言える。

「の、望みはなんですか？」

思わず下手に出してしまう。

もし玲さんの目的が、僕が提案した『鬼ごっこ』を終わらせるだけ（・・・）なら、縛った後すぐに僕に触ればいいわけですから簡単に終わる。

玲さんは僕を生け捕り（・・・）にし、なおかつ何かをしようとしている。あー冷や汗が止まらない。まだ包丁などの刃物の類いは見えないけれど、剣豪の抜刀速度と違ってしまっほどの素早さで抜かれる玲さんは自分の刃物を手にする。油断はできない。

捕まった時点で、油断も何も無いと思いますけど。

「まあ、そんなに怯えないですよ。

怯える悠夜くんがかわいすぎて 壊したくなっちゃうよ」

これって死亡フラグ!?

「望みだっけ……。うーん、特に無いな」

「そうですか……」

「あ、でもあえて言うなら、

欲しいな」

何がとてもじゃないですが、聞けなかった。

「悠夜くん」

玲さんはその手にもはやお馴染みとなった包丁を握り、ゆっくりとこちらへ近付いてくる。玲さんの表情は明るいの、その瞳はどこか黒い影を秘めていました。

最近是比较的おとなしいと思っていたのに、出てきましたか。天<sup>あま</sup>宮<sup>みや</sup>くん曰く、ヤンデレモード。

って、本当に命が危ない!

速く逃げなくてはと手足を動かすも、痛みを覚えるほど強く僕の四肢を固定するワイヤーはびくともしませんでした。

「大丈夫、大丈夫。痛くはしないから」

「よく包丁を持ちながら言えますね! よく人を身動きとれないほど縛っておいて言えますね!」

「もー、うるさいな!。せっかくだいい気分だったのに……。お仕置きしちゃうぞ」

「さつきまで機嫌良かった方なんですか!？」

毎度のことながら、玲さんはみんなの中で一番わからない。  
そんなこんなで、玲さんは手を伸ばせば触れられるぐらいの距離  
まで迫ってきた。

いつでもズブリといけるぐらいの距離まで……。

「悠夜くんが悪いんだよ？ 私にこんな想いを植え付けておいて…  
…。もう我慢できないよ」

(刺される!!!)

そう思った直後、突風が発生し玲さんを襲う。鎌鼬かまたちと表現しても  
差し支えない風が木々を薙ぎ倒し、僕を拘束するワイヤーを切断す  
る。玲さんは優雅に風をかわすと、鋭い目付きで風が起こった左方  
を睨む。

視線の先には悠然と佇む恋華れんかさんが、

「あら、お邪魔でしたかしら？」

涼しい顔で鬨気と殺気を撒き散らしながら呟く。

彼女が持つ鉄扇 扇型魔装具『朴旋華ほうせんか』。桜色をした、綺麗な  
色合いの扇はとても戦闘用の物とは思えないが、扇を振れば魔法を  
使用できるのはもちろんのこと、折りたためば鈍器に広げれば斬撃  
にも使えるという万能武器だ。

「うん、本当に邪魔だよ。フェーデの時といい、恋華は私の邪魔し  
かないんだね」

僕が冬空先輩とフェーデをした日に、何かあったのだろうか。

「それはすみません。ですけど悠夜さん、怯えていますわよ?」  
「照れてるだけだよ」

(違いますからっ)

今の状況は恋華さんと玲さんが臨戦体制を取りながら睨み合い、僕はある意味蚊帳の外。手首や足に絡まる綱糸をほどきながら、状況を見守る。

はつきり言って捕まっていた時よりも強い恐怖を感じる。

いや、だって、二人とも殺気を隠す気配もないし、敵意のかけらは何故か僕にも向けられているし……

「悠夜さんに用があるのですしたら後にしてくださいませんか？ 私はリスさんの言葉に嘘偽りがないか確かめなければいけないので」  
「駄目だよ。悠夜くんはこれからお仕置き(楽しいこと)するんだから」

「……どうやら譲る気はないようですね」

「それは恋華だって同じでしょう?」

「確かに」

あれ、なんだろう。また嫌な予感が……

「退かないと言つのなら」

「力付くで行きますわよ!」

……やっぱりいつもの展開に。

玲さんは右手に包丁、左手で綱糸を使って応戦。恋華さんも朴旋華で包丁の斬撃を防ぎ、魔法の風を起こして敵を打ち払おうとする。激しく繰り広げられる魔法戦。



僕はまたもや蚊帳の外。お互いに目の前の敵しか眼中になかった。これって……………チャンス？  
包丁と暴風が飛び交う中、僕はこっそりとばれないようにその場を去る。

「はあああ！…！」

「まだまだですわ！…！」

二人の怒号とほとばしる殺気を背に感じながら。

……………命が助かって本当に良かった。

3

「見つけたツスよ、悠夜」

「おとなしく堪忍するニヤ」

玲さんと恋華さんを振り切ってから数分。僕はあっけなく二人に見つかってしまった。

「神薙<sup>かななぎ</sup>くんはどうしたんです？」

「あいつはなんでか怒りが倍増してる冬空の姐さんをなだめてるニヤ」

「……………」

なんだか申し訳なくなってきた。てか冬空先輩、姐さんって呼ばれてるんですね。何故か妙にしっくりくる。

「それで、あなた方はどうしたいんです？ 見たところただゲーム（鬼ごっこ）を終わらせる気は無いように思えますけど」

「まあ、そつなるニヤ」

「悠夜をあのに三人に献上しないと、俺らの安全が保証できないんスよ」

「……………」

「どうやら、つくづく巻き込んでしまったようだ。」

「だからお前に触ってゲームを終わらせつつ、」

「悠夜を捕獲しなくちゃいけないんスよ　俺らの平和のために」  
「僕って魔王なんかですか？」

それに近い感じは自分でもしますけど。

「一応言っておきますが、あまみや天宮くんの両手は魔装具ですから、例え触れてもノーカンですよ」

「わかってるぜー。それじゃあ、あんまりフェアじゃないし　二  
ヤー！」

そう言つと同時に天宮くんが突っ込んできた。

天宮くんが装備している魔装具『しょうれいおつ照鈴殴』はシンプルな構造故、リーチこそ短い破壊力が抜群だ。その拳と脚から繰り出される技は、ヘルソナ制御装置で力が加減されているとはいえ、一発でも攻撃を受けてしまえば危うい。

「おつと」

黄色の右拳を紙一重で避けるも、続けざまに強力な回し蹴り。僕は両腕を盾代わりにして防ぐ。蹴りの衝撃で大きく後退する。

正直腕が痛い。

ルールに『魔装具で触れてもゲーム終了にはならない』というもの加えておいて本当に良かった。もしこのルールがなかったら、天

宮くんを相手にするのは骨が折れる。

「……思ったよりも動けるんですね」

「だてにマンガは読んでないニヤ」

以前に天宮くんが『マンガは教科書。あるいは聖書』<sup>バイブル</sup>と声高々に言っていたのを思いだす。

「俺を忘れてもらっちゃ困るツスよ!」

刈柴くん<sup>かりしば</sup>は大剣 魔装具『緑創碎剣』<sup>りょくそうさいけん</sup>を地面へと突き立てる。そして、てこの原理を利用して地面をすくいあげた。

「土竜返し!!!」<sup>モグラ</sup>

瞬間。

すくいあがった大地が巨大な岩石の塊となり、まるで落石のように僕を襲う。

「ええっ!!!」

刈柴くんが得意とするのは地質操作系魔法。

冬空先輩の『氷呀』と同様、自分の魔力や媒体を利用して魔法を行う。この『土竜返し』の場合は、地面の土を媒体としているのだらう。

この岩石群を避けるのは決して難しくはない。けど、

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラニヤー!」

重く、そして速い天宮くんの拳。

僕が岩石を避けた隙を狙い、的確に打ち込んでくる。僕はそれを

足やひじでガードするけど、分が悪い消耗戦だ。

天宮くんは雷電操作系の魔法を利用し、魔力を電気に変えて筋力の性能を底上げしている。アクロバットな動きや、俊敏な足さばきはお手のものでしょう。それにその気になれば、体力強化に使用している電撃も飛び道具として使える。

それに刈柴くんを叩こうとしても、大剣と素手。勝ち目は低い。いや、例え刈柴くんに勝利してもその隙に天宮くんに捕まる。

ゲームが『鬼ごっこ』なだけに、このペアは非常に厄介だ。

(正面突破、よりも戦線離脱した方が良さそうですね、これは)

二人の魔力切れを狙う手もありますけど、魔力の量がわからない以上博打やギャンブルに等しい。最悪、僕の体力が底を尽きてしまいかもしれない。

(やはりここは多少強引でも逃げきるしか……！)

僕は二人を正面にしながら、バックステップの容量で距離を開ける。

「させないニヤ！」

天宮くんが素早く反応し、僕を追う。拳をひじで防ぎ、更に後退する。刈柴くんは距離が開き過ぎたため、天宮くんと一緒に僕を追いか魔法を使うか悩んでいた。

(チャンス！)

僕は天宮くんの蹴りを避けるのではなく、手のひらで受け止める。そのまま間を開けず、魔装具の具足の部分を掴む。

「ニヤ！？」

「失礼します！」

遠心力を利用して、天宮くんを刈柴くんへおもいつきりぶん投げ  
る。

「ニヤー！ おまつ、悠夜これはキツ わー、大地だいちーっ、受けと  
めてー！」

「え、ちよっ、まつ うげっ」

人間砲丸となった天宮くんは目的通り、刈柴くんへ命中。刈柴く  
んも避けたり剣を使うわけにはいかず受けとめたせいで体を強打。  
身動きが取れなくなった。

「うっう、イタタ……」

「悠夜、いくらなんでも痛いッス」

「お前絶対今ので月弦つきじまとか姐さんの鬱憤つっぴんはらしたたる！」

……否定はできない。

罪悪感がわかないわけではけど、今は逃げるのが先決。僕は二  
人に背を向けて再び走り出そうとした、その時

「フレイムストライク  
火炎直球！！！」

人間大の大きさの炎球がまるで隕石のように、僕に襲いかかる。

「おわっ！」

ギリギリで避ける。着弾と同時にはじけて消えた炎球の向こうに

は、神薙くんが槌型魔装具　　紅煉獄を手に持っていた。

はめられた。

神薙くんとは別行動を取っているとっておきながら、実は近くに潜んでいたのか！

状況は更に悪化してしまった。

二人だけでも辛かったのに神薙くんも加わったとなれば、このままでは本当に捕獲されてしまう。

どうするか。

そう思い視線を動かすと、未だに立ち上がっていない天宮くんと刈柴くんが目に入った。ん？　二人は僕を襲撃した神薙くんを見て『何故？』という顔をしている。

そこでふと考えた。

本来味方である天宮くんと刈柴くんは神薙くんに対して本当のことを言っていて、彼らにも神薙くんの登場は予想外の出来事だったのだろうか。

じゃあ、神薙くんはどうしてここにいるのか？

『あいつは何故か怒りが倍増してる冬空の姐さんをなだめてるニヤ』

天宮くんの言い分だと、神薙くんは冬空先輩と一緒にいるはず（・

・・・）。

その神薙くんがここにいると言うことは……………

「ありがとう神薙。おかげで森羅を見つけ出すことができた」

神薙くんの背後。そこから亡霊のように現れたのは、先ほど会ったばかりの冬空先輩でした。

「あ、姐さんっ。いや俺たち頑張ったニヤっ。本当ニヤー！」

「そうツスよ。悠夜がなかなか捕まらなくて……、あーでも手なん

て抜いて無いツス。俺らはいつでも真剣ツスよ!？」

エクソシスト 魔祓師の登場で動揺したのは僕だけでなく、数十秒前まで戦っていた二人もテンパっていた。そう言えば、僕を捕獲するとかなんとか言っていましたもんね。

二人の取り乱した姿を見て、僕は幾分か落ち着きを取り戻していた。

冬空先輩は確かに魔法使いとしての実力は申し分ないですけど、果たして杖（魔装具）無しではどこまで行けるか。男子三人は魔装具所持ですが、こうなっては何がなんでも突破を

「あの、冬空先輩。その手に何を持ってるんです?」

「私の魔結晶だが」

それがどうしたと言わんばかりの表情。

冬空先輩の魔結晶エレメントを、冬空先輩自身が持っているのは、何も自然なところは無い。

でもその魔結晶エレメントは、僕が隙を見て奪ったはずだ。ポケットを確認しても、やっぱり無かった。

いつ? なんで? どうして?

「ああ、それは私が返したんだよ。落とし物はちゃんと持ち主に返さなくちゃ、ね?」

後ろを降り向く。

そこには包丁を持っている玲さんが。

.....。

最悪だっ!

冬空先輩（バーサーカー状態）だけでも厄介すぎるのに、玲さん（ヤンデレVer）まで……。

「さつき悠夜くんを縛ってる時にね。見つけたんだ。エ・レ・メ・ン・ト」

うん、玲さん？　そう言えば玲さんって確か恋華さんと一緒にいたような

「ここにいますわよ」

「やっぱり！」

いつの間にか全員集合。

僕は女子三人に囲まれ、デルタフォーメーションの中心にいた。

「って、俺らまで囲まれてるんですけど!？」

「なんでだニヤ、なんでこうなってしまったニヤ！」

「あー、悠夜。いつもどうやって切り抜けるんスか、死亡フラグ。人生で初めてそれに直面してるスけど！」

デルタフォーメーションに捕らえられたのは、僕だけでなく神薙くんたちも脅威の包囲網に入っていた。

「僕としては好都合ですけどね」

「ちよっ、悠夜の笑顔が黒いんスけどっ！　ものすごく嫌な予感がするんスけどっ」

「協力しようぜ悠夜。昨日の敵は今日の友と言う素晴らしい名言があるニヤ。だから一緒に生き伸びようぜ!？」

「こうなったら全員道連れです」

「悠夜。嘘だと言ってくれっ。俺ら友達だろ！」





「私達からは逃げられませんかよ！ いい加減捕まりなさい！」

僕達を追う美しくも鬼のような表情を浮かべる三人。

追われながらも僕は不思議な高揚感を感じていました。

僕開催の鬼ごっこはみんなの体力が尽きるまで、続いた。

あれ？ 何か忘れてるような……

### 一方その頃

「お兄ちゃん……砂時計終わったよ。リリースは寂しいよ。これってあれなの、放置プレー？ 興奮するけど焦らし過ぎるのは良くないんだよ。お兄ちゃん……グレてやる！ もうヤンキーになつてお兄ちゃんの好きな湯飲みを壊してやる！……お兄ちゃん、嘘だよ。リリースはいい子だから一緒に遊ぼうよ。」

ぐすん（><）。。」

第十四夜 鬼は嘆き、狩人は血を欲す（後書き）

これで鬼ごっこは終わりです。

……修行、こんなのでいいのでしょうか？ ああ、アイデアが欲しい。

次話はしばらく放置してた演劇部の面々もだし予定です。

それでは失礼します。さようなら！

books それぞれの聖書(グリモア) (前書き)

テスト期間の合間に書きました。

短編のノリで読んでください。次回はちゃんとストーリーにそったものを載せたいと思います。

それと、お詫びが一つ。

大地くんの名字ですが、古いデータをこの間みたら、『刈柴大地』でした。

伝助はこの古いデータを元に執筆しているので、大地くんの名字の漢字を変えさせていただきます。

読者の皆様にご迷惑をお招きするようなことをしてしまい。本当にすみません。

伝助はこれからも日々精進しますので、どうかよろしくお願いいたします。

長くなりましたが、それでは本編です。どうぞぞ〜

books それぞれの聖書(グリモア)

book 0

「ねえ、森羅<sup>もりあみ</sup>くん。ちょっといいかな？」

「はい、なんででしょうか」

「実はちよつと相談があるんだけど……、今日ちよつど外せない用事ができて図書委員の仕事出れなくなつたんだ。

ものは頼みだけど……、放課後だけでいいから、私の代わりに仕事してくれないかな？」

「僕は大丈夫ですよ。今日は部活もありませんし」

「本当っ？ やつたー、ありがとう。いやー、助かったよ。今度何かおごるね」

「いえいえ、お気になさらず(ニコッ)」

「あっ、うん……ノノノ(森羅くんって、こういう人だから嫉妬とかを買っただろうな)」

「どうかしましたか？」

「ううん、何も。それじゃあ、よろしくね」

「わかりました」

さてと、引き受けたはいいですけど、あまり仕事もありませんね。終了時間まで本でも読んでますか。

あ、ちよつどいいところに、鼻屑鼻屑にしている作家の最新作が。暇潰しにさせていただきましょう。

僕は本に手をかけるも、ぎゅうぎゅうに詰めて棚に入っているのが軽く引っ張つただけでは取れなかった。

多少強引だけど、力をこめて強く引っ張る。

するとどつだろつ。

まるで漫画の展開のように他の本も勢い良く飛び出してしまった。

床一面が本で埋まってしまった。

「図書委員も大変ですね……」

book 1

「あれ、悠夜くん……?」

「雲雀先輩、こんにちは」

「図書委員だったの?」

「いえ、僕はクラス委員長です。今日は代理として来ています。…

…あの、もう少し距離縮めてくれませんか? 話し辛いです」

「えっ。うん、そうだよね。悠夜くんは後輩で、私は先輩なんだから大丈夫。大丈夫大丈夫大丈夫……」

「(本当に大丈夫ですかね。部活の取り決めでお互いを名前で呼び合うことになってますけど、雲雀先輩は上がり症というか人見知りですし)ところで、本を借りに来たんですよ。手続き済ませますよ」

「大丈夫大丈夫……、えっ? あ、ああ、そうだね。うん、借りに来たんだもんね。じゃあお願いしていい?」

「わかりました。……あの、雲雀先輩が近付いてくれないと」

「こ、これは、悠夜くんが苦手とかちよつと怖いんじゃないんだよ? ええと、なんと言うか、こ、これは演技なんだ。男の子が苦手な男の娘の役を」

「落ちついてください、言ってることがめちゃくちゃです。肌には触れませんから本を僕に渡してください」

「は、はいっ(シュバツ)」

「渡すと同時に、バックステップしなくても……。ん？」

本は全部で二冊。

『シエイクスピアの悲劇』、『舞台から見る舞台』

「本当に演劇が好きなんです。先輩の向上心と演劇に対する情熱は本当に尊敬します」

「そ、そんなんじゃないよ。私は……」

「はい、手続き終わりましたよ」

「えっ、あ、ありがとう。じゃ、じゃあね。また明日、部活で」

「はい、さようなら」

book 2

「あら、悠夜さん。こんなところで何してるんですの？」

「今日だけ図書委員の代理をしてるんですよ。頼まれてまして。借りに来たんですか？」

「ええ、じゃあお願いします」

本は一冊。

『これである人はイ・チ・コ・ロ？ 男は体でメ・ロ・メ・ロ』

「……………（ブルツ）」

「あら、どうしたんですの？」

「あー、他にもいい本とがありますよ。この本は特に人気もありませんですし、今借りなくても平気ですよ。いや、もつずっと借りなくても……………」

「まー、それは悠夜さんといえども、聞きつてなりませんわね。本も読まずに、そんなことをおっしゃるなんて。試しに読んでみたら

「どうです?」

「いえ、結構です」

「なんなら、教えて差し上げましょうか? 私の中で」

「あ、あの、図書室でそういうのはいけないですって、そんな、あつ、ダメです!」

「フッフ。ちようど誰もいませんし、このまま」

『（ピンポンパンポン） 一年D組の霧坏恋華きりつきれんかさん。霧坏恋華さん。至急、茶道部の部室まで来てください。繰り返します』  
「チツ」

「（た、助かった……）」

「というわけですので、私はそろそろ行きますわ。あ、ちゃんとその本は手続きしてくださいね」

「はい……。どうぞ」

「ありがとうございます。それでは、また明日」

「はい、さようなら」

「悠夜さん悠夜さん」

「?」

「チユツ」

「えっ、あわわわ!」

「うふふ。今日はこれぐらいにしてあげますわ。それでは」

「……………（ほっぺたにキスされた!）」

book 3

「これお願いッス。あれ、悠夜?」

「そうですよ。今日は僕が図書委員です」

「ふーん。大変ッスね。じゃあ、頼むッス」

「はい」



本は三冊。

『魔陣獣が見る世界』 『これでわかる 魔陣獣の生態』 『キャン  
プのイロハ』

「あ、これ知ってます。『 の見る世界』シリーズ。とてもおもしろいですよね」

「そうなんスか。俺は先輩に薦められたから借りに来たんスけど。他のはどんなのがあるんスか？」

「僕が読んだものでは『悪魔が見る世界』、『ホムンクルスが見る世界』があります。どちらもとてもおもしろくてオススメですよ」

「わかったツス。今度読んでみるツス」

「にしても、キャンプでもするんですか？」

「ああ、今度ワンダーフォーゲル部と一緒に合同でするんスよ。俺ら実験部は魔陣獣の研究を主にするんスけど」

「へえー、そうなんですか。あ、ところで、なんで僕を実験部に誘ったんですか？」

「え、あーと、それは……、知り合いが一緒の部にいたらいいな、なんて思っただけツスよ。本当、それぐらいツス（部長に実験対象として部に入れるなんて言われたからって、口にしない方がいいツスよね。部長、まだ諦めてないし）」

「そうでしたか。あ、今度遊びに行ってもいいですか？ おもしろそうですし」

「いや、やめといた方がいいツス！」

「そ、そうですか。わかりました」

「それじゃあ、俺はそろそろ行かせてもらっツス」

「はい。さようなら」

「……悠夜」

「なんですか」

「フラグに負けちゃ、駄目ツスよ」

「？ ……わかりました」

「お兄ちゃん。会いに来たよ」

「え、リリースさん？ どうしてここに」

「さっきダイチから聞いてから。その廊下でばったりして」

「そうでしたか」

「ねえねえ。リリースもお手伝いしていいかな？」

「構いませんよ」

～～～10分後～～～

「ご主人様」

「今はメイドなんですね」

「退屈です。暇暇です」

「あきるの速いですよ。僕みたいに本を読んではいいじゃないですか。まあ、放課後ですから人も少ないのは当たり前ですけど」

「ご主人様、しりとりしませんか？」

「いいですね」

「じゃあ、リリースの『ス』から」

「酢」

「す、す、す、すいかっ」

「蚊」

「か！？」

「か、亀」

「眼」

「もーっ、なんで一文字で返すんですか、ご主人様はあれですかっ、

一文字フェチですか！？」

「違いますよ。そんな特殊な趣味は持ち合わせてませんよ。それよ

りもリリースさん、集中力無すぎですよ」

「む〜」

「本を読んだらどうです？ この前も読んでましたよね、メイドのなんとかを」

「あれはあの時読んでたのが最新刊で、他のは全部読んでるんです」

「そうだったんですか。それでは、これを期に他の本も読んでみてはどうですか」

「うーん、でも選ぶのがめんどくさい」

「そうですか」

「ご主人様はまだ図書委員をやるんですか？」

「はい。まだ時間内ですし」

「わかりました。では、リリースは帰って晩御飯の用意をしておきます。何かご要望はありますか？」

「そうですね。酢豚、お願いできますか。パイナップル有りです」

「了解です。メインディッシュは酢豚、デザートにはリリースですね」

「リリースさん。後半の、僕は口にも出してないんですけど」

「任してください。腕によりをかけて準備をします（ジュルリ）」

「なんで僕を見ながら涎を垂らしてるんですか？」

「お兄ちゃん、いろいろ楽しみにしててね？」

「今度は義妹ですか。というか、何ですか。いろいろって」

「もう、そんなことリリースに言わせないですよ。……お兄ちゃんのエッチ／＼」

「だから本当に何なんです！？」

「楽しみにしててね〜（タタタツ）」

「あ、ちよつと。……行ってしまいました。リリースさんの料理は美味しいですけど、それとは別になんだか不安ですね。

あ、リリースさん、図書室来たのに結局何も借りてない」

「ん、悠夜？ こないとこで何してるん？」

「あ、京さんみやま。こんにちは。今日は一日図書委員をやっているんです」

「ふーん。ご苦労さん。じゃあ、これ頼むわ、返却」

「はい」

本は二冊。

『インド人ですら涙を流す 脅威の激辛カレー！』 『Let's eat 〱辛党版』

「（また偏ったチヨイスですね……）はい、終わりました。本はこちらで返しておきます。何か借りますか？」

「ほなら、これ頼むは」

『お家で簡単に作れる家庭的な殺人激辛料理』

「駄目ですよっ、こんなの食べては！」

「別にいいやる。味覚は人それぞれなんやから。だいたい、こんなハツタリや。食つてもそこまで辛へんもん」

「でも、ページを開くとどれも刺激物と言うより、もはや激物と言つた方がいいものばかりなんですけど」

「料理は見た目やない。味や」

「見た目も重要ですし、そもそも味だつて安全と言えるかどうか」

「なんなら今度作つて、悠夜にもお裾分けしてあげるで。うちこれでも自炊派やから」

「それは遠慮しておきます。まだ味覚が正常でいて欲しいので。

……どうぞ、手続き終わりました」

「おおきに」

「あ、そうだ。少し伺つてもいいですか？ 雲雀先輩のことで」

「雲雀先輩？ どうかしたん？」

「先輩って、誰にでもあのような感じなんですか？」

「ああ、あの人見知りというか、モジモジのこと。ウチは今年から入ったから付き合いは長いと言えへんけど、人見知りもそうやけど男子には特にひどいらしいで。努先輩じつむも今では、まあ話せないこともないけど昔は大変やったって言ってたで」

「そうなんですか。なんだか不思議ですね」

「せやろ。ウチも始めは舞台上の雲雀先輩とおろしてる雲雀先輩が同一人物とは思えへんもん。中にはそのギャップがいいって言うてる奴もおるらしいけど」

「確かに、雲雀先輩って美人ですよな」

「でも、貧乳やけどな。くっくっくっ」

「（京さんも人のこと言えないと思いますけど……）」

「（ギロリ）今何か失礼なこと考えたやろ」

「い、いえ、何も」

「ふーん。ま、ええわ。あ、悠夜やって怪異とかに詳しくったりする？」

「人並みだと思います」

「そっか。ほなら、ウチはもう帰らせてもらっわ。また明日な、さいなら〜」

「はい。さようなら（怪異に興味でも持っているんでしょっか？）」

## book 6

「これを頼む。つて、森羅!？」

「こんにちは、冬空先輩ふゆぞら」

「な、何で、お前が図書委員を？ 確か今日は女子が行っていたはずだが……」

「交代して欲しいと頼まれたんですよ。……何回もこれ言うのさすがにうんざりしてきましたね」

「そうか、それは大変だな。(クソツ、ここで代打とは……盲点だ)」

「にしても、よく本来の図書委員が女子なんて知っていましたね。冬空先輩って、図書室よく利用されるんですか？」

「え、あー、うん、そうだな。図書室は昼休みもよく来るし、文学などをよく読むな」

「そうなんですか。僕はよくファンタジーとかも読むんです。最近あまみやは天宮くんの影響でライトノベルとかも読みますけど」

「意外だな」

「他の人にも言われます。でも、基本的に雑食ですから、何でも読みますね。」

あ、ところでその本借りますか？手続きしますよ」

「うっ、え、えーと、いや遠慮しておく。また今度にも借りますとしよう。私よりもこの本を借りたい人がいると思うし(言えないっ。三冊のうち二冊がバストアップ法が載っている本だなんて……！)」

「そうですか。それなら本返しておきますよ。これも図書委員の仕事ですから」

「ちよっ、いいからっ。本当にいいからっ。これぐらい自分自身でケリをつけるって。そんな笑顔で本に手を伸ばすなっ。まま待てっ、頼むから本に触らな 刻むぞ!!!」

「(ビクッ)……はい。すみませんでした」

「わかればいい。じゃあ私はこの本を返したら、そのまま帰るから。それでは、また(ああ、結局本を借りれなかった)」

「はい、さようなら(嫌がる先輩がおもしろくて調子に乗ってしまった……)」

「「はあ……………」」

「満を持して俺の登場だニヤ！」

「誰に言ってるんです？ それと、図書室ではお静かに」

「ニヤー、悪い悪い。俺こういう所あまり来ないから、いまいち乗りがわからんニヤ」

「図書室で何に乗る気ですか。返却ですか？ 借りに来たんですか？」

「なんか俺の扱い雑じゃね？」

「正直疲れて来ました」

「へえー。こんな時間帯でも人来るだニヤ」

「ええ、天宮くんを入れて七人。しかも、キャラの濃い人ばかりでニヤハハハ。それでも、お前の周りに比べればちよっとはマシだろ」

「……………」

「え、何その沈黙。何で涙目？」

「僕の『日常』ってこんなものなのでしょうか？ どうして苦難の連続なのでしょうか？ これじゃあ『非日常』と変わらないですよ……………」

「なんでこんなに悠夜の周りの空気が重いニヤ？ なんで悠夜の肩にどんよりとした黒いモヤモヤが？ な、なあ悠夜。もしかしてこれ俺のせいかなニヤ？ おーい、悠夜」

「いえ、僕の普段の行いが悪いのですから、僕がこうして生きているのが悪いのですから。アハハ」

「こわっ。ええー、こういうテンションのやつって、どう扱えばいいニヤ……。そ、そんなに落ち込むなよ、悠夜。誰だっついてない時はあるニヤ」

「もし転生できるのなら、誰かの役にたてる酸素になりたい」

「落ち着け、悠夜。生まれ変わりどころか、酸素は生物ですらないから」

「そして僕は空気へと霧散していくのですね。何の痕跡も足跡も残

「さずに……」

「いやつ、大丈夫だからつ。いい加減、鬱モードはやめるニヤ！  
あーもう、悠夜、スマン！（パチンツ）」

「痛つ。ハッ、僕は何を……」

「お、戻ってきた。なんか一人でぶつぶつ呟いてたニヤ。悠夜大丈夫か。お前結構ストレス溜まってんじゃない？」

「うーん、どうでしょう。確かにアストラルは慣れないところですが、やはりこういう環境は僕にとって負荷が架かるのでしょうかね」「ニヤー、俺とか亮は悠夜じょうみたいにに高校からアストラルに入ってきたから、よくわかんねーな。俺も亮も積極的にアストラルに来たかつたし。お前はなんでアストラル来たんニヤ？」

「僕は 通える高校がアストラルにしかありませんでしたから」

「あ、そつか……。悪い」

「いえ、別にいいですよ。そこまで気にしてませんし」

「……それなら聞いてもいいか？ 魔術決闘フェーデの時はうやむやになつて結局聞けなかったけど、お前つてやつぱり裏口入学なのか？」

「近いですね。アストラルに来る前、ひったくりを捕まえたんです。それでアストラルの最高理事長の一人に気にいられ、僕の身の上を話したんです。僕が魔力を持ってないって知ってましたっけ？」

「ああ、一応は」

「魔法社会の中で魔力を持たないのは致命的欠陥ですからね。どの高校も門前払いされたんですよ。まあ、僕自身そこまで高校に通う気もありませんでしたし、生きるあてもありませんでしたから特には気にしなかつたんですけど。」

最高理事長はそんな僕を特別にアストラルへ入れるようにしたんですよ」

「そうだったのか」

「ちなみに、その最高理事長は冬空先輩の祖母にあたります」

「ええ、マジでか!？」

「マジです。そのせいでフェーデにまで発展したようなものですし」



「そうだったのか。それなら納得がいくニヤ。……なんかお前っていろいろ大変だニヤ」

「玲あまさんにも言いましたけど、いろいろ慣れました。最初がどうだったと覚えていても、それに実感も沸きませんし。」

「気付いたらそこにいて、気付いたら歩いていて、そして僕は気付いたらここに居ました。」

「こんな感じですよ」

「お前って よくわからないニヤ」

「フフフ。僕自身、自分というものが今も昔もよくわかりませんからね。」

「自分探したニヤ」

「めんどろですわね」

「まあまあ、そういうニヤって。学生は『自分探し』が仕事って言ったニヤ、瀬野せの先生が」

「いい事言っているのに、瀬野先生が言つと、なんだか違和感がありますね」

「学園都市で酔っ払う人もんニヤ」

「本当にしなくてもいい仕事までクラス委員長（僕）に回して。いったいどれほどの短期間で、僕が苦労したことか……」

「ま、まあまあ、落ち着くニヤ。確かにああいう人だけど、根はい人ニヤ。多分」

「ところで天宮くん」

「ニヤ？」

「あなたは何しに来たんですか？」

「……………ニヤんだっけ」

「たいしてようもないのに図書室へ来たんですか。まあ、駄目ではないですけど」

「いやー、最近はキャラの濃いやつばかりだから、ちゃんと出とかなきゃまずいかニヤ〜って」

「何の話ですか？」

「ま、今日はお前の話しも聞けたし、俺的には図書室に来てラッキ  
ーだったニヤ。んじゃ、俺はそろそろ帰るニヤ」  
「せっかくですし、何か借りたらどうです？」  
「遠慮しておくニヤ。今日は家で積みに重ねたマンガを読まなきや  
いけないからニヤ」  
「そうですね。さようなら」  
「じゃあニヤ〜」

book 8

「よーつす。部活の合間にやって来たぞー」

「誰から聞きましたか？」

「響」  
ひびく

「予想通りな回答ありがとうございました。はあ、立て続けに来るか  
らもしやとは思いましたけど。こうして、永久循環の輪はできるん  
ですね。騒ぐのは駄目ですよ、図書室ですからねここ」

「わかつてるって。俺だってマンガくらい読むぞ」

「結局読むのはマンガですか。というか、野球部ってそんなに緩い  
んですか？ 僕のイメージではもっと厳しいかと思っていました」  
「そんなでもないぜ。特別厳しいわけではないし、緩いわけでもな  
いからな。顧問も結構ギャグとか通じる人だし。もっとも、ちゃん  
と練習に出たり実力がないとベンチ入りさえ難しいからな」

「大変ですね」

「まあな。悠夜のところの演劇部はお前を入れて五人だっけ？ 少  
ないけどレギュラー争いとかさうのってあるのか？」

「無いですよ。部長の意向で五人全員が出れる台本を探すそうです」

「へー、それなら悠夜も出るのか。もし劇やるなら見に行くぜ」

「ありがとうございます」

「途中で寝ると思うけど」

「それは来た意味ありませんよ。僕も都合が取れたら、神薙かんなぎくんの試合を見に行きますね」

「おお、まじか。そしたら特大のホームランを悠夜に当ててやるよ。僕は何かですか？ ホームランは打つだけにしてください。」

それに、キャッチぐらい僕にもできますって」

「じゃあ、レーザービームを悠夜にぶつける！」

「だからなんで僕に当てたがるです！？ しかもそんなことしたら、エラーですよ」

「んなことはわかってる」

「わかった上での暴拳ですか。なんだか試合を見に行っても、神薙くんが打席に立つ度に冷や冷やしそうです」

「そう言うなって。さてと、そろそろ時間だしマンガ借りて戻るか」

「本当に合間をぬって来たんですね」

「えーと、黒のバスケットはどこかなと」

「え、バスケットマンガ！？」

book 9

「ヤッホー。悠夜くん、来たよ」

「やはり来ましたか」

「？」

「あ、いえ、なんでもありません。部活が終わったところですか？」

「そうだよ」

「今日は遅くまでやったんですね」

「一年生の一人がぼや騒ぎを起こしちゃって。その後片付けしてた」  
「なるほど。体、大丈夫ですか？ やけどとかしてませんか？」

「平気だよ。ありがとう。そうだ、ついでに本借りてもいいかな？」

「大丈夫ですよ」

本は全部で五冊。

『Let's eat く愛しいあの人をおとそう』 『上手な首輪の選び方』 『絶対にばれない薬物投与十の法則』 『あなたと私の監禁生活 く二人だけの世界を作るには』 『包丁の使い方 く上級者編』

「（……悪寒がつ！）」

「どうしたの悠夜くん、なんだかとても寒そうだよ？」

「いえ、なんとも本のラインナップが……。あの、五冊はさすがに多いと思いますし、何度かにわけて借りたらどうでしょうか？」

「えー、長い間待ってやっと借りれるのに。この本どれも人気なんだよ？」

「大丈夫ですか、うちの学校！？ 結構危ない本ばかりですよ、

さつきから！」

「さつきから？ 私の他にも誰か来たの？」

「はい、聞いてくださいよ。京さんなんて」

「京って、だれ？」

「はい？」

「もしかして、演劇部の人。へー、もう名前まで呼び合うようになったんだ。ふーん」

「あ、あの、玲さんウツキ。なんで声のトーンを下げるんです？ 瞳も単

色ですし……」

「フッフ、私なんて最初にフラグが立ってるっていうのに、未だ攻略してない。おまけに他のはどんどん立っていく。あーあ、どうしようっかな。お姉ちゃんに相談しようか、それともこの間した相談を無視して」

「あの、玲さん」

「え、なに？」

「包丁しまってください。図書室は、いや、学校にそういうものは持ち込み厳禁ですからね。何度も言わせてもらいますけど」

「あ、ごめんね。ついっつかり」

「そのついうっかりで僕は何回刃傷沙汰に巻き混まれたものか」

「ねえ、悠夜くん。今日は遊びに来ない？」

「今からですか？ それはちょっと……」

「なんで、どうして！？ リリスちゃんがいるから！？ そっかあ、

リリスちゃんがいるからか。そうだよね、リリスちゃんは家に帰っても悠夜くんと居れるもんね。いいなあ、いいなあ、いいなあ。

私は会えるの学校だけだっというのに……!!」

「い、行きますっ。玲さんの部屋」

「本当っ」

「はい、だから包丁はしまってください」

「ウフフ、やったー。何か晩御飯のリクエストあるかな？ 私頑張るよ」

「……………酔豚でお願いします」

「うん、わかった それじゃあ、私の部屋に行こうか？」

「はい、そうですね。ちょっと、待っていてください。司書の先生に言ってきますので」

「大丈夫だよ。さっきそこで会って、悠夜くんは私と一緒に帰るって言ったら、戸締まりしてくれるって」

「そうでしたか」

「悠夜くん。本、本」

「はい。…………あの、やっぱり」

「もちろん五冊だよ」

「了解です 終わりました。どうぞ」

「うん、ありがとう」

「（今だ！）」

ダッ！！！（僕が足を勢いよく踏み出し音）

サクッ！（僕の進行方向、床にアイスピックが刺さった音）

「どうしたのかな、悠夜くん？　もしかして逃げようとしたの？　ひどいなー、悲しいなー。悲しくて涙が出そう。悠夜くんも　泣きたくはないよね？」

「に、逃げるっ。そんなわけありませんよ」

「そうだよ　行こっ」

こうして僕は玲さんに半ば強制的に連行され、夜遅くに解放されて帰っても、怒ったりリスさんに説教をされるはめになりました。

やっぱり図書委員って大変ですね……

## 第十五夜 影は気付かぬ内に、僕らの足元に

1

新聞の見出しには大きな文字で『ドッペルゲンガー現る！ 新種の怪異か！？』と書かれていた。

「なんですか、このドッペルゲンガーって？」

「都市伝説ツスよ。知らないんスカ？ 姿形はもう一人の自分で、出会ってしまったら死んでしまうんス」

「即死ですか？」

「うーん、どうツスカね。俺も詳しくはわからないツスけど、昔から有名ツスねドッペルゲンガーは」

「そんな都市伝説が、今は怪異と同レベルの扱いですか。行方不明が多発したからって、簡単に騒ぎ過ぎですよ」

「いや、行方不明も充分大事ツスよ。でも、行方不明者の中には『もう一人の自分に会った』と言った数日後にいなくなった人もいるって話しツス」

「大変ですね。真相がどうであれ、怪異として騒がれているのなら、<sup>エカソシスト</sup>魔祓師も動くんでしょうね」

「そうみたいツスね。この記事にもエカソシストを増員すると書いてあるし。ま、ここ（アストラル）とは関係無いツスね。今のところアストラルの学生は行方不明になって無いらしいツスし」

「やれやれ、人騒がせな。僕が行方不明になる前に速く捕まって欲しいですね」

「ウイース。……お前から朝っぱらから新聞読んでのか」

「おはようございませす、<sup>かんなき</sup>神薙くん。言っておきますけど、新聞は朝に読むものですよ」

「そうツス。朝に新聞を読んで、昼に話し合うのが大人つてやつツス」

「大人というかジジくさいぞ。それスポーツ新聞？」

「ものによつては読む気まんまんじゃないですか。違いますよ。チラシと載つてますけど、あくまでニュースが主体です」

「なんだ、つまんね。じゃあ大地たいち、一時間目になつたら起こして、寝るから」

「了解ツス」

「朝練のあるところは大変ですね。僕のところは大丈夫でしょうか」  
「演劇部は朝練とかあるんスか？」

「今は放課後だけですけど、舞台公演が近くなつたらやるかもしれ  
ません」

「悠夜は何の役で出るんスか？」

「それは教えられません」

2

「あー、だるい。早く帰りたい」

「瀬野先生、まだ六時間目のLHRロングホームルームが残っていますよ」

「クラス委員長、頼んだ」

「そう毎度僕に押し付けるのは止めてください。あなたは本当に教師ですか？ 職務ぐらいまっとうしてくださいよ。ただでさえ、基本僕に丸投げなんですから」

「わかつたわかつた。」

「じゃあ、プリント配るぞ。これには原稿用紙が印刷されているから、将来の夢について書いてくれ」

「え、作文？ 普通こうというのはアンケートとか、そういうものは？」

「別に構わないだろう。今回学年主任に言われたことは、進路調査





「当たり前だ。今言ったからな」

「何でこんなことをするんですか？」

「単純明解。私が暇になるからだ」

「動機が不純かつ至極どうでもいい！」

「はいはい、お前らの言い分は聞かん。学年主任にもちゃんと許可は取ってある」

「職権乱用ですよ」

「さうで、最初は誰かな？」

「人の話しを聞いてください。この無能教師」

「ジャジャン！ おつ、最初は月弦つきじゆんだな。じゃあ月弦、起立して読み上げてくれ」

「は、はい」

戸惑いながらも、玲あきさんが立ち上がる。

原稿用紙を目線の高さまで持ち上げると緊張した赴きで、

「短いですけど、読みますね。」

『将来の夢 お嫁さん』

玲さんが自身の作品のタイトルを口にす。それだけのはずなのに、僕は何故か恐怖感を覚えた。

「『私の夢は、まるで幼稚園児のようかもしれないけれど、好きな人と結ばれて、監禁（結婚）生活を送ることです』」

あれ？ おかしい。

結婚が何故か違う意味に聞こえてしまった気が……。

「『私だけかもしれないけれど、子供は欲しいと思いません。だっ

て、もし子供ができてしまったら、夫の愛情が分割されてしまうからです。そんなこと許せません」

え、実の子供にまで嫉妬!?

「『それにもし万が一、夫が浮気をするようであれば……、ウッフ』」

恐いっ。何を具体的にするか、言わない分想像力が嫌でも働いてしまう。

「『もちろん夫の世話は私が見ます。その為に花嫁修行というわけではないですが、日々勉強しています。料理から始まり、家事や家計のやりくりの仕方、包丁の扱いも学んでいます』」

何でわざわざ料理と包丁の勉強を別に!?! 一つにまとめていいでしょうっ。やっぱりあの本は貸し出すんじゃないかった。

「『そして、夫の最期の時は私が必ずみとります。例え、夫が鮮血の中で倒れたとしても』」

むしろ、玲さんが『夫』を鮮血に染める気が……

「以上です」

「うん、なかなか可愛いらしい夢だったな。はい、読み終えた月弦に拍手」

クラスメイトの拍手の中、照れたのか玲さんは可憐に頬を染める。そんな仕草さえ、僕は恐怖心を抱いてしょうがなかった。

「お兄ちゃん。そんなに気にしない方がいいよ」

僕の後ろの席に座っているリリスさんに、後ろから声をかけられる。

「……………監禁されるならせめて、外の景色が見える窓がある場所がいいですね」

「駄目だよそんなこと考えちゃ！」

一瞬、鎖に繋がれた自分を想像してしまった僕。

「じゃあ、次のやつを選ぶぞ」

そんな僕の心境を露も知らずに、瀬野先生は次のくじを引いた。

「次はペンドラゴン、お前だ」

「はい」

七番目になって、リリスさんが読み上げることになった。

今までの人は読むことに多少の抵抗があったようですが、リリスさんはそんな感じを全く出さない。

「タイトル『メイ道』」

受け狙いと思いたいタイトルですね。

「私の夢は、もう叶っているかもしれませんが、お兄ちゃんのメイドになることです。私とお兄ちゃんは以前、主従関係を結んだの

です」』

途端、クラス中から僕へ不信四割、羨望二割、嫉妬四割の視線が集まる。

痛い。

主に心が。

「でもお兄ちゃんは恥ずかしいのか、なかなか私にメイドとしての仕事をさせてくれません。お風呂で体を洗おうとしてもリリスを追い出すし、添い寝しようとしても拒否して一人で寝てしまいます。口では言えない夜の情事も、ぜんぜんしようとしません」』

なんだかクラスメイトの眼差しが、シスコンを通り越して犯罪者や変質者を見るそれにな変わってきている気がします。

何故？ むしろ僕は正しい判断をしているはずなのに。

「『私はそんなお兄ちゃんと、これからもより良い、改善された主従関係を結びたいです』 終わり」

「はい、ペンドラゴンに拍手」

リリスさんに浴びせられる拍手。着席すると僕の背中をツンツン押す。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん。リリスのどうだった？」

「1000点満点です」

僕を貶める事に関しては。

「それじゃ最後に、ペンドラゴンの主人で義兄の森羅もりあみに読んでもらおう」

「相変わらずの無茶ぶりですね」

嫌々立ち上がるも、あくまでくじ引きですしこういう展開を予期  
なかつたわけではありません。

内容はしつかりとしているつもりですし、話しの流れもしつかり  
と考えました。

発表しても恥ずかしくない作品に仕上げれた自信はあります。

「タイトル」

「と、思ったが、面白味に欠けるので、小学生の頃に森羅が書いた  
作文を私が読もう」

「えっ、ええ！ 何で先生がそんなものを持つてるんです！？ っ  
て、本物だ！ 駄目ですよ、僕が大人しく読ませると思って、

わっ、リリスさん離してください。何で僕を羽交い締めで拘束！  
？ これはお兄ちゃんの為？ ニヤニヤした顔で言われても説得力  
ゼロですよ。いいんですか、恋華さんっ。小学生の作文と言えば、  
あなたのことも書いてあるかもしれないんですよ。え、むしろ聞  
きたい？ だ、駄目です。絶対に駄目ですっ。なんですか、この葬  
式のような静けさ。一文字も聞き漏らさない気満々ですね。本当に  
このクラスは団結力が凄くてクラス委員長の僕は嬉しくて泣きそう  
ですよ。泣きませんけど。わー、先生、お願いです、後生ですから  
リリスさん離してっ、後が酷いですよ！？ え、むしろ酷くして？  
もうやだ！ だー、読み上げないでくださいっ。アーアーアーア  
ーアー！！！！」

3

「ということがあったんですよ」

「ははは、それは大変やったな。ウチのところは至って普通にや

ったからな。むしろ、羨ましいわ、そういうの」

「じゃあ、子供の頃の作文を貸してください。読みますので」

「それは、パス」

僕ともう一人、同じ部活に所属しているショートヘアの少女

篤兎京とくみよさんは、演劇部の部室に行くため文化教室棟の廊下を歩いています。

放課後になって部活へ出ようとした時に、京さんと合流してのてこうして移動がてらLHRのことを話してみました。

聞いてみれば隣のクラスである京さん所属のE組はきちんとした紙に書いて、もちろんくじによる発表もなかったそうです。実に羨ましい。

「ウチのとこの先生は堅物やないけど、基本真面目やからな。そういうことはまずあり得へんな」

「瀬野先生は仕事すらしなくて僕に回しますからね」

「なんか、有能過ぎるが故に無能な上司の尻拭いをする羽目になる部下の構図やな」

「……………」

「そんな落ち込むことあらへんて。昔の人は言うてたで、苦しいことの後には楽しいことがあるって」

「僕はアストラルに来てから、楽しいことはあってもそれ以上なことがいろいろありましたからね」

「いいやん、退屈せんで」

「それを言ったら、僕は京さんの方が羨ましいです」

「どうということなん？」

「京さんは演劇に限らず、なんでも器用にこなすと聞いています。きっと僕のような状況になったとしてもなんの問題もなくことを終えられそうですし。僕はそういう経験もないですし、きつと無理ですよ」

「別に難しいことでもあらへんで。ウチはむしろ悠夜のマネせえ言われたら無理やと思う」

「そうですか」

「生理的に受け付けへん」

「酷くないですか？」

「なんか、悠夜みたいなキャラはあわへんてことや。ウチは悠夜みたいになれへんもん」

「頑張ればできますよ。 あれ、冬空先輩？」

僕と京さんの目の前へ歩いてきたのは、生徒会長の冬空美姫先輩。  
心無しか、その顔は少し疲れているように思える。

「やあ、森羅。これから部活か？」

「はい、そうです。……冬空先輩大丈夫ですか？ なんだかお疲れのようですけど」

「ん？ ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「会長、もしかして怪異について調べてるんですか？」

こう聞いてきたのは京さん。緊張のせいか標準語になっている。

冬空先輩にこの間聞いたのだけれど、先日の魔術決闘フェーデの時に、学生でありながら魔被師エクソシストであることも知れ渡ったらしい。非公認の冬空先輩のファンクラブの人はもちろん知っていたようですが、知名度は格段に上がったらしいです。

魔被師エクソシストは魔法使いとして一定の技量があれば、誰でもなれる。でも、冬空先輩のように本当の意味で魔法使いと呼べる『実力』がなければ名は残らない。

冬空先輩はまさしく名実共に真正の魔被師エクソシスト、そう呼ぶに相応しいと僕は常日頃思います。

「最近有名になっている『ドッペルゲンガー事件』のことが。確か



にあれば怪異が原因と言われているが、さだかではないからな。そもそも國桜高校の周辺はおるか、アストラル全域内でも発生していないから、いくら私が魔祓師エクソシストと言っても借り出されることはないだろう。それよりも私が今懸念しているのは別の件でな、なんでも不良が集団を作っているらしい」

「それは初耳ですね」

「そうだろうな。奴らもただ群れるのではなく、まるでハイエナが餌へ集まるように一人また一人と数を増やしているらしい。馬鹿騒ぎをするのは私は構わないが、一般生徒に被害出るようなら未然に防がなくてはならないからな。今も部活で残っている生徒に遅くならないよう注意をしていたところだ」

「ご苦労様です。学園都市内でも、魔祓師エクソシストは大変ですね」

「演劇部はまだだからお前達が伝えておいて欲しい。私はまだ仕事があるので失礼する。じゃあな、森羅」

「さようなら。また今度」

冬空先輩は笑顔で僕に手を振るも、やはり懸念は拭えないのかいつも感じる覇気は感じられませんでした。近いうちに何か差し入れでもしましょうかね。

「どうしました、京さん？」

京さんは冬空先輩が行ってしまった後も、どこか思案気な表情を浮かべていました。

「なんでもあらへんで。最近はどこも物騒やな〜と思ったただけや。帰りはちゃんと送つてな、男子」

「わかりました。雲雀先輩うねすずも声をかけましょうか」

「その方がええやろ。キララ先輩はええやろな、彼氏持ちやし」

「京さんはいないんですか？」

「残念ながらフリーや。そういう悠夜はどうなん？」

「ぼ、僕ですか？」

「そや。さっきの生徒会長さんもそうやし、一年D組のダブルムーンこと月弦と霧坏きりつき、悠夜の義妹で転校生のペンドラゴン。ウチや雲雀先輩を入れても美少女ばかりやないか。こんだけぎょーさんのべつぴんに囲まれてるんやから、気になるのぐらいおらへんの？」

「え、ええ！？ い、いませんよっ。だいたい、僕のような根暗になびくような人などいませんよ」

「なびくなびかないやなくて、悠夜が個人的に好いてるやつはおるかかって聞いているんや」

「い、いませんよ……／＼／＼」

「フーン（ニヤニヤ）」

京さんはいして追求もせず、そのままにやけた表情で僕を見る。この場を逃れたことには助かりましたけど、完全に終わったわけではないので油断はできない。

そんな会話を続けていると演劇部の部室に到着。京さんとこのまま二人で居るのは得策ではないと考え、僕は率先してドアを開けた。すると、

「え？」

「あ」

既に部室に居た雲雀先輩と目が合う。それもすぐ近くで。

けれどそれが問題ではない。むしろ、今の雲雀先輩の状態にある。大道具の作業に使う工具をしまったための大きな箱。

雲雀先輩はそれを運んでる最中につまずいてしまったのか、箱の中身を全てぶちまける勢いで放っていた。

僕めがけて。

「て、ちよつ、待つ！」

釘を打つ頑丈なとんかちやどんな木材も切れる鋸のこぎり。他にもボール、千枚通し等が僕に向かって飛来する。

「うわっ！！！」

冗談のように飛んでくる工具達を避けきれず、僕の頭や胴体を直撃、激しい痛みが走る。

「っ！ ととっ！」

衝撃で酔っ払ったように足元もおぼつかず、後ろに下がってしまふ。

そしてふらつと背中から倒れそうになったところに

(ポフツ)

ポフツ？

可愛いらしい音をたてて受け止められた僕の後頭部。

視線だけを上に動かしてみると、ニツコリと額に怒りマークを浮かべる京さん。

……状況から考えると、どうやら僕の頭は倒れそうになった拍子に京さんの胸元に接触してしまったようですね、はい。

……………これって俗に言われる死亡フラグでは？

「誰が貧乳じゃ、ボケエ！」

「理不尽っ」

とんかちよりもボールよりも重い京さんの渾身の一撃で、僕の意

識は闇に落とされた。

「その、ごめんね悠夜くん。本当にごめんね」

「そんなに気にするなよ、雲雀。とどめをさしたのは京だから」

「ぶ、部長っ。失礼なこと言わんといてくれますっ」

「だってすごかったぞ？ ボクシング女子世界チャンピオンを狙えるほどの拳だったな、あれは」

「そんなことあらへんっ。か弱い乙女になんてことを」

「でも現に悠夜はノックアウトされただろうが」

「うっ、それは……」

努部長むつの言葉に、ばつが悪そうな京さん。その横では雲雀先輩がそわそわと僕を見ながら、しきりにペコペコ頭を下げている。

「はい、一応手当て終わったよ。と言っても、一番重症なのは京ち

やんによる頭部への衝撃だけど」

「キララ先輩までっ」

「ありがとうございます」

京さんに殴られ気絶した僕は、部室に運ばれ介抱されていました。幸いどれも軽傷で、大事には至らなかつたようです。頭はまだズキンズキンしてますが……。

「だいたい、悠夜も貧弱なのが悪いんやで」

「気絶から目覚めて早々にそれですか」

一応、鍛えてはいるんですけどね。

「にしても、悠夜くんってすごいね。体ものすごく頑丈だよ。とんかちが勢いよくあたっても特に損傷がないなんて。初めは痣くらいできてるかと思ったけど」

そう言うキララ先輩は感心したように僕を見る。師匠のおかげで体の頑丈さには自信がありますけど、さすがに脳を直接揺さぶるような衝撃は耐えきれませんでしたけど。

「ごめんね、ごめんね」

「いいですよ、雲雀先輩。幸いキララ先輩の言う通り、大した怪我もありませんし」

「でも、私が無理して運ぼうとして、転んだのが原因だし……」

「じゃあ、今度から工具箱は僕が運びます。それなら、大丈夫ですよね？」

「……うん。ありがとう、悠夜くん」

先ほどからずっと謝っていた雲雀先輩は、今度は目を潤ませて僕に謝辞を述べる。この性格といい笑顔といい、癒されますね。

「京、お前は何か言うことはないのか？」

「こづいうのはちゃんと謝る方がいいよ？」

「うっ、わ、わかりました」

リア充二人にさとされ、京さんは渋々と言った様子で僕の目の前へ来る。

「その、ごめんな、悠夜。殴ってホンマに悪かったわ」

「いえ、こちらこそ、すみませんでした。あんな状態になってしま  
い  
い」

「わ、わざわざ思い出させんといてっ」

「あ、すみません」

「って、これじゃ逆やつ。悠夜が謝ってどないすん。ウチも気にせえへんしもうどつかへんから、この話しは終わりや。これでええやろ？」

「はい」

ふう。一時はどうなるかと思いましたが、これで大丈夫ですかね。

「うんうん。じゃあ全てが丸く収まったところで」

キララ先輩が取り出したのは一枚の紙。って、それっ。

「いつの間に取りつたんですかっ？」

僕がLHRの時に書いた進路の作文でした。書かせたくせに、瀬野先生はめんどくさいとのことで回収はせず各自に持ち帰らせたのです。確かポケットに入れておいたはずなのに……。

「さつきちよろってね」 読んでいい？ 答えは聞いてないけど

「駄目に決まってますよ」

「じゃあ読むね」

「本当に聞いてないっ」

自分が読むのは構わないですけど、人に音読されるのはさすがに恥ずかしい。

「お、将来の夢か。今時作文なんて、手抜きもいいところだな」

「明らかな手抜きですよ。」

「そ、そういつ、努先輩はなんなんですか？ やっぱり、俳優ですか？」

「いや、まだ未定」

「私は看護師。将来は白衣の天使だよ」

「でもキララは俺だけの天使だぜ」

「もお、つつくんたら」

二人の世界に入ってしまったバカップル。

「京さんは？ そう言えば聞いていませんでしたね」

「ウチ？ ウチは……女優や」

「そうですか」

「なんや、どうせおてんばなウチには無理って思ってるんやろ」

「そんなことは……」

「気にせんでもええ。ウチは 違うから」

「京さん？」

「何でもあらへん」

突然そつぽを向いた京さん。どうかしたのでしょうか。

「雲雀先輩は将来の夢とかがありますか？」

京さんは何だか黙ってしまったので、雲雀先輩に聞いてみる。

「え、私？ わ、笑わないでね？ ……………お嫁さん」

なんと。玲さんと一緒ですか。

「笑わないの？」

「笑いませんよ」

「そっか。ありがとう」

雲雀先輩は嬉しそうな、それでいて寂しそうな表情を浮かべていました。

「『将来の夢 僕は小さい頃から』」

「わー、読まないでください！」

いけないっ。取り戻さなくては！

4

「あれ？ リリスさん、制服を着てどうしたんです？」

今日は土曜日。学校は休み。本来なら制服を着る必要はない。けれどリリスさんは制服を着用している。

僕は朝食を取りながら新聞を読もうとして、休日の朝には珍しいリリスさんの姿に気が付いた。

「今日は漫画研究部の活動があつて、その後全員で漫画に必要なペンとか買いに行くんだ。ヒビキも楽しみだつて」

「そうだったんですか。何時頃戻られます？」

「晩御飯までには帰って来ると思うよ」

「わかりました」

時間は午前10時半過ぎ。二人で遅め朝食を済ませ、リリスさんは一旦自室へ。僕は新聞に目を通す。

「また、行方不明者が出たんですか。毎度毎度飽きませんね。」



？  
通信コール

ポケットにあつた通信コール・エレメント用特殊魔結晶が震える。

「はい、どなたですか？」

『悠夜』

「京さん？ どうかしたんですか？」

『ウチ、ウチ見てもうた……』

「大丈夫ですか、京さん？ 何を見たんです？」

『怪異……、もう一人の自分、……ドツペルゲンガー』

「京さんっ、京さん！」

通信コールが途中で途切れてしまった。

「お兄ちゃん。どうかしたの？」

「いえ、特には」

部屋から出てきたリリスさんが、不安そうな表情を浮かべる。

(見たつて、いったい何を。もしかして京さん……)

再びコール・エレメントの震え。僕は即座に通信を開始した。

「もしもし、京さんですかっ？」

『私、キララっ』

「キララ先輩？ どうしたんです？」

先輩の声はひどく狼狽していた。

『さっきまでね、私、つつくんと雲雀と一緒に居たの』

さっきまで？

『そしたらねっ、急に不良ぽい人が、雲雀をさらっちゃった！私  
はつつくんが守ってくれたけど、雲雀が……』

「わかりました、落ちついてください。僕の知り合いに魔被師エクソシストの  
人がいます。その人に連絡を入れてみますので、先輩方の現在地を教  
えてください。僕もそちらに向かいます」  
『う、うん。わかった』

キララ先輩の現在地を聞き、通信コールを終了させる。

けれど、ああ言ったものの、僕自身動揺を隠すのでせいっぱい  
だった。

落ちついて。こういう時こそ冷静に……。

まずは冬空先輩に連絡を、でも京さんも

「お兄ちゃん」

リスさんの心配した声も、どこか遠くで聞こえてくるようで

何もわからないまま、時間だけが無情にも今起こっている『それ  
が現実だと僕に囁いていた

第十五夜 影は気付かぬ内に、僕らの足元に（後書き）

続きます。

今回はシリアス路線と予告します。

それと、またリアルがごたつきまして、更新は遅めかと……。亀  
のくせにすみません。広い心で待っていただければ幸いです。

それでは失礼させていただきます。さようなら

第十六夜 ボクのフタイ、アナタのセカイ（前書き）

遅くなって本当にすみません。いろいろありまして……

ちなみに今日は伝助のバースデーです。どうでもいいですね、はい。

それでは、どうぞ〜

第十六夜 ボクのブタイ、アナタのセカイ

0

違う

ヒトと違う

みんなと違う

世界はそれを否定する

誰かと異なる私は、世界から除外される

私の舞台はどこ？

私のドレスはどこにあるの？

世界なんていらぬ

私の舞台は私が作る

私のドレスは私が繕う

私は世界で輝けないのなら 全て壊すしかない

この手で

キララ先輩の通信コルを受けて、僕はすぐさま先輩達のところへかけつけた。

僕の他にも、部活の予定をキャンセルして付いて来てくれたリリスさん、連絡を入れてた冬空先輩も来てくれました。

三人でキララ先輩と努先輩つむの元へかけつけると、二人とも一様に安堵の表情を浮かべました。

「わー、悠夜ゆいよくん、銀髪ちゃん、ミキティー！」

冬空先輩に抱き付くキララ先輩。ごく丁寧に僕やリリスさんのことも呼ぶ。

母親のように冬空先輩が髪を撫で、キララ先輩をなだめる。

「すまない悠夜。俺がついていながら雲雀うんすずのやつを……」

「そう気落ちしないでください。必ず雲雀先輩を助けましょう」

「ああ、そうだよな」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

「なんですか？」

努先輩がその目に強い意志を灯す横で、リリスさんが僕の裾を引っ張る。まあ、言いたいことはわかりますが。

「この人、ツトムって人だよな？ 今ミキに抱き付いてるキララの『彼氏』の。どう見てもツトム、『女』なんだけど……」

リリスさんの言う通り努先輩の姿はどう見ても女性の格好をして

います。ウィッグを付けて髪を伸ばし、ブラウスと女性物のジーパンを着ている。薄いけれどメイクもしっかりしていて、事前に努先輩のことを聞いていなければ男性とわからないほど、努先輩の『女装』は完璧でした。

「努先輩は女装の趣味があるんですよ」

演劇の舞台でも率先して女役を演じるほどですからね。

「へ、へえー、そうなんだ」

「かじわら柁原の女装癖説は耳にしたことがあるが、まさか本当だったのか……」

啞然とした表情で努先輩の女装姿を見るリリスさんと冬空先輩。

「悠夜、おかしなところあるか？」

「大丈夫ですよ。今の努先輩は完全な女性です」

だからこそ、二人は驚いているんですけどね。

「ちなみにキララ先輩は男装趣味所持者です」

「えええっ!?!」

僕が以前休日デート中の二人に遭遇した時、努先輩は女装をキララ先輩は男装をしていました。

声をかけられた始めは僕も先輩方とは認識できず混乱していると僕に小声で種明かしをしたのです。そのせいで余計に混乱しましたが。あの時のショックつと言ったら……。驚いた僕の顔を見て、先輩二人とも大爆笑でしたよ。

このラブラブカップルがデートをする時は、それぞれ反対の性別

の服を着るそうですが今回は違ったようですね。

「雲雀先輩と『女子』三人で休日を過ごしていた、というところですか」

「うん、そうなの。雲雀って、演技すごく上手でしょ？ だから、例えどんなにつらくてもごまかしちゃうの。もう一年の付き合いになる私達にもね。それでも時々、雲雀がなんだかつらそうに見えて、つくくと雲雀と私でパーツと遊ぼうとしたの。そしたら」

「雲雀先輩が拐われた」

「……………うん」

「祭場、さいごじょう柘原、一つ聞かせて欲しい。白樺を誘拐したのは本当に不良の『学生』なのか？」

そこは僕も気になっていた。

学園都市は安全。

そう世間が認識するほど、生徒の安全面には徹底している。様々な場所には犯行抑止の為、監視に使われる記録用特殊魔結晶が設置。外敵から生徒を守る結界装置は校舎はもちろん、学生寮やトイレにまで完備。冬空先輩のように、魔被師も大人が極めて少ない学園都市内で警備として働くこともある。

それに、学園都市は生徒を過剰なまでに保護するが、ペナルティを犯した者は容赦なく追い出す。追い出すだけではなく、きちんと罪を償わせた上で保護者に引き渡す。犯罪を犯した学生はもちろんマスコミでも取り上げられるから、まさしく未成年で人生を棒に降ってしまう。

だからこそ解せない。

誘拐という多大なリスクをおってまで、雲雀先輩を拐う必要があったのか？ しかも休日の昼前、白昼堂々と。捕まるのを承知の上



でやっているとしたか思えない。

「うん、確かに学生だったよ。私達と同じくらい。ガラはすごく悪かったけど」

「そうか……」

冬空先輩も同じことを考えていたようで、犯人が学生という事実  
に驚いていた。

「ねえ、悠夜くん、ミキティーフ。もし、もし雲雀に何かあったら  
どうしよう。そしたら、私……」

「大丈夫だ。白樺は私が、いや、『私達』が必ず助ける。そうだろ  
う？」

「無論です」

「リリースも頑張る」

「みんな……」

「お前ら、本当にありがとう……!!」

「それでキララ先輩、一つお願いしたいんですが」

「何、なんでも言つて？」

「その、京さんみやこに通信コールしてくれませんか」

「京に？ うん、わかった」

キララ先輩が僕達から少し離れる。きっと、京さんみやこに通信コールする為  
でしょう。

しばらくコール・エレメントを耳に当てていましたが、数十秒た  
つとこちらへ戻って来ました。表情はどこか不安そうに。

「悠夜くん。駄目、出ない。実は京も誘ったんだけど、今日は家で  
することがあるからこれないって言ってたから、家にはいると思っ  
ただけど」

「そうですか」

「ねえ、悠夜くん。京がどうかしたの？」

「実は」

僕はキララ先輩の通信前コールに京さんからもあった事を告げ、京さんとの会話のやり取りを説明する。

話しを聞く内に皆さんは驚き、信じられないといった表情になる。いや、きつと信じたくないのでしょう。

キララ先輩が再び慌てた様子でコール・エレメントを使用する。けれど、京さんは返事をする事はない。

怪異

もう一人の自分

ドッペルゲンガー

京さんが残した言葉はどれも、今世間を騒がしている『行方不明者多発事件』、もしくは『ドッペルゲンガー事件』を連想させるものばかり。

再び僕らの肩に、氷解していた不安が降り積もる。

「……白樺の居場所を探しつつ、その京という演劇部員を探せばいいんだな？」

「はい。そうですね」

まだ京さんが行方不明になったという確証は無い。けれど、通信コールに出ない以上、安否を確かめなくては。

「そんな京まで……」

「私達、どうしたらいいの!？」

「落ち着いてください。きっと大丈夫ですよ」

大丈夫。

そんな陳腐な言葉、一番信用していないのは僕自身だ。けれど、今この言葉をかけなければ、努先輩とキララ先輩を安心させ冷静にすることはできない。

この非常事態に、的確でない判断をすることは、『手遅れ』になってしまう可能性が高くなる。それだけは避けなくてはならない。

「まずは手分けして」

「お兄ちゃん、もうちょっと待ってて。もうすぐ来るから来る?」

リリースさんの謎の発言を問おうとすると、不意に僕を呼ぶ声が。

「おーい、悠夜ー」

「えっ?」

声のした方を向けば、こちらに走ってくるいつものメンバーの姿が。

「皆さんどうしてここにっ?」

「俺ら、リリースちゃんに呼ばれたんすよ」

「水臭いニヤ。何故こんな一大事に俺らを呼ばない」

「そうだけ。俺達は悠夜の弟子なんだから、もっと信用してくれなきや困るぜ」

「私達にだつて力になれることはあるんだから」

「悠夜さん、ここにいる者は、度合いは違えどあなたのことを大切に思っていますのよ。その意志を尊重する為にも、あなたも私達を

頼りにしてください。

確かにあなたは昔からなんでもできましたわ。でも、例え一人でなんでもできたからって、誰かと力を合わせる事ができないわけではない。むしろ、誰かが傍に居れば、より大きな力となる。……これもあなたが教えてくれたことですわ」

僕の視界には、この学園都市アストラルでできていた、大事な人達が表情は違っても、確かにそこにいた。

「ありがとうございます」

でも、足りない。

後二人、いない。

癒し系な先輩と、元気な同期の部員が。

「絶対に、探して助けましょう」

みんなが静かにうなずいた。

2

「冬空先輩はこの近くにあるエクソシスト事務所に向かってください。努先輩とキララ先輩も一緒についてってください。」

リリスさん、神薙かなきさんと恋華れんかさんは誘拐された雲雀先輩の搜索をお願いします。

玲あきひさんと刈柴かりしばくんは僕と一緒に京さんを探します  
「俺はどうすればいいニヤ？」

「あなたはその広い交友関係と情報収集力で二人のことを探ってください。何かわかれば、その都度僕に報告をお願いします」

「了解ニヤ。この天宮響あまみやびびき、全力で任務を遂行させていただくニヤ」  
「皆さん自分の安全を最優先に考えて動いてください」

そう言つて、僕らは行動を開始しました。

「ねえ、悠夜くん。私達はどうするの？」

「一回京さんの自宅に行つてみます。それで家に居ればこちらの不安は解消されるんですが」

「でも、その京つて人、話しによると今噂のドッペルゲンガーに合つたつて言つてるんスよね？ さすがに子供じゃないんスから、イタズラでそんなことはしないと思うんスけど」

「そもそも、その京つて人、どんな関係？ 同じ部活仲間だよね……?」

「何度もそう言つてますよね。頼みますから、こんな時ぐらい包丁はしまつてください。刈柴くんも止めてくださいよ。玲さん包丁を出す、僕襲われる、刈柴くん逃げる。明らかにバットエンドまっしぐらですよ」

「そんなこと言われても、俺なんか月弦つきなさんを止められないツスよ」

「そんな、襲うなんてっ。私そんなはしたない女じゃないよ！／＼」

「そこで顔を赤らめますか。もお僕の周りにはいろんな女性が居すぎてパニックですよ」

「うん、わかつた」

「何がわかつたんですかつ。包丁持つてどこへ！？ とにかくあなたは包丁しまつてっ。刈柴くんは物陰に隠れないっ」

人選失敗しましたかね……。

「玲さんは僕が許可しない限りは包丁や刃物の類いはしまってください。刈柴くんもそんなに怖がらない。早いところ、京さんのところに行きますよ」

「「あつ、そうだった」」

本当に間違えたかもしれない。

それから歩いて向かい、京さんが住んでいる五階建ての寮に到着。四階にある京さんの部屋の前までくる。当然鍵は開いていない。呼び鈴を鳴らしても、反応がない。

「どうするんスカ？ お留守みたいツスケど」

「窓ガラス無い？ そしたら私入れるよ」

「何言ってるんスカ！？ いつも包丁を降り回しているのに、不法侵入で更に罪を重ねる気ツスカつ。冷静に考えると、悠夜と月弦さんのやり取り結構犯罪すれツスよ！」

「駄目ですよ。それでは証拠が残ってしまいます。僕ピッキングできますから、開けられますよ」

「悠夜も何言ってるんスカ！？」

「確かにこれがあるいろと法から外れているのはわかります。けれど、非常事態なんて言葉で片付ける気はありませんが、手遅れなことになってしまつては遅いんです」

「わかつたツス。それじゃあ、頼むツス」

「はい」

「ちよつと待つて悠夜くん」

刈柴くんの了承（？）も得られ、ポケットから針金を出すも玲さんに止められる。

「本で読んだんだけど、ピッキングって時間かかる場合もあるんで

しょ？ そんな物よりこっちの方が手っ取り早いよ」

玲さんはそう言って、手に銀色の魔結晶エレメントを取り出す。

「お願い

鋼銀線蟲「こじぎんせんちゅう」

玲さんのエレメントが発光し直後霧散する。粒子状になったそれは玲さんの両手に集まり、二つの指輪となって人差し指にはまる。

指輪から伸びてきたのは一本のワイヤー。その先が一人でに、鍵穴へと入る。

「錬金術アルス・マギカ

発動オン」

ワイヤーは鍵穴の中で形を変え即席のスペアキーとなり、ドアががちやりと開いた。

錬金術

この世の万物の元となる元素を操ったりすることで、様々な物を創造、もしくは破壊したりする魔法。けれどこれはほんの一例にして一般的なものにすぎず、錬金術師は個々に特殊な魔力を持つと聞く。

玲さんの場合は鉄製の物を操るのに特化していると言っていました。この事実を知った時、僕はものすごく納得しました。

「開いたよー。あれ、どうしたの？」

「……ピッキングできる僕が言うのもなんですが、玲さんに錬金術って鬼に金棒みたいなものですね」

「……月弦さんに目を付けられたら、誰も逃げることはできないッスね。とこそこの国家錬金術師みたいにどんな分厚い壁も、扉作って突破しそウツスもんね」

素直に玲さんの成長を喜べない僕がいました。

「まあ、無事に開いたことですし、入らせていただきましょう」  
「悠夜くん」

前へ進もうとする僕を、玲さんが裾を掴む。

「リリースちゃんから聞いたよ。リリースちゃんが何か頑張ったら、ご褒美に頭を撫でてあげるって」

「へえー、そうなんスカ」

やめてください。そんなシスコンを見る目で僕を見ないでください。

だって仕方がないじゃないですか。頭を撫でなければそれ以上のことを要求されるんですから。要求の具体的な内容は口が裂けても言えませんが。口が裂けてしまったら、喋るところではないですし。刈柴くんの前でもありますし、正直言って『ご褒美』とやらしたくない。でも、いつもなら真っ先に刃物を出すはずの玲さんは、ただただ無言で上目遣い。角度もちょうど良く、玲さんが『美少女』ということを思わず再認識してしまう。……まあ、要するに、僕と言えど美少女の上目遣いには勝てないってことですよ。

僕は少々びくつきながら、玲さんの頭へ手を伸ばす。信用していないわけではないですが、自分から包丁の射程圏内に入るのはさすがに勇気がいります。

「なでなで」

「えへへ」

少し茶色の混じった玲さんの髪はとても触り心地が良かった。恋華さんといい、リリースさんといい女性の髪はどうしてここまでさら



さらなのでしょうか。やはり日々の努力？

数十秒で玲さんの頭から手を離し、僕は京さんの部屋へと入っていく。上機嫌な玲さんと、『青春ツスね』と口にする刈柴くんも続く。

中は静まりかえっていて、人の気配はしない。念のため玲さんに風呂場やトイレも調べてもらいましたが、やっぱり京さんはここにいませんでした。

「悠夜、これってやっぱり……」

「で、でも、買い物に行ってるだけかもしれないし」

「そう信じたいですね」

もう一度、京さんに通信「メール」してみる。やはりと言っべきか、今度も繋がりませんでした。

「あ、この写真」

玲さんがリビングに飾ってあった写真を手に取る。

「ほら、ここ。悠夜くん映ってるよ」

「ほんとツスね」

「これは僕が入部してすぐに撮った写真ですね」

その写真は今の演劇部が映っていて、僕の隣に京さんと雲雀先輩。後ろには努先輩とキララ先輩が。

僕は顔から緊張しているのが見え見えですけど、他の四人はとびつきの笑顔を浮かべています。

「家族みたいって言われたんです。この前来ていただいた、O Bの先輩に」

僕は語りだしていた。

「努先輩とキララ先輩が仲のいい夫婦。雲雀先輩が普段はおろおろしているけど、しっかり者の長女。京さんはお転婆だけど、どこか憎めない次女。僕は一番末だそうです。」

その先輩の言葉を聞いた時、結構的を射ていると思いました。実際僕はこの数日で何度も『家族』に助けられましたよ。特に姉達二人には迷惑をかけっぱなしで。

それでもやっぱり僕は嬉しかったんでしょ。また家族ができたことに」

人は失ってしまったものに過敏に反応するそうです。

僕の場合は失ったというより、手放してしまったと言った方がいいかもしれません。

「……なんだかそういうの、すごくわかる気がする。私もお姉ちゃんにはいつも助けてもらってばかりだったし」

「俺一人っ子スから、兄弟がいるって羨ましいッス。昔弟が欲しいってせがむ度に、うちの親がすごいビミョーな顔をしたッスけど」

「すいません。妙な感傷に時間を取らせてしまって。ここも何もなさそうですし、早いところ移動しまッ！」

突然の頭痛。

僕はその場で膝をつき頭を押さえる。

『この世界は愛で溢れてる。うん、そう思うわ。だって私はこんなにもあなたのことを愛しているんだもの。でもね、足りないの。まだ愛は足りていないの。この世界にある全ての愛をあなたに捧げて、この世界にあるあなたの全ての愛が欲しいの。』

愛してるわ、ゆう』

「悠夜くん、大丈夫!？」

「どうしたんスか、急にっ!？」

「大丈夫、です……」

倦怠感を覚えながらゆっくりと立ち上がる。

頭痛は去ったけれど、まるで真冬のような寒気が僕の体を駆け巡る。

不安そうに僕を見る二人。作り笑いを浮かべて、

「そろそろいきましよう。ここにいるより、京さんを探した方がいいですよ」

「でも本当に大丈夫ツスか？」

「単なる立ちくらみですよ。そこまで気にするものではありませんよ」

それでも納得のいかなそうな二人の先を歩き、玄関を出る。時計を確認すると午後一時半を過ぎていた。

(どこにいるんですかね、京さんも雲雀先輩も……)

どこに向かおうか模索しようとした時、誰かから通信コールがきた。

「はい、誰ですか？」

『私だ、冬空美姫だ。頼まれていた、行方不明者のリスト。入手できたぞ』

「ありがとうございます。見たいので、今からそちらに行ってもいいですか？」

『そう言うと思って、既に送っておいた』

「送った？」

「わっ、何スかあれっ」

刈柴くんが指を指す方を向く。

そこには、白い鳩のような鳥がすぐそばを旋回していた。

「式神　陰陽道の術ですか」

昔に栄えた魔法使い、陰陽師の使う魔法。媒体を魔力で操り、自分の手足のように扱う遠隔操作可能な魔術。

『昔お婆様に教わってな。私の専門は氷冷操作系だが、これぐらいならできるぞ。その鳥に行方不明者のリストが書いてある』

「ありがとうございます。もう一つお願いできますか？」

『なんだ、私にできる限りの全力を尽くそう』

「じゃあ、行方不明者がドッペルゲンガーや、もう一人の自分を見たという証言を残しているか、調べて欲しいんですが」

『……時間がかかるがいいか？』

「お願いします。それと」

『？』

「今京さんの家の前に居るんですが、残念ながら家にはいませんでした」

『そうか。あの二人には言っておこう。どんな事実でも、知っておいていた方がいいだろう』

「そうですね。じゃあ、こっちは引き続き京さんを探してみます。そちらの方も頼みました」

『ああ。気を付けてな』

「はい」

『森羅……』

「なんですか？」

『もし二人が無事見つかったら、今度私と  
「時間が無いから切ります」  
「ちよつ、玲さん!？」』

冬空先輩が何か言おうとした時に、玲さんが「コル・エレメント」通信用特殊魔結晶を僕から取り上げ通信を中断させてしまった。

「私だって二人きりですごしたことほとんど無いんだから……」  
「何を怒ってるんですか？」  
「怒ってるって言うより、プチャンデレ化ツスね」

でしたら用心しなくては。

「はい、エレメント。ごめんね、勝手に取っちゃって。これからどうするの?」

「この周辺から京さんを探してみましよう」

羽ばたいている紙の式神に手を伸ばす。

式神は僕の手の平の上に乗ると、糸の切れた操り人形のように動かなくなつた。

折り紙の要領で折られた元式神を広げる。

冬空先輩の言う通り行方不明者の名前が上から失踪した順に書かれている。

「うーん。国籍も年代層もバラバラツスね」

「行方不明の人、こんなにあんだ。でもこれって今回のことと関係あるの?」

僕の両隣から、刈柴くと玲さんがリストを覗き見る。

「……すみませんが、近くの自販機で飲み物買って来ていただけませんか？ 二人の代金も僕が払いますので」

「わかったッス。何がいいスか？」

「500ミリリットルサイズのお茶を五本。量が多いので、玲さんもお願いします」

「うん、いいよ」

刈柴くんにお金を渡し、二人は近くの自販機へと向かった。近くと言っても、この周辺にはなく、歩かないと見つけれませんが。

二人と距離が空いたことを確認して、神薙くんコルに通信する。

『もしもし、悠夜か。そっちはどうだ？』

『収穫無しです』

『そうか。俺らもイマイチだ。聞き込みしてるんだが、その雲雀つて先輩らしき人を見た人はいないってさ』

『すみませんが、リリースさんにな変わってください』

『おう、わかった』

『はいはい。リリースだよ。どうしたのお兄ちゃん。リリースの声聞きたくなつた？』

『神薙くんと恋華さんに聞こえないようにお願いします』

『……オツケー。どうかしたの？』

『今冬空先輩から送られた、行方不明者のリストに目を通したんですよ。』

『その中のおよそ半数は科学者です』

『ッ！？ どうしてわかったの？』

『科学者というのは交友関係も限られてくるんですよ。裏の世界の住人は、裏の者として語れませんからね。知っているのは名前だけです、それでもいくつか知っているものが該当しました。僕記憶力がいいんです』

『じゃあその行方不明者多発って、誰かが科学者を狙って誘拐して

るってこと?」

「それはないでしょう。確かに科学者が大多数をしめていますが、リストには明らかに科学者でない人も入っています」

「でも偶然にしては多すぎない? カモフラージュの為に、一般人を拐っているとか」

「それならわざわざ学園都市にまで来て、科学者でない京さんが拐う理由がありません」

「……疑うわけじゃないけど、ミヤコは本当に行方不明なの? 確かに現在地は掴めないけど、確たる証拠があるわけでもないし」

「あつたんですよ、証拠」

「ええ!」

「僕の師匠、モーガン・ペンドラゴンが凄腕の魔女ということは知ってますよね」

「うん。実際リリスもママの魔法は見たことあるよ」

「その師匠から、僕は空気に残留している魔力を発見できる方法を教わったんですよ。僕の場合、魔結晶エレメントを使わなければいけません。それで、玲さん達に気付かれないように調べてみたところ

「何がわかったの?」

「何も」

「はい?」

「何もわかりませんでした」

「……お兄ちゃん、それってどうゆうこと?」

「魔力を持つ者は熱のように微弱ながら、それに似た性質の魔力を放出します。これを残留魔力と呼ぶんですが、指紋のように個々によって、同じものは無いと言われています。魔力の無い僕や機巧人アンドロイド形のリリスさんの住むあの家には、残留魔力はほとんどありません。わかりにくいのでしたら、電磁波を思い浮かべてください」

「ああ、あれのことか」

「部屋の持ち主である京さんの残留魔力、見当たらないどころか痕跡さえありませんでした。空気中の魔力はなくなることもあります

が、昨日まで普通に生活していた人の魔力が突然消えるなんてこと  
まずあり得ません」

『それってつまり、どういうこと？』

「長々と語ったあげくにここからは憶測になってしまいましたが  
部屋に居た京さんは【何か】によってその存在、空气中に残留した  
魔力ごと行方をくりました」ということではないでしょうか」

『……………じゃあ、もしかして』

「その何かというのが、ドッペルゲンガーかもしれないね」

その人の存在、空气中に残留した魔力ごと痕跡も残さずに消えて  
しまう現象。

怪異。

ドッペルゲンガー。

これらが同一なのでしたら、厄介そうですね。

『そ、それじゃあ、ミヤコを助けようがないんじゃない？』

「大丈夫ですよ。原因があるのなら、それを壊せばいいんですから。  
むしろ問題は雲雀先輩かもしれません。引き続き捜索お願いします」

『うん、了解。ねえ、お兄ちゃん』

「何ですか？」

『勝手にいなくならないでね』

そう言っでリリースさんは通信を終了させた。

……………さて、本当にどうしましょうか。

「悠夜くん買ってきたよ」

ナイスなタイミングで帰ってきた玲さんと刈柴くん。その手には  
大量のお茶とジュース。



「ありがとうございます」

刈柴くんからお茶を一本受け取り、キャップを開けて飲みほす。

「つて、早っ」

「悠夜くんつてどこまでブラックホールなの？」

「僕って正直、美味しいとは思っても空腹という概念がそこまで無いんですよ。ししょ　母さんによれば、僕って太りにくい体質だそうだし、つつい食べたり飲んだりしちゃうんですよ（ゴクゴク）」

「何それ!？」

「むうっ!」

二本目を飲み終えたところで、玲さんに両頬をつねられる。

「私はちゃんと考えて甘いものとか控えたり、野菜中心にしたりしてるのに、太りにくいっ？　痩せようにもまずは胸から落ちるって言うし……。ずるいよ!」

「落ち着くツス。気持ちはわからなくもないツスけど、これが主人公補正つてやつツス」

「うう。なんでヒロインにはそういうの無いのよ……」

二人は何を言っているんでしょう？

玲さんに手を離してもらい、残り三本を飲み移動することにした。

「どこに向かっているんすか？」

「高いところですよ。見たい者がありまして。どこかいところありますかね？」

「それなら私いいところ知ってるよ。小高い丘みたいなところ。あ、でもここからじゃ遠いかも」

「構いませんよ。案内お願いします」

「我は願う 我らの目の前の霧が晴れることを 我らの目指すものがそこにあることを 囚われの姫を探し出す術を

我は願う 光よ果てよ！」

地に描いた魔方陣。

黒く発光する刻まれた紋様は、陽の光と重なりあつて幻想的な風景を映し出す。

僕はその中心、黒い魔結晶エレメントを手にしながら、光の中で願う。僕の閉じられたまぶた。

その中に見えたのは巨大な空間、暗闇中で蠢く大きくてそれでいて長いなにか。そして、十字架に吊るされた

「ッ！」

限界が近付き、僕は魔方陣への魔力供給を中断する。

光を失った魔方陣はただの模様となり、僕はポケットにエレメントをしまった。

傍で一部始終を見守っていた玲さんと刈柴くんが僕に近寄る。

「何かわかったッスか？」

今僕が使用していたのは『探知』と『予知』の魔方陣を組み合わせたもの。

見晴らしのいい環境でこの魔方陣を使えば二人を探せると思いましたが、やはり簡単にはいきませんでした。もつと時間をかければ可能かもしれませんが、これ以上は僕の体もたない。

「具体的には把握しきれなかったですが、おおよその場所はわかりました」

いくら暗闇の中とはいえ、あそこまで開けた空間はそこまで存在しない。

「そっか。でも候補が絞れたなら充分収穫だよな」

「でもそんな便利な方法、なんで使わなかったツスか？」

「できれば使いたくな　　ッ！！！」

言葉の途中で僕は突然吐血した。痛みが走る体をくの字に曲げ、足元が赤く染まる。

「悠夜くん、どうしたの!？」

「大丈夫ツスか!？」

「だ、大丈夫つす……」

笑顔を浮かべ声真似をするも、二人の表情は未だ強張ったまま。

「悠夜くんどこか痛い？　具合でも悪いの？」

「そういうものではなくて……。これはある意味当然の結果なんです」

「どういうこと？」

「魔力ゼロの僕の体で、魔法を使うのって結構酷なんですよ。魔方陣や補助装置であるエレメントを使っても、負担がかかってしまうんです。

この前みんなで魔装具を創造した時は、あなた方の魔力を主に使いましたから負担は大幅に軽減されましたけど。

魔法は魔力があつてはじめて行える。これは世界が定めたことで

すから、むしろ僕なんかがあればうちの代償で魔法を使えるなら儲けものですよ」

「その魔方陣、俺らが使うのは駄目なんすか。……俺らの体には魔力があるから、別に問題はないんじゃない」

「駄目ですね。地質操作系や錬金術が得意なあなた方の魔力では、この魔方陣との相性は良くありません。僕みたいに苦痛は伴わないと思いますが、失敗して魔力を無駄にするだけです」

「……………そうツスカ」

悔しそうな刈柴くん。

哀しそうな玲さん。

「現代で魔法が使える方法ってわかります？」

「えーと、エレメント魔結晶や魔方陣の補助を受けて行っくんすよね」

「はい。魔方陣や呪文といった類いの物は、元来魔法をより使い易いように開発された物なんです。使う魔方陣や呪文が自分の魔力とあっていたら、頭に描いたり唱えることで魔法が発動します。僕が魔方陣を地面に刻むのは、普通のより複雑すぎるので実際に頭で浮かべるよりは成功率がいいからしているんですが。」

エレメント魔結晶はこの魔方陣や呪文を登録するインストールことで、必要最低限な行動で魔法を発動するのに役立ちます。

まあ、どれも行うのに魔力が必要というのは変わりませんが。

これとは別に魔法を使う手段があるにはあるんです。知ってますか？」

「いや、わからないツス」

「私も」

「魔法を使うという意味では少し外れるかもしれませんが二つ方法があるんです。一つは魔法使い自身が魔法に『なる』こと。二つ目は怪異と『同化』することです」

「そ、そんなことができるの!?!?」

「理論的には不可能ではないですが、どちらも成功例はありません。前者は肉体という邪魔な器を捨て、魔力と精神　魂だけの存在となり、魔法を使うんです。いや、そこに魔法を使うという概念はありません。その存在自体が魔法という現象なんです。」

「後者は魔法が災厄化した怪異が稀に人の持つ魔力と同化することです。元々怪異も魔力の塊なのですが、さっきも言った通り怪異は一種の災害のようなものなのですから同化できたとしてもそれはもはや『ヒト』とは呼べません」

「……………」

「ですから、あなた方は遙か遠くにある力なんて求めずに、自分ができることを精一杯やってください。ちゃんとした『ヒト』であってください。その方が、師匠の僕としては嬉しいです」

「悠夜くん……………」

「わかったツス。で、俺らは何をすればいいツスカ？」

「まずは広い空間を探しましょう。良くは見えませんが、さっき魔方陣を使った時とても広い場所のように思えました。…………アストラル全域じゃなくて、こちら辺一带にした方が良かったかもしれないですね」

「でも手掛かりが何も無いよりはマシだよ。あれ、冬空先輩？」

玲さんの目線の先には、こちらへ駆け寄ってくる冬空先輩。その後ろには努先輩とキララ先輩の姿が。

「え、どうしたんですか？　三人揃って」

「実はおもしろいことに気が付いてな。直接言った方がいいと思っ  
てわざわざ探してやってきたんだ」

言われて空を見上げる。

僕らの頭上では、さっきとは別の鳥型の式神が悠々と飛んでいた。おそらくあれで僕らを探したんでしょう。

「これを見てくれ」

冬空先輩は地面に地図　世界地図を出した。僕らは地図を囲むようにしてしゃがむ。

冬空先輩は鉛筆を取り出し、

「これが行方不明者が出た地域だ」

世界地図にいくつかの丸を描く。丸の近くには行方不明になった順に番号が書いてある。

「こう見ても、やっぱり共通点はなさそうツスね」

「そう思うだろ？　だが、実際は違うんだ。」

私は森羅に言われた通り、行方不明者が失踪する前にドツペルゲンガー等の物を見たか調べたんだ。結構大変だったんだぞ。先輩方にも手伝ってもらったりして。それでわかったんだが、なんと全員がドツペルゲンガー、もう一人の自分を見た友人知人親族に話していたんだ」

冬空先輩は世界地図に書いてある円の中心に黒点を記していく。全ての円に印を付け終わると、

「今度はドツペルゲンガーを見たと言う日時が古い順に点を線で繋いでいくぞ」

鉛筆が地図の上を滑り、五個目の点が繋がったところで僕は気付いた。

「動いてる……？」

結ばれる線は点と点を伝う間に右斜め、左斜めを繰り返して、歪ながらも稲妻型をしていた。まるで、何かググザグに進んでいるかのように。

「続けるぞ」

線を結ぶのが再開される。

稲妻型の形は崩れることなく、スムーズに鉛筆が進む。

やがて最後の点も結ばれ、世界地図に大きな稲妻型の傷が浮かび上がった。

「こ、これって」

「間違いないですよ、玲さん。」

ドッペルゲンガーは確かに移動しています。移動していて、それを見た人が時間をおいて行方不明になっているんです」

「そして、これは篤<sup>とくと</sup>京<sup>と</sup>のだ」

地図上の学園都市アストラルに黒点が書かれ、稲妻模様と結ばれた。

「……アストラルに円が書かれる前に、なんとしても京さんを探し出しましょう」

これはもはや単に見つかからないという問題じゃない。

京さんは明らかにドッペルゲンガー、怪異に巻き込まれたとみて間違いないと思う。

拭うことのできない嫌な予感が、これが事実だと言っているように思えて仕方がない。

「まだ篤兔京が行方不明になったという証拠もないが、こん結果出てたのなら無視はできない。見方を変えて動かないわけにはいかないだろう」

「で、本当にどうするんスカ。俺はちよつと展開が早すぎて軽く混乱してるんスけど」

「まずはリリスさん達と合流しましょう。ドッペルゲンガーのことを話さなくてはいけませんし」

僕は立ち上がって通信用特殊魔結晶を取り出す。まずは天宮くんコール・エレメントに通信しようとして 僕は中断した。

「刈柴くん」

「なんスカ？」

「都市伝説のドッペルゲンガー、もう一人の自分に会ってしまったら、死ぬんですよね？」

「そうツスけど……」

「僕死ぬみたいですよ」

「何を なっ!？」

刈柴くんの驚く声。

みんなが一齐に振り向き、同じく表情を驚嘆一色に染める。いやー、僕もびっくりしましたよ。

なんだって、目の前に僕と瓜二つ（・・・）な人が立っているんですから。

距離にして数十メートル。ここからでも確認できる格好は、今の僕そっくり。黒一色でコーディネートし、うつむいているせいで伸ばしている黒髪が顔を隠し良く見えない。

静寂。お互いに視線を合わせることなくたたずむ。



緊張。後ろでは玲さん達が静かに状況を伺っている。

邂逅。僕（偽）が顔を上げニタリと笑い、初めて僕と視線が合う。

瞬間。僕（偽）の姿が一瞬ぶれたかと思うと、姿を消していた。

直撃。いきなり目の前に僕（偽）が現れ、天へ伸ばした腕を僕へ叩きつけるように降りおろした。

「僕死ぬみたいですよ」

「何を なっ!？」

俺、刈柴大地<sup>だいち</sup>は悠夜のわけのわからない言葉を問いたただそうとして振り向いた瞬間、絶句した。同時に悠夜がなんであんなことを言ったのか理解した。

悠夜の視線の先には、まるで鏡から抜け出したかと思うほど悠夜とそっくりな『何か』がいた。

幻覚やまやかしの類いではない。

正真正銘のドッペルゲンガー。

静かにたたずむ二人（？）を凝視する。こんな異常事態に、俺はそれぐらいしかできなかった。みんなも目の前の光景を前に、どうしていいかわからず、事の成り行きを見守っている。

先に動いたのは偽悠夜だった。

消えたかと思うと悠夜の目前に出現し、異様に長く伸びた腕で悠夜を殴りつけた。

成す術もなく吹き飛ばされる悠夜。

「悠夜くんっ!」

「この……！」

冬空先輩が前に出る。

「抜刀 刀雪嶺斬」  
とうせつれいざん

水色の魔結晶が発光し、冬空先輩の手には愛用の刀型魔装具が握られていた。

「はああああ！」

偽悠夜への峰打ち、高校生とは思えない剣技。迷いも狂いも情けも無い一撃。けれど、偽悠夜は陽炎のように揺れたかと思うと、斬撃が届く寸前に忽然と姿を消した。

標的を失った冬空先輩が視線をさまよわず。

「どこに行った！？」

「左ッス！」

「お願い 鋼銀線蟲」

今度は月弦さんの魔装具、細い鋼糸が偽悠夜を襲う。

月弦さんの魔装具は標的に絡みつくことでその動き拘束するはずだった。

鋼糸が偽悠夜に触れた途端、拘束することなくまるで水や空気を通るように貫通しそのまま地面に突き刺さる。

「嘘っ」

「こいつに実体は無いのかっ？」

月弦さんと冬空先輩の困惑する声。俺だって何がなんだかわから

ない。脳がパンク寸前だ。それに、この女子二人のように自分の魔装具で応戦した方がいいのかもしれないが、俺の体は金縛りにあつたように動かなかつた。柁原先輩や祭場先輩も偽悠夜に視線を固定したまま立ち尽くしている。

冬空先輩も月弦さんも、まるで幽霊のような得体の知れない存在感の偽悠夜を前に、出方を伺うしかない。

偽悠夜がうつむかせた顔を上げ、ニヤリと笑う。顔は見知った友人のものなのに、俺の背筋は悪寒で震えた。

再び陽炎のように揺れると、偽悠夜は姿を消した。

「きゃあ！」

月弦さんの悲鳴。消えた偽悠夜は月弦さんの目の前に出現すると、その右手を彼女に伸ばした。

冬空先輩が急いで駆け寄ろうとするも間に合わず、月弦さんに異形の手が

「させませんよ」

触れようとした時、悠夜が偽悠夜の腕を左手で掴んで止めた。

「ナ・ニ……………」

偽悠夜が初めて口を開く。その表情は驚きに満ちていた。

「僕を壊したいのですしたら、これぐらいはしてくださいよ！」

アイアンクローの要領で偽悠夜の頭を鷲掴みにすると、悠夜はおもいっきり地面へと叩きつけた。

「無に帰ってください」

抵抗しようとしたのか悠夜に向かって手を伸ばすも、届く前に偽悠夜の体は結晶が細かく砕けるように崩壊した。風に乗って、粉塵が空中を舞う。

「悠夜くん、大丈夫っ？」

「ええ、なんとか」

そう言うわりには、悠夜の顔色はあまり良くなかった。

「ドッペルゲンガー……。あれが本物だとして、どうして悠夜くんを」

「次のターゲットは僕ということでしょうかね」

「で、でも、ドッペルゲンガーは消えたんスから、もう心配は無いツスよね？」

「どうでしょうか……。？先輩？」

悠夜の視線の先、暗く辛そうな表情を浮かべる柘原先輩と祭場先輩の姿。

「すまん、悠夜……」

「私、また何もできなかった」

この二人の先輩は目の前で同期の部員を連れさられ、後輩の行方もわからず、今ももう一人の後輩が傷付いた。

……精神的ショックは大きいツスよね。

俺だって、何もできない自分が惨めで、とても悔しい。

「すみませんが、戦闘に関しては先輩方に何も期待していません。」

戦闘に慣れてない人が参加しても、無駄な怪我を負うだけです」

悠夜にしては辛辣な言葉。俺に対しても言われているように思え、無意識に悠夜から目を反らした。

「でも、」

悠夜へ視線を戻す。

「僕のことですみません、ありがとうございます」

そう言う悠夜の表情はどこか嬉しそうで、少し哀しそうだった。

「さて、このままみんなと合流した方がいいですね。先に行ってください」

「森羅は行かないのか？」

「僕は相手をしないといけないので」

悠夜が視線を横に向ける。つられてその方向を見る。

そこにはゾンビのように佇む何人も偽悠夜。

「こいつら、また！」

「冬空先輩方は先へ。相手は僕がしますから」

「しかし……」

「どうやら僕一人だけが狙いみたいですし、ここで複数人が残っても効率が悪いですよ。早く行ってください」

確かにここは悠夜一人に任した方がいいのかもしれない。

悠夜を除いて一番の実力者と思われる冬空先輩でも、この偽悠夜には太刀打ちできなかった。

「……わかった。私達は先に行こう」

「そんな。ミキティーは悠夜くんを置いていくの!？」

「仕方がない。正直私達ではあれに対抗できない。そんな我々が残っても何もできない。なら、先に進むしかないだろう。柁原、お前も来てもらうからな」

「ああ、わかった」

「悠夜くん、私、信じてるからね」

「絶対待ってるッス」

「それでは、後で落合ましょう」

そう言っただけで俺達は悠夜に背を向けて、亮達じやうのところ向かった。

3

「見つからねえな」

俺こと、神薙亮は悠夜の指示通り会ったことのない白樺先輩とその白樺先輩を拐ったと言う不良を探しているが、手掛かりが全然無い。していることは聞き込みだけだが、成果は上がらない。

「なに弱気になっているんですの？ もっとシャキツとなさい」

一緒に行動していた霧坏きりつきに注意される。ちなみに今リリースちゃんは近くのコンビニでなんか買ってるらしい。

「悪い。でもここままでして手掛かりが無いっていうのもな」

「確かに。目撃者が全くいないと言つのも不思議ですし」

「だよな」

聞いた話によると、白樺先輩を拐った連中はいかにも『不良』という風体をしているらしく、学園都市ではまず間違ひなく浮く人を拐ったのなら、なおさらだ。

しかし、誘拐か……。実感わかねーな。

身近で、しかも学園都市の中の学生が行ってるなんて、正直なところあまり信じられない。

だからと言って、助け出さないわけにはいかないが。

「ごめん。お待たせ」

リリスちゃんが手に菓子パンを持ちながら走ってくる。

「遅かったな」

「ウザいやつがナンパして来たから、殴り飛ばして黙らしてた」

そうなのだ。

霧坏とリリスちゃんはまあ、見てくれだけは結構なものなので、聞き込みを始めてから野郎に数回ナンパされていた。

その度にリリスちゃんは暴力で、霧坏はお嬢様言葉から繰り出される相手の心臓をえぐるような毒舌で、ナンパして来たやつを叩きのめしている。まあ、あれだ。猫だと思って近いたら、実は虎だった、みたいな。

もし二人がナンパされてる光景を、悠夜が見たらどうなるだろうか？ 義妹と幼馴染みに手を出されたんだから……。あいつも結構ギタギタにしそうだな。悠夜って、ぶっちゃんけ女に甘いしスコンになりかけてるし。

「どうするの、このまま聞き込みとか続けるの？」

「うーん、そうするしかねえよな」。他に手はねえし」

「そうですね。せめて何か手掛かりがあれば、いいのですけれど」  
「うーん」「」  
「おーい」

俺達が腕を組んで頭を悩ましていると、聞き覚えのある声がした。  
振り向けば、こっちに走ってくる響ひびきの姿が。

「え、響？ どうしたんだ、てか何でここに？」

「ちよつくら、言うことができてちよつと通信コルしようと思ったらお前が遠目に見えたから、走って追いついて来たわけだニヤ」

「よく俺だつてわかつたな」

「ばか、何年お前とつるんだよ」

確かに、かれこれ響とは幼稚園からの仲になる。こうして考えると、響とも結構長いな。

「……………漫研の先輩の一人が、リヨウとヒビキのBL本つくつてたよ」

「ニヤに！？ 誰だニヤつ。誰がそんなこと言ってるんだニヤ！ てか何故今言う！」

リリースちゃんがぼそつて言うつと、響がものすごく動揺していた。  
というか、一つわからないことが。

「なあ、霧坏。BLつてなんだ？」

「……………世の中には知らない方がいいこともありますわ」

なんだ、なんだBLつて。誰か教えてくれ。

ボーイズラブです



「そんなことより、一体何がわかったんですの？」  
「そんなことって、これも結構重要なんだけど……。実は」

会話の途中で響のポケットの中にあるエレメントが震える。恐らく、通信コールだろう。霧坏も誰かからコールが来たのか、手にエレメントを持っている。

二人がコールをし始めたので、俺は手が空いたリリスちゃんに尋ねて見る。

「なあ、BLってなんなんだ？」

「……今あるヒビキとの関係を大切にしたいなら、聞かない方がいいよ」

だからなんだよ、BLって！

Boys Loveの略です

「ニヤー、大地からだったニヤ」

「私は玲さんからです。一回集合するから、現在地を教えてくださいと」  
「あっちの方も、進展あったのかね」

俺らとは別行動の悠夜達は、行方がわからない同級生 篤兎京を探していた。ただいなくなるだけならまだいいが、ドツペルゲンガーを見たと言っているらしい。

（白樺先輩に、篤兎ってやつ、本当に大丈夫なのか？）

何もわからず何も掴めないまま、心の中の不安や焦りが静かに加速していった。

それからしばらくして、大地達と合流できた。冬空先輩と演劇部の先輩二人もいる。だが、肝心の悠夜は何故かいなかった。

俺らが悠夜のことを尋ねる前に冬空先輩が説明してくれた。

篤兎京が家を探しても見つからなかったこと、最近頻発している行方不明者とドッペルゲンガーを見たという証言の関係性。そして悠夜のドッペルゲンガーが無数に現れ、一人で相手にしていることも

話を聞いて飛び出したのはリスちゃんだった。ものすごい速さで駆け出した彼女を、冬空先輩が腕を掴んで止める。

「離してっ」

「どこに行くんだ」

「お兄ちゃんのところが決まってるんでしょ！ だいたい、何でお兄ちゃん一人を置いてっちゃうの。それでも『友達』！？ もしお兄ちゃんに何かあったら」

「落ち着いて」

パニックになっているリスちゃんを、月弦が優しく諭す。いや、口調が優しいだけで、その表情は険しい。

「悠夜くんがね行けて、後で会いましょうって言ったの。私達は悠夜くんを信じてる。だからここに来たの」

「でも、だからって」

「私だって残りたかった！」

月弦がうつむきながら拳を握る。

「残って、悠夜くんと一緒に戦いたかった。力になりたかった。でも、私じゃできなかった。私がいたって、足手まといになるだけ。悠夜くんが困るだけ。だからここに来たの。悠夜くんのこと、信じたいから……」

月弦だけじゃない。

冬空先輩も、大地も、演劇部の先輩もみんな悔しそうに歯を食い縛っている。

「……………ごめん」

リリースちゃんも落ち着いたらしく、意気消沈している。

「一つ報告があるけどニヤ」

なんとも言えない雰囲気の中、響が口を開く。

「実は不良と思われる柄の悪い学生が、少しずつだけ一ヶ所に集まってるらしいんだニヤ。白樺先輩を拐ったやつもいるって話しニヤ」

「本当なの、金髪メガネくん」

「どこだ、どこなんだ!？」

すごい剣幕で響に迫る演劇部先輩と女装演劇部先輩。響はその二人に圧倒されながらも、冬空先輩を見た。

「場所は魔術決闘<sup>フェーデ</sup>技場。先輩と悠夜がバトツた場所だニヤ」

既に日は傾き始めていた。

魔術決闘<sup>フェーデ</sup>技場に着いた頃には日が落ち、辺りは薄暗くなっていた。

「入れるんスカ。普通こういうのって鍵とかかけてあるんじゃない」

「不良達が入ったって言うし、平気じゃね。いざとなったら冬空先輩が壊せばいいし」

「何故私なんだ？ 開けるぞ」

入り口は冬空先輩が開けただけですんなりと通れた。

俺らは一応トラップ等を警戒したが、何もなく話し合いの末、フエーデの戦闘ステージへと向かった。なんでも、悠夜が探知と探索の魔方陣を使った際、広い空間を見たとか。

岩がごつごつした戦闘ステージの前までやって来た。

「……開けますわよ」

霧坏が小声で確認する。下手したら、不良達と戦闘になるのかもしれないのだ。正直人と争うなんて、怖い。でも、やるしかない、自分にいい聞かせ手に魔結晶<sup>エレメント</sup>を握る。

全員がうなずいたことを確認し、霧坏が勢い良く扉を開ける。

「エクソシストだ！ お前ら全員動　！？」

先陣を切った冬空先輩が愕然とする。

フィールド内では不良が一人残らず気を失っていたからだ。

中央と思われる場所では、一人の女性の姿が。

「雲雀！」

演劇部先輩と女装演劇部先輩が走り出す。

名前を呼ばれた雲雀先輩はゆっくりとした動作で顔をあげると、顔を綻ばせ二人に抱きついた。

「キララ！ 努！」

「雲雀！」

「良かった、本当に……！」

「一件落着きたいだニヤ」

「ああ、何事もなく！」

その時俺は見た。二人に抱きつく雲雀先輩の顔が怪しく笑ったのを。

「みんな逃げて……！」

リスちゃんの声が聞こえた瞬間、俺の意識は闇へ堕ちた

第十六夜 ボクのフタイ、アナタのセカイ（後書き）

長いですが、まだ続きます 次も遅くなると思いますが、どうか  
お願いします

第十七夜 その劇中でワタシを演じる（前書き）

……遅くなってしまいすみません。

言い訳になりますが、伝助もいろいろ大変でした。この状況下でバンバン投稿できるユウザーさんは本当にすごいです。

『演劇部部員失踪編』もいよいよ佳境です。

それではどうぞ〜

第十七夜 その劇中でワタシを演じる

0

違う

ウチは違う

初めからわかっていた

誰かに言われなくても知っていた

ウチは違うと 届かないと

だからウチはいつからか、諦めていた

手を伸ばすことを

未来を望むことを

願いを叶えることを

でも……あいつは違った

ウチみたいに望んでも届かない、願っても叶えられないもの

あいつはただひたすら前へ進み、手を伸ばす



まぶしい

どんな照明で照された舞台よりも輝いて見えた

ウチもあいつみたいに

1

「おはよう。気分はどうかしら？」

まぶたを開く。

響（俺）の視界に入って来たのは、なんとも異様な光景だった。広い魔術決闘のフィールドには、眠ったように動かない不良達。亮りょうや他のみんなは十字架に縛られたように両腕を水平に持ち上げ、微動だにしない。まあ、俺もだが。手足を動かさそうにも、金縛りにあつたように動かない。

そして目の前にたたずむのは、先ほど演劇部の先輩二人と感動の再会に喜びを見せ、俺らが探していた雲雀ひばり先輩。その身には黒と赤を基調とした、西洋の舞踏会で見られるようないかにも豪華なドレスを着ている。

ドレスを見ていた俺の視線に気付いたのか雲雀先輩は、

「フフ、どうかしらこのドレス？ 私のオーダーメイドなの。この世でただ一つ、私だけのドレス……」

その場でクルッと回る。ドレスの裾が風に舞って、とても綺麗に見えた。こんな状況でなければ、目を奪われるところだが……。

「白樺、一つ聞かせる。この事件を起こしたのはお前か？」

「この事件って？」

「最近起きている行方不明者多発事件、そしてドッペルゲンガーを見たという幾つもの証言。そしてこの不良達が最近起こした突然の集団行動と篤兎京の失踪。全部お前が絡んでいるのか？」

「後半二つは当たり。両方私が関係してるわ」

「そんな、どうして!？」

祭場キララ先輩から漏れる悲痛な叫び。

「どうして？ フフ、ごめんねキララ。今は少し答えられないわ」

「……なあ、雲雀。京は無事なのか？」

今度は柁原努先輩が問いかける。だが先輩にも余裕は無いようで、声が震えていた。

「ああ、あそこにいるわよ」

雲雀先輩が指で左方を指す。すると、同じ方向を向いて金縛りにあっていた俺達の体は、つられるように体を左に向ける。もちろん自分の意思ではない。見えない糸で操られたかのように、動かされたのだ。体が自分のものじゃないように思えて、気持ち悪いことこの上ない。

強制的に変えられた視界には、本物の十字架に吊るされた篤兎京。その足下には、地面に倒れ死んだように動かない銀髪の少女。

「リリースちゃん！」

「おい、何しやがった！」

「もう、そんな大きな声出さないで。がつつく男の子は嫌われちゃ

うぞ」

声を張り上げる俺と亮をめんどくさそうに見据え、雲雀先輩は呆れたように首を振る。

「だって仕方がないでしょう？ あの子だけ眠らなかつたし、大人してくれないなら気絶させるしかなかったし」

「言い訳はいい！ んなことより、この拘束を解除しやがれ！」

頭に血が登ってしまった亮が、掴みかかる勢いで叫ぶ。

俺も目の前で友人が傷ついている見て怒りを覚えないわけではないが、頭の中では引つ掛かっていた。

確かこの悠夜ゆうやの先輩を見たのは数回ほどしかないが、内気という印象が嫌でも植え付けられてしまうほどオドオドしていた記憶がある。後輩である自分にも話しかける時は目を合わせてくれないと、悠夜が苦笑混じりに喋っていたのを覚えている。

だけど俺らの目前にいる雲雀先輩はそんなイメージとは真逆、何事にも臆すること無い威風堂々とした雰囲気纏っている。

まるで外見だけそのままに、中身が入れ換わってしまったみたいだ。

より異質な物に……。

「それは無理な相談だわ」

「なんだと!？」

「だいたい、私は拘束魔法なんて使ってないわよ。使えないし」

「どういうことだ!？」

俺らは篤兎京みたいに物理的に拘束されていないから、念動力や空気を操って動きを封じられたと思った。だが、拘束はしてないだつて？ じゃあ、体が動かないのは……？

「一度は思ったことあるでしょ？ 《もう動きたくない。ここから離れたくない》って」

先輩は自分の頭を指さしながら、楽しそうに笑う。

「私はそんな奥にしまってある人の《心》を引き出したの。私はただあなた達の本能を刺激しただけ、あなた達は自分で動けなくしているの」

「そ、そんなこと、精神操作ツスよ！ あんたわかっててやってるんスか！？」

「あら、そうだったの？ 知らなかったわ。まあ、知ったところで何も変わりはないけれど」

クスクスと。

口に手を添えて笑う姿は、まるで古の魔女のように美しく禍々しい。俺は妙な寒気を覚えた。

「なんで、なんでこんなことするの？ 京を解放してあげてよ……！」

「ごめんねキララ。あなたの頼みでもそれは聞けないわ。だってこれは京が望んでいることだもの」

「ど、どういふことなの！？」

「京の夢は知ってるでしょう？ それは女優になること。京のお母さんは旧姓、石動明子いしどうめいこなの」

石動明子。

聞いたことがある。

今は引退した身だが、十数年前に爆発的な人気があった大物女優。親父が石動明子の大ファンで、写真を見せてもらったことがある。

こうして思い出すと、篤兎京にいい具合の大人成分をプラスした感じだと思う。

正直、石動明子が結婚していて、その娘が篤兎京と言うことになり驚いた。まあ、こうして考えると、確かに二人は似てると思うが。

「京はね、母親に憧れて舞台女優になろうとしたんだって。それで中学高校の演劇部に入ったの。でも学園都市に来る前は、いろんな人にお母さんと比べられたんだって。舞台がうまけいっても比べられ、失敗してしまっても比べられたって。誰もがそうやって京は母親との違いを見つけ指摘し、一人で悩んでいたの。心のどこかでは自分では無理だと、母親と同じようにはなれないって。」

「だからこそ私は京を助けるのよ。先輩としてね」  
「助ける？ いったいどうする気だニヤ」

後輩を助けると言っておきながら、雲雀先輩はその後輩を十字架に縛りつけている。どうしても矛盾してるとしか思えない。

「フッフ、それはお楽しみ」

この先輩、さつきから笑ってばっかだニヤ。なんだ、この余裕？俺ら全員を拘束してるからか、それとも

「……話しを戻らしてもらおう」

冬空先輩ふゆぞらが再び口を開く。

「さつきはちゃんと否定しなかったが、お前は本当に行方不明者多発事件に無関係なのか？」

「確かに私は直接関わってないわ。でも、まるっきり無関係という

わけではないかもね」

「それはいつたい……」

冬空先輩が絶句。

俺らも驚愕と困惑が支配し、ただ“それ”を凝視するしかなかった。

目の前の霧が突然晴れたように

騙し絵の原理、トリックがわかった瞬間のように

まるで最初からそこにあっただように

“それ”は雲雀先輩の背後にいた。

見上げるほどの高さを持つ大蛇。

体表を彩る鱗は黒と赤。雲雀先輩のドレスと同じだ。

まるで精巧な像のように微動だにせず、けれどどこからでも確認できるキラキラと光を宿す黄金の瞳で、“それ”が生きているのがわかる。

怪異。

誰かに言われなくてもわかる。

異形にして、異常。

生きる災厄が目の前に合った。

「私は学園都市の外で悪さなんてしてないわ。ドッペルゲンガーなんて、他人に見せることもできない。でもね、それを実行したのは“この子”よ。全ての元凶にして、私の道標」

「待て、白樺。根本は魔力の集合体とはいえ、お前は怪異を仕えさせているとも言うのか？」

「……私と“この子”が出会ったのは、ちょうど二週間前。突然の

出来事だったわ」

おそらくリリスちゃんが転校して来た頃だ。

「最初は私も怖かったわ。見た目が蛇だし、丸飲みになれると思った。でもね、“この子”は私に喋りかけてきたの。“この子”は私を選んだ。私は“この子”を受け入れた。

そして、私は力を手に入れたの」

「怪異と同調したって言うの……？ でもそんなの、悠夜くんが『ヒト』と呼べないって」

「だったら」

雲雀先輩は笑う。

「私は化物、なんだろうね」

それがさも当然と言わんばかりに、雲雀先輩は笑う。

「“この子”は人にドッペルゲンガー（幻想）を見せて、さ迷わせ、導いてこのアストラルに来たんだって。人と言っても誰でもいいってことじゃないのよ？ 心の中に強い【不和】を宿していない駄目なの」

できの悪い生徒に教える先生のように、自分のアイデアを無邪気に喋る子供のように、雲雀先輩は話す。

「人は誰しも心の中に【不和】を持つ。嫉妬や孤独、恐怖から来る世界との歪み。

……あなた達も一度は思ったことはない？』どうして世界はこんなにも酷くて汚いんだろう』って」

そりゃ、思ったことはあるにはある。

オタク嫌いで狂暴な実の妹ができた時は、神様のバカヤローなんて叫びたくなつてたよ。ちなみに、妹相手にバカヤローと言ったら、罵りながらグーパーパンチをくらった。

でも、それこそ誰だつて思つてしまつたらう。

些細な不幸やちよつとしたトラブル、大きな問題も人は背負うことはせず『何か』のせいにしよつとする。

「確かにそうね」

背中に悪寒を感じる。

まるで俺の心の内を見透かしているような笑み。沸き上がる恐怖心で、俺は雲雀先輩から目を話せなかつた。

「けれど世界は許さない。【不和】から生まれる望みを。だつてそうでしょう？　どんなに努力しても、どんな役を演じても私の願いは叶っていないのだから」

今まで浮かべていた笑みから一変。

現れたのは憤怒の感情。まるでこの世の全てを憎んでいると言わんばかりの表情をその綺麗な顔にうつし出す。

ぶつちやけ言つて結構怖い。なまはげにも匹敵するかも。

「私が何をしたつて言うの！？　私だつて望んでこんなものになつたんじゃない！　私はただ、幸せになりたかつただけなのに……。もちろん自分の運命を受け入れよつとしたわ。受け入れて、頑張つた。でも、それでも、世界は私を除外する。私を闇に縛り付ける」

俺は気が付いた。



雲雀先輩が呪詛を呟くように口を開く度、先輩の後ろで佇む大蛇の瞳が輝きを増す。

こいつ、喜んでやがるのか……？先輩が怒りを顔おもてにしているのを。

「私の舞台はどこ？」

私のドレスはどこにあるの？

世界なんていらぬ

私の舞台は私が作る

私のドレスは私が繕う

私は世界で輝けないのなら 全て壊すしかない

この手で！

「白樺、お前は どうしてそこまで世界を憎む。何が あつたんだ？」

「フッフ、私が世界を憎む以前に、世界が私のことを拒んでるんだけど。ねえ、冬空さん。あなたは この世に生まれて後悔したことはある？」

「…………… ああ、何度も したことはあるさ」

「あら、 そうなの。完全無欠の生徒会長が そんなことを言うなんて ちょっと意外。ま、誰にもあるわよね、 そうなの。」

私は物心ついた頃から 毎日後悔してきたわ。

鏡で自分と向かい合う度。誰かと楽しくおしゃべりする度。街で素敵な男性（人）を見かける度。笑われた過去を思い出す度。これ

からも続くであろう未来を想像する度に

でも、そんな日々とはもうおさらば。私は生まれ変わる。そして世界は創り換えられる」

雲雀先輩は一回そこで言葉を区切ると、とても強い眼差しで俺らを見据える。

「私はね、男の娘なの」  
『……………』

一同沈黙。

衝撃の事実を前に、俺以外のみんなも開いた口がふさがらない。この様子だと、同じ部活の柁原先輩と祭場先輩も知らないみたいだ。男の娘ってことは、アレか？ 精神と肉体の性別が一致しないという性同一なんかかってやつか？

「正しくは性同一性障害よ」

そう、それ……って、やっぱり心読まれてねえか！？  
けれど、正直雲雀先輩が『男』だというのがいまいち信じられない。

確かに貧乳だし、背は女子にしては明らかに高い。でも、雲雀先輩は結構な美人だし、華奢な体躯にぱっちりまつげといいどころからどう見ても『女の子』だ。

もちろん冗談で言うことでもないと思う。第一、先輩の目はマジだ。おふざけの欠片もない。

それに、雲雀先輩が性同一性障害だってなら、やろうとしていることや今回の騒動は頷ける。

きつと俺らには想像できないほどの苦痛を味わって来たのだろう。

それも幼い頃から。

でも、だからって 大切な仲間を裏切っていいはずがない！

「信じてもらえたようで嬉しいわ。私、性同一性障害を自覚してから『女の子らしく』あるうとしてたから、周りにはなんとか隠し続けられたけど。ウフフ、この学園都市に来て初めて言っちゃった。

他の人には内緒よ？ でも、これでわかってくれたわよね？ 私がしようとしてることと、その真意を。安心して、別にあなた達に危害は加えるつもりはないの。むしろあなた達の為になることを私はしてるのよ？ あなた達だって、世界のせいで苦しんだ経験があるでしょう？」

「ざけんニヤ！ 怪異とグルになって何かするような奴に言われても信用できないぜ。だいたい、叶えたい望みがあるかどうか知らねえけど、こんなことして間違つてるとか思わないのか！？ ここにいる連中はみんな、あんたのこと心配してここまで来たんだぞ。悠夜だって、……その篤兔だってお前の大事な仲間（後輩）じゃないのかよ！」

「そうよ、大切に可愛らしい私の後輩よ。でも何がおかしいの？ あなただって大切なものは大事にするでしょ？ 私はちゃんと後輩想いな。何回も言うけど、これは京の為でもある。そして悠夜くんの為でも……」

「そこで寝ている篤兔さんがどうかは知りませんが、私達の悠夜さんはあなたがしようとしてることなんて1ミリたりとも望んでませんわ」

「はたしてそうかしら？ あなたよね、霧坏恋華ちゃんって。悠夜くんから聞いたわ、あなた達の中で一番付き合いが長いって。他の人達のこともしそうに話してたわ。それを踏まえて聞かせてもらうけど、恋華ちゃん、あなたは学園都市で悠夜くんと再会して何か気付いたことはある？ 正確に言うなら、再会する前と後の悠夜くんとで何か決定的な違和感はあるかしら？」

「それは……。っ、あなたに悠夜さんの何がわかるんです！」

「強がつてるけど、その顔はあるって顔ね。あなただけじゃなくて、他の人も一度は頭によぎったことあるんじゃないの？」

悠夜くんは自分らと違う)……………(って「

ある。

悠夜とつるむようになって数週間、いや、下手したら最初から悠夜の持つ違和感に気付いていたかもしれない。

あいつは俺達と居ても、別の誰かのことを考えているようで。

あいつは窓の景色を見ていても、瞳にはどこか別の場所を写しているようで。

あいつは確かに笑っていても、心のどこかでは何を考えているのかわからなくて。

あいつは俺達と同じ方を向いていても、本当は全く違う道歩いているように思えて。

そう思う度、俺はひどく苛つく。

悠夜はいい奴だけど、俺らはあいつにとってダチなのかと考えてしまっ。

これが単なる被害妄想ならいいが、いや、こんな場面で雲雀先輩に指摘されるぐらいだから、もしかしたら本当に悠夜は

「人と人は違う……。誰かはそこがいいと口にするけど、私はそうは思わない。

違いがあるからこそ私は苦しむ、京は悲しむ。そして悠夜くんは一人ぼっち……。

もうそんなことはさせない。私が許さない。大切な後輩は私が守る、自分の舞台は自分で飾る。  
その為に私は世界を壊す」

まるで独裁者の演説のように。

あるいは夢想家が語る絵空事のように。

白樺雲雀は口にする。それが自分に下した使命と言わんばかりに。

「うっ、……ひば、りせん、ぱい」

「京、大丈夫なのか!？」

「良かった……」

先ほどまで意識のなかった篤兔京が目を覚まして口を開き、柀原先輩と祭場先輩が嬉しそうに呼びかける。

「あら、起きたの？ おはよう。良く眠れたかしら」

雲雀先輩も声をかける。あんたが眠らしたんだろうに……、うん？ そっぴや、何で篤兔の奴は俺らとは違ってガチで拘束されてるんだ？ 意識が無い人間には大地が言う『精神操作』は使えないのだろうか。いや、俺らもはじめは気を失ってたわけだからそれは無いのか。じゃあ、いつたい……

「雲雀先輩……、こんなことは止めてえな。ウチはこんなこと、望んでへん」

「嘘はつかなくてもいいのよ。私は京が苦しんでたことちゃんと知ってる、だから」

「ウチはわかったんや」

「京?」

「確かに、いつもウチは夢を語る度に無理だと言われてきた。学園

都市に来る前は、演技が上手くいってもそうでなくても、母の名前を持ち出され自分のことを見てもらえずにずっと苦しんできた。でも、もういい、ウチはわかったんや。

例え世界に笑われたって、誰かが隣で微笑んでくれれば、それはきつと素晴らしいことなんだって。ウチは演劇を続けてずっと笑われてきたけど、続けてきたからこそこうしてかけがえの無い仲間に出会えた。雲雀先輩に努先輩、キララ先輩。それと悠夜にも……。だからウチはもう望まん。ウチは平凡で楽しく笑ってられる、今がいい」

「そんな……、何で、京……？」

「雲雀先輩かて本当はウチが望んでないことを気付いていたんやろ？ だから、先輩の誘いに乗らず、一人で自分の部屋でいたウチを無理やり連れて来たんや。」

……先輩。ウチも、悠夜も、こんなことで楽になるうなんてこれっぽっちも思ってたへん。本当は雲雀先輩も一緒ちゃうんですか？」

篤兎京からこぼれた言葉は、決意の現れ。その瞳には迷いが一切なかった。

「そんな、なんで……、どうして……？」

対する雲雀先輩は目に見えて動揺していた。まあ、無理もないだろうな。自分と同じ側だと思っていた人間が、真っ向から否定して来たのだから。彼女の中では裏切りに近いのかもしれない。

「例え、例え私は一人になったとしても続けるわ。この醜い世界が終わるまで！」

「もう止めてえな！ ウチは先輩が傷付くところなんか、見たくないんや」

「傷付く？ 言ったはずよ、私は物心ついた頃から後悔してきた、

ずっと傷つけられてきたって。

もう私は止まらない、誰にも止められない。

フフ、ウフフ、アハハハ……！」

雲雀先輩から発せられる狂気の笑い声が、魔術決闘フェーデの闘技場に響き渡る。

俺は悟ってしまった。

白樺雲雀はもうダメ（・・・）だと。

仲間と後輩の懇願も聞き入れず、自分の意思をそれこそ愚直なほど押し通す。

そこまでして望む物の為、怪異 異形まで受け入れたこの先輩はもう誰にも止められない。

少なくとも、俺には到底無理だ。

自分の意思では動かせない手足が物語っている。

「さあ、初めましょうか。ウフフ」

雲雀先輩がゆっくりとこちらに近付いて来た。先輩の接近に伴い、背後にたたずんでいた大蛇も地面を滑るよう移動する。

……初めるって、何を？ もしかして、後ろの蛇のディナータイムとかじゃないよニヤ？

「安心して、苦しむ間もなくすぐに終わるから。ウフフ、ハハハ

」

それは突然聞こえて来た。

『 黄昏 雨に消えて 黒い闇夜があなたを包む

流れ星が煌めくあなたの瞳 涙の影が夢へと繋がってゆく』

? なんだ……

「何、何なのこれは？」

突然聞こえて来た声。それは俺達の聴覚を刺激し、フェーデの闘技場に響き渡る。

雲雀先輩は動揺し、首を巡らすも音源は見当たらない。

『ボクが拾う鼓動の欠片は あなたが唄うキセキの調

空に浮かぶ月が隠れても 探せるように』

それは優しい子守唄のようで、こんな局面にも関わらず俺の心は安らいでいた。

まるで、大切な誰かがすぐそばに居るような安心感。

『例えこの身に愛がなくとも この道化は愛しいあなたの為に

今夜もあなたの笑顔がありますように ボクは一人踊る

明日もあなたの笑顔がありますように ボクは一人祈る……』

唄声が終わる。すると、変わりに今度は足音が聞こえて来た。この場にいた全員はその音に気付き、一斉に首を向ける。

「こんばんは。遅くなってすみません」



唄声の主

悠夜がそこにいた。

第十七夜 その劇中でワタシを演じる（後書き）

長い上散々待たした結果で申し訳ございませんが、まだ続きます。  
次の更新で『演劇部部員失踪編』はラストですのでどうか見守って  
ください。

誤字・脱字報告、レビューや感想を心からお待ちしております。

以上、伝助でした。さようなら

第十八夜 科学起動、この手は魔を祓う為に（前書き）

本当にお久しぶりです。

一ヶ月以上かかってこのクオリティ……  
どうか暖かい目で読んでいただければかと  
我ながら泣けてきます

それではどうぞ〜

第十八夜 科学起動、この手は魔を抜う為に

1

「こんばんは。遅くなってしまいすみません」

両手が袖の中に隠れ、裾が地面すれすれまである黒のロングコート。前を止めるファスナーは全開で、中の服も黒で統一されている。右耳には黒いサイコロのようなイヤリングを着けている。トードマークの長髪と右目を隠す眼帯も身に付け、まるで闇夜に溶け込むかのようなファッション。

悠夜は身動きの取れない亮（俺）達を視界に捉えながら、誰に對して言うでもなく口を開く。

「遅くなんてないわ。むしろ丁度いいくらい。

もしかして、さっきの唄は悠夜くんが歌ってたの？ とっても上手だったわ」

赤と黒で彩られているドレスを身に纏った雲雀先輩ひばりが楽しそうに悠夜を褒める。

その背後では、赤と黒の鱗を浮かべた、いかにも人一人を丸呑みできそうで見上げるように巨大な大蛇 怪異の姿が。

「ありがとうございます。僕の歌って結構好評なんですよね」

ヒーローのようにやって来た悠夜は、別に嬉しがるわけでもなくただ言葉を返すだけ。パツと見、先輩後輩がありきたりな会話して

るように見えるが、笑う雲雀とポーカーフェイスの悠夜。とても友好的な雰囲気には見えない。

悠夜は首を左右に巡らせ、身動きの取れない俺ら、十字架に張り付けられた篤兎とくととその傍で横たわるリリスちゃん、地面に倒れている何十人もの不良。そして、妖しさを含んだ表情を浮かべる雲雀先輩を視界に映す。

「……これがあなたの舞台ですか。綺麗とはあまり言えませんね」

「あらあら、厳しい評価ね。でもこれはまだ、序章の舞台。場面展開すればもつと華やかになるわ」

「そうですか。……あの、ところであなた達はさつきから何をしてるんですか？ 墓地に自分達を見立てた集団メッセージ？」

「んなわけあるか！ その先輩に何されたかわからんが、身動き一つ取れないんだよ」

ツッコミの勢いで悠夜に情報伝達。俺にもツッコミスキルがあったんだな。

「雲雀先輩。彼らをあなたの舞台の一部にしようとしても？」

「必要ならばそうするつもりよ」

「……………」

おいおい、一生このままとか冗談じゃねえぞ。どうにかならぬのか……………」

「でも、悠夜くんは心配する必要なんてないわ。

あなたも私の世界に足を踏み入れたのだから！」

「くっ」

雲雀先輩がズバツと勢い良く、悠夜に人差し指を向ける。すると悠夜は見えない糸に操られるかのように、下げていた両腕を俺らと同じように水平に固定した。

もしかして、いや、もしかしなくても、悠夜まで拘束されたのか？

「どうかしら。私の舞台の一部になった気分は？」

動けない悠夜の目の前で、雲雀先輩が満足そうな笑みを浮かべる。悠夜は身動きが封じられたまま、うつむかしている顔にニヤリと笑う。……笑っ？

「ハハハ」

「な、何がおかしいの!？」

口からも声が漏れ、悠夜は実に楽しそうに雲雀先輩へ笑いかける。

「雲雀先輩を騙せるのならば、僕も演劇部員としての力量が上がったようですね」

悠夜はそう言って上げていた両腕を静かに下げた。……え、下げんの？

俺は自分の意思で腕を動かそうとするが、相変わらず動かなかつた。どうやら雲雀先輩の力が弱くなったとか、そういうのではないらしい。

「な、何で!？ あなたも(・)私の世界の中で自由に動けるの!？」

も？ もしかして、篤兎やリリスちゃんや俺らみたいになってないのは、精神操作とかゆづのができなかつたからか？ そして悠夜

にも

「あなたの世界の常識は、どうやら僕には通用しなかったようですね」

「ッ！……まあ、いいわ。舞台上のアクシデントなんて、無いとは限らない。むしろまだ、修正可能の範囲内よ。悠夜くんが私の世界に居るのは変わらないのだから」

そう言う雲雀先輩は、優雅なしぐさで指をパチンと鳴らした。聞いた音が辺りに響く。

すると、地面に横たわっていた数十人の不良達が、まるでゾンビのようにゆっくりと立ち上がった。しっかりと体重を二本の足で支えているものの、開かれた瞳には自我の光は無い。

「より強い精神操作……！ 下手したらその人ら廃人になるツスよ」  
「へえー、そうなんだ」

俺のすぐ傍で大地だいちが悲痛な声を上げるが、肝心の雲雀先輩は全く意に介さない。さも、どうでもいいと言った様子であしらう。……雲雀先輩のやろうとしていることは誰かを犠牲にしていることなのか？ 今更ながら、俺は置かれた状況とあくまで冷静な雲雀先輩に恐怖を覚えた。

「なるほど。操ったこの人達を利用し、誘拐劇を自作自演したというわけですか。ずいぶんと手の込んだことを」

「ウフフ、正解。」

……役者には小道具が必要よね」

雲雀先輩が再び指を鳴らす。不良達の手がひかり、お伽噺に出てくるような剣が握られていた。

「模造刀だけど、当たると痛いから気をつけてね?」

「……選択肢はありませんか。ま、この方が僕は得意分野ですから構いませんけど」

悠夜は耳に着けたイヤリング　黒い七面体のサイコロを外し、  
宙へと投げた。

「匣型特殊魔結晶、発動　一ノ目、禍鎌!!!」

ダイス・エレメント

ハートブレイカー

宙を舞っていたサイコロが黒く輝き、その形状を禍々しい鎌へと変えた。自身の背丈ほどある黒い鎌を持った悠夜は、死神を連想するには充分な出で立ちだ。

「雲雀先輩、あなたの世界は僕のサイコロの中です」

「それはどうかしら?　行きなさい!」

雲雀先輩の声で、武装した不良達が一斉に悠夜へ距離を詰める。  
対する悠夜も得物を構え、迎撃体制を取る。

不良の一人が悠夜の正面から斬りかかる。悠夜はそれを鎌で受け止め、相手の腹へ強力な蹴りを入れ地面に転がす。

同時に、背後から迫った一人が悠夜へ攻撃を加えるが、後ろの不良へ振り向くことなく弧を描くように鎌を動かして防御する。

「無駄ですよ。いくら洗脳して動かしても、所詮は学生の寄せ集め。数で押しても、意味はありませんよ」

「さて、どうかしらね……」

雲雀先輩が右手の人差し指を上にくイツと曲げる。すると、悠夜の一撃で地面に横たわった不良が、再び起き上がりその手に武器を



持つ。

「……動けない程度に痛めつけたつもりなんですがね」

「痛みも思いも願ひも、役者には関係無いわ。台本に決められた通りに動くだけ。演出（私）の指示でね」

「なるほど。完全な操り人形というわけですか」

役者とかそういうの以前に、不良達を道具としか見ていない雲雀先輩。

悠夜がいくら攻撃を防ぎ、反撃を加えるもまるで意味をなさない。どんなに強力な蹴りや拳をくらっても痛みを感じないのか、すぐに戦闘へ復帰する。

状況は悠夜が一向に悪い。

「ほらほら、どうしたのかしら？ 悠夜くん（ヒーロー）はこんなところで舞台から降りてしまつもの？」

「好きかって言ってくれますね……！」

悠夜は戦法を変え、不良の集団から距離を取るように動く。囲まれないよう移動しつつ、どうしても攻撃を回避できない時だけ、鎌を器用に使って相手の武器をはじく。そしてまた距離をあける。

真つ向勝負が有効的ではないのが目に見えているが、悠夜に打開策があるのか？

「頑張るなあ、悠夜くん。でも、その頑張りもいつまでもつかしらね」

雲雀先輩の聲がさつきよりも近くに聞こえ、思わず声のした方へ首を向ける。どうやら首から上は自分の意思で動かせるようだ。

俺の左、響ひびの肩をポンと叩くと、

「あなたの魔法、借してもらっわね」

響の右腕がゆっくりと動き、その手の平を悠夜へと向ける。

魔法を借りるって、まさか……！

「や、やめるニャー！」

「さあ、照明に照らされなさい、悠夜くん」

響の制止も効かず、無理矢理放たれた雷が音をたてて悠夜へと襲いかかる。

不良達は道を開けるように後ろへ下がりが、悠夜が異変に気付くも既に時は遅く、非情な雷撃が放たれる。

地面を黒く焦がし、夜に染まつた景色の中で暴力的な光が悠夜を襲う。

ドバン……！！

命中。操られている為か、冷酷無比、寸分の狂いも無い一撃が確かに悠夜へと届き、轟音を発した。けれど

「な、なんで……？　なんで平気なの！？」

手加減も何もしていない、直撃すれば最悪絶命してしまうかもしれない雷。だが悠夜はそれを受けながらも地面に立ち、しっかりと目を見開いていた。

突き出された悠夜の右手。そこへ避雷針のようへ進むように向かった雷は、見えない壁に行く手を阻まれるように停滞しながらも前へ前へと進むうとしていた。その光景はまるで、悠夜が右手一本で雷を受け止めているように見える。

ピキッ、メキッ、ギリッ

まるで鏡の表面にできるひびが枝分かれするように、雷の先端から亀裂が走る。

……確か、俺はこの光景を見たことある。

パリンッ!!!

隅の隅まで亀裂が走った瞬間、雷は結晶が弾け飛ぶように音をたてて崩壊した。

その様子はあの時と非常に酷似していた。

以前行われた魔術決闘<sup>フェーデ</sup>。

悠夜と冬空先輩<sup>いふそく</sup>が戦ったこの場所で。

それは起きた。

冬空先輩が最後の魔法を使った瞬間、誰もが悠夜の敗北が頭を過った。確かに負けはしたけれど、悠夜は冬空先輩の魔法を退け何らかの方法で消滅させ限界まで冬空先輩に挑んだ。

今の雷が消えた現象はまさしく魔術決闘<sup>フェーデ</sup>の再現に思える。

魔術決闘<sup>フェーデ</sup>が終わった後は悠夜の弟子になったりと、いろいろあったし詳しくは聞いていなかったが、今ので確信できた。

悠夜のやつ、魔法をその魔力（存在）ごと消しやがった！

「何をしたの!?!」

悠夜対冬空先輩の魔術決闘<sup>フェーデ</sup>を見ていなかったのだろうか。雲雀先輩は響に触れたまま、困惑気味に叫ぶ。

動揺する雲雀先輩を冷ややかに見つめながら、悠夜は質問には答えず左手に持った鎌を雲雀に向けた。

「雲雀先輩　あなたは科学を信じますか？」  
「カガク？　……いつたい何が言いたいの」  
「反撃開始と言つことですよ、リリスさん！」  
「とっつ！」

悠夜がその名前を呼んだ瞬間、リリスちゃんは勢い良く立ち上がると見せかけてジャンプした。結構な高さまで飛び、体を折り曲げるように丸くなり回転を加えながら落下、極めつけに『シャキーン！』と決めポーズを取りながら悠夜の傍らへ着地した。  
……正直やる意味がわからない。動けたことにも、もちろん驚きだが。

「あなた動けたの！？」  
「ううん、さつきまで私は機能停止（気絶）してたよ。でもお兄ちゃんの呼び声で起きたの。……ところで変なポーズで突っ立って、みんなは何をやってるの？　ウケを狙ってるならもう少しマシなもの……」  
「ちげーよっ！　操られてんだっ。というかウケがどーのこーのなんて、ついさつき『シャキーン！』をやった奴に言われたくねーよっ！」  
「リリス・ペンドラゴン」

悠夜が再び義妹の名前を口にする。けれど今の声はどこか無機質で、いつもリリスちゃんを呼ぶ声とは違うように思えた。

「所有者（僕）の名の元、命じます。  
科学起動、その両手に宿すは闇を撃ち抜く銀の弾丸」  
「イエス、お兄ちゃん（マスター）。白銀の荒鷲、ダイヤモンド・イーグル起動します」

リリースちゃんがポケットから取り出した髪ゴムで素早く髪をツインテールに結び、悠夜は手にした鎌をおもいつきり雲雀先輩へと投げた。

「くっ！」

雲雀先輩は当然のように避ける。フワリと宙を浮くように舞い、再びあの怪異の大蛇の手前へ。悠夜の鎌も、ブーメランの要領で持ち主の手へ戻ってゆく。

髪を結び終えたりリリースちゃんは、服の袖から二つの金属体を取り出した。L字の形のしたそれを握りしめ、独特の構えをとる。

「標的はみなさんの額。弾丸は貫通しない物を」

「オーケー、ご主人様。<sup>マスター</sup>弾丸装填、発射します」

ん、何か不穏な単語が聞こえてきたぞ。

標的？ 額？ 貫通？ 発射？

「歯あ食い縛って、ね！」

パンツ！、パンツ！、パンツ！

「痛てえー！！」

乾いた音がリリースちゃんの手元から聞こえたかと思うと、額のちようど中心に小さい何かがあるものすごい勢いで当てられた。

この衝撃に一番近いのは、小さい頃響や他の友達と遊んだ銀玉鉄砲だろう。だが、威力はこっちの方が格段に強い。

あまりの痛さに思わず後退り、手のひらで額を押さえる。……………

…って、あれ？ 俺の体、動く。動くぞ！ 雲雀先輩のなんか良く

わからん拘束が解けたのかつ。俺以外のやつも（めちくちゃ）痛そうに額を押さえているが、自由に動けるようだ。

「ッ！ まだよ、手駒（役者）はまだいるんだから」

雲雀先輩が腕を横に降り、不良達が悠夜とリリスちゃんへ駆ける。二人は臆することなく立ち向かう。悠夜は鎌と蹴りを繰り出し、不良をフィールドの隅へと追いやる。後ろに控えたリリスちゃんは銀玉鉄砲（のような物）を使って俺らの時と同じように、小さな球体と思われる金属の額にぶつけてゆく。地面に転がった不良はゾンビみたいに起き上がるうとはしない。きっと精神操作とやらが、悠夜とリリスちゃんの活躍でなくなったのだろう。

森羅もりあみ兄妹は文字通りばったばったと敵を薙ぎ倒し、とうとう立っている者は俺らと雲雀先輩だけになった。

悠夜は呪縛の解けた俺達を背中で庇うように立ち、眼前で佇む雲雀先輩と対峙する。リリスちゃんは十字架に固定された篤兔を解放しようとするが、両手足を縛っている鎖に苦戦していた。

「なんで……、どうしてそこまで私の邪魔をするの……？ 私は幸せになっちゃいけないの？」

怒りを通り越して、『虚無』の表情を浮かべた雲雀先輩はまるでよくできた仮面をつけた雰囲気を醸し出す。

雲雀先輩のやってることは確かに間違っていると思う。でも、先輩の気持ちは俺にも少しだけわかる気がする。どうしても選びたくない選択肢しか目の前にない時、人はいったい何を選べばいいのか

「僕は別に、あなたのしてることは間違っていると言っ気もありませんし、正直なことを言ってしまえば邪魔をする気もありません」

「じゃあ、なんで  
「それはあなたが『白樺雲雀』だからです。……僕の知っている『  
白樺雲雀』はとても優しく、ヒトの心に機敏です。誰かを傷付けて  
まで、自分の願いを叶えようとはしません。例え叶えられたとして  
も、あなたは苦悩と負い目から笑顔にはなれない。」

僕は笑顔を浮かべることができなくなった雲雀先輩なんて見たく  
ありません」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！  
私の何を知ってるってゆうの！ 知りもしないくせに私のことを  
語るなつ。悠夜くんは私のこと全然知らないからそんなことが言え  
るのよ。」

なんなら教えてあげようか？ 私は今までいくつもの苦痛を味わ  
い、何度も夢を描いては諦めてきたわ。どれもこれも生まれた時か  
ら

「知ってましたよ」

「！？」

「あなたが性別を周りに偽って生活していたことは、前から気付い  
ていましたよ」

マジでか！

こつ言っちゃんだが、雲雀先輩の『女装』は完璧と言っても過  
言ではない。同じ部活で一年の付き合いがある二人の先輩の目も欺  
いていたのだから。正直俺は、雲雀先輩が真実を告白しても未だに  
信じられない。雲雀先輩はどの角度から見ても『女の子』だ。とい  
うか何で悠夜は雲雀先輩が女じゃないってわかったんだ？

「ヒトの性別なんて、そのヒトの骨格を見ればわかりますよ。だい  
たい、性別を当てる確率なんて二分の一じゃないですか」

「……………いつから？ いつから私が男だって気付いてたの？」

「初めてお会いした時には『おや?』と違和感を覚えた程度ですが、次の日に雲雀先輩を見て偽っていると確信しましたね」

「そう、そんな前から……」

雲雀先輩は変わらずの無表情。だがその目には憤怒を浮かべ悠夜を睨み、拳はドレスを強く握りしめていた。

「あなたもやつぱり私を騙してたのね! 私と平気な顔して話して部活して、一緒に帰って、でも本当は私のことを奇異の目で見てたんでしょ!? 私が自分の夢を語った時だって、本当は心の中では私のことを嘲笑ってたんでしょ!」

「それは違います」

「何が違うの? 私が将来の夢を言った時は、もう私の性別のことはわかってたんでしょ」

「確かにあの時にはすでにわかっていましたよ。でも僕はあなたの置かれた状況を知った上で僕は『笑わない』と言ったんです。

誰かが思い描く夢を笑い飛ばすなんて真似僕はしたくないですし、現にとても似合うと思いますよ? 雲雀先輩が『お嫁さん』のように朝の台所でエプロン着けて料理する姿は。雲雀先輩は性別がどうのここの言う以前に、『女性』としてとても魅力的な方です。内気な性格からあまりヒトとうまく関われないかもしれませんが、それでも誰かを常に思いやりたり自分にできることを最大限にこなそうとするところはすごいと思います。

雲雀先輩はとても尊敬でき、目標の一つとなるヒトです。そんなヒトの夢を、僕は笑わずに応援したいんです」

そう言って悠夜はにっこりと笑う。こんな緊張状態にも関わらず、まるで子供のように純真無垢で誰もを安心させるような笑顔は、目の前にいる一人の先輩がいかに大切な存在であるかを物語っていた。



「悠夜くん、私……」

毒気を抜かれた表情の雲雀先輩が頬に涙を流していた。その手を悠夜へと伸ばし、距離を縮めるため足を前に進める。

けれど、その瞬間

「きゃあ！」

「雲雀先輩！」

背後から伸びて来た数本の黒い紐のような物によって、雲雀先輩の体が縛られそのまま引き寄せられる。

「悠夜くん！」

「くっ……」

悠夜は急いで駆け寄って手を伸ばし、雲雀先輩の手を握ろうとするが一步およばず虚しく空を掴むだけ。

黒い紐は篤兔の方にまで伸び、まだ拘束の解けていない篤兔をその十字架ごと引き寄せる。

「させないよ！」

リリースちゃんが再びL字の金属体を取り出し、それから出される小さな球体が紐に命中する。

命中し紐がちぎれるも、紐は一人でに結合してリリースちゃんの攻撃は意味をなさなかった。

縛られた雲雀先輩と篤兔は黒い紐の根元 怪異の大蛇へと引つ

ばられ、悲鳴を上げる間もなく波紋を生みながら鱗の中へ吸い込まれた。

今度は異形の蛇が俺達と静かに対峙する。

「クロキ、モノヨ……」

喋った！

2

怪異の大蛇に雲雀先輩と京さんみやこが取り込まれた。

この状況を想定していなかったわけじゃない。けれど、対処できなかった自分に苛立ちを覚える。さっきの操られた不良達だって、リリスさんの手を借りなければ打破できなかっただろう。少し舞台（戦場）を離れたからって、この体たらくとは。

鎌首をもたげた状態でビル五階分の高さを持つ異形の蛇。きっと雲雀先輩との同調が不完全となった為、無理やり取り込むことによつて同調を促したのだろう。京さんは恐らく雲雀先輩ほどではないにしろ、世界に対して拒絶していた節がありましたから一緒に取り込まれたのかと思う。

怪異は魔力の塊。厳密に言えば、魔法とさして変わりはない。

それ故に怪異は魔法を使う『誰かの意思』があつて初めて活動できる物がほとんどだ。例外こそあるがその存在はとても希少だし、この蛇もそれにあてはまるのでしょうか。もっとも、途中までは雲雀先輩とかなり強い同調していた為問題はなかったようですが。

「クロキ、モノヨ……」

おや、僕のことですね。ヒトを取り込んだからか、それとも初め

から喋れたのか。まあ、喋れるという事は相手と意志疎通できま  
すし、対話してみますか。ちょうど聞きたいこともありますし。

「あなたの目的はなんですか？」

「ワレハ、ソノソソナイヨ、ハタスノミ……」

どうやら何者かが意図的に送りこんだとかではなさそうですね。  
あくまで空気中の魔力から自然発生した怪異がこの学園都市に流れ  
ついたところですか。

けどまだわからないことはある。

「あなたは『何故』ここに来たんです？ 雲雀先輩の他にも、あな  
たと同調できるヒトなんて世界にはたくさん居たはずです。どうし  
てわざわざ学園都市にまで来たんですか？」

怪異はさつきも言った通り魔法の一つだ。

本能や知性があったとしても、それを使用したり行おうとする『  
意思』はない。例えば、食欲があっても好き嫌いを選んで食せな  
かったり、知識や経験を行動に生かせなかつたりする。

だが冬空先輩が行方不明者と怪異の関連性を説明する為に使った  
地図を見る限り、発生した時からまっすぐにこの学園都市に向かっ  
ている。ジグザグに進んだのはおそらく蛇行運動だと思う。

まるで初めから学園都市アストラルを目指していたのか、それと  
も

「ワレハ、ミチビカレタ…… クロキモノノ、ヤミニヨツテ……」

その言葉の真意を考える間もなく、僕は蛇の尾による一撃によ  
って吹き飛ばされた。一瞬の判断で禍鎌ハートブレイカーを使い防ぐも、ハートブレ  
イカーは壊れ盾の意味をなさなかった。

みんなの声が聞こえるけど何を言っているのかわからず、僕は地面を何度も転がる。石が何個かあって結構痛かった。

僕の体がやがて止まり横たわった状態の視界には、僕を殴りつけた太い尾が見えた。

地面の上に鎮座したそれは、まるで脱線してしまい線路から投げ出された列車を僕に連想させ、昔の記憶の断片を思い出させた。

『ウフフ、気分はどうかしら？ 可愛いくていとおしい私のゆう…』

…』

『姉さん、何でこんなことをするの!?!?』

『知らないなら教えてあげる。……力と力、異質と異常は互いに惹かれ合うのよ。』

私達のようにね』

『素敵だと思わない？ ゆうと私、愛し合う二人だけしか存在しない世界。そんな世界にいずれなるのよ。ゆうが大嫌いな世界じゃなく、愛しい人どずっといられるそんな楽園に』

『……だったら姉さん。僕があなたを ブツ破壊こわします!』

「クロキモノヨ……」

ああ、そうか。

僕は

「…………クフフ、アハハハ〜、ヒヒヒヒヤハハハ〜！  
！」

僕は狂ったように笑いながら、立ち上がる。

いったい何を期待していたのでしょうか？

どんなことがあっても僕は僕、変わることは決してないのに。

僕は道化。

僕は悪魔。

そして異常。

世界と神に呪われた非日常に住む存在。

「いいでしょう、怪異。あなたが本能のまま、導かれるまま僕の前  
に在るといふのなら　僕はその全てを否定して破壊します」

左手を右目に着けている眼帯へと伸ばす。そのままむしり取る。

「ヘルツナ制御装置解除　灰色ノ夜眼ダスト・アイ発動！」

視界に魔界が重なる

眼帯を外し露出した右目は左と同じ物ではないあまりにもかけ離  
れたモノ。

黒く染まった目の中に瞳と呼べる物はなく、灰色の虹彩に浮かぶ  
のは逆位置の五稜星。星の下からは黒い涙が一筋流れ落ちる。

ダスト・アイ魔眼、灰色ノ夜眼

それは遙か昔、一つの神が一人の人間を愛したが為に生まれた悲  
劇。なんとかして自分の姿を認識して欲しかった神は、人間の右目  
を自身の魔力によってこの世の全ての『魔』が見える眼に作り替え  
た。神の望み通り人間には神の姿が見えたが、人間が見たのはそれ

だけではなかった。人間を愛した神以外の神、天使に悪魔、果てにはヒトの魂までその右眼で視認できるようになった人間は『視る』という情報処理に耐えきれずに発狂。その後人間は永眠した。神は自分の行いが愛する人間を死に追いやったことを酷く悔やみ、人間の死体から右眼を取り去り以降その視界にヒトを捉えることはしなかったという。

今の僕の視界には本物の左目と呪われた右眼によって映し出されている。

右眼が視る光は全部で九つ。

玲さん達が宿す銀、桜、赤、黄、緑、青色をした綺麗な輝き。その向こうでは、赤と黒が混ざりあった禍々しい血の色の中に、小さな光が二つ。

よし、ちゃんと視える。

僕は戦える。

袖の中に隠れた右手を、天を指すように上へと向ける。

「科学起動

アクマ・プログラム  
破壊者！」

重力に従って零れた袖から出て来た僕の右手が黒に色付く。

僕の右腕はもはやヒトのそれではなく、硬質で無機質な鉄で作られた科学の腕。

「ぬくもりも、優しさも、絶望も、儂さも全て力に変えましょう

嘆け　へル！」

僕の呼び声に応え、右腕は暗く光ながらその姿を変えてゆく。

螺が回り、歯車が連動し、バネが軋み、ワイヤーがほどかれ絡み合う。やがて全ての音が止んだ時、そこにあったのは僕の足元に届くほどの長さを有した武骨な右腕（科学兵器）。

さあ、小道具は揃いました。



狂ったように笑いながら、その左目に輝きを灯す。だが、その輝きはどこか寂しそうにも見えて。

「いいでしょう、怪異。あなたが本能のまま、導かれるまま僕の前に在るといふのなら、僕はその全てを否定して破壊します」

ベルソナ  
「制御装置解除　灰色ノ夜眼発動！」

森羅が自分の眼帯をむしり取る。

そこから現れたのは、人が宿すとは思えないとても酷く奇怪な眼だった。黒の中には逆さの五稜星が浮かび、何かを悲しむかのように一筋の黒い涙を流しているのが確認できた。

まさか、魔眼なのだろうか？

だとすれば何故森羅がそんな物を？

魔眼は魔法と言うよりもむしろ『呪い』に近い。呪いなんぞ体に抱えれば、ただではすまないはず。

そもそも森羅はどうやって魔眼を？

続いて森羅は右手を持ち上げ、夜空へ向ける。長い袖から右手の肌色が顔を見せる。

「科学起動　アクマ・プログラム破壊者！」

「ぬくもりも、優しさも、絶望も、儂さも全て力に変えましょう  
嘆け　ヘル！」

今度は右手が黒くなったと思つたら、暗く発光しその姿を変えた。見た目は『腕』に変わりないが、大きさは森羅には不釣り合いなほど巨大で、硬質なため巨人が身に付ける鎧の一部かと思うほどだ。肩と右腕の境界線らしきところからは、黒く光る煙が出ては空気中に消えていく。

右目に異質な魔眼、黒き異形の右腕、闇に溶け込むような衣服を身に纏った森羅の姿は、人間界に舞い降りた悪魔を彷彿とさせた。



「父さんが僕に託したこの右腕と、母さんが僕に話してくれた右眼の物語、師匠が僕に教えてくれたこの世界で在る意味

僕の全てをもって怪異、あなたを　　ブツ破壊こぼします！」

瞬間、森羅が駆ける。

いかにも重量のありそうな右腕を持ちながらも凄まじい速さで怪異のすぐ下までゆく。

怪異はまた尾の一撃を加えようと振るうが森羅はこれを飛んで回避。否、飛翔した。勢いの止まらないまま森羅は怪異の顔のすぐそばまで来ると右腕を使い顎に一発、怯んだすきに裏拳の要領で二発目と怪異にダメージを与えていく。

お返しとばかりに再び怪異が尾で攻撃を仕掛ける。森羅は空中で体を捻ることにより避けるが、今度は口を大きく開け森羅に食らいつこうとしてきた。さすがに避けることはできなかつたのか、右腕を前に出し盾の変わりにする。吹き飛ばされながらも素早く体制を立て直し、怪異へ攻撃を加える。

「すーい……」

感嘆の声しか出なかった。

森羅は何度地面を転がっても、何度その体を叩きつけられても怯むことなく逃げることなく怪異へと突き進み戦闘を繰り返す。

片や怪異、片や異形。

片や大蛇、片や悪魔。

お互いが交差する度に光が瞬き、空気が震える。

「これが森羅の『力』、なのか……？」

「そうだよ。あれがご主人様が宿す『力』にして、稀代の科学者が

残した遺産」

「リリスが私の隣で頷く。

鬼神のごとき森羅の強さを見て次元の違いを突き付けられたようで、私は何故だか不安にかられた。

自分は今まで何をしていたのだろうか。

お婆様に憧れ魔法を学び、この学園都市アストラルにやって来た。そして森羅との魔術決闘フェイデを通して違う形の強さを知り弟子になった。期間は短いが森羅の指導で確実にレベルアップはしていた、つもりだった。

だが実際に『力』が必要になった時、私は何もできないでいる。自分よりめ上の物を目の前にして実感する、自分という無力でちっぽけな存在。

『鬼』にもなれない、強くもあれない私は

「冗談じゃありませんわ」

不意に横から聞こえた声。

森羅のクラスメイトである霧坏恋華きりつきれんかのものだった。

「私は何のために強くなろうとしたんですの！ 悠夜さんを一人にしないためでしょう。こんなところでただ立っているだけなんて意味がありませんわ！」

自らを鼓舞するように霧坏は言う。

その姿とても気高く、端正な顔には変えられようのない決意があった。

「ぐっ！」

森羅は怪異の攻撃を防ぎきれず直撃してしまい、地面を転がるように私達の前まで来た。体制を整え、また駆け出そうとするが

「悠夜さん！」

霧坏の呼び掛けに足を止める。振り向かない森羅に霧坏は続ける。

「私は悠夜さんと共にあるために魔法を学び、魔装具を授かりました。例えどんな時、場所でもあなたの隣が私の居場所です。ですから あなたの戦場で私も戦います！」

「私だつて！ 私もこれぐらいのことしかできないけど、悠夜くんの為に戦う！ 悠夜くんは私を助けてくれた。今度は私が悠夜くんを助ける番だよっ」

「そういうこつた。真剣勝負の最中に邪魔しちゃ悪いが、ここは前の友人<sup>ダチ</sup>として助太刀させてもらうぜ」

「ニヤハハハ。主人公<sup>ヒーロー</sup>だけに、おいしいところは渡さないニヤ。脇役の底力を見せてやるぜ」

「ま、なるようになれッスね。こうなつたらとことんやってやるッスよ、師匠（悠夜）」

私はいつたい何を悲観していたんだ……。

私と共に森羅から魔法を学んだ後輩達はこう言っているというのに。我ながら情けない。

怖いのなら、それ以上の勇氣を持てばいい。

私に力が足りないのなら、誰かの隣に立てばいい。

例え『鬼』になれずとも、私が果たすべきことを最大限すればいい。

彼が遠くにいるというのなら、私は刀を取り一步を踏み出すだけだ！

「私は冬空<sup>みき</sup>美姫。森羅の一番弟子にして、冬空家の三女。師弟の義理にて、今戦場に馳せ参じる！」

抜刀 刀雪嶺斬<sup>とうせつれいざん</sup>！」

「舞いなさい 朴<sup>ほう</sup>旋<sup>せん</sup>華<sup>か</sup>！」

「お願い 鋼銀線蟲<sup>こうぎんせんちゅう</sup>！」

「来い 紅煉獄<sup>くわんれんごく</sup>！」

「轟け 照鈴<sup>しょうれい</sup>殴<sup>お</sup>！」

「出るッス 緑創<sup>りょくそう</sup>碎劍<sup>さいけん</sup>！」

手に持つ魔結晶<sup>エレメント</sup>が発光し、それぞれの武器の形を取る。

「……お願いしますね」

小さく声をもらすと、森羅は再び怪異の元へ。

「神薙<sup>かんなぎ</sup>くん、天宮<sup>あまみや</sup>くん。僕が今いる場所に火炎球と雷撃」

「まかせろ、 火炎直球<sup>フレイムストライク</sup>！！！」

「 獣雷拳<sup>ネコパンチ</sup>！！！」

神薙が炎球を生みだしバッティングの要領で打ち込む。天宮の拳から放たれた雷撃はデフォルメされた猫のような形になり炎球と列をなして突き進む。

（もしかしたら、初めてかもしれないな。こうやって誰かと共闘するのは）

森羅は絶妙なタイミングでそれらを避け、今まさに攻撃をしようとした怪異に命中。怪異の動きが止まる。

「刈柴<sup>かりしば</sup>くん、恋華さん。岩石と風の魔法を。

武装<sup>クロス・シフト</sup>転換 巡れ、ヨルムンガンド！」

森羅の右腕が歪な音を上げながらまたその姿を変えてゆく。変形を繰り返した森羅の腕は計五本からなる太い鎖になっていた。

「土竜<sup>モグラ</sup>返し！！！！」

「風椿<sup>かざつばき</sup>！！！！」

巨大な竜巻が怪異の周りで起こり、動きを制限する。刈柴の魔法で発生した岩石群が怪異を攻撃すると同時に、森羅が足場として利用し上へと軽やかに飛躍してゆく。

（誰かと戦闘をともにしたのは経験上あるが、私に依存するか『あくまで自分はおまけ』と思う輩ばかりだったからな。だから、こっつうのはなんとというか、心地いい）

「二人は返してもらいますよ！」

右腕から変化した鎖を怪異に向かって伸ばす。

鎖は命中するも怪異を貫通することなく、奥へ中へと進んでゆく。

「見つけましたよ」

森羅の声に合わせ鎖が引き戻される。

鎖の先端には意識がないようだか、怪異に取り込まれていた白樺

と篤兔が。無事救出できたようだ。

「クロキモノヨ……」

怪異が二人を再び奪おうと森羅に牙を向ける。

「冬空先輩。お願いします」

「了解だ」

森羅が後退し、私はすれ違うように前へ出る。離れてゆくも、背中に感じる森羅の気配。

（自分の背中を預けようなんてこと、昔はちつとも考えなかった。ただ強くなる。それだけに固執していた。だが気付かされた。森羅、お前によって）

「私が相手だ！

刀雪嶺斬、昇華

双雛ふたひな！

右手に持った刀雪嶺斬。それと同じ物が私の魔力によって作られ、左手に現れる。逆手に持った左の刀雪嶺斬と右の刀雪嶺斬。二つの刃に魔力を流しこんでゆく。

怪異は大口を開け、私を飲み込もうとする。同時に体表からまた黒い紐を生み出し白樺と篤兔を捕らえようとする。

させるものかっ。

（私が今こうしてあるのは森羅、お前のおかげだ。私は愚かにもお前に刀を振るい、森羅悠夜の強さに気が付けた。だからこれから、この刀はお前の為に振るわせてもらおう。それが私なりの想い方だ）

「クロス・アイシクル 氷泉ノ十字架！！！！」

二つの刀雪嶺斬を交差させ十の字を描く。刀身が強く水色に輝くと、光から飛びだしたかのように氷で造られた巨大な十字架が出現。私はそれを怪異へとぶつける。

「アオキオニカ……」

怪異は抵抗するが更に魔力を込め十字架で押さえつける。

「押し通す！」

怪異が力負けし後ろへ倒れる直後、音を立てて氷の十字架が砕けて結晶となった。

私は魔力を一気に使用したせいで意識が朦朧としてきた。

「お疲れ」

リリスの声が聞こえたかと思うと、その腕に抱きかかえられる。体に力が入らないため、ありがたい。

見れば白樺と篤兔は、同じ演劇部の祭場さいじょうと柁原かじわらに介抱されていた。森羅はどうしたんだ？

「あそこだよ」

リリスの視線の先、森羅は右手の形状を再び鎧風なものにしていった。

「玲さん」

「まかせて。」

パニッシュ・ホール  
染界網羅！！！！」

月弦の両手から幾重にも張り巡らされた鋼糸。それらが怪異に絡まり、自由を完璧に封じる。鋼糸を足場のように使って飛ぶように移動し、悠夜は怪異の眼前で制止した。

「クロキ、モノ……」  
「終わりです」

森羅が右手を掲げる。  
黒鋼くろがねの腕にある隙間から光が漏れ、やがてそれは辺りを照らすほどの大きなものへと変わった。  
宵闇を明るく染める、汚れなき黒の光。

「滅んでください。  
バットエンド  
相思相愛！！！！」

光が一際強くなり森羅の右手が動けない怪異を襲う。

「ワレハ、ミチビカレ」

怪異はジグソーパズルが破片から徐々に崩れさるようになり崩壊していき、やがてその存在を完全に消していった。  
脅威がなくなった今、闘技場には再び夜の静けさが戻ってきた。  
静寂の中で何かが倒れるような音。  
森羅が力尽きたように横たわっていた。

「ご主人様！」  
「ぬおっ。こらっ、リリース！」



私が完全に体重を預けていたりリスは森羅を見るやいなや、私を放り投げ一目散に森羅の元へ。

月弦達も一斉に森羅へ駆け寄っていく。

少しは私の心配もしろ！ まだ魔力消費過多による体力消耗で満足に動けないんだからな！

だが、（意識のない）森羅を中心に心配そうにしている後輩達を見て、私はまた日常が帰って来たんだとどこか心の中で喜んでいた。

4

目が覚める。

まず私の視界を占めたのは見慣れない天井。色はいかにも清潔そうなお白。ここは病院なのだろうか？

「起きはったんやね。具合とか大丈夫ですか？」

聞き馴れた関西弁の声。

横を見ればベッドの上で座っている京みやこの姿。

「京っ。大丈夫なの？」

「見ての通りぴんぴんしてますわ。それよりも雲雀先輩は大丈夫なん？ 一応医者は心配ない言うてましたけど」

「うん、私は大丈夫。問題ないわ」

「そりゃあ、良かったです」

私に笑顔で微笑んでくれる京。

あんなことをしてしまったというのに……。

「あー、それよりも少しいやるか？」

「なにが？」

「確かに医者は異常ない言うてましたけど……、とりあえずこれ」

京に渡されたのは手鏡だった。私は鏡を通して自分の顔を見る。

驚きが隠せなかった。

色素は薄いがそれでも黒色だった私の髪は白金に染まっっていて、日本人の典型的な色をした私の両目は深紅の色を宿していた。

「これって……」

「色だけ言ったらアルビノですね。怪異と同調してたのが切り離された影響やて、悠夜が言っではりました。あ、本物のアルビノみたいに、日光の下歩いても何ら悪影響は出ないから、そこは心配せえへんでいいと」

「……そっか」

私は怪異に、化物に魂を売ったのだ。むしろこれぐらいで済んだことを幸運に思うべきなのだろう。

「めっちゃ似合ってますやん。元が言い分、華やかさが増してはりますよ」

「そうかな、ありがとう。……怒ったりしてない？」

「怒るとかそういう次元やないと思うんですけど」

「うっ……」

「まあ、ウチは別に怒ってはいないですけど。どんなことでもウチのためにしてくれはったんやろ。そならウチは別にせめたりせえへん。無事に解決したことやし。それに、もうあんなことしようとは思ってへんのでしょっ？」

「うん……」

「なら、それでいいとちやいますか」

「ありがとう」  
「おおきに」

どちらともなく口を閉ざし、私達の間には沈黙が流れる。

「ウチは詳しいこと覚えてへんけど、悠夜がなんとかしてくれたんやろ？」

「……うん」

「ははっ。悠夜には敵わんな。あいつ、演劇のことよく知らんくせに演技は素人にしてはうまいし。」

前に部室でお互いの将来の夢を話し合ったことがあるやん？ 部活が終わった後に悠夜がウチに謝ってきたんや。そんな時ちょっとふてくれてたから、自分の行動でウチが気を害したと思うたみたいで。そんな時言われたんですわ。自分には絶対に届かない、狂おしいほど願っても叶えられない『夢』がある。だから例えどんな夢でも可能性のあるのなら頑張つて欲しい、って。……あいつ、口ではそんなこと言うてたけど、目がマジやった。例え無理でも、不可能でも、絶対でも、決して諦めない不滅の心が見えたんや。ほんま、悠夜には敵わんと思つたわー、あん時。どんな時にも進める足を止めない。ウチはそんな強さがちょっとだけ羨ましいですわ」  
「そうだね。悠夜くんは強い。私のことも救ってくれたもん。……それで、その、悠夜くんは」

ガラガラッ

「おお、起きてたか雲雀っ」  
「心配したんだよ」

扉から入って来たのは、努つととキララ。キララは部屋に入るなり私に抱き付いてくる。

その後ろでは冬空さんと悠夜さんのクラスメイト六人が、私と京の見舞いに来てくれていた。

「みんなっ、うっ、うっ……」

私はいつの間にかキララの背中に手を回し、泣きじゃくっていた。

「よしよし。もう大丈夫だからね」

「俺らもすまんかったな。お前のことちゃんとわかってやれなくて」

「違うのっ。私が、私がつ、うわ〜ん！」

一年間、部活を通して巡り合えた二人の親友。この時ほどその存在を大きく感じたことはなかった。

私はひとしきり泣きじゃくると呼吸を整え、冬空さん達の方を見た。

「あなた達にも迷惑をかけて本当にごめんなさい。なんて謝ったらいいのか……」

「気にするな。私達は森羅についてきたただけだ。それに目的はあくまで白樺を助けることだったからな」

私の自業自得なのにみんなは笑顔を私に向けてくれた。悠夜くん、いい友達を持ったんだな、あ。

「ねえ、そういえば悠夜くんはどこ？ 彼は大丈夫だよな？」

「心配ないよ。なんなら行く？ お兄ちゃんのところ」

私の質問に答えた銀髪の少女が天井を指差す。

「以上が怪異による今回の事件の発端と顛末です」

『ご苦労様、ユーちゃん。各国の行方不明者もちゃんと見つかつて保護できたわ。それにしても悪いわね、疲れてるのに長時間喋らせちゃって』

「別に構いませんよ。僕としては、こっちに来られて余計な騒動を起こされてはたまりませんから」

『なによー。人を除け者にして』

「それで、怪異と同調した者の処分のことですが」

『ああ、別にいいわよ。大事に至る前にユーちゃんが解決したんでしよう？ だったら私はとやかく言うつもりはないわ。その同調した子がユーちゃんのお気に入りならなおさらよ』

「お気に入りとかそういうのではなく、尊敬している先輩の一人なのですが」

『あらそうなの？ まあ、あなたがそこに少しでも居たいと思うのなら、私は嬉しいな』

「意外ですね。てつきり今すぐにでも自分の元に僕を連れ戻して、過剰で過保護なスキンシップを取りたくて仕方ないと思ってましたけど」

『だから毎晩ユーちゃん抱き枕で慰めてるわ』

「その習慣を今日から破棄してください！」

『なによー。私のささやかな潤いと安らぎを奪うというの！？ ユーちゃんが反抗期になったところから行っている私のフリーダムタイムをっ』

「反抗期って、そんな前からアホな抱き枕つくってたんですが。とつかあなた、そんなに暇じゃないでしょう」

『何言ってるのユーちゃん。私は今世紀最大の魔女、モーガン・ペンドラゴンよ。抱き枕を創造するなんてちょちよいのちよいよ』

「ちよちよいのちよいで造らないでください！ というか今世紀最大の魔女がそんな下らないことを意欲的にしないでください」

『下らない！？ 私の至福の時間を下らないですって！ そんなことを言われたら、ユーちゃんの等身大フィギュアを造って部屋に飾るしかないわね、不本意ながら』

「なにが不本意ですかっ。というか造るな！」

『ねえ、さっきまでの会話ってなんだか痴話喧嘩みたいじゃない？』

「どこがですが。……はあ、どこで接し方を間違えたんでしょうか？ 手にかかる母を持つと大変ですね」

『……………ユーちゃん、ユーちゃん』

「なんですか？」

『い、今のもう一回言ってくれない？』

「えっと、《はあ、どこで接し方を間違えたんでしょうか？》、ですかね？」

『違う違うっ。その後の、《手にかかる母を持つと大変ですね》ってところ！』

「ちゃんと聞こえてるじゃないですか」

『はぐらかさないでっ。わ、私のこと“母”って言ってくれたよね？』

「っ！」

『あー、何年ぶりだろ。ユーちゃんが私をそう呼んでくれたのは！』

「そ、そんなこと言っていないせん！」

『照れなくていいのよ。さあ、もう一度母ママって言ってみて』

「そんな単語は本当に言った覚えがないんですけど！？」

『さあ、早く愛の言葉を私にちょうだ (ブツン)』

こちらから無理やり通信コールを終了させる。あのままにしていたら途方もないことになっていたでしょう。

病院の屋上。

そこで僕は師匠に今回の騒動を報告していたのです。

入院患者共通のパジャマのような服から、ロングコートを肩にかけるように羽織る。

服の袖や裾、髪がそよ風になびく。

転落防止用の金網越しに眼下に広がる景色を眺める。僕の家や國桜高校が確認できた。

「浮かれてたんですかね……」

昔みたいに日常で生活していた僕に導かれた怪異（非日常）。それは嵐のように僕の周りを巻き込み、大きな災害へと発展していく。

「ヒトはヒト、僕は僕。忘れてるわけじゃないんですけどね……」

不意に背を向けていたドアの開く音。こちらに足音が近付いてくる。

「だ〜れだ？」

視界を背後から回された手によって奪われる。眼帯で隠されている右目にもちゃんと手の感触があった。

「恋華さん、ですね」

僕は訪ねられた声から推測する。

「正解、でも限りなく不正解ですわ」

なぜ？

そう思って振り返る。

「答えは“みんな”ですわ」

振り向いた先にいたのは恋華さんだけでなく、神薙くんと天宮くんと刈柴くん。玲さんにリリスさん。冬空先輩の努先輩とキララ先輩。京さんと雲雀先輩の姿もありました。

「みなさん、どうしたんですか？」

「絶対安静のお前が病室にいないんでみんなで探してたんじゃニヤ。なかなか見つからないと思ってたらリリスちゃんが『屋上は？』って言ったからこうして見舞いに来たのニヤ」

「たく心配かけさせやがって。悠夜ってしばらく入院すんだろ？」

神薙くんの言う通り、外傷が無い京さんや瞳と髪の色が変化しただけにとどまった雲雀先輩と違い、科学を起動したはいえ怪異（大蛇）と肉弾戦を繰り広げ暴れた僕の体はボロボロだった。

目立ったのは折れた右足だけですけど、打撲やら打ち身が酷く出血のせいで血が足らなかつた。そこで僕は入院生活を余儀なくされ、ゴールデンウィークの三分の一をここですごさなくてはならないはめに。

「悠夜くんは確かA B型。私もA B型……」

「そ、そう言えばそうでしたね」

「ねえ、悠夜くんが出血多量でA B型の血が必要になった時、私の血が悠夜くんに使われたんだよ？」

「そうだったんですか。その件につきましてはありがとうございました  
す」

「うっん、気にしないで。……悠夜くんの中には私の血が流れてるんだね。紅い紅い私の血が……」

うっつとりと恍惚の笑みを浮かべる玲さん。魅力的だけれど触れれ



ばただではすまないような笑顔は、やっぱり玲さんにしか出せないのでしょうか。

「あのところで一つ聞きたいんですけど。悠夜の右眼と右腕って……」  
「知りたいですか？」

「いや、その……」  
「構いませんよ。それに知ってしまった以上、教えなくては。まずこちらから」

人差し指で右眼を指す。

「この眼帯は制御装置ベルソナの役割をしていて、右眼の効力を無力してるです」

「右眼……、魔眼のかとか」

「はい。冬空先輩は『死神に愛された少女』という物語を知っていますか？」

「知っているぞ。一人の少女を愛した死神が、少女に振り向いて欲しい一心で起こした行動が、その少女を死においやってしまった話しだろ？」

「では、死神のした行動というのが、少女の眼を魔眼にするというのはご存知ですか？」

「ああ。！、まさかっ」

「はい、僕の右眼はその死神が与えた魔眼とほぼ同種なんです。

特性は魔を視ること。空気中に残留する魔力からヒトの魔法まで。普段は母さんが作ってくれた眼帯ベルソナのおかげで見えませんが」

「いつからそんな眼を持っていましたの？ あなたは幼い頃から眼帯を着けてましたけど」

「それこそ僕が僕であった時から。僕が生まれた時からこの眼はありましたよ」

「そうだったのですか……。私があの時悠夜さんに声をかけられた

時は既に」

「でも、悠夜くんって魔力ゼロなんだよね？　なのに魔眼って……」  
「玲さんの言いたいことはわかります。魔眼と言ってももはやこれは『体質』、あるいは『呪い』という考えの方が当てはまるんです。魔眼という『体質』で魔法を視るのに魔力は必要ありませんから。魔眼、魔力ゼロというちくはくな特徴が僕の中で偶然重なっただけなんですよ。」

更に一つ加えるなら、魔眼とは本来ヒトが持つ眼ではない。僕はこの魔眼がある限り、ヒトに分類されません」

驚きを隠せないみんなの視線を、右眼に感じる。

まあ、当然でしょうね。

ある日を境に自分の隣に居た存在がヒトではなく、化物と宣告されたんですから。

「次はこの右腕ですね。みなさんも見た通り、この腕も普通ではありません。」

この腕は科学の腕なんです」

「科学ってあれだよな、ラノベとか漫画とかにある魔法じゃない『力』のことだよなニヤ？　でもあれはフィクションの　」

「現実です。科学は実在します。魔法が溢れる世界の裏側で、科学という存在はあります。」

そもそも、科学が何故世界の裏側で息を潜め、表の世界でフィクションや絵空事と詠われるようになったか、知ってますか？」

「いや、わからんニヤ？」

「それは相容れないからです。魔法と科学。二つは相反し相剋し、お互いを滅ぼし合う存在なんです。ですから、二つは同じ舞台にはいられない。詳しい経緯は不明ですが、昔に魔法が科学を世界から追いやる形になって、今のよう魔法が溢れる世界になったんです。でも、光が隙間からこぼれて影を落とすように、科学は表の世界

にも確かに存在しています。

その例外が右腕（僕）です」

「<sup>フェーデ</sup>魔術決闘で私の魔法が壊れたのも、操られた天宮の雷撃を受けて無事だったのも、怪異を滅ぼしたのも科学の力ということか？」

「はい。……魔法が十人十色なように、科学にも個々によって違いが生じてくるんです。」

僕の右腕である『<sup>アクマ・プログラム</sup>破壊者』は魔法に限らず全ての物を破壊するためのモノなんです。まあ、使用による代償は大きいですけど。

この『<sup>アクマ・プログラム</sup>破壊者』は名前の通り、悪魔を科学の力によって現代に蘇らすために造られたモノです。

右眼に魔眼、右腕に破壊者。

僕の存在は悪魔と言っても過言ではありません」

右の手のひらをパーの形にして前に出す。

やろうと思えば、ここで科学を起動しこの場にいる全員を抹殺（破壊）することは可能だ。抵抗したとしても、大した障害ではない。なんだって僕は悪魔だから。愛するヒトも、大切な場所もなかも消し去ってしまう破壊者

「それだけじゃないよ」

玲さんは一歩前出ると、突き出した僕の手を握りしめた。

「確かに悠夜くんの手は全てを壊す手なのかもしれない。でもね、こうやって誰かと手を繋ぐこともできるんだよ」

「玲さん……？」

「そうですね。私も初めて悠夜さんとお会いした日、あなたと握手して絆を確かめたのは今でも覚えていますわ」

「それに、悪魔の右腕ってなんだか、かっこいいじゃん。魔球とか投げれそうだし」

「それに眼帯をとつたら魔眼があるとか、今時珍しくもないしニヤ」  
「悠夜はもともと普通じゃないオーラとか出てたツスからね。そういう方がむしろしっくりくるツスよ」

「しかし魔装具と思っていた鎖が科学の力だったとはな。フフ、私が敵わないわけだな」

「もしかして、自分は悪魔だから部活を止めるとか言わないよな？」  
「駄目だよ。悠夜くんがいなくなったら、演劇同好会になっちゃう」

「心配せえへんでも、悠夜はウチがスカウトしたんやから、ちゃんともんどろ見たる。悪魔だろうが科学だろうがビシバシ行くで」  
「悠夜くんは私を救ってくれたんだよ。その右眼と右腕の力で。だから、私はそんなに自分のことを卑下して欲しくない。むしろ私は誇るよ。自分にはこんなにすごい後輩がいるって」

「……………僕はなんと言われようと非日常がお似合いの科学者、全てを壊す力を持つ化物です。」

「……………でも、ありがとうございます。こうして僕の前に来てくださって」

みんなに頭を下げ、礼をする。

これしかできないけど、僕の存在を享受してくれる誰かがいるのなら、僕はこうしてできることをする。

それがせめてもの礼儀で、少しでも感謝を伝えることができるのなら。

「お兄ちゃん」

さつきから黙っていたリリスさんに呼ばれ顔をあげる。

すると間髪入れずに、リリスさんの唇が僕のそれを強引に塞ぎ舌を挿し込んできた。

「う、うむっ、んん！」

「ちゅぱっ、ちゆるる、くちゃ、ねちよ、ちゆるっ！」

激しく音をたてながら舌を使って僕の口内を荒らしてゆく。僕は腰に力が入らなくなり、いつさいの抵抗ができない。

濃厚なキスが終わり、リリースさんと僕の口は銀色の粘ついた糸で繋がっていた。

突然の奇行に僕だけでなく、他のみなさんもあっけにとられていました。

「何をそんなに驚いてるの？ ディープで濃密な大人のキスなんていつも家でやってるし、それ以上のことなんてしててるじゃない」

天使のような笑顔で僕を地獄に突き落とす義妹。

いつもって、いつもなんてしてませんよっ。そんなのこっちの身がもたない……。そ、それに、それ以上のことなんてしてませんからね！

そのことを固まっているみなさんに伝えようとするも

「ねえ、悠夜くん。私さ、悠夜くんに血、わけてあげたよね？ 私にもちようだい 悠夜くんの真っ赤で紅い血」

「悠夜さんの浮気者……！ 子供の頃なんて一回もしてくださらなかったのにっ」

「そんな爛れた生活を送っているとはな。よし、私が生徒会長としてお前を粛清してやろう。手元が狂ってぶった斬ってしまったても文句は言うなよ？」

「さーて、ウチがスカウトした愚かな同輩にはビシバシせんとな」  
「ゆ、悠夜くんのエッチ。不潔だよ！」

時遅く、みなさんは聞く耳を持っていなかった。

「まっ、待つてください。みなさん持つてる魔装具や包丁をしまってください。てかあの戦闘のあとでよくそんだけ、元気ですね。それと京さんは手にあるボールとかハンマーとかのこぎりとか何に使うんですかっ。というかどこからそれらを出したんです!？」

雲雀先輩は武装していないものの、しくしくと泣きくずれ努先輩とキララ先輩が慰めている。できればこっちをなだめてください。

それと原因であるリリスさんは金網の上に器用に座り、文字通り高見の見物。おや、口パクで何か言っている。なにになに? 『ガ・ン・バ・ツ・テ』うるさいですよ! 誰のせいだと思ってるんですかっ。おまけに、

「悠夜、さすがに俺でも今のお前は憎い」

「全国の非リア充よっ。この勝ち組ロンゲをブツ飛ばす力を俺にくれニヤー!」

「悪魔ってゆうぐらいツスから、ちよつとやそつこのことは大丈夫ツスよね〜?」

普段は僕に牙を向けない三人までこの有り様。まさしく四面楚歌だ。何故僕は怪異と死闘を繰り広げた後にこんなピンチを味わう羽目に!??

「ちよ、ちよつと待って。集団で行う狩りのように僕を隅に追い込まないでっ。こ、こうなったら、僕だって攻めますよ。科学と魔眼を両方使いますよ! え、なんでみなさんそんな『やってみろ!』的な闘志に満ちた目を? 嘘です。すみません調子に乗りました。だ、だから痛いのは止め、早く武器をしまっ わー、誰か助けてっ。なんで僕は病院でこんな逆行に立たされてるんですっ。ああ、待って、みなさん落ち着いて話し合いを。だから、まっ ギャア

「アアア……！」

「ちなみに、お兄ちゃんの入院期間は伸びましたとさ。ちゃんちゃ  
ん」

第十八夜 科学起動、この手は魔を祓う為に（後書き）

都合主義が多発する中、読んでいただきありがとうございます。

やっぱりシリアス&バトルは疲れます。

これからしばらくは溜めていた用語集やキャラ紹介を追記更新しつつ、ラブコメ&ギャグパートでいきたいと思えます。

魔装具も書いた方がいいですかね？

駄目な作者に付き合っていたいただきありがとうございます。これからもよろしくお願いいたします。さようなら〜



第十九夜 例えどこで胡蝶が羽たばこつとも、嵐はすぐ目の前に（前編）（前書）

長い間を開けてしまった……

再び戻ってきた悠夜くん達の日常（？）（編です。それではどうぞ〜

第十九夜 例えどこで胡蝶が羽たばこつとも、嵐はすぐ目の前に（前編）

0

「あー、あの太陽が果てしなく鬱陶しい。今すぐ曇りになって雨がザーザー降ってくれませんかね」

ささやかな願いを口にするも、それは叶うはずもない。そりゃあ、降水確率は100%をきってましたけど、望みくらい持ったっていいはずです。

せめて窓の景色だけでも、自分の好きなものであつて欲しい。

だつて……

「ウフフ。悠夜くん待つててネ……」

「さーて、再びあの頃に帰りましょうか。悠夜さんと私が二人だけで遊んでいたあの頃に」

「ふむ、森羅もりあみは私生活が墮落しているからな。ここは私が修正してやらねば。私が、な」

「お兄ちゃんにはリリスのメイドになつてくれるのもいいかもね」  
「演劇部の本気、見せたるでー」

「ね、ねえ、キララ。本当にそれをやるの……?」

「あつたり前つ。狙うは必勝なんだから」

「おー、なんか盛り上がつて来たー!!」

「いったい栄光は誰が手にすのかニヤ」

「見ものツスね」

かつてにテンションの上がつていくみんなの気配を感じながら、僕はそつちの方を見ないように窓へ視線を向ける。

「台風でも来ないですかね」

不幸（嵐）はすぐ目の前まで来ているとゆうのに。あー、退院したい。

1

リリースさんの陰謀というか策略というかイタズラにより、三日ほどですんだはずの入院生活はゴールデンウィーク最終日まで伸び、いろいろ予定したことが全ておじゃんになってしまった。

伸びた入院期間の中、僕の弟子や演劇部メンバー、リリースさんを始めとするクラスメイトも誰も見舞いに来ませんでした。

ライトノベルの世界では僕みたいな境遇のヒトはただの寂しいやつですが、むしろこの環境を僕は楽しんでいました。

だって、一人でいるから厄介ごとが起きないんですもん。

身をもって『羽を伸ばす』という言葉を理解した僕は、多少の不便はあっても、このプチ一人暮らしを満喫していました。

でも、多少楽観的になっていた僕はあることに気付いていなかった。た。

この平穩が俗に言われる『嵐の前の静けさ』ということに。

退院を明日に控え、僕は最後の入院生活をどうしようかなと考えた朝、その来訪者達は突然現れた。

「み、みなさん、なぜここに!？」

ぞろぞろと扉を開けて入室して来たのは、努先輩を除く、あの日

屋上で僕が理不尽な目にあつた時と同じメンバーでした。

「いやー、せっかくの入院生活だからなんかパーっとしようと思つてさ。何しようかみんな考えてただけど、なんとか最終日まで  
に思いついたぜ！」

「入院に来ないと思つたら、そんなことしてたんですかっ。入りませんからね、サプライズは。というか病院内で騒ぐ気ですか！」

「照れんなくて。俺も練習中に骨折って入院した時は、部員のみん  
なが見舞いに来てくれたぞ。あん時はおもしろかつたな」

「あなた達が揃うとおもしろいとか冗談ではすまないですよ。被害が全面にくるんですからね、僕に」

「にしてもラッキーだったな、入院期間が長くて。おかげでいいものが考えられたぜ」

「あなた達のせいですからねっ」

なぜ？

なぜこんなにも僕の『日常』は平穩に遠いのでしょうか？

みなさんが用意したと言う『企画』、なぜだかものすごく嫌な予感がする。いや、天宮くん曰く『フラグは建つた』ように思えます。ここは経験上、みんなの話しと流れに乗りつつ突破口を見出だすしかない。できなくてもやるしかない。でないと、また入院生活が長くなる可能性があります。それだけは阻止しなくては。

「一様聞いておきますが、あなた方は何を企画されたんですか？」

「よくぞ聞いてくれた！」

キラキラと輝く目を見て、僕の不安は一気に加速した。

「その名も『第一回 誰が悠夜の傷だらけのハートを癒せるか？

乙女同士のガチンコバトル！』悠夜の内臓ポロリもあるよ」だ

「予感的中！ 名前からして至極どうでもよさそうかつ、やっぱり僕が痛い目を見るんですね。しかも内臓ポロリ!? してたまりますか！」

「大丈夫、ここは幸いにも病院だ。内臓ポロリ（サービスシーン）になってもすぐにドクターが駆けつけて、治療してくれる」

「これ以上ドクターの世話になんかありませんよ」

なつてたまるものか。

けれどこれはまずいですね。

このままではまた僕が酷い思いをするのは火を見るよりも明らか。ここは一人ずつ味方を増やすしか……。

「雲雀先輩、あなたは誰もが認める立派な常識人です。病院内で騒ぐなどいけないのは承知のはず。どうかこの催しを中止してください」

「うん。確かに病院の中でうるさくしちゃいけないのはわかるよ？ でもね、みんなは悠夜くんの為思って、このゴールドデンウィークを使っている用意してきたの。教えなかったのは悠夜くんを驚かせたかったらだし、少しでも楽しんで欲しいな。……だめ？」

いや、そういうわけではないですけど、なぜそう不安そうに僕を見る。なぜそんな悲しそうな目で僕を見るんですか。

「……わかりました。何をするのか検討がつきませんが、お願いします」

「ありがとう、悠夜くん」

「よし、悠夜のお許しも出たことだし、ちゃっちやと準備するぞ」

『おー！』

神薙<sup>かんなぎ</sup>くんの掛け声に、みんなが天井へ握り拳を向ける。  
ちなみに僕はこの時点で入院生活延長を覚悟していました。

2

『さーで、とうとう始まったニヤ。第一回 誰が悠夜のハートを癒せるか？ 乙女の以下略！』

『第一回ということは第二回、三回も予定に入っているということですか？』

『司会進行は私、天宮響と』

『司会が無視ですか。いい度胸ですね』

『解説はこの俺、神薙<sup>かんなぎ</sup>亮と』

『刈柴<sup>かりしば</sup>大地<sup>だいち</sup>でお送りするツス』

『で、具体的にはいったい何をされるんですか？』

『説明しよう。参加者は悠夜の傷ついた心をそれぞれの手法で癒すのニヤ。悠夜にはどちらがより癒されたかを審査していつてもらうのニヤ』

『そんなことしなくとも、僕の心は自然治癒しますのでどうかほっといてください。それに何度も言いますが、僕の身心に傷を負わせたのはあなた方ですからね』

『それじゃあ、さっそく始めるのニヤ。ちなみに、順番はあらかじめくじによって決まってるニヤ』

『早く終わってください』

『一番手はこの人。大舞台を夢見る女優の卵、篤兔<sup>とくとみやい</sup>京だニヤ』

『おおきに』

『お手柔らかにお願いしますね』

『ま、悠夜もそんなに肩に力入れんで楽にしいや』

『さてさて、篤兔選手はいったい何を持って来たのかニヤ？』

「これやー！」

京さんが大きめの鞆から取り出したのは、保温のためか布にくるまれた土鍋。

……そんなもん、よく持ってこれましたね。

『土鍋ということは、つまり食べ物系ツスね』

『いやー、俺は食い物という着眼点はいいと思うぜ。入院の時に出る飯ってなんか味薄くてまずいんだよなー』

食事を作ってくださいる調理師と栄養師さんに謝りなさい。

にしても、京さんが料理ですか……。別に京さんの実力を疑っているわけではありませんが趣味嗜好が……。

『で、どんなものを用意したのかニヤ？』

「いろいろ迷ったんやけど、シンプルにお粥にしたんや。お粥言うても、ちゃんと手の込んだ物やで？」

『おー、これは期待できそうだなニヤ』

「そんじゃ、オ〜プリンや〜」

地獄の釜茹で。

京さんがご機嫌な様子で蓋を開け中身を見た瞬間、その言葉が真っ先に思い浮かんだ。

きっと僕だけでなく天宮くん達や他の人も絶句しながら土鍋の中の『お粥』を凝視している。

赤。

それ意外の色が見当たらず見ているだけでも辛そうなのに、スパイシーとはとても言い難い匂いまでしてくる。

篤兎京。

その片寄った味覚と嗜好から、食事に関してなんでも辛味な物を

求める。彼女が作る料理は大抵このように赤く辛くなってしまふ。他者に強要することはないのですが、まさかこんな形でくるとは…。

ちなみに僕の味覚は至って普通。辛い物は嫌いではありませんが、ここまでの物は正直口にしたくない。味蕾が崩壊してしまう恐れもありますし。

「あのー、京さん。ちゃんと味見しました？」  
「何言つとるん。ちゃんとしたで。味もばつちりや」

ああ、聞きたくなかった情報。  
京さんにとってばつちりとは、僕にとって致死量という意味になりますし。

……どうでしょうか。冗談抜きで、あのお粥もどきを食べればいろいろ終わってしまう気がする。

『じゃ、じゃあ、篤鬼選手は、お粥を悠夜に食べさせてもらつたニヤ』  
「ちよつと天宮くん！ そんなことしたら、僕無事では要られない気がするんですけど」

『うるせえニヤ。物が食材なんだから、食べないと公平なジャツチにならないだろうが』

「そもそもなんですか、公平なジャツチって？」  
「なんや、食べさせてもらつのに照れてるん？ 悠夜は子供やな」

僕の動揺を勘違いしたのか、ニヤニヤと愉快そうにれんげを靴から取り出す。

いや、僕は別にそういうの気にしな　つて、えっ、お米まで真っ赤！？　いったいどんな調理法をしたらあんなに色が着くんですか。むしろ教わりたい気もしてきた。



「ほら悠夜。あ〜ん」

れんげ一杯のお粥をすくい、雛鳥に餌を与えるように京さんが「あ〜ん」をする。

……そう言えば入学当時に数回、『あ〜ん』をしたりさせていたいただきましたが、あれからもう一ヶ月ですか。時がたつというのは本当に早いですね、この前なんて

「悠夜、早く食べないと冷めるで」

……現実逃避の真っ最中でしたのに。

やはりここは潔く食べるしかないのでしょうか？

「悠夜、まさかウチが作った料理を食べたくないとは言わんよね？」

正直言っただけ食べたくない。絶対ただでは済まない。

でも京さんが放つ肉食獣並みの眼力は『早く食べる』と訴えている。

よし。決意は固めました。

僕のために作ってくれた物ですし、変なのは入っていないはずで、量は問題かもしれませんが……。

僕は雛鳥のように口を大きく開ける。

そんな僕を見て満足そうに京さんはお粥の入ったれんげを僕の口に近づける。うわっ、食べてもいないのにすごい刺激匂。これが少しでも薄ければ、食欲を誘う香りになると思うのに。

ものすごい緊張の中、れんげが僕の口に入りお粥を咀嚼する。

「……………どうや？」

僕のことを不安げに見る京さん。

味は確かに辛いけど……、あれ、結構いけますね。お米もいい具合に水分を含んでいますし、これなら土鍋一杯分はいけ

「っ！？ ゴホッ、ゲハッ、ウ、ハッハッ……」

京さんに感想を述べようとした時、最初に感じたものよりも十倍強い辛さをしたが感知した。それはもはや味ではなく『痛み』と呼べる凶器でした。口内がとてつもなくヒリヒリし、体がまるで燃えているかのように暑い。部位を問わず流れる汗は、僕の体がこれ以上ないほど水分を欲しているのを表しています。

「み、水を……」

『ほら、悠夜。これを飲むんだっ』

「ありがとうございます」

神薙くんの手渡されたペットボトルのキャップを開け、中身を一気に飲み干す。

「ゴホッ、グッ、アッ……」

けれどまたしても僕は咳き込んだ。

理由は単純明解。

神薙くんの渡してくれた物が炭酸水だったからです。

伝わりにくいかもしれませんが、辛いお粥でダメージを受けた僕の口に、シュワシュワの炭酸水が侵入することで新たな強烈な刺激が僕を蝕んだのです。

『すまん、悠夜。まさかそこまでおもしろく悶絶するとは……。まあ、狙い通りだけ』

「こっ、この愉快犯め……！」

「なんや、だらしないなー。こんくらいの辛さでヒーヒー言つて

そう言つと京さんはお粥を自分の口へと運ぶ。そしてそのまま咀嚼し、飲み込むとすぐさま二杯目へ。

し、信じられない。辛党と言つのは知っていましたが、まさかこんなに強靱な味覚(？)の持ち主だったとは……。なんだか、京さんの食生活がすごく心配になってきましたね。

啞然とする僕をよそに、数回お粥を食べた京さんは再び僕にれんげを差し出す。

え？

「なに、ボーツとしてるん？ ちゃんと完食せんと許さへんで」

「あの、これはどういう意味で？」

「せつかく悠夜のために作ったんやから、きちんと食つてえな」

「でもこれ以上食べたら僕結構危ない気がするのですが」

「いやいや、ここは審査を公平にするため悠夜には全部食べてもら  
うニヤ」

「なんですか、他人事みたいに！ なんでしたら、あなた方も食べますかっ？」

「ごちやごちや言わんと食べんかい！」

「ちよっ、わかりました。わかりましたから、土鍋ごと押し付けな  
いで、熱っ！」

3

「さーて、初っぱなから波乱のスタートだけど、解説の二人はどう  
みるかニヤ？」

「うーん、まあ、インパクトは強かっただろうな」

「インパクトはあつたスよね」

「ありまくりですよ！ 見た目も辛い上に、拍車をかけて辛いんですもん。よくできましたね、完食。自分で自分を誉めたいですよ。それよりも大丈夫ですよね僕の味蕾？ まさか全部崩壊してたりとかしませんよねっ？」

「さーて、悠夜の味蕾も未来も危険地帯に突入したところで、さくさく次に行ってみるニヤ」

「うまいこと言ったつもりですかっ。ちっとも笑えませんか！ だいたい危険地帯に入ったのならフォローしてくれてもいいのではっ」

「悠夜がなんか言ってるけど、無視してさっさと進めるニヤ」

「この企画ってちゃんと僕を癒すために考えてくれたんですよ！？」

「二番手はこの方。その包丁は台所だけでなく修羅場でも大活躍、  
月弦玲だニヤ」

「やるからベストを尽くすわ」

「前口上と人物に早くも不安を隠しきれないんですが……」

さすがに病室で刃傷沙汰を起こすとは いや、玲さんが刃物を取り出すのに少しでも躊躇するような方でしたら、僕は日常的に危険な目にあっていないはずですが。

「入院はあと何日伸びるのでしょうかね」

「私がおかする前から悠夜くんがどこか諦めたような表情してる！」

「んで、月弦はいつたい何を用意した来たんだニヤ？」

「篤兎さんと少しかぶるかもしれないけど、私も食事系で勝負するよ」

玲さんはそう言って、紙袋の中から赤くて大きめの果物 林檎を取り出した。

『なるほど。お粥が看病の王道なら、こちらはお見舞いの定番とい

つたところツスカね」

「確かに入院した時ってフルーツとかテーブルに置いてあると、なんかその人とても心配されてるって気するもんな」

「これは高ポイントが期待できるニヤ」

「何なんですかポイントって？ いつからそんなの導入されたんですか、どうやって僕は割り振ればいいんですか？」

「それじゃあ、皮を剥くね」

僕は皮があつたり丸かじりでも構わないですが、ここは玲さんにお任せしましょう。

そう樂觀的に眺めていましたが

「　　」

玲さんはやつぱりと言いますか、ポケットから包丁を取り出し、なんとそれで林檎の皮を剥きはじめました。

……大根の桂剥きならわかりますけど、球体に近い林檎、しかもそれに対して大きな包丁で皮を剥くなんてすごい技術ですね。普通は果物ナイフを使用するのに。よくまあ、曲芸師のようなことを平気でやられる。

大きめにカットされた林檎を簡易テーブルに置いてあつた紙皿へ盛り付けていく。

とても美味しそうですね。早く僕の味蕾が無事かどうか調べたいので、林檎へと手を伸ばす。

ザクッ！

けれど僕が触れようとした林檎は、まるでつまようじを使うかのよう玲さんが自身の包丁で浅く突き刺した。……あ、危ないっ。

「私が食べさせてあげる」

包丁の先に刺さったままの林檎を玲さんは僕へと向ける。

「あ、あーん……／＼／」

えっ？ これってもしかして……

『おおっと、これは月弦選手もあーんをして来たぜっ。これはおもしろくなってきた！』

『お見舞い 林檎とくればこの流れも必然ツスしね。天然か狙ってるかはわからないツスけど、恥ずかしげに頬を染めるのもポイントが高いと思われるツス』

『篤兎選手、同じ戦法をとってきたけど、どう思うニヤ』

「なんかずるない？ これパクリの気がするんやけど」

やっぱりこれも『あーん』でしたか。先ほどのゆうにれんげ、フオークやスプーンならわかりますけど、包丁を使った場合でも同じと言えるのかすごい疑問なのですが。というかなぜ誰もつつこまないのでしょうか？

「ね、ねえ、悠夜くん。早く食べてくれないかな？ 私も恥ずかしいよ……」

僕だって怖いですよ。林檎が先に刺さっているとはいえ、包丁に口を近付けるのは少し、いや、かなりの抵抗が。

『おや、悠夜は全く動かないニヤ』

『恥ずかしがってるんスカね』

『悠夜ってけっこうウブなところあるもんな』

人事のように言ってくれますね……！

あなた方にはわからないと思いますけど、この一ヶ月弱でどれほど包丁に恐怖心を抱いたことか。自分の家の包丁を握るのさえ躊躇した時があっただからですから。

……やっぱりこれも食べなきゃ駄目ですよ？ まあ、あくまで用があるのは林檎ですし、包丁に触れなければいいのですから。触れたら大惨事ですけど。京さんのお粥のようにすればきっと大丈夫ですし、ここは慎重に行けば

そつと林檎に顔を近付ける。

文字にすればたったそれだけのことなのに、異様な緊張感が僕の中で生まれる。いや、だって包丁で切りつけられたことはあっても、自分から（林檎が刺さった）刃先に顔を伸ばすなんて自傷行為に近い。できれば体験したくありませんでしたよ。

少しずつ僕の顔を動かし、とうとう林檎をぱくりといける距離にまでなってきました。

けれどぱくりとはいかず、舌を奥まで引つ込め歯が林檎だけに触れるように噛むと、ゆっくりと林檎を包丁から取り去る。……これってなんて名前のゲームなのでしょう？

「どう、悠夜くん。林檎美味しいかな？」

「お、美味しいですよ」

確かに美味しいのですが、この林檎を食べるのに消費した体力や緊張感、披露度を考えると割りに合わない気がします。

料理って奥が深い。食べ方一つでこんなにも恐怖心が植え付けられるんですね。

「良かったあ。じゃあ、いっぱいあるからたくさん食べてね」

「えっ……?」

そうでした。

玲さんは丸々一個の林檎を持って来ていて、今僕が食べたのはその林檎を一口サイズに切った物の中の一つにすぎない。

つまり

「あーん／＼／」

わー、まだたくさんありました。

「……あの、ちなみに」

『これも出された以上、ちゃんと完食してもらおうニヤ』

司会の無慈悲な言葉に、心が折れそうになった僕でした。

4

『さーて、早くも二人のアピールタイムが終了したニヤ』

彼女達はいったい何を僕にアピールしたかったのでしょうか？

『ここで悠夜にはどちらかから、暫定一位を選んでもらうニヤ』

「暫定一位？」

『そうニヤ。そして、最後の時に一位だった物には、なんと賞品が与えられるのニヤ』

「これって本当に僕のため企画された物かどうかすごく怪しくなってきたね。まあ、それはもうどうでもいいと言つか諦めるとして、賞品ってなんですか？」



「……ところで悠夜。月弦選手と篤兔選手、どっちが暫定一位なんだニヤ？」

「えっ、またスルーツ？ 今度のは本当に嫌な予感がしてならないのですが」

「いいから、早く決めるニヤ」

「また強引ですね。えーと……」

殺人激辛お粥の京さんか。

恐怖の林檎包丁の玲さんか。

……なんで選択肢がこれしかないのでしょうか？仕方ないとは言え、どちらも選びたくないのが本音なのですが。

玲さんも京さんも真剣な目でこちらを見てくる。まるで、自分を選ばないならどうなっても知らんぞと言わんばかりに。この場合選択肢があると言えるのでしょうか。

「……両者共に負けということでは駄目ですか？」

「「どっという意味（なの、なんや）！」」

僕の心境としては両者に負けてるんですけどね。だからと言ってどちらが勝っているとは比べることはできない。この深いダメージは数値化・加減不能な物として僕の心に刻まれましたから。

「……あんま長引かすのもめんどろだし、暫定一位は二人ってことで落ち着かすニヤ。悠夜もこう言ってることだし」

「わかったよ」

「ま、ウチは別にええけど」

「じゃ、二人には一位席に座ってもらおうニヤ」

壁際に置いてあったパイプ椅子をもう一つ追加して、玲さんと京

さんが並んで座る。

なるほど、あそこに暫定一位とやらが待機するわけですか。二人いますけど。

にしても、早く終わりませんか。こうというのが後数人続くのは、いくら僕でも無事で要られるかすごい不安なんですよね。

『それじゃあ、気を取り直して次行ってみるニヤ。三番手はこの方  
最近<sup>つき</sup>は徐々にブラック化、最大の武器は懐かしい思い出。霧<sup>きり</sup>  
坏<sup>つきれんか</sup>恋華だニヤ』

「よろしくお願いいたします」

「恋華さん、今の前口上はスルーしていいのですか？」

「特に問題はありませんわ」

「そうですね」

僕にとっては、幼馴染が腹黒くなってしまふのはなんとも止めた  
いところなのですが。

『霧坏選手、前の二人が暫定一位という予想外の展開だけど、自信  
のほどはどうかニヤ？』

「無論あるに決まっていますわ。そもそも悠夜さんに最初から両方  
負けと言われた時点で、私の勝利は約束されたようなもの。あの二  
人に負けるはずがありません」

「へえー……」

「言ってくれるやん、あのお嬢様」

挑発的に微笑む恋華さんと睨みをきかせる京さん。その京さんの  
横では怒りかはたまた別のものかわかりませんが、何か黒いオーラ  
を漂わせる玲さんが。

何ですか、このものすごく重い冷戦状態は。近くにいるだけで、

胃に穴が空きそうです。本当に空いたらどうしましょう。美味しい物が食べられなくなります。

『プチ修羅場はそれぐらいにして、そろそろ始めてもらおうニヤ。霧坏選手はどんなことを用意してきたニヤ？』

「これですわ」

恋華さんが取り出したのは、竹でできた細い棒状の先端に綿毛のようなふさふさが付いている道具。

これは……

『耳掻きツスね』

『耳掻きだな』

『おお、これはもしかしなくともっ、悠夜を筆頭に数々の思春期男子が一度は夢見る“女子に耳掻きをしてもらう”だニヤ！』

『前者二人の“あーん”よりも実現する可能性が低いツスから、これは高印象かもしれないスね』

『おー、良くわからないけどすごそうだな』

天宮くんの説明に若干の悪意を感じます。そして神薙くんは解説をやる気はあるのですか？

「悠夜さん、ちょっとどいてくださるかしら？」

「わかりました」

ベッドから一旦降りると恋華さんは『失礼します』と言って掛け布団を畳んでスペースをつくり正座しました。そしてポンポンと自分の膝を軽く叩きました。

「それ、どつぞどつぞ」

「は、はい」

恋華さんの指示に従って頭を彼女の膝の上に乗せる。

リリスさんに何回かしてもらってことはありますが、恋華さんにしてもらったことはないので緊張します。リリスさんにして頂いた時は、半強制的にされたことが多々ですが。

恋華さんの下肢はやはり柔らかく人肌の熱も感じられ、手のひらから汗が出て落ち着かない。

「それでは、始めますわね」

僕の耳に指が触れ、耳掻きが動かされていく。

あ、これいいかも。

『悠夜のやつ気持ち良さそうだな』

『霧坏も耳掻きがうまいツスね。練習でもしてたんスカね？ 見るからに好印象のようツスよ』

『だそうだけど、二人としてはどうかニヤ？』

「フフ、恋華もまだまだね」

「あんなんなら、ウチの圧勝やな」

「おかしいな、確か篤兎さんは悠夜くんに負け宣言されてたけど」

「それはあんたも同じはずやけど？」

「私の場合は愛情の深さが違うのよ」

「人のパクつといてよくゆうわ」

「なに、戦<sup>や</sup>るの？」

「望むところや」

『はいはい。ヒロイン同氏のどろどろバトルは裏でゆっくりやってくれニヤ』

そこは真っ先に止めてくださいよ！

「ねえ、悠夜さん」

僕が心の中ツツコミを入れつつも耳搔きの気持ち良さを満喫していると、恋華さんが柔らかい声でとんでもないことを聞いてきました。

「鼓膜が破れた経験ってありますか？」

「えっ。いや、幸いなことに、ありませんが……」

「そうでしたか。これは人から聞いて得た知識なのですけれど、鼓膜が破れるのは相当痛いようですわ。それに聴覚に支障が出ますし、鼓膜は大切にしないとイケませんわね」

「……………そうですね」

なんででしょうか？ この意味深な言い方は。

先ほどまでであった陽射しの中でまどろむような感覚から一変し、僕の体に緊張感が再び走る。

「鼓膜ってここかしら？」

ビクッ！

恋華さんが耳搔きを使って鼓膜をトントンと、軽くつつく感触が。

「あら、どうされましたの？ 私は誤って悠夜さんの大事な鼓膜を破くわけにはいけないので、場所を確認しているだけですわ」

……………怖いです。怖すぎます。

目の前に武器があるのも勿論恐怖ですが、姿形が把握できればまだ対処しようとする意思是生まれる。けれど恋華さんの凶器は既に僕の耳の中。しかも体制のせいで恋華さんの表情を伺うこともで

きません。声からしてとても暗い笑顔をしてそうなんですよね、十中八九。

「フッフ、静かになって悠夜さんはいい子ですね。では、私のお話しをちゃんと聞いててくださいいね？」

僕の髪をすきながら、顔をすぐそばまで近付ける恋華さん。他の人から見れば恋華さんが僕に何かを囁いているか、内緒話をしているように見えるかもしれない。

けど実際は鼓膜を人質に取られ、身動きが取れない僕をこれから恋華さんがねちねちと痛ぶると言った構図の方が正しいと思われる。再会してわかったのですが、恋華さんってSの気があるんですよね。

何がくるのかと戦々恐々していると、恋華さんは僕だけに聞こえる小さな声でこう言ってきました。

「では、これからいくつかの質問しますので、ちゃんと答えてくださいいね？」

「は、はい」

「ではまず始めに、リリースさんとどこまでされてますの？」

「ど、どこまでというのは」

「ですから、リリースさんが度々口にするあなたとの関係についての色々な疑惑のことですわ」

あー、もしかして、僕と一緒に風呂に入ったあの、僕と一緒に布団で寝たとかのあれですか。

……100%全てが嘘というわけではないので正直否定しにくいですね。でも風呂の件はあくまで『未遂』ですし、一緒に寝たと言ってもリリースさんが僕を抱き枕変わりにしただけですけど。

でもそんなことを言ってしまうえば経験上、恋華さんが激怒するの

は目に見えています。

どうすればいいのでしょうか？

僕は選択肢のない問を自分自身に投げかけます。

ここは恋華さんの様子を伺いながら、怒の感情が出ないような言葉選びをしなくては。

「確かに一緒に風呂場に入りましたが、お互いに水着を着ていましたし湯船には入っていません。それに背中を軽く流して頂いただけですし、僕はその時リリースさんには指一本触れていません。」

これと同様に、リリースさんと二人で一緒の布団を使ったことはありませんが、それはリリースさんが望んだことで仕方がなかったのです。弱味を握られた僕は、おとなしくリリースさんの要求を受け入れるしかなかったのです。そしてここが一番重要なのですが、同じ布団で夜をすごしたと言ってリリースさんが僕を抱き枕変わりにしただけでやましいことなんて一つもありませんでした。本当です」

ふう。これで信じてくれましたかね？

「悠夜さん」

「は、はい、なんででしょうか……」

「嘘っぽい」

「なっ!?!」

え、どうして!!

「二、三喋ればいいものを、矢継ぎ早にそれこそいつさいの追求を許さないように口を動かすところを見ると、私は悠夜さんが何かしら嘘をついていると考えますわ。もしかして、さっき悠夜さんが口にしてる以上のことを、リリースさんとしているのではないでしょ

うね？」

かえって裏目に出てしまいました。

あー、上から声が聞こえる分、威圧感がすさまじいです！

「いや、別に何もありませんって！ 僕がそういうことに昔から疎かかったり、積極的でなかったのは恋華さんが一番存じてますよね？」  
「まあ、確かに。悠夜さんは小学生の頃に『君は枯れているのかい？』と言われていましたものね」

そう言えばそんなことありましたね。あの時はその意味がよくわかりませんでした。今思うとなんだか癪ですね。

「ふむ。まあ、ここは信じましょう。私は子供の頃から一緒に寝たり、風呂に入ったりしましたものね」

「……そうですね」

さすがに子供の頃はノーカンですよ。幼い時期は主体性というものが希薄だったので、当時はほとんどの時間を一緒に過ごしていた恋華さんと同じ行動を取ることが多かったんですよ。……あの頃は『腹黒』などという属性は恋華さんにありませんでしたのに。

「それでは、次の質問に参りますわ」

「薄々わかっていましたけど、質問は一つだけではないのですね」

「リリースさんとは何回、強いて言うならどれくらいの頻度でキスをしていますの？」

二個目でそれが来ますか。というかりリースさんと頻繁にキスしてると思わてる！？

確かにこれもリリースさんに隙を見せてしまった時はよくやられて



いましたが、最近ほぼガードできています。断る度にリリースさんが悲しそうな顔をするので割りと苦しいですけど。

「どうしてすぐ答えられないのです？ あー、そういうことです。あまりにもキスをし過ぎて回数を覚えていないと」

「ち、違いますよ。ええつとですね、確か僕の記憶によれば先日の屋上のあれをカウントするなら、8回くらいかと……」

「まあ。そんなに悠夜さんは『義妹』<sup>いもつと</sup>とキスをしてらっしゃるの。筋金入りのシスコンですわね」

心臓を抉るような一言。

恋華さんはあくまでも淡々とした調子で、僕の脆い部分を削っていく。義妹と言えどもキスをしてしまう僕は、やっぱりシスコンなのでしょうか？

「要約すると、悠夜さんは思春期男子が夢見るような、義妹との甘酸っぱい生活を送っていると。そうですね？」

「人の感じ方や考え方には差があるとはいえ、それは否定させていただきます」

「けれど世の人々はどう思うでしょうね」

うつ。

確かに僕も客観的にそういうことを聞けば、そう思うに違いないですね。

「なるほど、悠夜さんは銀髪妹萌えでしたのね」

「お願いですから、違うと言わせてください」

「ならどうしてキスしたのです？」

「ぐあっ」

恋華さんはいったいどんな理由で僕を精神的に追い込んでいるのでしょうか？

というよりこの催し、僕を癒すために開催されたはずなのに、恋華さんは見えそうで見えない悪意を感じなりません。

「では、最後の質問です」

ああ、やっと終わる……。

「私があなたの家に住みたいと言ったら、快くオーケーと言ってくれますか？」

「それは……」

「すぐに答えをくれないのですね」

「あつ、えと、ごめんなさい」

「別に迷って当然ですわ。例えば私が自分の生活費を払うなりしても、家に住人が一人増えるというのはそれだけで負担ですもの。家事の量が一人分増えますし、プライバシーの問題も出てくるかもしれません。今以上の不便を抱えるかもしれません。

でもこれだけは覚えていてください。私はいつでもあなたの味方です。私はいつだってあなたの傍にいます。あなたのためなら、私は道化になることも躊躇いませんわ」

「……………どうしてですか？」

「あら。女性がこれだけ尽くすと言っているのですから、理由を尋ねるなんて野暮ってものですよ」

「そうですね」

「ま、強いて申すのであれば、私はまた昔の時のようにすごしたいと思っただけですよ。もちろんこの『今』も気にいってわいませけどね」

「……………」

「わからないって顔、してますわね」

「はい」

「いくら悠夜さんが利口でも、わかるはずありませんわ。これは私だけの感情。私だけがその全貌を捉えることができる想い。」

もしも、悠夜さんが私が持つこの想いを知り受け止めてくれたのなら、その時は私の長年の夢が叶う瞬間ですわ」

「恋華さん……」

「あえてわかりやすく言うのであれば 負ける気がないってことですわ！」

「ヒイツ」

恋華さんは僕の耳から耳搔きを取り出すと、暖かい舌を耳にねじ込んで搔き回した。

「あ、あの、ちょっと。恋華さんっ。そこは立ち入り禁止。一般人はお断りなわけですて！」

「ちゅぱっ、ちゆる、ちやく、ねちゃ、ちゅむ。ぷはあ。さあ、これで悠夜さんの耳は綺麗になりましたわ」

え、恋華さんはこれが耳掃除とでも言いたいのでしょうか？ 中耳炎にでもなったらどうする気です！

「なんなら反対側もやりましょうか？」

「いえ、結構です」

もし反対側もすれば、いろんな物が壊れてしまう気がしてなりません。

『これは霧坏選手、怒涛の猛攻だったツスね』

『最初は優しく耳掃除しつつ、小声で楽しそうに内緒話して、最後は舌を豪快に使う。霧坏の本気が見えたな』

『それでは悠夜、誰が暫定一位か決めてもらおうニヤ』

あー、そういえばそんなのありましたね。

「じゃあ……恋華さんで」

「やりましたわ!」

「どういうことなん、納得いかへん!」

「悠夜くん、私以外の女を選ぶなんて……」

『はいはい。そう思うのはわかるけど、決まったことなんだから文句言わないニヤ』

「そうですねよ。ささっとときなさい、この負け犬」

「くぐぐぐ」

暫定一位席を離れた玲さんと京さんは、部屋の角にいつの間にか敷かれていたござの上に正座です。ござの面積が小さいので肩を寄せあつように。正直言って惨めに見えます。……あれが敗者の末路ですか。

「悠夜、後で覚えときい」

「覚悟しててね……?」

まさか退院して、すぐさま骨折なり重症を負って入院とか、無いですよ。そう信じたいです。

二人に対し恋華さんは椅子に優雅に腰かけ余裕の表情。扇子を出して自分を扇あおいでもいます。

『さて、これで前半戦は終了だニヤ。30分間の休憩を挟んで、後半戦をスタートするニヤ』

「まだやるんですか……」

僕にできることはただ一つ。

後半戦とやらが、今まで以上に変な方向へいかないように祈るだけでした。

第十九夜 例えどこで胡蝶が羽たばこつとも、嵐はすぐ目の前に（前編）（後書

サブタイトルと今話のラストを読んで頂ければわかると思います  
が、お見舞い編はまだ続きます。

次回の更新も遅くなると思いますが、頑張りますのでどうか応援  
よろしくお願いいたします。

感想、レビュー、評価等できればよろしく願います。

以上、伝助からでした。さようなら

第二十夜 例えどこで胡蝶が羽ばたこうとも、嵐はすぐ目の前に（後編）（前書）

嵐は過ぎさつてもその爪痕は残り、誰かの心に刻まれる。

忘れたくても、痛みは僕らを忘れない

そして離れることなく、僕らは日々を過していく

第二十夜 例えどこで胡蝶が羽ばたこうとも、嵐はすぐ目の前に（後編）

0

『前回までのあらすじだニヤ』

『悠夜は演劇部の先輩、白樺雲雀を怪異から無事救出することに成功するが、その時の戦闘で負傷してしまいゴールデンウィーク最終日まで入院することになった』

「入院期間がゴールデンウィークいっぱいになったのはあなた方のせいですけど」

『そこで俺達は入院中、暇であろう悠夜の為にある企画を用意したツス。その名も「第一回 誰が悠夜の傷だらけのハートを癒せるか？ 乙女同士のガチンコバトル！ ～悠夜の内臓ポロリもあるよ～」ツス』

『ちなみにこのタイトルは、一時間かけて考えたんだぜ』

「でしょうね！ 僕としてはむしろびっくりですよ。こんな幼稚で稚拙なタイトルを考えだしたことにっ」

『実はどっちか悩んでたんだニヤ。「傷だらけのハート」にするか「修羅場だらけのロード」にするか』

「一時間も費やして悩むようなことでもない気がしますけど」

『けど悩んでおかげで、とてもいいものができたニヤ』



「至極どうでもいいの間違いだと思うのですが」

『そんな「誰が悠夜の以下略」のトップバッターは悠夜と同じ演劇部の篤兎京だつた』

『彼女は看病の定番ともいうべきお粥で勝負してきたツス。しかも「あーん」して食べさせるといふ高等テクを見せたツス。この行動はウブでシャイでチキンな悠夜には大ダメージだつたスね』

「あれはお粥という名の殺人兵器です。おかげで水飲んで辛さしか感じませんでしたし。それと刈柴くん、さすがに僕でも怒ることはありませんからね？」

『篤兎に続いたのはご存じ、キレのある包丁が売りの月弦だつたニヤ』

『まあ、運悪く月弦は前の篤兎と傾向が被ってしまい、林檎を使つたんだが「あーん」をしたためパクリ疑惑も浮上したが厳正な審査の下、パクリではないことが証明されたことをここに言っておくぜ』

「そんな審議してましたっけ？」

『けど、月弦選手もまたすごいインパクトあつたスね』

「ありまくりでしたよ。だって大きめの包丁で林檎を剥き、更には包丁をフォーク代わりに使用するのですから。過去にいるんな人を見てきましたが、包丁をあそこまで日常生活に取り込んだ人は見たことありませんよ」

『そしてヘタレの悠夜はどちらか一人を選んで暫定一位に指名せんとならないのに、なんと勝者を選ばなかったのニヤ』

「あんな目に合わされて、どちらが素晴らしかったか決めると？」

『仕方ないので俺達はそのまま二人を暫定一位としたまま進行し、三番手は悠夜の昔馴染みでもある霧坏きりつきだったのニヤ』

『霧坏は男の夢のトップ10に入っているであろう、耳搔きで勝負をしてきたツス』

『初々しい新婚のような雰囲気醸しながら、霧坏が悠夜の耳元に顔を寄せて内緒話をし最後の方で激しく責めたてるっ。さすがの悠夜もアレにはイチコロだったな』

「……………（ブルツ）」

『どうした悠夜？』

「いえ、少しばかりイヤな記憶を思い出しただけです。ハハハ…

…」

『笑い方がすごく怖いんだが。まあ、霧坏は見事勝利、というか悠夜に選ばれ暫定一位の座を獲得したわけだ』

『残す後半戦はあと三人。いったい誰が栄光を掴むのか？ 誰かがその手に勝利を握りしめるのか？』

「そして僕は無事に退院できるのでしょうか……………？」

『それでは張り切って、行ってみるニヤー！』

『休憩も終わったところで、後半戦をいってみようかニヤ！ 四番手は悠夜の義妹でもあるリリス・ペンドラゴン選手だニヤ』

「よろしくね」

「もう終わりでいいですか？」

「なんかリリスの対応他の人に比べてひどくないっ？」

「あなたがはりきると、ろくなことが起きた例が無いんですよ」

『おおっと、これはリリスちゃん早くもアウエーだ』

『まあ、四六時中一緒に居たら、幻想なんて抱く暇ないツスよね』

強いて言うなら幻想を抱く時間が与えられる前にリリスさんはある意味はっちゃんけましたけど。

「もおー。リリスだってお兄ちゃんを喜ばす為にいろいろ考えて来たんだよ」

「そうでしたか。それはありがとうございます」

僕は手を伸ばしてリリスさんの銀髪を撫でる。義妹状態でストリートにしているリリスさんの髪はさわり心地がとてもいい。

『兄妹でイチヤつくのは構わんが、そろそろ進めて欲しいニヤ』  
「イチヤついてません」

天宮くんも冗談とは思いますが、ちゃんと否定しておかなければ後々めんどいですからね。

にしても、髪を撫でるくらい妹へのスキンシップとして当然のような……、おや？ これはもしや俗に言われる『シスコン』の思想に類似しているのでは？ うーん、何がとは言えませんがなんだかこのままではまずい気がします。

「リリースは入院で暇をもて余したお兄ちゃんのことを考えて、ある物を持って来たんだよ」

『なるほど。ペンドラゴン選手はプレゼント作戦か』

『まあ、前半三人はどちらかと言うと奉仕してたツスからね。このプレゼント攻撃は新鮮ではないかと。それでペンドラゴン選手は何を持って来たツスか？』

「フッフッフ。私はみんなとは違って“形に残り”なおかつ“実用性のある物”を用意してきたんだよ。はっきり言って負ける気はないね」

『だそうだけど、そっちは何か言いたいことあるかニヤ？』

「どんな物をリリースさんが出そうとも、私のこの位置は不動ですわ」  
「私はどっちが負けても、別に気にしないけど。でもそうね……」

どうせどっちかが負けるのなら、これ以上無いくらいの惨敗が見たいな」

「もうどっちでもええから、はよ終わらせて欲しいんやけど。この座（おき）に敗者として座るの、精神的にきつい……」

『まあ、意見も出てるし時間も有限なことなので、そろそろペンドラゴン選手、ささっと悠夜その持って来たプレゼントを渡して欲しいニヤ』

「はい」

リリースさんはよっこいしよと言って、僕が座るベッドの端にいつも登下校時に利用している鞆を置きました。やはりあの鞆の中に入っているのでしょうか？ どうやらあまり大きな物ではなさそうですね。さて、いったいどんな物が出てくるのでしょうかね。ちよっぴり楽しみです。

リリースさんはそんな僕の心境を感じとったのか、いかにも楽しそうに鞆を開け中をあさる。そして薄っぺらい何かを差し出した。

「はい、お兄ちゃん。これをリリスだと思ってたっぶり楽しんでね」

僕に笑顔で渡して来たのは見慣れない雑誌。

綺麗な外国人美女が載っている表紙。肌の露出はものすごく、豊満な胸や下半身を手と腕で隠しこちらにウイंकしている。

これってもしかして……

何か何かとプレゼントを覗き見る他のみなさんも、正体がわかりなり絶句。信じられないという目でリリスさんとプレゼントを向後に視線を向ける。

「リリスさん、リリスさん。一応聞きますが、これはなんなのですか？」

「何ってそれは、思春期の男子ならベッドの下に一冊以上は必ずある、青春の甘酸っぱさと儂さを内に秘めた至高の一品 エロ本だよ」

あろうことがこの娘、義兄の見舞品にアダルト本を持ってきやがりましたよ！！ これを持ってきたのが男友達なら百歩譲ってまだわかりますけど、なんで義理とは言え妹が持つてくるんです！？ しかも友人や先輩方の目の前で！！

「いやー、お兄ちゃんに何かプレゼントしようとはまでは考えたんだけど、肝心の贈る物を何にしようか迷っちゃって。そこでね、ママに相談してみたんだ。そしたらママが『Hな本をもらって喜ばない男はいないわ』って。だからそれにしたの」

僕の心境なぞいざ知らず、さも得意気に語るリリスさん。

というかこれは師匠の差し金ですか！ どうしてあの人は見舞品にアダルト本を推奨します普通！？ 本当に親子の縁をぶった斬

ってやりましょうか!?

『え、えーと、それじゃありリスちゃんはプレゼントを悠夜に渡して、悠夜は誰が一位か決めてもらおうニヤ』

「はい。どうぞお兄ちゃん。プレゼント、フォア、ユー」

外見の割に微妙な発音をしながらアダルト本を僕に渡してくるリスさん。……ああ、周りからくる同情の視線が痛い。なぜ僕はこんな感覚を味わなくてはならないのでしょうか？ ん、そう言えば、僕の入院が長引いたのって、確かリスさんが余計なことをして余計なこと言ったからですよね。そのせいで他の方々が興奮状態に陥って……。結局はリスさんのせいじゃないですか!! 今だっておかしな企画と師匠のおかしなアドバイスのせいもありますが、また僕はリスさんによって精神的ダメージを追わされている。

なんだか最近、リスさんには理不尽な目に合わされてばかりですね。そう思うと胸に熱い何か物がふつつつと込み上がってきました。

「リスさん」

「ん、なに？」

「猛省なさい！」

僕はリスさんからアダルト本を受けとると　そのままリスさんの脳天を冊子で叩き付けました。

スパンツ！

「痛っ！ な、何するの!？」

僕は目に涙を浮かべ痛そうに頭部を擦るリスさんを見無視し、スリッパを履かずに風通しを良くするために開けてある窓まで歩きま

す。

憎々しいまでの清々しい日射しの中、僕は窓から見える景色を見下ろしながら

「飛んで行きなさい、遙か彼方まで！」

「あーっ！」

フリスビーの要領で、僕はアダルト本を空へと投げ放つ。ちなみにここは五階。

リリースさんは驚きの声を上げながら窓まで走りよると、弧を描きながら重力に従うアダルト本を視線で追う。本は高い木に引っかけ、そのまま落下が終わった。

「……………」

アダルト本の最期(?)を看取ったリリースさんは、ものすごい勢いで意気消沈しそのままフラフラと歩き病室を去って行きました。

……やり過ぎでしたでしょうか？

「え、えーと、途中退場したことにより、ペンドラゴン選手は失格となりましたニャ。いや、でも、まさかこういう展開になるとは……」

「リリースちゃんって一見馬鹿っぽいツスけど、ほんまもんの馬鹿だったんスね」

「なあ、悠夜。追いかけていいのか？」

「いいです。子供ではないのですから、戻ってくるなり帰宅なりするでしょう」

「そんじゃ、えーと、見事一位をキープできた霧坏選手。何かあるかニャ？」

「(……アレを投げ捨てたということは、悠夜さんに外国人、もし

くは金髪の女性を積極的に好む嗜好ではない。これは私が若干優勢  
ということ……！」

『おい、もしもし〜？ ……えーと、霧坏選手は特になさそうな  
ので、次に行かせてもらおうニヤ』

こうして精神疲労だけが溜まり、後半戦が続いていくのです。

……ところで、恋華さんの目が怖いくらいにギラついているのは  
何故でしょう？

2

『五番手はこの人。最近抜刀癖が付いて来た、ミスまな板。冬空美  
姫選手だニヤ』

「あ、手元が狂ってしまった」

『ギヤニヤー！』

口は災いの元と言いますが、まさにその通りですね。

天宮くんの軽率な発言は、魔装具を瞬時に抜刀させ冬空先輩の手  
元をおかしくするのに絶大な威力を有していたようでした。

まあ、天宮くんの自業自得とはいえ、彼が紙一重で避けなければ  
冬空先輩もいったいどうしたのでしょうか？ 床にハラリと落ちる  
金髪を見ながらそんなことを考えました。

『あ、危なっ。冬空先輩、あんななんてこと ……』

「（ジャキッ）何か言いたいことでも？」

『いえ、何もありませんです、ハイ』

口を開くも再び構えられた日本刀を目の前に、押し黙りました。

……天宮くんの言うことに同意するわけではありませんが、



抜刀癖は確かに付いてきている気がします。出会った頃はすぐにプチツと来ても抜刀すること無い、まごうことなき『常識人』でしたのに。最近では他の人と大差ないように思えて来ます。ああ、僕にはこういうのを引き寄せる引力かなんかを持っているのでしょうか？

『そ、それじゃあ、冬空選手はいつたいどんなことを計画されたんだニヤ？』

「うむ。私は森羅に贈り物をと考えてな」

『てことは、ペンドラゴン選手と一緒にスね』

「アレと一緒にするな！」

「そうですね、そんなことよりも過去のことなど早く忘れてくださいー！」

「……私も否定しておいてなんだが、そんなに嫌だったのか」

「嫌と言うより、ものすごく不安なんです。リリースさんの将来や、僕の平穩などが」

リリースさんは思いつきをすぐに実行する傾向がありますからね。

その悪癖によって僕がどれほどの苦勞を強いられたことが……！

『兄妹の事情はさておき、そろそろ冬空選手は持って来た物を悠夜に授与してくれニヤ』

「それもそうだな。私が用意して来たのはこれだ」

そう言って冬空先輩は大きめのスポーツバックからダンベルやらウェイトやら、体を鍛えるのに必要な物を取り出しました。

「やはり『武の道』を生きる者にとって、数日とはいえ鍛練が行えない環境は苦痛でしかないからな。まあ、自分の使い慣れた物の方がいいだろうが、さすがに用意できなかったので私が普段使用している物を持って来たことに関しては何弁してくれよ？」

腕組みをして誇らしげに胸を張り、自信に溢れる表情で語る冬空先輩。

着眼点は悪くないと思いますが……

「あの、冬空先輩」

「ん、なんだ。まだ他に欲しいのがあるのか？　なら言ってみろ、お姉さんが用意してやろう」

お姉さんって……。

いつもより上機嫌な冬空先輩。対して僕は実に気まずい心境の中、「ここの病院って、リハビリを必要としたり入院生活で体力が衰えてしまった患者のために、トーレーニングルームなる場所が設けられているのですよ」

「ほー、そうなのか」

「それで僕も冬空先輩と同じことを考え、これはまずいなと思いついて担当医に相談したのですよ。そしたら、担当医の方が快くそのトーレーニングルームの使用許可を出してくれたんです」

「……………え？」

「ですから、この数日は自己鍛錬という意味ではすごく充実したも  
のになりました。特にやることもありませんでしたし、それはもう  
集中的に」

「……………と、ということは何か。私の考えは、私が立てた計  
画は意味がなかったということか……………？」

「端的に言えばそうなりますね」

「ッ！」

さっきまでの余裕ある表情はどこへやら。ものすごく悲痛な表情を浮かべながら、冬空先輩はぺたりと床に座りこんでしまいました。

「まあ、普通に考えてお見舞いに筋トレグッズなんて持って来ませんわよね」

「うっ」

「意外性を重視したんだろっけど、逆にイロモノ過ぎたと言っかりスちゃんのと大差無いと言っか」

「ひうっ」

「そもそも今日退院やのにそんな物を渡すなんて、お前まだ入院してると言ってるようなものやん。生徒会長はんも、存外酷いんやな」

「うわーん！」

あーあ。

恋華さん達のねちっこい攻撃に耐えきれず、とっとう泣き出してしまった。意外に打たれ弱いんですね。まあ、ここでこそこんな扱いをされていますが、学校に行けばカリスマ美少女生徒会長ですから、誰も冬空先輩を弄ろうとはしませんよね。そう考えると、この絵はとてもレアではないでしょうか。

「うう、ぐすっ」

「えーと、冬空先輩。とにかく泣き止んでください。結果としては無に終わりましたが、あなたの心遣いはとても嬉しかったです」

「ううっ、えぐっ。……ほ、本当か？」

冬空先輩と同じ目線になり、頭を撫でながら言葉をかける。

何故僕は自分よりも年上で、自分よりも背の高い女性を慰めてくれるのでしょうか？

「本当ですよ。ですからね、冬空先輩。ご機嫌なおしてください」

「う、うん、わかった。お前がそう、言うなら、ひぐっ、そうしょ

う

「そうです、冬空先輩はそうでなくては（ふう、これでいつもの冬空先輩に戻って来てくれましたよね）」

「……なあ、森羅。一ついいか？」

「はい、なんでしようか」

「何故私は『冬空先輩』なんだ？」

「え？」

なんだか冬空先輩が哲学的なことを言い出してきました。

「違う。そういうことじゃない。どうして私の呼称は名字に先輩付けなんだ。百歩譲って先輩を付けるのはいいとして、何故私のことを名字で呼んでいるのだ。大半の者は名前で呼び合っているのに不公平ではないか」

えー。

『ハイハイ。実は俺も前から思っていました。俺らも下の方で呼んでいるんだからお前もそうしやがれこのフェミニスト』

『そうだニヤそうだニヤ』

『他のみんなはそうなのに自分だけ違っていて、地味に傷つく時があるんすよね』

突然口を開いた神薙くんに賛同するように、男子達も不満（？）を言い放つ。

え、なんですかこの展開？

「えーと、つまりあなた方は僕に呼び方を変えて欲しいと？」

『そういうこと』

「あー、それでは、神薙くんのことを亮くん（じやうくん）。天宮くんは響くん（ひびきくん）。

刈柴<sup>かりしば</sup>くんを大地<sup>だいち</sup>くんと呼べばいいのですね？」

『それでオーケーツス』

「……わかりました。以後からそのようにいたします」

呼称つてそんなに重要ですかね？

本人と特定できたり侮蔑等がこめられていなければ別に気にすることでもないように思えますが。

「だから私のことを忘れるな！」

あ、そう言えばもう一人……

「ちょっと待てっ。さてはお前、本当に私のことを忘れていたな！」

「……そんなことありませんよ」

「目が泳いでいるせいで説得力がまるで無いぞ」

冬空先輩は軽く僕を睨むも、「ホンと小さなせきをするとな差し指でビシッと僕を指さしました。

「今日から私達はお互いを名前で呼び合う！」

と、声高に宣言しました。

けれど、ぼかんとして何も言葉を発しない僕を見て不安になったのか、怯えたように目が潤むと先輩にしては珍しく小さな声で、

「だ、だめ、か？」

「いえ、大丈夫です」

と言い、僕は僕であっさりと了承してしまいました。

「本当かつ」

「え、ええ。さすがにこれしきのことを前言撤回はしませんよ」

いい返答が聞け、満足そうに微笑む冬ぞ じゃなかった、美姫

先輩。先ほどの涙目といい、今浮かべている輝かしい笑顔といい、改めてふ 美姫先輩が魅力的な女性であることを認識してしまう。

そのせいか

『それじゃあ、悠夜。霧坏選手と冬空選手、どちらが勝者がニヤ？』

「美姫先輩です。……………あ」

何も考えずに思わず視いつてしまっていた方の名前を上げてしまいました。

急に振られたとはいえ、まさか呆けてしまうとは……。もしかして僕って、色仕掛けに弱いのでしょうか？ そんなことを思うとなんだか虚しくなってきました。

「悠夜、私を選んでくれたのかつ。嬉しいぞ！」

「こんな結果認めませんわよ！ あんなのルール違反じゃなくて！？」

『でも決めたのは悠夜だニヤ。不満があるなら悠夜に言って欲しいニヤ』

「そうだ、これは悠夜が決めたことだ。文句を言わずにおとなしく負けを認めるのだな」

「ウギギギ……………」

なんともわかりやすい勝者と敗者の構図。まあ、癒されたという点では、美姫先輩の笑顔が今日の一番ですから、審査（？）は間違っていないはず、ですよ。

美姫先輩は満足な表情でパイプ椅子（一位席）に座り、恋華さん

はブスツとした表情で敗者が集う座へと向かう。

「……………やはり鼓膜を破っておくべきでしたわね……………」

僕は何も聞いていません。幻聴なんて耳にしていません、恋華さんは通り過ぎる際に何も言っていません……………！

3

『トリを飾るのはこの人、こんな可愛い子が女の子なわけないを地  
でいく演劇部の先輩、白樺雲雀選手だニヤ』

……………。

おや？ いつまでたっても雲雀先輩のプチ自己紹介が始まりませ  
んね。

それとなく病室を探しても雲雀先輩の姿は見当たありませんでし  
た。それと、雲雀先輩に同伴するような形でやって来たキララ先輩  
も。

『……………どっか行っちゃったのか、白樺選手？』

『そうなると不戦勝ということ、冬空選手が優勝ツスね』

「前から思っていたのですが、優勝したら何か貰えたり特典がある  
のですか？」

この企画は変なところに力を入れていますし、なんか景品くらい  
は用意してるかもしれませんね。

『悠夜を一日好きにできる権利』

「……………ええつと、初耳なのですが？」

『だって言っていないからしょうがないニヤ』

「ないニヤ、じゃないですよ！ どうしてそんな重要なことを後々言ってくるんですか。しかも僕が聞かなければ言う気配なかったですよねつ。そもそもあなた方は勝手に景品にしといて、本当に僕を見舞いに来てくれたんですかっ？」

『え、駄目だったんスか？』

「駄目とか言う前に一言言ってくれませんかね、人権的な問題からして」

『だってあいつらに優勝商品が合ったとして何がいいかって聞いたら、口を揃えて“悠夜一日好きにできる権利”がいいって言ったんだニヤ』

「う、裏切り者（？）っ」

塵の上に座った玲さんは若干気まずいのか視線を僕と合わないようにか明後日の方向に向けています。少しでも罪の意識があるように思えますが、彼女達も黙っていたのですよね…………。

「フハハハ、今さら知ったところでもう遅い。既に悠夜（の一日）は私の物だ！」

美姫先輩も美姫先輩で悪役っぽいことを言ってるっ。しかも言葉から勝利への自信がありありとにじみ出ていますね。このまま行けば不戦勝らしいですけど。

『それじゃあ、何故か知らないけど白樺選手は失か』

ガラガラッ！

勢いよくドアが開き、響くんの言葉が遮りました。みんなの視線



が息を切らせながらドアの前に立つキララ先輩へと向かいます。

「間に合った!?!」

『ギリギリセーフだニヤ』

「やー、危ない危ない。ごめんねー、待たせちゃって。準備に手間取ったのもあるんだけど肝心の雲雀が嫌がっちゃって」

僕はキララ先輩の言葉に引っ掛かりを感じました。

準備に遅れたと言うのはまだわかりませんが、雲雀先輩が嫌がった……?」

「うう、キララア……」

今度は雲雀先輩がドアからひよっこと頭だけを出してきました。何故か涙目で。

「ねえ、本当にするの……?」

「だから言ってるでしょう! あなたには必勝の二文字以外はありません。敗北なんてもっての他よ」

「ふえええ」

なんだか泣きそうな雲雀先輩。いったい何が先輩を追い詰めているのでしょうか?

『で、雲雀選手は何もアクションしないのかニヤ。だったら失格ってことになるけど』

「うう」

雲雀先輩は何かを悩む素振りを見ると、覗かせていた頭を引っ込めました。

「わ、笑わないですよ……？」

そう言うと、雲雀先輩は頭だけではなく全体を僕らの目の前にさらしました。

雲雀先輩の姿を確認した瞬間、僕達に衝撃が駆け巡りました。

ナース服。

雲雀先輩はナース服を着用していたのです。

それも通常の看護師さんが着るようなものではなく、ピンク基調とした配色に半袖、見ているこっちが赤面してしまうようなミニスカートの仕様になっています。

さらさらストリートな白金の髪にはナースキャップを乗せ、右手におもちやの注射器を持ち左手で恥ずかしそうに押さえるスカートからは肉付きのよい太ももが存在感を示し、足に装着された網タイツは見事なまでの脚線美を演出していました。

「どうよこれ！ 私が腕によりをかけて作り上げたのよ。いやー、私の目に狂いわなかったわ」

そう自信満々に呟くのはキララ先輩。なるほど、この衣装はキララ先輩が雲雀先輩の為に用意したオーダーメイドというわけですか。キララ先輩は裁縫がお得意で、舞台衣裳のほとんどは先輩が作った物だと聞いています。

「この話しを聞いた時にピンと来たのよ。雲雀にはこれしかないって！ まあ、一から作る事になったし、さすがに連日徹夜して今朝やっと完成したんだけど。ちなみにつつくくんも手伝ってくれてたんだけど、終わったとたん力尽きちゃって今は爆睡してるでしょう

ね、多分」

なるほど、<sup>つとま</sup>努先輩の姿が見えないのは不思議に思いましたがそういうことでしたか。キララ先輩と努先輩はいつもべったりですからね。キララ先輩も化粧をしています。よくよく見るとつつすらした隈が目の下に。

「そんな私とつくくんの愛の結晶を、雲雀ったら着る直前になって『無理っ』、って言うてきたのよ。もー、ひどいったらありゃしないんだから」

「だ、だってそれは、こんな格好だと思わなかったから……」

もじもじしながら、恥ずかしげにうつむく雲雀先輩ははっきり言うてとても可愛いらしい。

骨格上男性というのはきちんと理解しているつもりですが、こういうしぐさを見るとやはり性別を疑ってしまいますね。

他のみなさんの反応はというと

『ナース服ってなんていうか……、いいな』

『萌え神様がここに降臨されたニヤー!』

『うわー、破壊力抜群スね、これは』

「ひ、卑怯ですわよっ。友人に身繕ってもらっなんて。しかも似合いですぎ……」

「そうか、看護師になったら合法的にその人の世話もできるしライフラインを握れるし、退院しそうになれば“怪我”なんていくつでも作れるし。………アリかも」

「はあ。どうして同じペチャパイやのに、こつも違っんやろっなあ。なあ、生徒会長さん」

「その話題を私に振るな!」

ヒトそれぞれでしたがどれも好印象な様子。  
雲雀先輩も口々に賞賛され、嬉しそうにはにかみます。

「ほら雲雀、これだけじゃないでしょ？ 練習通りちゃんとやりなさい」

「ええつ。まだやるの……？」

「四の五の言わずにちゃっっちゃっとしなさい！」

「うう、わかった」

なんだかキララ先輩が教育ママに見えてきましたね。

持っていた注射器を一旦しまうと、雲雀先輩はビニール袋の入れであった濡れタオルを取り出しました。

タオルをぎゅっと握りしめ、顔を朱に染めながら僕に言い放つ。

「そ、それじゃあ、体拭くね」

「はい？」

体を拭くつて、そのタオルで？

雲雀先輩が？

そう思った瞬間、一気に体が熱くなり羞恥心が首をもたげました。

「い、いいですよそんなのっ。一人でできますし、というか汗かいてませんしっ」

「しなきゃダメなの！ これは決まったことなの！」

やけになったのか僕のTシャツに手をかけ脱がそうとする先輩に何とか抵抗を試みるも、柔らかな手や腕があたる度になんとも言えない気分になりとうとう僕は折れ、

「わかりましたっ。……じゃあ、お願いします」

自ら服を脱ぐと背中を向ける。……雲雀先輩意外の視線を感じてしまつのは気のせいでしょうか。

「悠夜くんの背中って、思ったよりも小さいね」

「え、そうなんですか？」

シヨックというわけではないですけど、なんだか予想外の言葉に戸惑います。ほめられているのでしょうか？

「それに肌も綺麗で触りごちいいし」

「あの、先輩」

「えっ、ああ、ごめんね。今拭くから」

そう言つて濡れタオルで僕の背中をごしごしと拭いてくれました。と言つてもそれほど力は強くなく、むしろがゆいながらも気持ちがいい。

「よいしょ、よいしょっ」

こうやって雲雀先輩が一所懸命僕のために何かをしてあげていることも要因かもしれませんね。

「はい、背中は終わり。」

「じゃあ今度は下も脱いで」

「えっ、下もですか!？」

「じよ、冗談だよ、冗談っ。ほら、こういつのつてラブコメでわお約束でしょ？ だから、言ってみただけ。言ってみただけだから、ね？」

そう言っただけ　本当に少しだけですが残念そうにタオルをしまう雲雀先輩。……なぜ残念がるのでしょうか。

「あの、悠夜くん。改めて言う機会もなかったからこの際に言わせてもらおうね　本当にありがとう。先輩なのに助けられちゃったね」

雲雀先輩は笑顔で僕に礼をのべるも、表情には影がさし先輩が未だ後悔をしていることがわかります。

「そんなに気にしない方がいいですよ。僕だってあのまま怪異を野放ししておくのは好かないですし、演劇の教え手であるあなたを失いなくありませんでしたし」

「フフフ。でも悠夜くんってすごいよね、なんでもできるし初めてのことでもすぐに覚えてマスターしちゃっし」

「なんでもはできませんよ。できることだけです」

「でも、私のことは救ってくれたよね。道を踏み外してしまった私の目を覚ましてくれた」

ナース姿の先輩は両手の指を絡ませ、何かを決意したように真っ直ぐな目で僕を見据える。

「ねえ、悠夜くん。もしも、もしもだよ？　ある日突然知らない人

例えば私みたいに肉体と精神がバラバラになっちゃった人から告白されたら、悠夜くんはどうするの？」

「断りますね」

「即答！？　……うん、そうだね、やっぱりお断りだね、私なんて……」

僕が答えを提示したとたん、雲雀先輩は何故かひどく落ち込んでしまいました。

……なんかまずいこと言ってしまったのでしょうか？

「その、やはり告白をされても知らない人からされてはお受けするわけにはいきませんし」

とりあえず理由を言ってみます。

「……………もう手術を受けるか、それとも悠夜くんをそういう道に……………、えっ？ 断るってそういう理由なのっ？ 知らないからなの！？」

「だって先輩が前提条件でそう言ってきたじゃないですか」

「いや言ったは言ったけど、むしろ気にして欲しいのはその後なんだけど……………」

なにやらまたゴニョゴニョしだした雲雀先輩。

「じゃ、じゃあ、もしもだよ、例えばだよ？ 有り余る可能性の中にある、もしかしたらの話しだからね。実際の人物・団体・事件などにはいっさい関係なくもないけど限りがないからね。

えっと、私が悠夜くんにそのすすすす好きですって、こ、告白なんかしちゃったら、その、悠夜くんはどう、かな？」

「それは、とても嬉しいですね」

雲雀先輩のような素敵な方に、好意的なことを言われるのはこそばゆいですが素直に嬉しいです。

「そ、そうかな。えへ、えへへへへへへへ／／／」

今度はだらしなく頬を揺るませる先輩。今日はやけに表情豊かで

すね。

まあ先輩が喜ぶのは僕も嬉しいところなので、ここはもう一つぐらい雲雀先輩が喜ぶこと言っても罰はあたりませんよね。

「はい。やはり信頼している先輩にそう言われるのですから、一人の後輩としてとても嬉しいですよ」

僕がそう言うとピシッと何か亀裂ができたような音が聞こえ、雲雀先輩はシヨックを受けたような表情で、やや芝居ががりながらスローモーションで後ろに倒れこむ。それを状況を見守っていたキラ先輩が受け止める。

「……ねえ、もしかして今のつて、普通に受け止められた？ 先輩から後輩へのライクで受け止められた？ ……アハハ、一人で舞い上がって馬鹿みたい、ぐすん」

「雲雀しっかりっ。もう、悠夜くん、なんてことするの！」「僕のせい！？」

瞳を潤ませる等ではなく涙を両目から流す雲雀先輩を優しく抱き寄せながら、キラ先輩は僕を叱るという不思議な芸当を試してみました。

『悠夜、さすがに……』

『お前はもうちょっとラブコメで勉強した方がいいニヤ』

『その方がいいツスよ』

「悠夜は存外鬼畜なんだな」

「私、告白する時がすごい不安になってきましたわ」

「悠夜くんには言葉で伝えるよりも、体に刻みこんだ方が……」

「アカン、雲雀先輩が不憫すぎてウチまで泣けてきた」

「ええっ、なんですかみんなして！」





扉をパンツと開けはなつたのは、途中退室したリリスさんでした。手にはなにやら紙袋を持っています。

「さつきはごめんね、お兄ちゃん。リリスわかってなかった」  
「リリスさん……」

どうやらリリスさんは自分の間違えを悟って反省し、アダルト本ではなく別の物を用意して来たのでしょうか。  
リリスさんはみなさんの方をチラッと伺うと、

「この様子じゃ、もう終わったんだね。でも、勝負なんて関係ない。お兄ちゃんには、リリスの、受け取って欲しいの」  
「はい、ありがたく受け取らせてもらいます」

リリスさん（義妹）が用意してくれた、本当の意味で心が籠ったもの。それをどうして拒むことができませんでした。

僕は差し出された紙袋へ手を伸ばす。けれど僕の手を紙袋に触れるギリギリのところまで中の重みに耐えきれなかったのか、底が破れ中身が床に散乱してしまいました。

「あーっ、そんな、破けちゃった」  
「……………」

中身を見た僕や他の方は絶句。リリスさんだけが慌てた様子で拾い集める。

「リリスさん、それは……」  
「えっ、ああ、これはね」

拾った内の一冊を満面の笑みを浮かべて僕に見せる。

その表紙は漫画チックに書かれ、頬を染め大きめの胸を惜しげもなくあらわにする女性（セーラー服）のイラスト。

こ、これって……………！！

「二次元版のエロ本だよ　いやー、お兄ちゃんがリアルのでシない派とは思わなかったよ。案外マニアックなんだね。あ、でもリリスはぜんぜん気にしないから。特にオススメなねは」

「リリスさん」

僕はリリスさんが持っていた内の一冊をひつたくるとバツトのよ  
うに丸め、

「この変態色欲銀髪義妹がー！」

「はぎゅっ」

思いきりリリスさんの脳天へ叩きつけました。

『…………えー、最後の最後で森羅兄妹のコントもあつたけど、本当にこれで終わるニヤ。みなさん、お疲れでしたニヤ』

こうして僕の入院生活は終わりました。

…………できれば普通に何事もなく終わって欲しかったですね。  
はあ。

4

「リリスさん大丈夫ですか、頭？」

「うん、平気。少しだけ」

「そうですね。……もつと強く打った方が良かったですね」

「今さらつと黒い発言聞こえた!？」

「聞き流してください」

「しかも否定しない」

「自業自得ですよ。ああ……、絶対みなさんに疑われましたよ、僕ら兄妹の人間性」

「私達二人とも人間じゃないじゃん」

「そうですね」

破壊者（悪魔）と機巧人形。  
アントロイド

それはヒトと似て非なる存在。

僕とリリスさんは二人で並んで病院から家までの道のりを歩いている。

リリスさんを病室で引つ張った後、お世話になった看護師の方々に挨拶をして当然というか解散となった。

最初は一丸となった帰路を歩いていましたが一人、また一人と角を曲がりこうしてリリスさんと二人きりになりました。

「よくよく考えると久しぶりの我が家ですね。そう思うとなんだか感慨深いですね」

病院のベッドに慣れなかった頃は、無性に自分の家の布団が恋しかったです。

「確かにそうだねー」

「リリスさんは入院していませんでしょう」

「入院はしてなくても、お泊まりはしたよ。アキラの家に泊めてもらってたの。あ、でも、部屋の掃除とかはちゃんとしてたからね」

「そういえば玲さんは一人暮らしでしたね」

「結構楽しかったよ。プライベートを深くさぐるわけじゃないけど、

身近な人の私生活が知れるのってちょっとおもしろかった」

「それは良かったですね」

てつきり一人で留守番(?)してると思いきや、今度玲さんに何かお礼した方がいいですね。

「ああ見えてアキラってね、遅くまで起きてることが多いんだよ」

「そうなんですか」

「うん。夜中に白い和服のような着て、頭に火のついた蝋燭を白いはちまきで固定して人型に縛った藁わらの束に釘を打ち付けたりしてた」

「……へえー」

「後ね、やっぱり錬金術で作ったのか頑丈そうな手錠とか鎖とか、睡眠薬とか神経麻痺に使われる薬とかすごいたくさんあった。錬金術師っている作ったり用意しなきゃいけないから大変だね」

「………そうですね」

「それといかにも鉄製でどんな魔法叩き込んでもビクともしないようなドアの部屋があって、これはなんの部屋なのって聞いたたら」

『そこは悠夜くんの部屋だよ』

「………って言うってたんだけど、なんでアキラの家にお兄ちゃんの部屋があるの？」

「………わかりません」

「それと」

「ストップ！ リリスさんストップ！………さすがにこれ以上人様の家の情報を喋るのはいかななものかと」

「それもそうだね。ごめんねお兄ちゃん。調子に乗っちゃって」

「いえ、わかればいいのですよ」

玲さんのわかりたくなかった私生活にはいったん目をつむり、それからも夜道を談笑しながら歩いていると、いつの間にか懐かしい我が家の目の前。鍵をポケットから取り出そうとして、入院していたのだから持っていないことに気付きました。

「リリースさん、鍵お願いします」

「……………」

「あの、リリースさん？」

無言のまま俯くリリースさんを不思議に思い顔を覗きこむと、突然抱き締められた。

柔らかくて温かい体温が身体中に伝わる。

「あ、え、リリースさん、ちよつまっ」

「ねえ、お兄ちゃん」

困惑する僕にリリースさんは尋ねる。

「入院生活楽しかった？」

「えと、楽しいというよりは、安静にしてなくてはならなかったの  
で、特にはないです」

「今日は楽しかった？」

「楽しいと言うより、みなさんの顔を久しぶりに見たので、少し嬉  
しかったですね、はい」

「じゃあ、さ」

リリースさんの銀色の瞳が僕を捉える。

「ヒバリに取り憑いた怪異と戦った時と、どっちが楽しかった？」

「なん、ですか。そんな突然」

「だってお兄ちゃん、リリースといるよりも、みんなといる時よりも一緒に弁当食べる時よりも、バカやって誰かがボケてツッコミやる時よりも　あの怪異と戦ってた時、お兄ちゃんものすごく楽しそう（・・・）だったもん」

「それは、何かの勘違いでは……」

「ううん、お兄ちゃんのことだもん。勘違いとか、見間違いとかじゃない。あの時、確かにお兄ちゃんはとても楽しそうに笑ってた」

「……そう、ですか」

「みんなも薄々は気付いていたんじゃないかな？　だから今日みたいなことを考えて、お兄ちゃんと日常を繋げようとしたのかもよ。」

お兄ちゃん、右手起動して眼帯外して、手当たり次第にぶっ壊して人に見えない物を見るのって、そんなに楽しいの？」

ボクハタシカニアノトキ……………

「ねえ、お兄ちゃん。お兄ちゃんの右手はお兄ちゃんを壊したりはしないよね？　そんなのやだよ！　せつかく、せつかく出逢えたんだよ。せつかく日常って物を知れたんだよ。それなのに、非日常なんかに取り込まれて終わらないでよ。日常が退屈ならずと退屈なままでいて！　私がつくと退屈にならないようにしてみせるから、だから、リリースの前でみんなの前で壊れないでよ、傷付かないでよ。笑うのはリリース達の前だけにしてよ」

じゃないとリリース、お兄ちゃんが怖い

いつの間にか泣き出したリリースさんの体に軽く腕を回して、髪を撫でる。

言葉はかけない。

言葉はみつからない。

ひとしきりなくと『今開けるね』と言って鍵を開ける。それから一人で玄関に上がると、

「お帰りなさい、あなた。ご飯にします？ お風呂にします？ そ

れとも、リ・リ・ス？」

「では、リリスさんで」

「えっ、ほ、本当!？」

「嘘です」

「ええっ、ひどい！ 嘘つき、オオカミ少年！」

「それよりも、久しぶりにリリスさんの手料理が食べたいです」

「それよりって……。もお、こうなったら、その生意気な舌をギヤフンと言わせてやる！」

「楽しみです」

その後リリスさんの作った晩御飯を食べ、空いた時間でチェスをしたりして、そろそろ日付が変わりそうになったので歯磨きをしてリリスさんにおやすみなさいを言い、僕は床とこにつきました。

やはり、我が家の布団が一番ですね。

静かに目を閉じて、意識を睡眠へと誘おうとする。

『 じゃないとリリス、お兄ちゃんが怖い』

「僕はみなさんの方が怖いですよ」

こうして僕は今日も日常の中で眠りにつき、日常の中で目を覚ま  
す。

その裏側には非日常がいつも潜んでいることを知りながら。



おやすみなさい

第二十夜 例えどこで胡蝶が羽ばたこうとも、嵐はすぐ目の前に（後編）（後書

悠夜くん、無事退院です。当初はさらに入院生活を伸ばそうとも考えていましたが……………

次は学生特有のイベントです。伝助はこのイベント、大嫌いですが。

また次の機会に読者の皆さまと会える時を楽しみにさせていただきます。

感想やレビュー等どしどし募集しています。

それでは失礼します。さようなら！

第二十一夜 僕の両手に存在するは、重い想いと暖かさ（前書き）

やっと投稿できました……！！！！

長いですがどうか最後まで見ていただけたら幸いです。

それではどうぞ〜

第二十一夜 僕の両手に存在するは、重い想いと暖かさ

0

ヒトには回避不能な事態が複数存在する。

突然の病や怪我はもちろん、自他の環境及び心境の変化も数えられるかもしれない。

どちらにしろ、予測も予想も行えるが、絶対ではない。

回避できたとしても、次にまた回避できるという保証もありはしない。

あたりまえです。

預言師という限られた存在でもない限り、ヒトには運命 或いは未来を知ることなどできはしないのだから。

『一寸先は闇』

昔のヒトはよく言った物だ。

けれど、稀に凡人でも予期できる、避けられない事態はあるにはある。

でもそれはあまりにも強大で、その全貌わかってしまうからこそ、

ヒトは嘆くのдарう。

知ることでも生まれた一つの悲劇。

あるヒトは懸命に抗おうとし、

あるヒトは行動を放棄して全てを諦め、

あるヒトは絶対の剣を持って“それ”と相対する。

ヒトが望んだ選択。一つの結果の形。

けれど、どの選択肢も一概に間違っているとは言えない。

ヒトはどの選択肢を選んでも誰かにそれが『正しい』と言われるまで、選んだことに対する後悔に悩まされるのだから

1

「て、テスト……?」

しんと静まる教室の中、クラスメイトの誰かが声をこぼす。その声に諦めが混じっているのは気のせいではなさそうです。

「そうテスト。今日で調度一週間を切ったから、せいぜい頑張れよ。あ、くれぐれも低すぎる点を取るなよ? そしたら先生だって怒られるんだからな。そんじゃ、ホームルーム終了。さようなら」  
「ちよっ、聞いてなかったんだが!」

一人がまた苦情を述べる。

まあ、これは仕方がないですね。

職務怠慢に定評（？）がある瀬野先生はいつものように連絡事項を怠り、僕ら一年D組の生徒はテスト一週間前　ある意味ギリギリラインまで知らされなかつたのです。

……しかし、いくら担任が連絡しなかつたとはいえ、学校自体が『テスト前』という独特の空気になるのですから、それを察知できなかつたのは痛手かもしれませんね。

「ギャーギャー騒いでも時間は巻き戻されないんだ、潔く現実を受け止める。じゃ、先生は帰るからな」

そう言うつと瀬野先生はクラスメイトの非難の嵐をもともせず、気だるそうに廊下へと消えてしまいました。

ある者は突然の宣告に嘆き、ある者は今からでも遅くはないと自分に言い聞かせながら参考書を開き、ある者は完全に諦めふて寝を決め込んでいます。

「これも面倒事（瀬野先生）を僕に押し付け過ぎた一つの誤ちですね。みなさんで協力し会えばこうにはならなかつたでしょうに。クク……」

「ねえねえ、お兄ちゃん。テストって、なんなの？　お祭り？　後爽やかに地味な毒を吐くお兄ちゃんも素敵だよ」

「ありがとうございます、一応誉め言葉として受け取りましょう。クラスのみなさんはテストが楽しみで騒いでいるわけではありませんせんよ。テストというのは、日頃の勉学を疎かにしているかどうかをみるものなのです」

「ふーん。なんだかめんどくさそうだね」

「ちなみに、あまりにテストの結果が悪いと、ペナルティがかせられます」

「ええっ、そうなの!?!」

「その反応ですとテストに自信が無い、もしくは日頃の勉強を疎かにしているように聞こえるのですが」

「ちなみにペナルティってどんなのがあるの?」

「大量の課題やら、休日に実施される補修等です」

「げっ」

見た目にふさわしくないうめき声を上げながら机に突っ伏すリリスさん。

……彼女の性格からして 偏見かもしれませんが あまり勉強をしているイメージが湧かないんですね。むしろ蝶を追いかけの方がしつくりします。

僕はそんなことを考えながら帰り支度をします。もちろん家に帰って勉強です。雲雀先輩も今日は部活が休みと言っていました。にしても、退院早々テストとは、あまりついていませんね。事前にわかっていれば、入院生活を利用して勉強できましたのに。もったいないことをしました。

「悠夜あ!!!!」

「………なんでしょう? それと大声出さなくても聞こえていますか」

声こゑのする方を見れば、亮あきらくんを始め、いつも一緒にいる響ひびくんと大地だいちくんな姿もありました。

要件は大抵想像できますが。

「」「俺らに勉強を教えてくれ」「ニヤ」「ッス」

やっぱり。

「そんなうんざりしたような顔しないで欲しいツス」

「うんざりというわけではないですが、あまりにも予想通り過ぎて多少つまらないと思っただけです」

「つまんないのは取り返しようがないが　ダメか？」

「別に拒否したわけではありませんが」

「おおっ、じゃあ　」

「まあ、お断りしますが」

「期待させといて落とされたっ」

「そんなこと言わないで頼むニヤ。困った時はお互い様ニヤ」

「僕がピンチの時はいつも、あなた方は揃って傍観していたように思えるのですが」

「それに関しては俺らには無理だつて。刃物や魔法が飛び交う中で一般人の俺らがどうこうできるわけないだろう」

「盾ぐらいにならなれるじゃないですか」

「最近わかつて来たツスけど、悠夜も存外酷いこと言ってくるツスよねー！」

そうでしょうか。

「とにかく、俺らに勉強を教えて欲しいニヤ。なんだったら、今度学食おごってやるニヤ」

「僕、ただ飯ならあなた方の財布を枯らすまでたいらげることができませんよ？」

「……………」

「……………」

「……………」 肩たたきぐらいで手をうつてくれないか？」

「肩たたきなんて、健康グッズがあればそれで充分ですよ」

「そこをなんとか頼む！　さすがに高校最初のテストで馬鹿扱いされたくないんだ！」

「頼れるのはお前しかいないのニヤー！」



「そうツス。文武両道、才色兼備。学生の鏡ともいふべき悠夜に是非ともご教授承りたいツス」

「……………」

どうしましょう、かね？

「なになに、何の話し？」

「私達を除け者にしないでくださるかしら」

「おお、いい所に。月弦つきづると霧坏きりつきも一緒に頼んでくれニヤ。フェミニストの皮を被ったスケコマシの悠夜もお前らの願いなら聞き入れてくれるはずニヤ」

「決めました。絶対に教えません」

「響きこばかコノヤロー！」

「ニヤー！ ごめん嘘うそつ。今は嘘だニヤー！」

「頼たのむつて何を？」

「悠夜に勉強を教えてもらおうと、こうして頼み込んでるところツス」

「なるほど」

「そう言えば悠夜さんって、昔から勉強も人より数倍飛び抜けていましたものね」

「どれくらいすごかったの？」

「習った次の日には九九の段全てを丸暗記していましたわ」

「へー、なんだか悠夜くんらしいね。でもそれなら私も教えて欲しいかも。最近は勉強そっちのけで料理部に勤しんでたから正直不安なんだ」

「では私も。ウッフ、悠夜さん家で勉強会なんて昔のことみたいですね。……まあ、お邪魔虫がいるのは今との圧倒的な差ですけど」  
「お邪魔虫まじまじつてなんのことかな？ なんなら私が今ここで駆除してあげようか？ 害虫を」

「ナチュラルな会話から睨み合いに発展しないでください。そもそも

も教えるとは言つてませんよ」

「そこをなんとかお願いしますわ。ね？」

「お願い」

うーん。まさかここまで話しが発展してしまうとは。

正直一人で勉強しようとしたのですが……。

玲さんあいきにはゴールデンウィークにリリースさんを自宅に泊めていた  
だいた恩もありますし

「わかりました。僕でよろしければ勉強を教えさせていただきます」

「「やつたー」」

「おお、マジかニヤ」

「本当に助かるツス」

「ハハ、サンキューな。でも月弦達の頼みは素直にきくんだから、  
悠夜って本当にフェミニストなんだな」

「そうです、僕はフェミニストです。故に男子には勉強を教えませ  
ん」

「亮のバカツ。なんてこと言っただニヤ！」

「早く謝るツスよ」

「わ、悪かった悠夜。俺が間違ってたよ。お前は男にも優しいフェ  
ミニストだもんな」

「それって結局フェミニストじゃないですか！ ……はあ、まあい  
いですよ。教える対象が増えたところで負担が極端に倍増するわけ  
でもありませんし。リリースさん、あなたはどうしま あれ？ い  
ませんね」

背後に居るであろうリリースさんにも一応確認を取るべく振り向く  
も、彼女は自分の席に着いていませんでした。

「お兄ちゃん見て見てっ。アゲハチヨウがゲットできたよ」

「本当に蝶を追っかけてましたよこの義妹っ」

やはり似合うとはいえ本当にそういうことをするとは。

でもよくよく考えるとリリスさんは精神年齢も稼働時間（実年齢）もまだ幼いですしこういう行動を取ってしまうのも仕方のないことなのでしょうか。……立端<sup>たっぱ</sup>だけは僕よりもありますのに。

取り敢えずリリスさんの持つ虫籠と虫網を没収してから説明しますか。

2

「で、勉強会を僕の家でするのは、まあ、流れと言いますか薄々予想できていましたから別段構わないのですが……、どこから聞きつけました？」

この場には玲さん達一年D組メンバーの他に、隣のクラスの京<sup>みやこ</sup>さんに、学年の違う美<sup>みき</sup>姐先輩と雲雀<sup>ひまわり</sup>先輩もいました。

「別にええやろ。ウチもちょうど勉強に困ってたところやし、同じ部員として助けあわんと」

「それに私達が教えてやってもいいぞ。なに、一年前の勉強なんぞ取るにたらんさ」

「うん。悠夜くん達には迷惑かけないようにするし、大勢の方が楽しいかな〜って」

「そうですね。……僕としてはどこから情報が漏れたか気になるところですが　うん、気にしないことにしましょう。せつかくですし、努<sup>つとむ</sup>先輩とキララ先輩にも声かけましょうか？」

「うーん、あの二人はいいと思う。努とキララを呼んでも二人で勉強そっちのけでイチャイチャしちゃうと思うし。最悪それを見せつ

けられてこっちのテンションが下がる恐れもあるし……」

確かにそのビジョンは鮮明に浮かびますね。

あの二人が顔を会わせれば、もはや常人では立ち入ることのできない固有結界が張られてしまいますからね。雲雀先輩の言う通り呼ばなくては意味正解かもしれません。

もしかしたら先輩方は教室でもあんな感じなのでしょうが？

「ううん。キララと努は別のクラスだよ。私と冬空さんと努が一緒に、キララだけ他のクラス。お昼は二人とも部室で食べてるから、付き合ってるのを知っててもあそこまでラブラブなのを知ってる人はそういないと思う」

なるほど、そうでしたか。

さて、話しがそれましたけどそろそろ始めましょうかね。

僕は通学用鞆から教科書とノート、参考書を取り出し勉強を開始し

「ストップ」

「なんですか亮くん。せつかくノリノリな感じで勉強を始めようと思いましたのに」

「どこの世界にノリノリな感じで勉強をスタートしようとする高校生がいるんだよ。まあ、お前の勉強を邪魔するつもりはないんだけどさ、俺らにも教えてくれねえかな。そのために来たようなもんだし」

「……それもそうですね。クラスメイトの学力向上をはかるのも学級委員長の仕事でしょう。で、得意教科と苦手な教科はなんですか？」

「得意なのは野球だ！」

「じゃあ、体育ってことでいいですね。って、体育なんて今回のテ

ストに出ないじゃないですか」

「だから困ってるんだ」

「ようは得意なことを今回ばかりは活かせることができないということですね。それなら苦手な教科を克服して平均点を上げましょう。で、何が苦手なんです?」

「うーん、たくさん有りすぎて絞れねえや」

「お引き取りください」

「待った、諦めないでくれっ。……強いて言うなら数学が一番駄目だな」

「なるほど、他の方は?」

「俺は現文が嫌いだニヤ。でも英語は得意だZ E」

「生物は得意ツス。でも亮と一緒に数学は苦手ツスね」

「私も数学は厳しいかな。現文は自信あるよ。あと今回はないけど家庭科も任せて。包丁使いとか部長にすぐ褒められるんだから」

玲さんの包丁さばきを褒めるのでしたら、包丁を常備したりすぐ出したりすれのを注意してくださいよ料理部部长。

そうしていただければ、僕の寿命が減るのを少しは防げることができると思いますから。

「ウチは現文と古典が得意で、数学が苦手や」

「私は英語が苦手ですわね。得意なのは 保険体育かしら。なんなら悠夜さんにも教えて差し上げましょうか? もちろんカラダを使っ」

「いえ、結構です」

そうやってみなさんの前で挑発するのはいい加減やめてくれないでしょうか。

心臓に悪いです。

「私は特に得意な教科は無いが、苦手とするなら地理だろうか」

「英語はちよつと苦手だな。でも暗記物は任せて。台本とか、物事を記憶するのには自信があるんだ」

「……何故先輩方までわざわざ苦手分野を口にするんです？ 教えてください」

「流れって大事でしょ」

「私達でそれを途切れさせてはいけないと思つてな」

「そうですか。」

「あれ、そう言えば。」

「リリスさん。あなただけ言つてませんよね苦手教科」

「ビクツ。え、苦手？ えーと……」

座るなり教科書とにらめっこしていただけリリスさんに声をかけると、明らかに挙動不審な態度を取りました。というか完全に慌てますね、これ。

「リ、リリスには苦手という概念は存在しないんだよ。だから、苦手な教科なんてないんだよ」

「では問題です。八月を英語にしなさい」

「えつと、おーがすと」

「スペルは？」

「た、確かO……」

「義妹は重症でした。」

「ま、まあ、英語が苦手なのは認めるよ」

「銀髪が何を言っているのでしょうか。」

「でも、他の教科は全然大丈夫だからね!!」

そう言うふうに強がるところがいかにも“それ”っぽいですね…

「心配するニヤ。馬鹿も立派なアイデンティティーだニヤ」

「だから馬鹿じゃないもん！」

「駄目ですよ響くん。直接的にヒトをけなしては」

「間接的ならいいのっ？ あとお兄ちゃんもフォロー入れてる振りして、否定もなしなんだねっ！」

悲痛な叫びを上げるリリスさんを放っておいて、僕はそれぞれの苦手教科を今回のテスト範囲分だけ要点をルーズリーフまとめ、それを各々に手渡しました。

「どうぞ。苦手教科が被る場合は回し読みしてください」

「何気にスゲーなお前！」

そうでしょうか。

興奮気味に声を上げる亮くんと同じく、他の方も僕手製の用紙を見ては目を丸くし関心したように紙と僕を交互に見ます。

「綺麗で読み易い字。無駄がなく、それでいて丁寧な解説。……悠夜くんって、本当は歳ごまかしてない？」

「失礼ですね。僕は玲さん達と同じですよ」

多分ですが……。

「でも本当にわかり易いッスねー。ノート見せてもらっていいッス

か？」  
「どうぞ」

数学のノートを大地くんの手渡す。

渡された大地くんの横から覗き込むように、他の方も一斉に僕のノートを見ます。

……なんだか恥ずかしいですね。

「うわー、見本みたいに綺麗にまとってるツスね」

「これを『ノートの手本』というタイトルにして本にしたら結構売れそうですわね」

「先生がさりげなく漏らした重要ポイントもしっかり書かれてるニヤ。あ、そう言えばこんなこと言ってたニヤ」

「どれ、私にも見せてくれないか？」

「先輩は一年生のノートなんて関係ないじゃないですか」

「ケチケチするな月弦。関係なくても興味はあるぞ」

「私も見たいな」

「雲雀先輩もなら、ウチも見せてえな」

いつの間にかリリスさん以外の方が僕のノートに群がる構図が出来るようになってしまいました。

ちなみにリリスさんは何してるかと言うと、今度は世界地図とにらめっこです。

にしても、取り合うように扱われているノートを見て僕は少し不安になってしまったので、

「みなさん落ち着いてください。このままではそんなことしている内にノートが破けてしまう」

ビリビリッ！……！



『……………あっ』（みなさん）  
「パターンに……………」

予感的中！！

「ううっ、ノートが、僕のノートが……………」  
「えっと、本当にごめんッス。まさかあんなふうに破けるとは思わなかったッスから」

大地くんが申し訳なさそうに謝る背後で、他の方も気まずそうにされています。

「いえ、僕は大丈夫です。形有る物、いずれ壊れるものです。そのノートの寿命が今日来た、それだけのことですよ」

「ポジティブなこと言ってるわりにものすごく暗いオーラを纏ってるスけど」

「まあまあお兄ちゃん。ノートの供養はそのへんにして、一服すれば？ お茶を入れてきたよ」

悲しみから立ち直ろうとする僕に、リリースさんが優しく声をかけてくれました。その手にはお茶の入った湯呑みをいくつも乗せた盆を持って。

「ありがとうございます。そうですね、読めないくらい大破したわけではないですし、そこまで悲観することはないですよね」

リリースさんに励まされ盆の上のお茶に手を伸ばすけれど、またも運が悪く

「くしゅんっ」

「わっ」

リリースさんが突然くしゃみをしたことで盆が傾いてしまい、湯呑みが盆から溢れ落ちてしまいました。

湯気がたっていたお茶がかかってしまったら火傷を負うことは必然。

僕は伸ばした手を瞬時に体ごと引いて避けたのですが、この時お茶に気を取られるあまりぼろぼろのノートを落としてしまいました。そしてノートはちょうどお茶の落下地点でもあり……

ビチャンツ

「ああっ、ごめんなさい、ごめんなさいお兄ちゃんっ。い、今拭くから！」

「待ってください！」

自らの失敗で混乱してしまったのか、慌てた様子でポケットからハンカチを取り出し濡れてしまったノートを拭こうとするリリースさん。焦る気持ちはわかりますが濡れて脆くなったノートを布でするうとしたら、

ビリッ、ビリリッ！

……破けますよね。

「うわああああん！ お兄ちゃん、ごめんなさい！」

「そんな号泣されなくても」

「ふえええん！ お兄ちゃんがリリスのせいで赤点あがでんどっちゃうて  
！」

「いや取りませんよつ。取ってたまるものですか！」

涙声で不吉なリリスさんにツツコミを入れつつ、水分を含みぐちゃぐちゃとなったノートを指先で摘まむ。ちなみに湯呑みはどれも大丈夫でした。

文字は紙がふやけたせいで歪んで炭素が滲み、書いた僕（本人）ですら解読は無理でした。リリスさんがハンカチで拭こうとしたせいでページが破けて完全にノートとして機能していませんでした。

「……みなさん、これが『泣きつ面に蜂』です。覚えておくように」  
「悠夜先生最初の授業が痛々しい！」

3

リリスさんが溢したお茶と、もはやノートと呼ぶことのできないノートを処理した後は中断していた勉強会を再開させることにしました。

「この問題はこっちの公式を使えば」

「この古文の主語は武士の方ではなく貴族の方で」

「ナウマンゾウを発見されたのはナウマンという学者が」

「この修飾語は後に続く『椅子』を修飾して」

「世界で今のところ一番高い山はエベレスト、日本で今のところ一番高い山は富士山。世界一の湖は」

「魔力と魂は同一視される考えがあり、それを裏付ける実験が16世紀に」

まあ、基本は僕がみんなから出された質問に答えながら各自が勝手に参考書を解いたり単語カードを作ったりしています。

ぶっちゃけそれぞれの自宅でもできることですが、大勢で同じ行動をすることで仲間意識が強くなり志気が上がっています。 気がします。

「というより先輩方も後輩に教えてくださいよ。どれも一度習ったことでしょう」

「正直言うと、一年生のノートをチラッと見たら、あんまり覚えていないことに気がついてな」

「確かにそうだよな。こうしてみんなのノートを見て懐かしいなって思っちゃうもん」

「でしたらお二人はなんのためにここへ？」

「さつきも言っただろう。勉強をしに来たんだ」

「それに悠夜くんなら私達（二年生）の勉強も教えてくれそうだし」

「さすがに無理ですよ。まだ習ってもいないことを教えるなんて」

「でも悠夜って結構博識なところもあるし、何より魔法学に関してはずば抜けた知識を持つてるツスよね」

「まあ、魔法が使えない身としてはせめて知っておくぐらいのことしかできませんからね。右眼のことを知る必要もありますし」

「難儀ですわよね、魔法が使えないというのも」

「でもそのおかげで、僕なりの『勉強のやり方』を理解することができましたし」

「おおー、スゲー頭のいい発言だニヤ。そんな悠夜は今回のテスト、

ズバリ何位ぐらいを目指してるニヤ？」  
「一位ですよ」

僕が響くんの質問に答えたたん、みなさんが一斉に手を止め驚いたように僕の顔を凝視します。

「えっ、なんですかみんなして」

「いや、マジでそんなこと言うとは思わなくて」

「実現不可能というわけではないでしょう」

「俺からしたら限りなく無理だけど」

まるで珍獣でも見るような目の亮くん。そこで諦めたら文武両道は成り立ちませんよ。

「悪いことは言わへん。一位なんて諦めとき」

「なんですか、京さんまでそういうことを言うのですか」

「だってウチのクラスに桁違いのやつが居るやもん」

「もしかして、暦こよみのこと？」

「そうや。そう言えば暦こよみって料理部に入ってる言うてたな」

「誰なんですか？ その暦こよみという方は」

聞き慣れない名前が京さんと玲さんの口から出たので、尋ねることにしました。

「ウチのクラスにいる生徒なんやけど、これがとても頭がいいねん」  
「ただ単に勉強ができるだけじゃなくて、頭の回転も凄まじく速いもんね」

「入学式で新入生代表の挨拶を任されたぐらいやからな」

「代表挨拶もされたんですか」

現実には知りませんが、ラノベや漫画の世界では頭が良かったり人当たりがいい人が選ばれますものね。

「一年E組の有里暦ありさとは知っているぞ」

「え、美姫先輩ですか？」

「うん、時期生徒会長候補を探す一環で見つけてな。確かに彼女は思慮深く、なかなか良い人柄だったな」

「あ、やっぱり時期生徒会長候補に選ばれてる噂は本当やったんや」「そこまですごい方なのですか。これは負けてられませんね」

「うーん、確かに暦は頭はズバ抜けていいんだけど……」

「まあ、誰にも欠点はあるってことやね、うん」

玲さんと京さんは何かを思い出されたのか、同時に溜め息をつかれました。

「欠点、ですか？」

「なんて言うか、頭はいいねんけど、ものすごい頻度でドジ踏むねん。歩いとつたら突然転んだり、鞆の中身をぶちまけるなんて日常茶飯事や」

「料理部の時も砂糖と塩を間違えたり、ぼや騒ぎ起こしたりするんだよね。それなのに暦自体は怪我とかしないから不思議だよな」

それはやはり、天は二物を与えないということでしょうか。

素晴らしい頭脳を持つ変わりに、そのようなドジを踏んでしまうんでしょうね。

「それともう一つ。これが最大の欠点やな」

「まだあるんですか？」

「せや」

京さんは苦笑気味に頷かれると、

「あいつなー、ドジッ娘な上に重度のブラコンなんや」

「え、呼んだ？」

「あなたのことではないですよリリスさん」

何故そこで反応するのでしょうか？

「兄妹で同じクラスなんやけど、いつもべったりやもん。学校で別々の時なんて、部活の時ぐらいちやう？」

「そうかもね。部活中でもお兄さんのこと話してばかりだもん。料理中にお喋りすることで、注意力が散漫してドジしてしまうのに…」

…

「それだけ聞くとさのお兄さんが苦労人に聞こえてきますね」

「むしろ苦労しっぱなしやな。胃薬常備してる高校生なんて聞いたことないで」

「え、僕も常備してますけど」

「……ブラコン持ちの必須アイテムなんか？」

「呼んだ？」

「だからあなたではないですよリリスさん。ちゃんと勉強してください」

「でもそれを言うたらリリスと磨って共通点結構あるもんやな」

「共通点ですか」

「まずブラコンやろ」

あ、やっぱりリリスさんはそういう認識をされていたのですね。

「それにいい意味でも悪い意味でも天然やからな」

「それは同意しますね」

「リリス天然っ？」

「何故嬉しそうなのですか？」

「だって天然は何しても許されるんでしょ」

「それは無自覚の方に限ります」

無自覚でも度の過ぎた行いは駄目でしょうけど。

「ま、まあ天然なのはおいといて、義理の兄妹というのも当てはまるな」

「えっ、そこまでですか？」

「いやー、入学当初は自分らも血の繋がった双子と思っとなみたいやけど、よくわからんけどゴールデンウィーク中にそうじゃないことを知ったらしいんや。今朝いきなり『実は私達、義兄妹だした！』宣言されてこっちもびっくりしたで」

「私も今日暦と廊下ですれ違った時に言われたよ。すごい嬉しそうだったな」

「まあ、ぶっちゃけ義兄妹と言われも正直納得するわな。あの兄妹って全然似てへんし」

なんだかその暦さんとリスさんの共通点と言うより、僕ら兄妹と有里兄妹の共通点に思えてきますね。

「やっぱりニヤ。血の繋がった妹がデレるわけないニヤ」

「唐突にやさぐれないでくださいよ」

「実妹なんてニヤ、実妹なんてニヤツ、選らそうなだけなんだよ！」

「なんですかこの人。妹に恨みでもあるんですか？」

「かなで奏ちゃんには昔から尻に敷かれてたからな」

響くんの幼馴染みである亮くんが、懐かしむような表情をしました。



「懐かしいぜ。俺がある日響の家に行ったら、ボロボロの響を踏んづけてる奏ちゃんの姿を」

「あん時お前爆笑してたよニヤ！ 指をさして笑ってたよニヤ！  
せめて助けるよ！」

「何を嘆くことがあるのですか。それが兄と妹のあるべき形ですよ」  
「お前も何言ってるんだニヤツ。何で真顔なんだよ」

「あなたはわかっていない。べつたりな妹を持つ兄の辛さを……！」  
「テメーはわかってねえ。唯我独尊な妹を持つ苦しみをニヤ……！」

「なんですか」

「戦るか？」

「上等ですよ」

お互いに睨み合いながら立ち上がり、僕と響くんはそれぞれ構えをとります。

「おい、悠夜も響も。なんで妹談義からそんなリアルファイトに  
発展しそうなんだ？」

「お兄ちゃんはリリースに踏んづけて欲しいの？」

「いやそんな極端な話ではなく、あなたの僕に対する接し方を改  
めて欲しいと」

「とおっ」

「痛っ。なんでいきなりドロップキック!？」

「だってお兄ちゃんが立ってたら踏みつけられないよ」

「だからって何故ドロップキックを!? あと踏んで欲しいとは言  
ってませんからね」

「リリースがしたいからだよ」

「尚更なほさらたちが悪いですっ」

「よし、そのいきだニヤ、リリースちゃん。お前にも妹に虐げられ  
る気持ちをわからせてやるニヤツ」

「よしっ」

「ちよつ、リリースさんやめてください。響くんも何促してるんですかっ」

「ちよつ、みんなして暴れちゃだめツスよ」

「あなた達本当に何しに来たんですのっ」

「み、みんな、喧嘩は駄目だよ」

あわや乱闘になりかけたところで、大地くんと恋華さん、そして雲雀先輩に諭されました。

「あ、そうでした。僕ら勉強の真つ最中でした。いけないいけない」

危うくアホ二人のペースにのまれるところでした。

「ちえー。せつかく勉強会が潰れると思ったのに……」

リリースさんの勉強嫌い、どうにかしないといけない気がして来ました。でないと、本当に赤点をとられてしまうかも。

「リリースはそんなに勉強が嫌いなのか？」

「うーん、嫌いというかつまらない。楽しくない」

「そうか……。リリースは何か目標等があった方がはかどるようだな」

リリースさんが発したテストに出る問題よりも問題発言を聞いて、美姫先輩が顎に手を当て考え初めました。

なんだか絵的に女子高生探偵で通りそうですね。

「どうだろう。ここはリリースや他の者の士気を高めるために、一つ提案があるのだが」

美姫先輩が僕達に語りかけます。

「この中で学年成績順位が一番高い者が、悠夜から褒美を貰えるのはどうだろうか？」

カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……（みなさんが凄  
い速さでノートにシャーペン走らせる音）

「反応早っ。というかまだ僕オーケーしてないんですけど」

「悠夜くんうるさい」

「あ、すみません……」

玲さんに注意されてしまいました……。さっきまで玲さんもそんなに集中していたわけでもなかったのに。注意に包丁が出なかっただけマシですが。

最近やたら日常生活で刃物を使うんですね。物を取る時とか、刺したりして。

「ふむ。みんなもやる気が出たようだしこの提案はいい方向に転んだようだな」

そう言っつて満足そうに頷く美姫先輩。見ていて気持ちいい笑みを浮かべていますが、むしろ僕は

「（フッフ、みんな餌に釣られて術中にはまったようだな。確かにテストで一位を取るなど誰にもチャンスはあるが……、残念だったな。私はこの学園都市に来て以来一位を他人に譲ったことがなくてな。一位になるうと奮闘するあまりペースを乱す者と、普段通りやっつて一位を確実に手に入れる者……。勝敗の差は歴然だな）」

……………なぐんてことを考えているように思ってしまうのは、僕の心が荒んでいるからですよ。あの笑みの裏に何か黒い物が渦舞いてたりしませんよね。

腹黒は恋華さんだけで充分ですよ。

「悠夜さん」

「（ビクッ） な、なんででしょうか？」

もしかして心読まれ

「実はここを教えていただきたいのですが」

「ああ、そういうのですか、それは……………」

「ウフフ、何をそんなに怯えてらっしゃるの」

「いや、別に……………」

「そんな気になさらなくても、私は別に心の中で……………（思っ  
ていれば怒りはしませんわよ）」

……………バレてません、よね？

4

美姫先輩の目論み通り（？）、しばらくは無駄話しをすることもなく勉強会はなんのトラブルもなく普通に（・・・）進みました。

ああ、何事も無いってすごい平和で素晴らしいですね。

けれどやはり慣れないことをするのは負担なのか、時折手を止めたりする人も出てきました。

それからしばらくして、亮くんが大きく伸びをされて

「あー、疲れたぜー。こんなに勉強したのは生まれて初めてだぜ」

「あなたどうやって高校受験を合格できたんですか」

「亮はまぐれで高校に受かったようなもんだからニヤ〜」

「お前らひどくねっ!?!」

「まあ、確かに長いこと集中していましたし、そろそろ休憩しますか」

時計を見ると美姫先輩の発言から一時間半近くたっており、僕は腰を上げてお茶を入れることにしました。

「あ、私も手伝うよ」

「いえ、僕だけでやりますので、休んでいてください」

「それじゃ」

玲さんに続いて入る手伝いの申し出に断りを入れ、一人で台所に立ちます。

僕愛用の湯呑みはリリースさんが先ほどくしゃみでノートを台無しにしたのがそれなので回収しました。

人数分のお茶を入れようと、食器棚を開けたのですが。

「湯呑み足りませんか?」

リリースさんがこの家に来てから湯呑みやコップの数は増やしたものの、さすがにあの人数に足りるほどのものはあっただでしょうか。

「ええと、僕とリリースさんは愛用のがあるからいいとして、玲さんと恋華さんと亮くと響くと大地くと美姫先輩と京さんに雲雀先輩」

僕が上げた名前は自身のを含めれば両手の指の数と等しくなっていました。

「……………こうしてみると、多いですねえ」

いつの間に両手が塞がるほどに増えてしまったのでしょうか。

さすがに十個も湯呑みはなかったので、何個かマグカップで代用することにしました。

お茶を煎れるためのお湯を沸かす間に茶葉を用意します。

そういえば恋華さんが所属している茶道部ではどんな物を使用しているのでしょうか。今度聞いてみることにしましょう。

待つことしばらくお湯も沸いたので、まずは僕の方だけ用意し一口ほど飲みます。お客様にまずいものを出すわけにはいきませんし、うん、上出来です。

みなさんに出す湯呑みとマグカップにお茶を入れて、二つの盆に乗せる。あ、茶菓子もあつた方がいいですよ。煎餅も出しましょう。

両手で盆を持ち、みなさんが待つ勉強部屋へと向かう。

……………やっぱり十人分のお茶は重いですね。

「フッフッフ。どう、みんな？ これリリース秘蔵のお宝物だよ」

「この寝てる悠夜の写真、なんだか死んでるみたいツスね」

「これとかいいアングルやな」。いつの間に撮ったん？」

扉越しに聞こえてくる声から内容まではよくわかりませんが、僕がいない間に随分と賑やかにやっているようですね。

みなさん 特にリリースさんのはしゃぐ声が聞こえます。

「みなさん。お茶が入りましたよ」

多少行儀が悪いですが両手が塞がっているので足で扉を開けました。

「げっ、早いっ」

僕を見るなり、なにやらイタズラしている最中に見つかった子供のように慌てだしたりリスさん。

みなさんは床に何かを広げ、その周りを囲んで覗き見ていました。

僕はお盆を置いてみなさんが作る輪に近づき、

「なんですか、それ？ 僕にも見せてくださいよ」

「だ、ダメだよっ。これは男子禁制、女の園なんだよ」

「その割には亮くん達もばっちり見てましたけど」

「ううっ、えーと、えーと。と、とにかくダメなものはダメなのっ。

こればかりはお兄ちゃんでも、むしろお兄ちゃんだからダメ！」

リスさんには珍しい強い拒絶。見ていた物　大きめの本のよ  
うな物体　を胸に抱えてしまいました。

そんな僕に見せたくない物なのでしょうか。

「リスさん、ばんざいしてください」

「やー」

うーん、やはり引っ掛かりませんか。

となると……。

「さあ、どうぞ僕の胸に飛び込んで来てくださいっ。存分に甘えさせてあげますよ」

「わーい！」

僕が両腕を横に広げ『おいで！』としたところ、リリスさんはすぐさまジャンプして僕に飛び付こうとしました。

もちろん僕はリリスさんとハグする気は毛頭なくさつと体を横にそらしてリリスさんを避けると、彼女が先ほどまで大事そうに持っていた物を手に取りました。

それはアルバムで、この家に住んでいながら僕が見たことのないものでした。

「ああ、お兄ちゃんずるいつ」

「どうしてこんなものが？」

「ちよっ、見ちゃダメ！」

リリスさんを無視してページ目をめくります。めくった瞬間僕はわけがわからなくなりました。アルバムにあったのはたくさんの『僕』でした。

教室等で撮られた物には他の方が写っているのもありましたが、写真構成を見る限りどれも僕主体に撮られた物ばかりでした。

けれどどの僕も妙なアングルと言いますか写真の割にカメラ目線で撮られた物がなく、更に言えば僕はこんな写真を撮られた覚えがありません。

「リリスさん、これ……」

「ええと、お兄ちゃん観察ファイル、かな？」

ジト目で睨む僕に対し、歯切れ悪く明後日の方向に視線を泳がすリリスさん。

「……いつからでした？」



「そのアルバムを買ったのがね私が学園都市に来た次の日、お兄ちゃんと買物に行った時にこっそり、ね。写真は学校に行き始めたころから少しずつ撮って集めたんだよ」

「へー、そうなのですか！。よく少しずつでこんなにも量があるものですねー」  
「うぐう」

僕の指摘で苦し気な声を出すけれど、問題なのは量ではありませんせん。

もしかしなくてもこの機巧人形アンドロイド

「僕のこと盗撮してやがりましたよ！！」  
「ひうっ」

これまでリリスさんによる数々の奇行に悩まされていましたが、本当に普段から何をしてるのでしょうかこの暇人は。一応部活に所属してましたよね。

「べ、別にこれはお兄ちゃんを盗撮してたわけではないよつ。ちょっと風景を撮ろうとしたらお兄ちゃんも写っちゃったただけだもん」  
「何が『写っちゃった』ですかつ。どうみても背景はついでで、どう見ても僕を隠し撮りしますよこれは。それよりもそんな変態がするよつな言い逃れを僕が信じるとでも？」

「そ、そんなこと言ったらアキラだって同罪だもん」  
「ちよっ、何言つてのよ！ わ、私は別にやましいことなんか……」  
リリスさんに指をさされ、それまで他の方と一緒に傍観していた玲さんは驚き声を上げ怯んでしまいました。

と、動揺する玲さんの後ろへ、恋華さわが気付かれないようこっそりと忍びると羽交い締めになりました。

「今ですわ！」

「わっ、何ちよっと恋華離してよ！」

「了解だ」

「堪忍しいや」

玲さんの静止の声も聞かずに、恋華さんの合図で美姫先輩と京さんが飛びかかりました。

そのまま二人は玲さんの服やポケットに手をつっこみ何かを探します。

くすぐったいのか、やや過呼吸になりながらも抵抗しようとしませんが、恋華さんが強い力で押さえつけているのかなか脱出することはできないようです。

「先輩は参加しないんスか、あれ？」

「うーん、やめておく。私があれに混ざるのはギリギリアウトな気もするし」

「そういうもんスか」

「うん」

遠目にそんな玲さん達を見ながら質問する大地くんに、雲雀先輩が微苦笑を浮かべました。

「あつたで！」

京さんが嬉しそうな声を上げて見つけた物を満足そうに頭上にかげました。

美姫先輩も良くやったという顔で頷き、恋華さんの拘束を解かれた玲さんは体力を激しく消耗したのかぐったりしてしまいました。その顔はどこか悔しそうです。

「なんですか、それ」

僕は京さんが玲さんから奪った何かを受け取りました。その物体を確認してまたしても驚愕です。

夕日の中、真新しい制服に身を包み、疲労が見えながらもどこか楽しそうに道を歩く長髪に眼帯を着けた少年の姿がその写真の中にありました。

というか、これ、僕の写真ですよ……………。

「ええと、玲さんこれは…………？」

「悠夜くんの写真、の隠し撮り」

おや、リリースさんとは違い、盗撮を認めているのでしょうか。

「実はこの写真ね、入学式の帰りに撮った写真なの」

「え、あのレストランの帰りですか？ 確かあの時はレストランを出て解散となり、それぞれ帰路についたはずですが」

「実はあの後こっそり悠夜くんをつけてたんだ。これは中でも一番のお気に入りなんだ　よく撮れてるでしょ？」

流れる動作で僕の手から写真を取り去ると、大事そうに写真を胸に抱きしめました。その顔は少し照れくさそうにはにかんでいます。それよりも聞きたいことが…………

「ええと玲さん、さっき『中でも』って言いましたよね？ てことは他にも写真はまだ」

「　　いっぱいあるよ」

やっぱり。

「ふん、例えどんなにいいのを撮ってたって、リリスの愛溢れる作品には敵わないだよ」

「あれ、もしかして私の方がリリスちゃんより悠夜くんを素晴らしく撮れてるからって妬いてるの？ 嫉妬は恥ずかしいよ」

「どの口が言うの！ アキラは暗い部屋の中一人きりでぶつぶつ呟きながら、不出来な写真を鋏でチヨキチヨキ細かく裁断していくのがお似合いだよ」

「なによ？」

「なくに？」

「ちよつ、なんでいつの間にか二人とも目線で火花を散らしてるんですかつ。リリスさんもいつ頃復活したんですか、さっきまで反省したようにシユンとしてましたよね？ というかどんなに写真の出来映えが良くても、僕は盗撮なんて認めませんからね」

「そうですね。たかが写真の一枚や二枚で、何を醜い争いを繰り広げているのやら」

僕に便乗するような形で、恋華さんはのすごい余裕な笑みを浮かべました。

「どういうことなの？ レンカ」

「ウフフ、こういうことですわよ！」

そう言っつて恋華さんは懐から写真を　てかまた写真ですか取り出しました。

リリスさんと玲さんの物とは違い写っていたのは幼い子供が二人……、アレ？

「恋華さん、もしかしてその写真って」

「ええ、そうですねよ。これは悠夜さんご推察の通り、私と悠夜さんの子供の頃の写真ですわ」

『えええー！！？』

これには僕だけでなく恋華さん以外の方全員が驚かれました。幼い頃僕と恋華さんが知り会いだっただというのは衆知の事実ですが、再開したのは学園都市に来てから。それも予期せぬものでした。僕ですらその存在を忘れていた写真を、恋華さんはずっと持っていたのでしょうか。

「諦めてませんでしたから」

恋華さんは写真に写る僕達を優しい視線で見つめそつと指でなぞる。

「絶対に再開すると、心に決めてましたの」

「……そうでしたか」

『どうしてっ、約束したじゃないですか！？』

『ごめんなさい』

あの時に告げた一方的な別れ。

恨まれても、良く思われなくても仕方がないのに、恋華さんはまだ僕と会いたいと願ってくれていた

「悠夜さん」

視線を上にして、僕を見据える。恋華さんの瞳には、あの頃とは違う僕の姿がありました。

「あなたはまだ」

「おお、ちっさい悠夜だ！」

「少しぐらい見せてえな」

「いやあ、これはレア物ツスね」

「うわー、二人とも小せえニヤ」

「おい、押すな。見えないだろう」

「わ、私も見ていいかな？」

「ちよっ、なんなんですかのあなた達！？　せっかくいい雰囲気でしたのに！！」

恋華さんが何かを言いかけた時、僕達が写った写真を一目見ようと亮くんを筆頭に群がってしまったためよく聞こえませんでした。ちなみに玲さんとリリスさんは揃って床に手をつけて、

『負けた……』

『いいなー、ツーショット……』

等、ぼそぼそ呟いていました。

どこからか『ずーん』という重い効果音が聞こえてきそうです。

「……別に遊ぶのは構いませんけど、お茶は冷めない内に飲んでくださいね」

わいわいと騒ぐみなさん（一部を除く）を見ながら、僕は小さく溜め息をつきお茶を飲むのでした。

お茶を飲み終わった後も勉強を再開（盗撮写真については“保留”ということにしました）させ、各々のやりたい教科を自主勉強してわからないところを他のヒトに質問するというシステムでやっていました。

ほとんどの質問は僕に來ましたが。

雑談も特にはせず、全員で集中して取り組んだので濃密な時間を過ごせましたが、やはり（苦手分野に対して）集中力が乏しいリリスさんや亮くんはばてて來たのか鉛筆で問題用紙の隅に黒丸を書いたり、他の方がどんな勉強方してるのか覗きこんだりと徐々に落ちつきのなさが目立ってきました。

まあ、この二人は普段の授業で寝てることも多いですし、よくもった方だとは思いますが。

だんだんとつまらなそうにしていたリリスさんは、僕の方を見てニヤリと笑うと口を開きました。

「お兄ちゃんお兄ちゃん、質問」

「今度はなんですか？」

「胸が小さい女の子と、胸が大きい女の子。どっちが好み？」

それまで紙の擦れる音やシャーペンを滑らす音がしていたのですが、リリスさんが質問された瞬間に張り積めた空間が生まれある種の無音状態に近くなりました。

他の方はいかにも勉強してますよという雰囲気醸し出していますが、聞き耳を立て一言一句全てを聞き漏らさない気配がピンピンと伝わってきました。

要は僕にとって、非常にまずい空気に移行しかかっているということです。

「ねえ、お兄ちゃん。はやく答えてよ」

「そ、そうですね……。僕は女性のバストサイズにこだわりはないというか、そこまで注目する必要がないと思うわけです、はい」

「つまり『揉む』ことができればそれでいいってことか」

「さらっとなに危険なことを言ってるんですかあなたは！？ てか違いますよー！」

「じゃーねー」

僕のツッコミを無視して、リリスさんは次の質問を投げかけます。

「胸がぺったんこな女の子は可愛いそうだと思う？」

メキメキッ

ビリビリッ

ゴンッ

「ひいっ」

上から順に、

美姫先輩が片手でシャーペンをへし折る音。

京さんが問題用紙を勢いよく引き裂いた音。

雲雀先輩がまるで糸が切れた人形のように額にをテーブルに打ちつけた音。

いずれの方も怒りか憎しみかわかりませんが、内なる負の感情を抑えようとしているのか体をわなわなと振るわせています。

「と、特に可愛いそうとは、僕は思いませんが……」

「ふーん」

どことなく不満げに呟かれると、

「じゃあー、胸が小さくもなく大きくもない、中途半端な大きさの



は、はつきり言って存在する意味ないよね？ だってそんなに需要ないんだもん」

ザクッ

ガンッ、ガンッ、ガンッ

「こわっ」

上から順に、

恋華さんがシャーペンをテーブルに突き刺す音。

玲さんがハンカチで作ったと思われる即席の藁人形に、シャーペンを筆箱に打ちつける音。

思わず見たままの感想を述べてしまいました。

「そ、そんなことはないと思いますよ。大きさが中ぐらいでも、存在する意味は必ずあるはずですし、きつと」

「ぶー、さつきからそんな返事はっか」

「僕にどんな回答を望んでいるのですかあなたは」

選択を間違えたら最後、どんなに抵抗してもきつと僕は解体バラされてしまいます。

「それじゃあ、うんとねー。お兄ちゃんはいつもどうして私の胸ばかり見てるのかなー？」

キラリ！

「う、誤解ですよそれはっ。変なこと言わないでください！」

リリースさんにまたもや質問された瞬間、女子の方々がまるで音が聞こえそうなほど威力を有した眼光を僕に向けました。

その狂暴すぎる視線は『それは本当か？』と問いかけてるようにも思えました。

「えー、だってリリース家でしょっちゅう視線感じてるもん。特に風呂上がりの時とか、パジャマでいる時とか」

「ひ、ひどいつ。これは完全なる罠です、とてつもなく深い陰謀ですつ。そ、それは、確かにリリースさんの胸部に視線がいつてしまうことはありますが、それはあなたのが大きくて視界に入ってしまう割合が高くて、だからこそ見てしまうこともあつたりするわけですけど、すぐ視線を反らして直視なんてしていないので問題はナッシングでしてだからみなさんもそんな怖い顔向けないでください勉強しましょうよりリスさんももう変な質問禁止です異論は認めませんからね禁止と言ったら禁止です!!!!」

演劇部の練習の賜物か、なんとかみなさんの負の情を沈めリリースさんも不満そうです。勉強をまたやり始めてくれました。

あー、一気に疲れました。勉強ってこんなに疲れましたっけ？いや、後半に関してはあまり勉強とは言えない気がします。

「悠夜、悠夜」

気を取り直して僕も勉強に取り組もうとしたところで、今度は響くんに呼び止められました。

また厄介事かと思いましたが、僕の方に紙を滑らせ指先でトントんと叩きました。

「ここ教えて欲しいニヤ」

ああ、普通に問題を聞こうとしただけですか。

心の中で彼を疑ったことを少し反省しつつ、響くんが指で示す文章を黙読します。

えーと、

『問一。あなたは何フェチかを答えなさい』

「やっぱりまともな質問じゃなかった！」

少しでも疑ったことを後悔した気持ちを返してください。

「いいから早く答えてくれニヤ」

「嫌ですよ。こんなのテストに関係ないじゃないですか」

「さつきはリリスちゃんの問題にはいろいろ答えたのにそんなのずるいニヤ。それともあれかニヤ？　あまりにもマイナーフェチ過ぎて人には言えないとか」

「そんなことないですよ」

「じゃあ、言えるよニヤ？」

「うぐっ」

ううう、墓穴を掘った気分です。

響くんにはああ言ったものの、自分が何フェチかなんてそういうの考えたことありませんよ。

えーと、魅力的な体の部位、ってことですよね。

うーん、これと言って特には……。

あ、でも、師匠が無理やり僕と一緒に風呂に入った時、師匠の背中がとてもすべすべで気持ち良かったよ……。本人の許可も降りてしばらく手でスリスリしていた記憶があります。

「……………強いてあげるなら、背中ですかね」

『背中！？』

まあ、体の一部ではありますし、あの時見た師匠の背中は確かに綺麗と思ってそう言ったところ、みなさんが一斉に驚かれました。

「またマイナーところを……」

「うなじならまあわかるツスけど、背中って」

「俺背中フェチなんて初めて聞いたニヤ」

「え、なんですかその反応っ？ ちゃんと答えたのにそう微妙な反応をされてはこっちもなんかやりづらいですよ」

やかましい男性陣はともかく、女性陣はというと

『……………（背中、綺麗かな？ 後で鏡見よ）』

無言で服越し、あるいは直接背中を触っていました。かゆいのでしょうか？

なんだか、軽い気持ちで大切な物を失ってしまった気分です。

6

響くんのフェチ質問の後に解散となりました。まあ、女性陣が帰りがついていたのでそうなったのですが。

まるで何かを早く確認したいような、とても慌ただしい帰りでしたね。

リリスさんもみなさんが帰るやいなや、風呂に入ってしまったました。

なので僕は一人で一通り掃除し、終わったところにはくたくたでした。

あー、疲れしました。いや、あの人達と関わって疲れない日がありませんか。

「だらしなく床でゴロンとしていると、ポケットの通信用特殊魔結晶ソルトが震えました。」

「はい」

『あ、ユーちゃん元気？』

「師匠？ どうしたんですか、急に」

『えっとね、ちょっと報告』

「報告ってなんのですか？」

『ウフフー、聞いて聞いて。マーテルって言う私の秘書みたくのがあるんだけど、マーテルに交渉して学園都市そうちに遊びにいけることになったの！ しかもオフだよ、オフ！』  
「そうですかー」

「うわー、嫌な予感しかしません。」

『詳しい日程はまだわからないから、また今度連絡するわね。それじゃあ、またね。リツちゃんにもよろしく。Chuu……！』

……はあ、またもやめんどごとくことが起きそうな気配。

「どうしたのお兄ちゃん？」

「いつの間にか、背後にリリスさんが立っていました。」

「いつになわかりませんが、近々師匠が学園都市に来るそうです」「ママがこっちに遊びにくるの？ わーい」

「万歳をして心から嬉しそうなリリスさん。まあ、僕も会いたくないわけではないですが。」

「と、ところでお兄ちゃん」

リリースさんは少しだけ頬を赤く染めながら、

「リリースの背中、どう思う……?」

「普通です」

殴られました。

第二十一夜 僕の両手に存在するは、重い想いと暖かさ（後書き）

かなり間を開けてしまいました。

この約2ヶ月バイトやらなんやらいろいろ有りまして……  
うーん、一括ではなく小出し投稿の方がいいですかね

今回はテスト勉強でした。

ちなみに伝助はテストが嫌いで仕方なかったです。今もですが。

悠夜くん達は無事に赤点を回避できるでしょうか？

それと次話のことですが、短編と同時進行になるのでぶっちゃけ遅くなると思います。

……ただでさえ鈍亀なのにすみません。どうか読者の皆様には長い首と広い心でお待ちいただけないと。

それではそろそろ失礼します。

感想・レビュー・評価等歓迎しますのでお気軽にお願いします。  
伝助でした。さようなら〜

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8739n/>

---

あなたは科学を信じますか？

2011年10月9日21時00分発行